ヘヴィーオブジェクト

鎌池和馬
KAZUMA KAMACHI
イラスト・オブジェクトデザイン／
凪良 NAGIRYO

『とある科学の超電磁砲（レールガン）』の（TVアニメ放送中!!）鎌池和馬が放つ、近未来アクション・ボーイミーツガール!!!

特報 はやくもコミック化決定!!「電撃黒皮王Vol.10」より連載開始!（2009年12月中旬発売予定）

<<<一億冊突破大プレゼント実施中!! ※詳しくはオビ折り返しをご覧ください。

か-12-21

ヘヴィーオブジェクト

鎌池和馬

電撃文庫

¥ 610

9784048680691

ISBN978-4-04-868069-1
C0193 ¥610E

1920193006100

ASCII MEDIA WORKS

発行● アスキー・メディアワークス

定価: 本体 610 円
※消費税が別に加算されます

とある科学の超電磁砲（レールガン） TVアニメ放送開始!!

禁書目録計画は「超電磁砲」プロジェクトに突入――!!
http://project-railgun.net

TOKYO MX 毎週金曜日26:30～
テレ玉 毎週土曜日25:30～
チバテレビ 毎週土曜日25:35～
MBS 毎週土曜日25:58～
tvk 毎週土曜日26:30～
CBC 10月より放送開始予定
AT-X 毎週土曜日23:00～他

【STAFF】
監督：長井龍雪（「とらドラ!」）／キャラクターデザイン：田中謙一（「とある魔術の禁書目録」）／シリーズ構成：水上清資（「鉄腕バーディー DECODE:02」）／音楽：I've sound 井内舞子／アニメーション制作：J.C.STAFF／OPテーマ：fripSide／EDテーマ：ELISA

【CAST】
御坂美琴：佐藤利奈
白井黒子：新井里美
初春飾利：豊崎愛生
佐天涙子：伊藤かな恵
ほか

© 鎌池和馬／冬川 基／アスキー・メディアワークス／PROJECT-RAILGUN

ヘヴィーオブジェクト

結局、戦争はなくならなかった。

でも、変化はあった。くだらない殺し合いが淡々と続く中にも、変化はあった。

超大型兵器オブジェクト。

それが、戦争の全てを変えた。

戦場に派遣留学した学生・クウェンサーは、整備基地で、奇妙な雰囲気を持つ少女と出会う。その少女は『エリート』と呼ばれていた――『オブジェクト』のパイロットとして。

近い将来。このちっぽけな少年は、少女のために、最強の兵器『オブジェクト』へと、生身で立ち向かうことになる。

これは、そのきっかけとなる出会いだった――。

か-12-21

ヘヴィーオブジェクト

鎌池和馬

電撃文庫
610

9784048680691

ISBN978-4-04-868069-1
C0193 ¥610E

1920193006100

ASCII MEDIA WORKS
発行● アスキー・メディアワークス
定価: 本体 610 円
※消費税が別に加算されます

かまちかずま
鎌池和馬

本日のレプリカント的観察日記。ハトです。自由に空を飛ぶ仕組みも十分に魅力的ですが、伝書鳩の方向感覚も結構すごいかも。ここらへんの研究が進めば、GPSや遠隔操縦に頼らない、完全自動操縦の小型偵察UAVとかができるかもしれませんね。

【電撃文庫作品】

とある魔術の禁書目録(インデックス)①～⑱
とある魔術の禁書目録(インデックス)SS①②
ヘヴィーオブジェクト

イラスト:凪良(なぎりょう)

バンダイナムコゲームスのゲーム『アルトネリコ』シリーズのキャラクターデザインをつとめる。電撃文庫では『シャープ・エッジ』『F』（著／坂入慎一）、『アブラクサスの夢』（著／高橋弥七郎）などを担当する。個人サークル『S.E.C』でも活動中。http://www.sec.or.tv/

カバー／脱印刷

鎌池和馬
KAZUMA KAMACHI

イラスト・オブジェクトデザイン
凪良 NAGIRYO

結局、戦争はなくならなかった。
でも、変化はあった。
――超大型兵器オブジェクト。
それが、戦争の全てを変えた。

ヘヴィオブジェクト
HEAVY OBJECT

ASCII MEDIA WORKS

INDEX

000010 序　章

000012 第一章

ガリバーを縛る雑兵達>>アラスカ極寒環境雪上戦

000154 第二章

親指トムは油田を走る>>ジブラルタル通行阻止戦

000234 第三章

蟻とキリギリスの戦争>>オセアニア軍事国攻略戦

000364 終　章

【ベイビーマグナム】BABY MAGNUM

総合マルチロール型オブジェクトの一種。
本体だけで全長五〇メートル。砲の長さまで含めればそれ以上のサイズを誇る。
レーザー、下位安定式プラズマ砲、レールガンなどを備えた、本体後部から伸びる七本のアームがメイン兵装である。
他にも球体状の本体から一〇〇門近い砲が伸びており、地対空全方向からの攻撃に対処することが可能。
推進装置は静電気とレーザーを応用した推進装置を使い、縦横無尽に敵を迎撃する。

コックピットは球体状の本体の中心点にある。
搭乗者は「エリート」と呼ばれる資質が条件を持つ少女のみで、彼女達しか満足にオブジェクトを操ることができない。
なお、「エリート」ミリンダが駆る本機はあまりにも強力すぎてカムフラージュの必要がないため、カラーリングは白で統一されている。

©Imagineer Inc. Hiroyasu Watanabe

BABY MAGNUM BABY MAGNUM BABY MAGNUM BABY MAGN
BY MAGNUM BABY MAGNUM BABY MAGNUM BABY MAGNU

雪原の戦場に派遣留学している少年
クウェンサー
「うーん、今日も平和だ」
雪原の戦場に派遣された「エリート」の少女
ミリンダ
「わざとおこらせようと、ちょうはつしてる？」
変わり者の貴族にして不良系軍人
ヘイヴィア
「ヘイ、姫様にナイト様。そろそろのんびりもしてられなくなってきたみたいだぞ」
クウェンサーとヘイヴィアの上官（和風マニア）
フローレイティア
「優れた部下を持つ私は幸せよ。そうよね？賛成だったら頷けよ」

戦争の代名詞はオブジェクトである。
生身の兵隊などに価値はない。
――フライド評議員

HEAVY OBJECT

ヘヴィーオブジェクト

鎌池和馬
KAZUMA KAMACHI

序章

結局、戦争はなくならなかった。

地球という惑星の隅々まで開発の手が及び、高出力のレーザーが気軽にシャトルを打ち上げ、一部の権力者達が月面に別荘を建てるような時代になっても、人と人の心の隙間までは手を加えられないらしい。いや、今の世の中ならデジタル化された『癒し』やら『スピリチュアル』やらを売り物にするサプリメント企業も珍しくもないのだが、それでも結局、根本的なところで人は人と争う機構を、自分の精神から取り除く事はできずにいた。

新兵器の登場によって戦争のルールが変わった事は、相変わらずな人類にとってはおざなりな救いになるのか、あるいはより一層の退化と嘆くべきか。

そう、変化はあった。

くだらない殺し合いに夢中になる彼らにも、変化はあった。

超大型兵器――オブジェクト。

本体だけで全長五〇メートル、砲の長さまで含めればそれ以上のサイズを誇るこの新兵器は、

登場と共にこれまであった戦争の常識を全て塗り替えてしまった。多くの兵隊は直接戦場で殺し合うのではなく、最強のオブジェクトを万全の状態で戦場へ投入させるために使う方が有意義だ、とまで言われるほどに。

戦車や戦闘機といった、これまでの主役は全て『旧世代兵器』と呼ばれる事となった。並の機銃や砲弾、ミサイルなどは単なる豆鉄砲扱いになった。

それぐらい、超大型兵器オブジェクトの戦闘力は桁が外れていた。

一番最初にその兵器を提示したとある島国は世界中から恐れられ、一四カ国からなる連合軍によって試作オブジェクトに対する奇襲総攻撃を受ける事になり——その全てを退けた。

戦闘終盤には太平洋上で核攻撃を受けた訳だが、半身を炎天下のアイスのように溶かしながらも、残った兵装だけで連合艦隊を沈め続けた光景は歴史の教科書にも載っている。

未だにその島国がオブジェクト開発の最先端に君臨しているところからも、このオブジェクトがいかに強大な存在であるかが分かるだろう。

当然ながら、オブジェクトは戦争の代名詞になった。

では。

それ以外の者は？

第一章　ガリバーを縛る雑兵達　〉〉アラスカ極寒環境雪上戦

1

結局、戦争なんてものはオブジェクトとオブジェクトの戦いだ。生身の体でちっぽけなライフルを後生大事に抱えたところで、どうにかなるものではない。一万、一〇万の兵が集まったところで、戦車や戦闘機を山ほど用意したところで、あの五〇メートル級の化け物は悠々と雑兵達を蹴散らしていく。ものによっては核兵器が一発二発直撃しても動き回るというのだから、もう真面目に戦おうとするのも馬鹿馬鹿しく思えてくるだろう。

だから、主役なんてオブジェクトに任せてしまえば良い。

主役なんて面倒臭い役割は化け物に押し付けておいて、脇役はそれをのんびり眺めていれば良いのだ。

……そんな風に考えていたからこそ、ベースゾーンと呼ばれる整備専用の基地に詰めている

八〇〇人の兵隊達は、戦場の最前線にいながらも、どこか気を緩めていたのかもしれない。

基地なんて言っても、やる事は効率良くオブジェクトを整備し、出動させる事。

生身の兵隊はオブジェクトが帰ってきたわずかな間だけ、整備中の超大型兵器が襲われないように警備をすれば、『命を顧みず国を守るヒーロー』としての報酬をいただける。

オブジェクトがいれば安泰だ。

自分達を守ってくれるオブジェクトは金のなる木だ。ただ黙って眺めているだけで、大勢の敵を勝手に蹴散らしてくれる。兵隊達はそれを『ウチのベースゾーン全体の成果です。みんなで頑張ったんだからみんなに報酬をください』と主張すれば、国民の血税から自分の預金通帳へ、湯水のように膨大な金が振り込まれる。

実質、戦争なんてオブジェクトが勝手にやってくれる。

あれさえあれば、自分達の命も未来も保障されたようなものだ。

そんな風に思っていたからこそ、

自軍のオブジェクトが火を噴いて爆発した瞬間。

整備基地ベースゾーンでそれを眺めていた兵士達は、一斉に恐慌状態に陥る事になった。

そう。

結局、今の時代の戦争なんてオブジェクトとオブジェクトの戦いだ。

それはつまり、敵軍にもオブジェクトが配備されていた場合、てしまう可能性がある事も考慮しなければならない事を意味しているのだ。

アラスカの白い吹雪に視界が遮られる中、赤い炎と黒い煙はそれでもはっきりと見えた。

『エリート』と呼ばれるパイロットの少女が脱出装置によって空へ飛び出すが、もはや役にも立たない敗北者を助けようとする者はいない。

それどころではない。

何度も何度も繰り返すが、結局、今の時代の戦争はオブジェクトとオブジェクトの戦いだ。

戦車や戦闘機など、これまであった普通の兵器をどれだけ並べたところで、オブジェクトという全長五〇メートル級の化け物は悠々と雑兵を蹴散らしていく。

そして、自軍のオブジェクトは破壊され、敵軍のオブジェクトは自由に動き回っている。

この事実が意味するところは簡単だ。

虐殺だ。

圧倒的な掃射によって、肉も骨も内臓も体の外に飛び散らせるような、絶望以外に何もない、あまりにも決定的な虐殺だ。

もはや、逃げる以外に道などなかった。迷わず逃げるという選択肢を採っても、今ベースゾーンと分類されるこの基地にいる一割も生き残れれば奇跡と呼べるほどの状況だった。『その

場に留まって戦線を維持する事』という、軍の中でも最も基本的な命令すら、まともに思い出せる者はいなかった。

地獄の鬼ごっこが始まる。

本体だけで五〇メートル以上の化け物とちっぽけな人間達の、くだらない鬼ごっこが。

2

その一日前。

アラスカの氷雪地帯に、クウェンサーという少年は立っていた。超大型兵器オブジェクトの整備基地ベースゾーンの敷地内である。クウェンサーは正規の軍人とは印象の違う体つきの少年だった。有り体に言えば、兵士として必要な筋肉が鍛えられていない。その辺の『安全国』の学校にでも通っている方が似合っていそうな感じだった。ズボンを穿くかスカートを穿くかで、そのまま見た目の性別をチェンジできそうなほどである。

実際、その印象は間違いではない。

現に今も、スコップで雪を掘る彼の腕は、疲労と筋肉痛でぶるぶると震えている。

「くそっ!!　こんな作業に何の意味があるってんだ!!」

そんなクウェンサーの横で、先にギブアップを宣言したのは正規の軍人だった。意外な顔を

しているクウェンサーに対し、ベースゾーンで知り合った軍人の少年はスコップをその辺に放り投げた。

「軍人っつっても色々あんだよ。俺は元々敵軍のオブジェクトのスペックを調べて弱点を見つけるためのレーダー分析官だぞ。こんな雪かきのために軍に入った訳じゃねえ!!」

このインテリ系軍人の名前はヘイヴィア。体育会系な軍の気質に慣れないクウェンサーとしては、『それでもまあ他の連中に比べれば気の合う方』程度の知り合いである。

（……ま、タイプも似てるしな）

適当に考えながら、クウェンサーは口を開く。

「仕方がないんじゃないか。戦闘は全部オブジェクトに任せっ放しなんだから。少しは仕事をしていますってところを見せないと、本国で税金収めている平和な人達は給料に使ってほしくはないんだろう。選挙で票が欲しいフライド評議員とかが節税節税って叫んでるの、CSのニュースチャンネルで観ただろ」

「それだ」

ヘイヴィアはくだらなさそうな調子で、

「こんな風に雪掘って滑走路を確保したところで何の役にも立たない事ぐらい、現場の人間なら誰でも知ってる。お飾り任務だって分かってっから、余計にやる気が出ねえんだっつの」

「まあ、戦闘機なんてオブジェクトには通用しないしな。模擬戦闘の成績は、対一五〇〇。し

かも実情は、これ以上カウントするのは面倒だからコールドゲームになったんだっけ？」

クウェンサーはスコップの先端を地面に突き刺し、両手で体重を預けて、

「オブジェクトは大出力動力炉を利用した対空レーザーとか使ってくるからなあ。戦闘機がマッハ二で飛ぼうが、光の速度には敵わないし。ロックされた瞬間に即撃墜。大昔の歴史の授業なんかに出てくる機甲部隊の話だと、地上近くの場合は塵や埃、蜃気楼なんかでレーザーが屈折して助かったなんて話も聞くけど、戦闘機が得意とする高空じゃ空気が綺麗過ぎてレーザーを遮る物が何もないって言われてるし」

「相手は本体だけでも五〇メートル級の化け物だぞ。核ミサイルを撃っても動き続けるような相手じゃ、戦闘機なんて小鳥どころか羽虫だろ。滑走路なんて整備するだけ無駄なんだっつの」

「航空部隊のエース達がコックピットで待機してるのって、無線機使ってラジオを聞きたいかららしいし。とはいえ、それ以外の機甲部隊――戦車の連中が役に立ってるとも思えないけど。というか、滑走路の『地均し』なんてさ。装甲車の前面にでっかいシャベルをつけてガーッと直進すれば済むのは良い事じゃないか」

「……俺ら、今何やってんすか……？」

「まあまあ。戦わなくて済むのは良い事じゃないか」

「軍人の台詞じゃねえが、そいつについては同感だがな」

民間出身のクウェンサーの言葉に、不良軍人のヘイヴィアも軽く認めた。

「殺し合いなんざオブジェクト同士に任せときゃ良いのさ。今時、戦場で命を落とすなんて流行らねぇ。遠くから黙って見てりゃ、オブジェクトが勝手にお土産の功績を持ち帰ってくれんだ。生身の俺らが真面目に戦うなんてありえねえよ」

「ヘイヴィアは『貴族』なんだっけ？」

「そーだよ。だから武勲なんてつまんねーモンをかき集めねえと、家督を継ぐ者としての箔がつかねえんだと。ま、三年も基地に詰めてりゃ後はデカい屋敷で大勢のメイドさんとお戯れコースさ」

言葉に反して、ヘイヴィアはつまらなさそうな顔をしている。どうも、そういう安泰な人生コースに不満があるらしかった。

「テメエもテメエで大変そうだがな」

「こっちはヘイヴィアと違って『平民』出身だからさ、手に職つけないとやってけない訳。だからこんな所まで派遣留学してるだけだよ」

「オブジェクト関連の設計士目指してるんだっけか？」

「現場で学ぶのが富豪への最短コースって話だよ。こっちも三年ほど基地に詰めてれば、最高クラスの高学歴がいただけるって寸法だ。後はヒーローが乗るためのオブジェクトを製造・売買する事で、『ヒーローに協力している聖者コース』の特権と大金を得られるんだ」

「それなりの難関だから、派遣留学の成功者ってもてはやされんだろ。軍人としての『教育』

を受けてねえヤツは、なんだかんだで戦地の病気とか過労とかでバタバタ倒れていくとかいう話じゃねえか。そういう話を聞くと、やっぱここは戦場なんだって思い出させられるな」

「そういえば、ヘイヴィアって『教育』とか受けてたっけ？」

「一応、旧式の入隊訓練を一通りな。五ヶ月の間に基礎体力と協調性を学ばせたかったみてえだが、思惑通りになってりゃこんな不真面目になっちゃいねえよ。配属以来一度も生身の実戦がねえから、近接格闘の方もそろそろ錆びついてきてるかもしれねえ」

「戦いを忘れてしまうぐらいの日々なら、幸せって事なんじゃないのか？」

「軍人の台詞じゃねえが、そいつについても同感だ」

言うだけ言うと、ヘイヴィアはくだらなさそうな調子で話題を変えた。

「にしても、軍の食糧ってのは不味くていただけねえな。栄養調整型レーションなんてもんを開発してる連中は何を考えてんだか。……普通の肉より高いのに普通の肉より不味いってのが余計に気に食わねえ」

「明確に味を決めてしまうと、美味い不味いで兵士のテンションが変わるから、わざと味のない物を食べさせてるんじゃなかったっけ？　料理の評価なんて主観的だから、絶対的に誰もが喜ぶ料理は作れないとか何とかで」

「だから万人が平等に不味く感じる物を食べさせましょうってのか？　ふざけんなっつーの」

「他人の税金で食べられるんだから文句はナシなんじゃないの？　まあ確かに、これならその

辺の鹿でも捕まえて、塩焼きにした方がまだマシかもしれないのに」

クウェンサーが適当な調子で言うと、何故かヘイヴィアはピタリと動きを止めた。

彼は純粋に感心した瞳をクウェンサーに向ける。

「……流石は派遣留学。テメェは本当に天才だな」

「おい」

「そうだよな。美味い物がないんなら、自分で食材から調達しちまえば良いんだ」

3

そんな訳で。

スコップを放り投げたヘイヴィアは、軍用のライフルを構えてベースゾーンの敷地外へと飛び出した。辺り一面に広がっているのは、白い雪から突き出すように生えた針葉樹の森。野生の動物なら腐るほどいそうな感じの大自然だった。

付き合わされたクウェンサーは、押しつけられたライフルをその辺に置きながら、

「オイやめようぜ、バレたら上官がうるさいぞ。動物愛護の精神が足りないとか何とかグチグチ言われるに決まっているんだ」

「テメェだってあんな石油製品でコンニャク作りましたみてえなレーションじゃなくて、ジュ

ーシーなお肉が食べたいだろ。大体、敵国の兵士をバンバン撃ったら怒られるっつーのもどうなんだか」

「だから、弾だってタダじゃないじゃん。敵国の兵士を撃ち殺すために税金使って用意してるんだから、血税の無駄遣いはやめましょうって話なんじゃないのか？」

そんな風に言うクウェンサーだったが、ヘイヴィアは聞く耳を持たない。雪の上に残る鹿の足跡をなぞって、針葉樹の生い茂る森の奥へ奥へと出かけてしまう。

（……やってらんないな）

と言っても、それは分厚い鉄筋コンクリートの建物が並んでいる訳ではない。クウェンサーはいわゆる『移動型』で、その正体は大型トレーラーを遥かに凌ぐサイズの基地構成車両を大量に並べて構成される大規模な車両団だった。兵士の居住区もレーダー管制塔も全て巨大な車両の上に設置されている。一番大きなオブジェクト整備場ですら、数十メートル級の極めて大きな特殊車両をいくつも並べて組み立てられているぐらいだった。

これも、オブジェクトによって戦争のルールが変わった点の一つ。

一ケ所に固まって防備を固めるより、最強の戦力であるオブジェクトをあらゆる地域で迅速に展開させる方が、軍事的に重要とみなされ始めているのだ。

ライフルを拾い上げると、近くにあった岩の上に腰かけた。

クウェンサーはそんな新しい時代の基地に目をやりながら、

（……勲章持ってる上官達は、あったかい部屋の中でコーヒーでも飲みながら、トが功績を持ち帰ってくるのを待ってる訳だ）

とはいえ、怨念を放ったところでアラスカの寒さが和らぐ事はないし、ヘイヴィアの言う通り、味も素っ気もないレーションに飽きていたのも事実である。

着慣れていない軍服のポケットを探り、クウェンサーは使い方も覚えていないナイフと一緒に支給された、サバイバルキットを取り出した。傷の手当てをするための一式の他に、火を起こすための道具や魚を釣るための物なども収まっている。

（オブジェクト全盛の時代に、これぞ税金の無駄遣いだな）

竿はボールペンぐらいの長さで収納されていたが、伸ばすと五〇センチ程度――わかさぎを釣るための竿のような形になった。とはいえ、無駄に軍事技術を応用したカーボンナンタラとかで、強度と柔軟性は抜群なのだろう。餌はなく、代わりに毛鉤が数個用意されていた。どうやら餌を消費しないで釣るための方法が模索されているらしい。

その辺をうろうろ歩き、曲がりくねった川を見つけたクウェンサーは、表面に張っていた氷を割って釣り糸を垂らしながら、

「うーん、今日も平和だ」

と、戦場の最前線で思わず呟いてしまうのだった。

4

しかしまあ、素人の学生が頑張ったところで、そうそう簡単にサバイバルキットなんぞ使いこなせる訳もない。元々、ちゃんとした釣り竿を使っても魚を釣れるかどうかも分からない有り様のクウェンサーはいつまで経っても待ちぼうけだった。

遠くから、断続的に発砲音が聞こえる。

もちろん敵国の兵士が間近まで迫っているのではなく、鹿を求めるヘイヴィアが今夜の晩ご飯を追っているのだろう。今のご時世、超大型兵器オブジェクトの控えている整備基地ベースゾーンへ生身の兵隊が攻めてくるなんて事は確実にありえない。それは核シェルターの壁をタックルで破壊しようというようなものなのだから。

と。

そんな風に考えていたクウェンサーの耳に、さくさくと雪を踏むような足音が聞こえてきた。

「何してるの？」

振り返ると、一人の少女が怪訝そうな顔をしていた。一四歳ぐらいの、派遣留学の学生クウェンサー以上に軍隊には相応しくない感じの少女だ。

肩にかかるほどのふわっとした金髪に、色白の肌。単純な青というより空色に近い瞳は、どこかボーッとしているようで感情を摑みにくい。

華奢を通り越した繊細な体のライン。

彼女の台詞はクウェンサー本人に、というよりは、遠くから聞こえてくる銃声に対して話しかけているような調子だった。

対して、クウェンサーは素っ気ない口調で答える。

「今夜はバーベキューだ。俺がシャケ係でヘイヴィアが鹿係。言い出しっぺが心配するのも何だけど、鹿の肉って美味いのかな。食った事がないから実は結構不安なんだよ。味にクセがなければ良いんだけど」

「……やさいのないバーベキューなんかやってると、その内死んじゃうよ」

少女は箱を開けてくだらない物を発見したような顔で、ため息をついた。

クウェンサーはいつまで経っても反応のない竿から目を離し、

「お姫様はどちらまで？」

「わざとおこらせようと、ちょうはつしてる？」

少女はあまり動かない表情を、その時だけムッと変化させる。

とはいえ、正直クウェンサーは少女とあまり面識はなかったし、接し方も良く分からなかった。おそらく少女の方も、気紛れで話しかけているだけなのだろう。何らかの必然性があって、

この少女とコミュニケーションを取らなくてはならない状況が生じるとも思えない。

そう。

『エリート』と呼ばれる――超大型兵器オブジェクトのパイロットなんて。

このアラスカの整備場で仕事を手伝っている時には、たまに挨拶程度の会話を交わす事はあるが、それで親交が深まっているとは思えない。掃いて捨てるほど余っている学生と一国の中でも限りある人数しかいないエリートとでは、あまりにも立場が違いすぎる。

彼女の服装はクウェンサー達のものとは違い、操縦士エリート専用のものだ。そのスーツの形状は、何と表現するべきだろうか。明らかに普通の軍服などとは違う。藍色を基調にした、首から手足の先までピッタリと覆うスーツ。ブーツや手袋は着脱式らしいが、ファスナー状のパーツで繋ぎ合わせられるようだった。

さらにその上から胴を守る黒の装甲ベストと、ミニスカートのように広がるポケット類が取り付けられている。こちらは実際にオブジェクトを操縦する際はベストの下端とポケット類の上端を繋げて一体型にするらしいのだが……。軍の伝統なのか、彼女のスーツの首元にセーラーの襟が取り付けられている事も手伝って、現状のツーピース型の状態だと、どことなく『安全国』の学生服のように見えなくもない。

その実、強力な撥水性によって着たまま水中活動が可能であり、空軍用のスーツのように『下半身の血を止めて、脳の機能低下を防止する仕組み』まで組み込まれている。何というか、

陸海空の既存の軍を全て圧倒する、いかにも『オブジェクトらしい』特殊スーツなのだった。

その青ではなく空色の瞳も、初めて整備場で見た時は本当に光を放っているように見えて、クウェンサーは驚いた記憶がある。ただしその印象は間違いだった。正確にはオブジェクト操縦時に微弱な赤外線を利用して、眼球の動きすら入力デバイスに組み込んでいるため、長期間のレーザー照射で元々は青かった瞳の色が薄く変質してしまっているのだ。

もっとも、これは『レーザーで瞳孔のレンズ機能が無秩序に壊されている』のではなく、『効率良くレーザーの効果を発揮するために進化している』のであって、一定以上瞳の色が薄くなる事はないらしいのだが。

少女はエリートの証拠である薄い色素の瞳をクウェンサーに向けて、こんな事を言う。

「オブジェクトはせいびちゅうに壊れたら、なんかバンバンおとがきこえてきたの」

「……ヤッベ。基地の中まで届いていたか。となると説教が待ってるかもな」

「あと、きちょうなオブジェクトのメンテナンスなのに、あのコゾウはべんきょうするチャンスをぼうにふってどこであそんでいるんだって、チーフのおばあさんがどなってた」

「ヤッベエ!?　そいつは本格的にまずそうだ!!」

思わずガバッとベースゾーンの方へ帰ろうとしたが、

「……いや待て。どうせ今からダッシュで戻っても説教されるんだよな。だったら手ぶらで怒

られるか、シャケを手に入
上げるまでは死んでも帰れ
「そんなふうにふまじめだ
ほとんど現実逃避気味に
る。どうやら本当に暇なの
ジェクトの運用は死活問題
一にも不慮の事態に陥らせ
かいつもより食いついてく
らい事務的な言葉を交わす
（……もしや、このお姫様
とも考えたが、そんな事
そんな感じで、会話のき
話しかけてきた。
「あなた、オブジェクトの
「そうだよ。三年ぐらい基
スが待ってる訳だ」
「何で、このきちなの？」

てから怒られるか、だ。……そうかそう
なくなってしまったぞ」
から、いつもおこられるのよ」
釣り竿へ戻るクウェンサーに、少女は心の底から呆れた視線を向け
か、あるいは正規の軍人以外の者が珍しいのか（軍人にとってオブ
なので、それを操る『エリート』の少女に不用意に接触して、万が
訳にはいかない、という意識が働いているらしい）、今日は何だ
ていても、一言二言ぐ
るのか？）
もレーションに飽きてシャケに興味があるのか？
を言えば流石に機嫌を損ねてしまうだろう。
っかけを探しているクウェンサーだったが、少女の方が続けてこう
べんきょうに来たんでしょう？」
地でメンテを手伝いながら生き残ると、後は本国に帰って成功コー

少女は本当に不思議そうに尋ねてきた。

「このきちの――わたしのあやつるオブジェクトがどういうものかはしってるんでしょ？」

「総合マルチロール型オブジェクト。……つまり、世界中のどんな地域でもどんな天候でも自由に扱える、最もスタンダードな超大型兵器って訳だろ。陸でも海でもお構いなしだ」

「スタンダードっていうのは、じだいおくれっていうことなのよ」

少女はため息をついた。

「『だい2せだい』のオブジェクトは、どこでもつかえるなんてよくばりなことは言わない。たとえば、さばくでたたかうためにかいはつされ、それ以外のぜんぶをすてたオブジェクトは、さばくの中にかぎってはたたかうオブジェクトより強いようがする」

それは、オブジェクトの製造業界では徐々にささやかれ始めている学説だ。

オブジェクトが戦場に登場した当初は、世界中のあらゆる戦場で同じように戦う総合オブジェクトは、天敵のいない百獣の王だった。しかし、戦場のあちこちにポツポツと複数のオブジェクトが現れ始めた頃から、また事情が変わってきたのだ。

どこでも自由に扱える総合型というのは、苦手なもののない機体という事だ。しかし代わりに、決定的な長所もないという事でもある。戦争が『オブジェクトが普通の兵器を蹴散らす』から『オブジェクトとオブジェクトの戦い』へと移りつつある状況に合わせ、今度は『数ある オブジェクト同士の中で、群を抜くためにはどうするか』という問題が生まれてきた。

「……？」

「スタンダードでベーシックな機体のノウハウを覚えておけば、それをいくらでも応用できる。でも、最初っから尖った機体を勉強すると、それ以外に応用できない。派遣留学のお勉強としちゃ、お姫様のオブジェクトについていった方がお買い得なんだよ」

それは戦争の勝敗をまるで考えていない、不真面目極まりない意見なのだが……これもやはり、クウェンサーは『軍人じゃないから』の一言で切り捨てられる。

「せんじょうでよくばると、ながいきできないよ」

「そうだよ。だから派遣留学ってのは、生存率が低い。それでも一攫千金の出世コースを目指して戦場にお邪魔してるんだから、その辺の文句は言いっこなしなんだ」

クウェンサーがそんな事を言うと、百戦錬磨の少女はほんのわずかに、小さく首を傾げた。

その上で、彼女は言った。

「かくごは決まっているのね」

「まあ、まっとうな学業をコツコツやるのが嫌で、飛び級しようと躍起になってるんだ。それぐらいは覚悟しておかないとな」

「ふうん」

エリートは、ともすれば間延びした印象を与えるリアクションを取った。

そして、

「本当に？」

「？」

今度はクウェンサーがキョトンとする番だったが、オブジェクトを操る少女はそれ以上会話を続けようとは思っていないらしい。ライフルと釣り竿が活躍するアラスカの森林地帯から、彼女はそっと背を向け、去っていく。

今思えば、などという陳腐な台詞は、実生活では何の役にも立たない。

その事を踏まえた上で、それでも『今思えば』と前置きさせてもらうと、エリートの少女が何故こんな風に話しかけてきたのか、クウェンサーはもう少し真剣に考えてみるべきだったのかもしれない。

もっとも。

戦争の代名詞はオブジェクトであって、生身の兵隊などに価値はだとすると、考えただけ無駄なのかもしれないが。

5

当然のように説教された。

クウェンサーとヘイヴィアの馬鹿二人は、お偉い将校用の兵舎に連れて来られていた。とは言っても、やはりここも大型の基地構成車両の中である。三台の車両をボルトで並列に連結し、四階建てに相当する四角い建物を形成している。もちろん、いざとなれば連結を解いて細い道を通る事も可能だ。

クウェンサー達はそんな将校用の兵舎の中でも、最上階の四階部分の一角にいた。

和風マニアのブルジョワめ。

思わず二人がそうシンクロしたのは、何も室内の豪華な内装を見た感想だけではない。硬い床の上にジャパニーズ・セイーザさせられているためだ。

一方、我らが上官フローレイティア様は硬い床にはいない。部屋の奥半分は一段盛り上がっていて、そこにはタタミーが敷かれている。彼女はタタミーの真ん中にある脚の低い机の前に座っていた。猫が乗ったら二度と離れなさそうな柔らかいザブトンを尻に敷いている。

長い銀髪の美女だった。

ただの銀色ではなく、うっすらと染めているのか、わずかに青い色を帯びている。

スラリとした長身に、軍服を内側から強烈に盛り上げる爆乳。女性将校用のタイトスカートから伸びる、黒いストッキングに包まれた脚は単純に細いだけでなく、何か人の目を惹きつける流線形の美に溢れている。淡い色を施した唇には煙管が咥えられていた。ヨーロッパ辺りの名探偵が愛用するような太く短いパイプではなく、これもやはり和風な――二〇センチ弱

の長さを持つ、ひどく細く長いものだった。
そういう種類の煙草なのか、それとも女性の髪の匂いでも混じっているのか、仄かに甘い香りがクウェンサーの鼻まで届く。
「……何故呼ばれたのかは分かっているのね？」
窓の外の雪原よりも冷たい声がクウェンサーとヘイヴィアの耳に突き刺さった。
もちろん、分からないはずがない。
二人は本来の職務である『雪かき』を放り出して、整備基地ベースゾーンの外で食糧探しに勤しんでいたのだ。おまけにヘイヴィアの方は軍のライフルを使ってあっちこっちにバンバン撃ちまくっていたのだから、怒られない方がおかしい。営倉送りどころか、ひょっとすると軍法裁判にかけられても不思議ではないレベルである。
「（……どうすんだよヘイヴィア！　だからやめようって俺は言ったんだ!!　これならレーションどころか三日間雪の塊だけ頬張ってた方がまだマシだったじゃないか!!）」
「（……うるせえな畜生!!　あいつに限って言えば握り拳でオブジェクトと戦えるんじゃねえくそ、ホントに一八歳かこの女。今時の戦場に生身の兵隊は必要ねえとは思ってたけどよ、あいつに限って言えば握り拳でオブジェクトと戦えるんじゃねえのか!?）」
「クウェンサー、ヘイヴィア」
ただシンプルに名前を呼ばれただけで、大の男二人がビクゥ!!　と背筋を強張らせた。フロ

ーレイティアはこちらを睨んでもいない。カンザシを模した二〇センチ前後の細長いヘアピンを指先で軽くいじりつつ、机の上にあるボードに向かって、ペンのような物を走らせている。

タブレットだ。

確か、本来はパソコンを使って絵を描くための道具だったと思うのだが……、

「これが気になるのクウェンサー？」

「はっ、はい!!」

「日々の食糧探しに明け暮れるお前達ほどではないが、私も私で忙しくてね。いやはや全く、ゲットした肉や魚を雪の中に埋めて食材を保存するのに必死なクウェンサー殿に比べればどうって事はないんだが、アラスカのベースゾーンに常駐しつつ、太平洋の小島での作戦も遠隔指揮しなくてはいけないの」

「え、ええと……」

クウェンサーは、眼球だけを動かして横合いの壁を見た。そちらは全面が巨大な液晶モニタになっていて、大きな海と島々の地図が映し出されている。どうやら、フローレイティアの手元と連動しているらしく、タブレットの動きに合わせてVに似た赤いチェックが増えていく。

「ああ。ようは簡単な事よ。私がこのボードに印をつけると、待機している巨大なオブジェクトが遠距離砲撃でゲリラの拠点を吹き飛ばしていくって訳。実にシンプルな作戦よね？　そうだって言えよ」

涼しい顔で言いながら、さらにキュッキュッとチェックを入れていくフローレイティア。

「やはりタブレットは良いわね。筆圧の高さで私のガッツが伝わるらしいから。今日の遠隔部隊は何だか特にスムーズに動いてくれる気がするの」

正確に作戦指揮を行いつつも、よほどお怒りなのか、彼女の握るプラスチック製のペン型ツールがミシミシと小さな音を立てていた。

その都度世界のどこかで肉片が飛び散っている様子を想像し、二人はガタガタガタガタターッ!!　と高速で震える事になる。

「という訳で、複数のベースゾーンと部隊を同時に指揮する私は忙しくしてくれたという事よ。……ところで、私の胸中は想像できる？」

折に馬鹿二人がさらに私を

「はい!!　できればあまりイメージしたくありませんが！　フローレイティアさんが大変ブチ切れているのが分かってしまいますッッッ!!」

「よろしい。優れた部下を持つ私は幸せよ。そうよね？　賛成だったら頷けよ」

嗜虐に満ちた笑みで、ようやく顔をこちらに向けるフローレイティア。

彼女は一通り太平洋の部隊への命令を終わらせ、作戦の完了を確認すると……これまでとは打って変わって屈託のない表情でこう質問してきた。

「て、戦果の方はどうだったの？　いい加減、こっちも食べられる巨大な消しゴムみたいなレ

ーションは真っ平だからね」

6

……という事で今夜の夕飯は豪華なものになりそうな感じで話は収まったのだが（ただし罰則については話は別で、クウェンサーとヘイヴィアの両名は後日雪原ランニング一〇キロの刑が確定してしまったのだが）、食事まで少々時間がある。

となると早速地獄のランニングか!?　と身構えたクウェンサーだったが、上官のフローレイティアは首を横に振った。彼女が言うには、

「お前は派遣留学の学生でしょ。いい加減に整備場に連行してオブジェクトの勉強させないと、私が整備主任のばあさんにどやされてしまうのよ」

「うっ!?　そういえばそっちもすっぽかしてた!!　となるとフローレイティアさんが一目置くほどのばあさんからコンボで説教が!!」

「ええと、それからヘイヴィアは一人で雪かき続行ね。日没までに滑走路が使えるようにしておけよ。航空部隊から苦情が来ているからね」

「いえーい!!　一一〇キロダッシュよりきつそうだぜオイ!!　っつーか航空部隊も自分で働けよ!!」

そんな訳で、ひとまずクウェンサーはヘイヴィアと別れてオブジェクト整備場へ向かう。

本体だけで五〇メートル以上の超大型兵器オブジェクトをすっぽり覆うほどの巨大建造物。しかしそれもまた、将校用の兵舎と同じく、複数の基地構成車両を連結させた車両団だ。

縦一五メートル横一〇メートルほどの、平べったい台座のような形の基地構成車両を左右両サイドに並べ、冂の字のように急造の壁と天井を組み立てたセットを作る。その輪切りにされた倉庫のようなセットをいくつか連結させ、大きな整備場を作っているのだ。

そういう仕組みのせいか、この整備場には通常のシャッターの他にもう一つ、緊急時のオブジェクト出動方法がある。整備場を形作る基地構成車両群がオブジェクトの周りを覆うようにに連結し、オブジェクトが出ていく時は逆に各車両は連結を解いて離れていく、というやり方もあるのだ。……整備用の足場を崩してしまうため、普通はまずやらないのだが。

そんなこんなで、クウェンサーは整備兵用の小さな裏口から巨大な建造物の中へと入っていく。

圧倒的な光景だった。

武力の象徴である、五〇メートル級の超大型兵器オブジェクト。

中心である動力炉を包んでいるのは、そのまま核シェルターにもなる分厚い壁だ。それは球体に近いフォルムになっている。足回りは逆Y字の形状で、理屈としては歩いたり車輪を転がしたりするのではなく、静電気を利用して地面から少しだけ浮かび上がっている。理論は全然違うが、見た目の動きは下敷きが滑るような感じに近い。

もちろん、ただの地面に静電気を浴びせただけでは巨体は浮かばない。帯電したオブジェクトに対する反発剤のスプレーを地面に吹き付けながら進んでいる訳だ。

推進装置はレーザーの応用だ。

静電気の力でオブジェクトと地面の間には小さな隙間ができているが、ここに高出力のレーザーを放ち、反射、集中を繰り返させる事で空気を熱し、爆発的に膨張させて推進力を得る訳だ。……レーザー式のシャトル発射装置にも使われている理論の応用である。

メインの兵装は、球体後部から伸びる七本のアーム。

そこに接続された七門の巨砲は、同格のオブジェクトすら貫通するという。

さらに他にも大小一〇〇門近い砲台が球体状の本体の全面にびっしりと取り付けられ、もはや『最適化された兵器』というより『考えつく限りの武力を片っ端から寄せ集めた異形』のような印象があった。

現代における軍の要。

戦争の歴史の最先端。

超大型兵器オブジェクト。

その巨体はクレーン車に使うような太いワイヤーを二〇〇本以上使って、広大な建造物の壁や天井の各部に固定されていた。空中には無数の連絡通路が走っていて、今も作業服を着た大勢の整備兵が各々の作業に没頭している。

と、金属の手すりをスパナで叩く、ガツンという甲高い音が響いた。
クウェンサーが驚いて顔を上げると、三階部分の通路にいる婆さんがこちらに向かって大声で言ってきた。
「来たかね小僧！　猫の手も借りたい状況じゃて、垢抜けない小僧でも使ってやるから感謝しさっさと工具持ってこっちに上がれ!!」
「遅れてすみません!!　罰則の方は――ッ!!」
「構わん構わん。結果で示すのが整備兵の流儀じゃよ!!」
婆さんの言葉を聞きながら、クウェンサーはボタン一つで分離できる簡易階段を駆け上がって三階に向かう。
「（……うおお。話の分かるばあさんで良かったー。何だよ全然怖くないじゃんよー）」
「（……ま。使い物にならんかったらドラム缶に詰めて外から金属バットで叩きまくるがね）」
互いに聞こえぬ声で呟きながらも、二人は三階の連絡通路で作業を始める。
婆さんがいじっているのはシステム回りだ。
オブジェクトのコックピット（及び非常用の脱出口）は、球体状の本体の後方上部にあり、（考えたくもないが）緊急時には、操縦者エリートは後ろ方向の斜め上へ射出される仕組みになっている。
現在は何十もの隔壁が開いて球体中心までのルートが開放されていて、トンネルの出口のよ

うに、奥の奥でコックピットのモニタの光がわずかに瞬いていた。

このトンネルは単純なコックピットまでの道という訳ではなく、二重扉の燃料追加用投入口と、排気ガスを圧縮封入するための固着ボックス交換室など、様々な場所へと繋がる分岐路になっているはずだ。隔壁と切り替えレールで構成された、地下鉄のトンネルを思い浮かべると分かりやすい。

一方、婆さんはそのトンネルの近くの手すりに背中を預けたまま、手元の携帯端末を眺めている。

「それ、オブジェクトのシステムと無線で直結してるんですよね？　なら、コックピットの隔壁を開放する必要ってないんじゃあ……」

「阿呆。オブジェクトの隔壁は電波遮断効果もあるんじゃよ。そうでもせんと、戦闘中に敵軍のオブジェクトからいらん小細工をされるリスクが増すんじゃし」

そこで、視界の端で、バチッ!!　という青白い閃光が迸り、二人は思わず声を止めた。溶接工がオブジェクトの装甲に手を加えているのだ。

本体だけで五〇メートル以上のオブジェクトだが、まさか馬鹿デカい型枠に溶けた鉄をそのまま流し込んで作るのではない。わずかに湾曲した畳ほどの鋼板を用意して、それを何十、何百、何千、何万枚と重ねていって、巨大な球体を作り出している。

薄い板を何重にも重ねるのは、分厚い壁の防御力よりも、衝撃の分散や拡散に重きをおい

たものだった。理論として単純な防弾ベストにも似ているが、あまりにも多くの鋼板を使っているおかげで、核攻撃の衝撃波すら押さえつける事に成功している。

「オニオン装甲でしたっけ？　ただ頑丈なだけじゃなくて、敵軍オブジェクトから被弾した時に簡単に交換できる事まで考えてるんだからすごいですよね。最初に考えたヤツはノーベル賞をもらって良いと思う」

「簡単とは言っても、装甲の最小単位である一枚一枚だって、日本刀のように職人が手間をかけて鍛え上げた特注品じゃがね」

「熱した鋼に高耐火反応剤の粉末をミリグラム単位で混ぜながら打っていくんでしたっけ。あれは強度は高くなるけど再利用が難しいとかって話でしたよね」

「職人の指先あっての業じゃな。下手な機械に任すと配分を誤り、逆にパキパキと割れやすくなってしまうからの」

婆さんと一緒に階下を見下ろすと、ちょうどフォークリフトが湾曲したスペアの鋼板を運んでいるところだった。フォークリフトの側面には、『ミリンダ姫に美しき勝利を!!』とアルファベットで大きく書かれている。

例のお姫様の事か、とクウェンサーが心の中で呟くと、隣にいる婆さんがこんな事を言ってきた。

「まあ儂としては、中心部の動力炉から外装部のレーザー砲まで、ケーブルを一切使わずに電

力供給しとる機構の方に驚いたもんじゃが」

「プリント基板式送電装置ですよね。絶縁物質と導体物質をセットで銅板に焼き付ける事で、『装甲にケーブル用の穴を空けて防御力を下げる事なく、電力の供給に成功した』とか何とか。最初に考えたヤツはノーベル賞もんですよ」

「やれやれ。小僧が言うと何でもかんでも簡単に作れるように聞こえるのう」

婆さんはゆっくりとした動きで首を横に振る。そうしている間にも、しわだらけの指先は高速に動き、携帯端末上でオブジェクトのソフト的なメンテナンスを行っていく。

作業を進めながら、婆さんはこう切り出した。

「ところで、ウェポンエンジニアを目指しているんじゃったな」

「え？　ああ、オブジェクトの設計士の事ですよね。まあ、俺みたいな『平民』だったら、その辺が一番リッチな生活ができるポジションじゃないかなって思ってるんですけど。報酬にしても世間体にしても、下手な下級貴族を簡単に追い抜けるらしいし」

「まったく、豪商なんぞ目指すとろくな人生にならんというのに。……まあ、小僧の人生だから止めはせんがね。で、未来のウェポンエンジニアは何を専門に組み立てる気じゃね？」

「一応、トータルフレームなんですけど」

「阿呆。そこらの新人の卵にいきなりオブジェクトを全部組み立てる仕事なんぞ回ってくるものか。そりゃ『将来の夢は億万長者です』っていうのと同じじゃぞ。漠然としすぎておる。普

通、小僧ぐらいの学生なら手頃なレプリカント方面を勉強して軍需産業に売り込みをかけて、そこからより複雑な技術を学ぼうとするもんじゃないのかね？」

「いやあ、レプリカントは苦手なんですよねえ」

と、何かを思い浮かべたのか、クウェンサーはちょっと嫌そうな顔になった。

「あれって動物や昆虫の動きを基に、新しいマシンの動かし方を考案する学問でしょ？　俺、クモとかゴキブリとか苦手なんで。……まあ、虫の観察日記なんだから、研究に掛かる費用が安く済むのは認めますけど」

「腑抜けじゃのう。基本をおろそかにすると後で泣くのは小僧じゃぞ」

「だから、そういう面倒なのをやらずに手っ取り早く基本を学ぶために、スタンダードな性能を持つお姫様のオブジェクトの所へ派遣留学の希望を出したんですよ」

「『本国』の重鎮達が、何のために方々の主要都市に動物園や昆虫博物館を建てさせていると思っておる。将来性のある若者達にオブジェクト設計のインスピレーションを提供するために血税を割いておるというのに」

ふう、とため息を吐く婆さん。

そこでクウェンサーはコックピットに繋がるトンネル状のルートの出入り口の方へ目をやった。

「将来性のある若者って言えば、そろそろ操縦士……エリートの選抜スカウトの時期でした

つけ？　『安全国』の学校にいた頃は、黒服の役人が校舎の周りをウロウロしていましたけど」

「年に四回も行う必要があるのかのう。どうせ今回も『該当者なし』じゃろ」

「エリートって『エレメント』とかいう適合条件があるんでしょ。あれって何なんですか？」

「……『オブジェクト操縦士』になるための条件』の総称じゃよ」

と、婆さんはそこで携帯端末を操る指先を止めた。

その口調が、これまでの世間話よりも若干温度が下がる。

「とは言っても、別に特殊装置を操るためのエスパー能力とかいう訳じゃない。ま、芸術性みたいな『資質の卵』もあるのは確かじゃがね。しかしまあ、エリートは電気刺激や暗示を使ってでも、徹底的に『当たり前の才能』を磨く軍事プロジェクトじゃからな。その育成に当たって、最大の障害となるのは資金でも設備でもなく、人権じゃよ」

「それって……」

「該当者の人権を完全に無視してもどこからも文句が来ず、なおかつ開発されたエリート自身も、胸の内はどうあれ国家の思惑通りに戦ってくれる。そういう条件に適合する人物というのは意外に少ない。……手塩にかけて育てたエリートを最強の兵器であるオブジェクトに乗せた途端、『本国』に主砲を向けるようになってしまっても大問題じゃからな」

あの子には話すなよ、と婆さんは小声で付け加える。

その時、グイーンという機械の作動音が二人の耳を打った。

コックピット用のエレベーターを使って、トンネルのようなルートから座席が飛び出してきた。そこに座っているのは、H字のベルトで上半身を固定させたエリートのお姫様だ。

「やっと来たね。おねぼうさん」

「返す言葉もございませんわ」

「ほれ、小僧の仕事じゃ。緊急用の脱出装置の整備でもやっとくれ。縁起が悪いっつって誰もやろうとせんからな」

いつの世も、半人前に任される仕事なんてそんなものである。縁起が悪くて役にも立たない仕事をこなしながら、横目でプロの技を盗んでいく訳だ。

少女の座っている椅子の後部へ回り込み、工具を動かしながらクウェンサーは尋ねた。

「そう言えば、オブジェクトが白一色なのってゲン担ぎなんですか？　それともストレートに雪原用の迷彩とか？」

「さいしょはきちんとかんきょうに合わせて、めいさいしていたんだけど」

「天敵知らずの百獣の王は身を隠す必要もあるまい。ペンキ代の無駄という事で、今じゃ白一色なんじゃよ。……そもそも、五〇メートル級の巨体じゃしな」

「へえ。それこそさっきのレプリカントの話じゃないけど、凶暴な動物や昆虫の模様を参考にして、敵に威圧感を与えるプロジェクトがあったとかってウワサありませんでしたっけ？」

「後はギアチェンジによって、金属を擦る嫌な音を延々と響かせる悪趣味なモードを追加する

計画もあったがね。いずれも頓挫した」

「？」

「オブジェクトを眺めるのは敵軍だけじゃないからの。味方の士気まで削いだら意味がないし、そんなもんですかね、とクウェンサーは適当に相槌を打って、『安全国』のパレードで悪趣味なオブジェクトを国民に見せる訳にもいかんじゃろ」

「じゃあ天井からぶら下がったロープにくくりつけてあるレイピアは？」

「あれは単なる『伝統』じゃ」

「ひっしょうひっさつのね」

そんな言葉を聞きながら、クウェンサーはレンチを動かし続ける。

カチッという小さな音がした。

と、さらにおまじないについて語ろうとしていた少女の首が、ぐらりと揺れた。『？』と脱出装置の調整を行っていたクウェンサーは、座席の後ろから少女の後頭部を眺めていたのだが、

「くるしい」

「あっ、くそ！　馬鹿もん、ベルトの調整を勝手にいじるな!!　姫さん締まっとるじゃろうが!!」

「あれ!?　なんかまずい事になってる!?」

「くるしい」

少女はもう一度同じ事を繰り返す。クウェンサーは慌てて工具を摑み直すが、そもそもどこ

がどう影響してベルトの方に干渉したのかが分からない。
婆さんは婆さんで作業用の小さなエレベーターに走りながら、
「ええい、刃物を探してくる!!　小僧は力仕事じゃ！　儂が戻るまで姫さんが窒息せよう、両手でベルトを引っ張って隙間を空けておけ!!」
あわわとうろたえている内に婆さんは階下へ行ってしまう。
クウェンサーは急いで座席の前面に回り込み、
「すっ、すまない!!」
「気にしてないから、なんとかして」
「おう!!」
クウェンサーは婆さんの指示通りに、とにかくベルトを手前に引っ張って、少女が窒息するのを防ごうとしたが。
……なんか、H字のベルトは少女の胸を強調するようにみっちり食い込んでいる。
ええと、とクウェンサーの指先がわずかに硬直した。
ベルトを摑んで手前に引くためにはフック状にした指を潜らせて裏側に引っ掛けなくてはいけない訳で、そうすると少女の膨らみに触れなくてはならない訳で、というか

スレンダーな幼児体型かと思ったら意外に『ある』かも……などと無駄に思考を高速回転させるクウェンサーの耳に、お姫様のか細い声が届く。

「……死んじゃう」

「ッ!?」

そうなのだ。ためらっている場合ではないのだ。

（人命救助だ真面目な場面だ俺の失敗だ俺が挽回しなくちゃいけないはずだでも女の子のおっぱいだぜいやいやそれどころじゃないシリアスに行こう早くしないと命の危機だそうだ助けるんだこのお姫様のためにできる事をやるんだおっぱい!!）

「おおおおおおおおおっ!!」

ついに意を決したクウェンサー、これ以上ゴチャゴチャ考えて覚悟が鈍るのを避けるため、全力で少女の胸に摑みかかろうとして、

「ひ……っ!?」

お姫様の小動物ライクな短い悲鳴に、思わず踏み止まる。

いかんいかん。

今、ベルトじゃなくて乳のほうにロックオンしていなかったか？

ともあれ、少女が貞操の危機を感じるほどの興奮面で乳を鷲摑みする訳にもいかない。ならばどうする？　どうすれば少女を汚す事なく助ける事ができるのだ!!

「きっ、きんきゅうしゅだん……」

いよいよ顔が青ざめてきたお姫様は、やや切羽詰まった調子でこう言ってきた。

「どうした？　なんか打開策があるのか!?」

「あるにはあるけど」

言いながら、少女は座席の下の方に隠されていたボタンを、小さな指先で触れた。

直後、少女の座る座席が爆発した。

彼女を戒めていたH字のベルトが自動的に切断され、小柄な体が宙高くへ舞い上げられる。

しかしクウェンサーにそれを眺めている余裕はなかった。圧縮空気の塊に体を叩かれ、数メートルも吹き飛ばされたからだ。

ゴロリと連絡通路の上に転がると、視界の隅に白くて大きな花が見えた。

緊急脱出用のパラシュートだ。

本来はコックピットから外装まで高速エレベーターで出て、そこからさらに座席そのものが空中に飛び出し、最後にスーツに備わった圧縮空気の射出機構が三段階で機能するはずだったのだが、今回は最後のヤツだけを作動させ、天井近くまで飛び上がったのだろう。

確かに脱出装置は縁起が悪すぎる。

心の中で呟くと同時に、クウェンサーの耳にこんな声が届いた。

「これ、生まれてはじめて使ったな」

7

日没になったらご飯の時間だ。

クウェンサーは食堂には向かわず、雪のちらつく外へと飛び出した。

のだ。鹿を捕まえてきたヘイヴィアはもちろん、大変部下想いな上官のフローレイティア様まで付き合ってくださるつもりらしい。

……どいつもこいつも、超大型兵器オブジェクト任せの戦争にはいつもこいつも、超大型兵器オブジェクト任せの戦争には

○人近い兵士に声をかければ全員ついてきそうな雰囲気だが、フローレイティア様は三人だけの機密事項にしておきたいらしい。肉の量には限りがあるからだ。

そんな訳で、今夜のバーベキューは三人で催された。

会場は整備基地ベースゾーンの敷地内。

ベースゾーンはたくさんの大型の基地構成車両の集合体だが、彼らは四方をブロック状の施設に囲まれた、最も冬風の流れてこない場所へこっそりと集合し、焚き火の上に鉄板をかけていた。

一足先に火種を用意して暖をにしていたんじゃないだろうか「やっぱり暖を取っていても、食べて体の中から温まりたいよクウェンサーはフローレイテ「ストッキングって、生足より「何なら頭から被ってみるクウらないね。お前は防寒グッズと年中ズボンのお前達が羨ましヘイヴィアへ話しかける。

「ご苦労さんヘイヴィア。お前空部隊のSTOLの連中もお前「へへっ。いやあ、大した事いっすよ」

「まあ実際、航空部隊の連中た結果、自ら武装を解除するよ要がある』と思われるのが怖いるが、実際、敵軍オブジェクト

ヘイヴィアの足元をチラリと見て、も温かいものなんじゃないんですか？　こんなものは身だしなみよ。気休め程度にしかなして靴下を選んでいるの？」ローレイティアは呟くと、今度は

に感謝しているはずね」

必要ないんだけど。どうせ敏捷性とステルス性を追求し力を保有しているから撃墜の必うな腰抜け共だしね。敵に『武ん だとき。いけしゃあしゃあと偵察専門の部隊を気取ってはい情報はほぼ全てお姫様が実際に戦って体当たりで持ち帰って

きているような状態だからね」

「くそっ!!　無駄な事をしてたと薄々分かっちゃいたが、他人の口から言われると改めてムカつくなオイ!!　そもそもこの調子じゃ一晩明けたらまた雪に埋まってそうだし!!」

「ま、化学酸素沃素レーザーが爆撃機に搭載され始めた頃から戦闘機の時代は下り坂だったしね。……あれはユニットが大きすぎて小柄な戦闘機には積めなかったから。『光』の登場で、音速で飛べるかどうかなんてどうでも良くなったって事さ。そこに来てオブジェクトのレーザーだって各種方式勢揃いだしね。連射、乱射も思いのまま。これで戦えっていうのは無茶よ。今時の航空部隊にできる事なんて、『安全国』からピザを冷めずに届ける事ぐらいじゃないの？」

「……おい、七〇〇メートルだぞ。短距離滑走路とはいえ、俺は一人で七〇〇メートル雪かきしたんだぞ……ッ!!」

わなわな震えるヘイヴィアから見えない位置でこっそり舌を出すフローレイティア。彼女は普段多くの部下に指示を出す時よりもくだけた調子でクウェンサーに言う。

「そう言えば、ベースゾーンの外でお姫様と話していたって？」

最前線の兵士にあるまじき、小指の爪の先まで丁寧にマニキュアを塗った美貌の上官は、そんな事を尋ねてくる。隊の命令をボイコットした事よりも、むしろそちらの方が重要であるかのような口ぶりだった。

「えーっと、やっぱ問題ありました？　整備場の方じゃ時折話はしてたんで、おんなじようなノリで対応してたんですけど、立場を考えるべきでしたか」

「良いんじゃない？　衛生班の連中は万に一つも体調を崩さないようにとか何とか言って、私達以上に不味いレーションを食わせているみたいだけど……正直、あんな状態じゃ栄養面より前にストレスでやられてしまいそうよね」

「エリートのお姫様には、専用の娯楽棟が用意されてっとかって話じゃなかったでしたっけ？　デジタル化されたヒーリング効果がある設備とか満載の」

ヘイヴィアは明らかに使い慣れていない敬語でそんな事を言う。

フローレイティアはジューシュー焼けた鹿の肉を、和風マニアらしいハシで摘みながら、

「あんなもの、金ばっかりかかって使い物にならないのよ。お前は学校の先生から配られる教材なんかで夢中に遊べるの？　実際、お姫様は一回ふらりと立ち寄ったっきり、それから全く やってきていないそうよ」

「そういうものですかね」

クウェンサーは昼間の会話を思い出しながら、適当に言葉を返す。

そもそも、あの少女は何をすれば笑うのやら、それさえ見当もつかない。

今度は勝てないかもしれない、と不吉な事を言っていた少女。

その言葉を頭に浮かべながら、ついクウェンサーはこう尋ねていた。

「フローレイティアさんは、負けた事ってありますか？」
「それはあるよ」
肉を食べてはビールが欲しそうな顔になるフローレイティアは、あっさりと肯定した。
「遠隔指揮している最中に三回、自分が駐留している部隊が負けたのは一回。いやあ、さんざんだったよ。敗走そのものより、本国に帰った後の風当たりがね。国家規模の戦術兵器であるオブジェクトを失ったんだから仕方のない話だけど」
「えー？　戦争の代名詞ってオブジェクトでしょ。向こうにオブジェクトぶっ壊されたらどうすんですか。普通の戦車とか戦闘機でどうにかできるとは思えないんですけど」
ヘイヴィアが興味津々という感じで言うと、フローレイティアはケロリとした顔でこう答えた。
「簡単よ。『白旗』を上げれば良いの」
「は？」
「今時の戦争なんてのは総力戦なんかじゃないからね。片方のオブジェクトが壊れた時点で勝敗は決まるし、無力な歩兵部隊に追撃するほど勝者は暇じゃないの。別にそういう条約が正式に締結されてる訳じゃないけど、ここまでやっちゃったらこんなのは口に出すまでもない基本事項ってヤツね。部隊を速やかに撤収して、領土を明け渡してしまえば『泥沼』になる事はないっていうのがセオリーよ」
ポカンとした顔の新米二人を見て、フローレイティアは屈託のない笑みを浮かべた。

「ははっ、驚くのも無理はないよね。訓練の時には緊張感を削がないようにオリーについては話さないものだし。しかしまあ、私の体を見ろ。少年兵として一三歳の頃から従軍しているが、古傷の一つもないのよ。オブジェクトは余計な人死にを増やさないよう、全兵力を拡散させず一ヶ所に結集させた、クリーンな超大型兵器なの。私の綺麗な肌はその恩恵である『安全な戦場』の証拠ってヤツよ」

フローレイティアはハシを小さくくるくると回し、

「知っている？　この部隊から兵士がリタイヤしていく一番の理由は、敵との銃撃戦で倒れる事でもうっかり地雷を踏む事でもないの。……ベースゾーン内での男女間のいざこざよ。今時の戦場ってのは、銃弾よりも色恋沙汰の方が恐ろしいらしい。いかにここが安全か分かるよね？」

瞬間、納得しかけたクウェンサーだが、そこでふと疑問が浮かんだ。

「あれ？　でもフローレイティアさん、昼間は太平洋で友軍のオブジェクトに命令を出して敵の拠点を直接砲撃させていたような……」

「良い着眼点ねクウェンサー。あれは正規軍同士の『戦争』じゃないの。ゲリラやテロリストなどに対する攻撃作戦は鎮圧『活動』にあたるから、そういうセオリーは持ち出されないのよ。戦争条約で禁止されている拳銃の特殊弾頭を警察が普通に使っているようなものね。……良いか、覚えておけよ。これがオブジェクトの効率的な運用プランなの。大国のメカニズムは、対

抗勢力を上手に排する機構も備えている訳よ」

話題がきな臭くなり、飯が不味くなりそうだったので、クウェンサーは話題を変えようとする。オブジェクト以外の話のタネとなれば、やはりバーベキューの食材しかないだろう。

クウェンサーは夕飯の主役である鹿の肉を眺め、それから獲物を獲得してきたヘイヴィアの顔を見た。

「……それにしても、やっぱり軍人って自力で食糧を得る訓練とかも積んでるの？　こっちは三時間粘っても、シャケを一匹釣れるかどうかだったのに」

「近頃のライフルってのは光学スコープだけじゃなくて、赤外線カメラとか索敵マイクとか搭載して、いろんな角度から標的の足取りを追えるようになってんだよ。俺だって釣り竿一本で大自然に立ち向かったらボウズになんだろ」

戦争はオブジェクトの仕事だから、丸っきり税金の無駄遣いだがな、とヘイヴィアは付け加える。フローレイティアの方も器用にハシを動かしながら、

「食糧なんてベースゾーンと補給路がやられない限り、本国からいくらでも回ってくるからね。そして、オブジェクトがいる限り基地がやられる事はないの。動物の獲り方なんて、私が新兵だった頃にも習ったか習わなかったか、ぐらいのものよ。少なくとも、お前みたいな工兵なんぞに必要なスキルじゃないの」

「工兵……ですか。なんか、そういう響きは未だに慣れませんね」

「一応、ベースゾーンの運営は国の税金で回っているからね。ブラブラしてる学者の卵にも、なんか仕事を与えないと政治家さん達の票に響くんだとさ。『本国』の方じゃ、これから評議員選挙の佳境だし……現職のフライド評議員とかピリピリしているのよこれが」

工兵にも色々あるが、クウェンサー達が話題にしているのは爆薬を使う兵士の事だ。と言っても兵士を殺すためのプロフェッショナルではなく、橋を爆破して敵の進路を断ったり、邪魔な岩を吹き飛ばして自軍の進路を築いたり、といった事をする。

変な知識ばかり豊富で、ろくに人を撃つ度胸もない学生には、そういう役職が適任らしい。衛生兵というコースもあるにはあるが、クウェンサーの専攻は機械であって、生き物関係はそれほど詳しくない。

「といっても、ウチの基地は基地構成車両主体の車両団だからハンドル操作だけで陣地構築できるし、超大型兵器のオブジェクトも控えているから、ほとんど工兵としての仕事はないんですけどね」

「それは工兵だけじゃないね。ベースゾーンの連中みんなそんな感じよ」

フローレイティアは数少ないシャケの身にハシを伸ばしつつ、

「くそっ、世の中は平和よね。おかげで銃は錆びるし栄養過多でニキビができそう」

「そっすよね。オブジェクトさえいりゃ俺らは安泰。俺は三年も基地に詰めてりゃ『貴族』の道が待ってるし、クウェンサーの野郎は『安全国』に帰ってお偉い学者様の仲間入りだ」

バンバン、と馴れ馴れしくクウェンサーの肩を叩きながら、ヘイフローレイティアは『……その顔には嫉妬の色などは全くなかった。おそらく、軍人として出世して堅苦しい政治ポストに就くよりも、この安全な戦場が気に入っているのだろう。

そうだよな、とクウェンサーも思う。

「……オブジェクトがあれば、俺達みたいな平和ボケでも戦争できるよな」

この時のクウェンサーの言葉は、まさに世界の真理を突いていたのだろう。

そう。

オブジェクトさえあれば。

8

一日後、彼らは知る。

自軍のオブジェクトに破壊されてしまった軍人達にどんな地獄が訪れるかを。

フローレイティアは、負けたら白旗を上げればおしまいだと断言していた。

だが、彼女は同時にこうも言っていたのだ。

別に、正式にそういう条約が締結されている訳じゃないが、と

9

ボン!!　という爆発音が、吹雪のアラスカに炸裂した。

吹雪に霞む一〇キロほど向こうで戦っていた無敵の超大型兵器によってゆらゆらと雪原へ落下して動きを止めている。脱出用の座席が射出され、パラシュートにしていくのが、双眼鏡越しに確認できた。

そして、

「……、」

ギチギチギチギチ、という腹に響く嫌な音が、風に乗ってクウェンサーの耳まで届いてきた。

安全地帯の象徴だったオブジェクトを吹き飛ばしたのは、やはり同じく敵軍のオブジェクトだ。

本体は分厚い装甲に覆われた、巨大な球体だ。その四方から昆虫のような四本の脚が伸びていて、大地を踏みしめている。主砲は全長五〇メートル級の下位安定式プラズマ砲が二門。砲身に特殊なガスを充塡した上で、動力炉から膨大な電力を通して超高熱のプラズマを人工的に作り出し、発射する仕組みの大規模兵器だ。それが前後左右に各ワンセットずつ配備され、横倒しの十字架のように全方向への砲撃を可能としている。主砲だけで合計八門だ。さらに本

体の球状ボディや四本脚の各所には、大小無数のレーザービーム、レールガン、コイルガンなど、一〇〇門以上の砲が備え付けられている。

本体だけで五〇メートルに達し、四方向にある主砲の長さを含めると一四〇メートル以上のサイズを誇る山のような塊が、中規模の鉄橋並の巨大な主砲をゆっくりとこちらへ向けてくる。地中深くの核シェルターすら一発で溶解させるほどの、二門ワンセットの下位安定式プラズマ砲だ。

「……おい」

ふと、隣にいたヘイヴィアが呆然とした調子で言った。

「何で照準がこっち向いてんだ？　オブジェクトが負けたらてんじゃねえよ。早く『白旗』上げろっつってんだろォオおおお

ギチギチと微調整される主砲の照準は、暗にこう告げていた。

――知った事か、と。

「逃げろ……」

誰かが呟いた。

あるいは、それはクウェンサー自身の言葉だったのかもしれない。

「逃げろォォおおお

な、オブジェクトを整備するための設備を積んだものが飴細工のように爆発した。

爆風に煽られ、クウェンサーの体が深い雪の上へ投げ出される。

○度を下回るはずの雪に埋もれながら、クウェンサーの全身は嫌な汗に包まれていた。

「なんっ……だ……」

自分の声を、自分の耳が認識できない。

半分以上性能を失った視力で必死に現状を確認すると、何とさらに、一直線に突き進んだ下位安定式プラズマ砲の進路をなぞっている事にも気づく。

取られるように消滅している事にも気づく。

（……あまりの熱で、雪が溶けて……水蒸気爆発でも併発したのか……？）

もしかすると、鋼鉄も一度蒸発して地面に張り付いているかもしれない。

倒れたまま呆然としているクウェンサーの腕を、誰かが掴んだ。

血走った眼で荒い呼吸を繰り返している、ヘイヴィアだった。

「おい、逃げるぞ」

「……何だって……？」

「逃げるっつってんだよ!!　こっちのオブジェクトはやられたピンしてやがる!!　こうなったら俺達が一〇〇台の戦車を持ち出したってどうにもならねえ。向こうのオブジェクトはピン

逃げなきゃ蟻の行列みたいに虐殺されちまう!!」

逃げる。

ようやくその言葉に現実味を感じたクウェンサー。

周囲を見回せば、他の多くの兵士達も行動を開始していた。ベースゾーンにある基地構成車両だ。兵士達はとにかく手近にあるはずの車両団が、各自バラバラにパニックでも起こしたように急発進していくのが分かる。

飛び乗り、本来は隊列を組んでベースゾーンとして機能しているはずの車両団が、各自バラバラにパニックでも起こしたように急発進していくのが分かる。

方々から叫び声が聞こえる。

兵士達の言葉には、『戦う』という意思など一つもなかった。

「くそ、無人機を全部出せ！　UAVを飛ばしてオブジェクトの注意を引くんだよ!!」

「逃走ルートは構築できたか!?　五〇メートル級の化け物が通り抜けられないような細い山道はないのか!!」

「チャフやフレアのストックはあるか!?　戦う事はできなくても、何とかロックを外す事ができれば……ッ!!」

彼らは本物の軍人だからこそ、オブジェクトと正面から戦っても勝てない事ぐらい承知している。

それらを眺めながら、クウェンサーは呆然とした調子でヘイヴィアに言った。

「逃げるって――どこへ？」

「……ッ!!」

ヘイヴィアの顔が怒りではなく恐怖で歪む。

改めて他人の口から絶望的状況を知らされ、ショックがぶり返したような感じだった。

直後。

ギュン!!　という奇妙な音が聞こえた。

見れば、一〇キロ以上離れた所にいたはずのオブジェクトが、滑るような挙動でこちらへ迫って来ていた。タイヤを使った自動車の動きではない。まるでアメンボのように小刻みな加速を繰り返し、平地のみならず急斜面の山肌にまでスルスルと動き回る。それはもはや、スポットライトの光の輪を動かしているような、地形を完璧に無視した挙動だった。

黒い雷雲が近づいてくるような低い音が、クウェンサーの耳に残る。

（くそ、やっぱりウチのお姫様と同じ静電気か……ッ!?）

慌てて逃げようとする自軍の基地構成車両に取り残されながらも、クウェンサーはただ雪の中で呆然とした頭で何とか考える。

あのオブジェクトは、静電気を使って地面から少しだけ浮いているのだ。二〇万トン以上の巨重のオブジェクトだが、内蔵している動力源は、クリーンな上に原子炉を軽く凌駕する。

その性能を使って、巨重を浮かばせるほどの電気的エネルギーを生産しているのだ。

ほんのわずかに、特徴的な匂いが鼻についた。おそらくは帯電したオブジェクトの巨体を反発させるための物質を、スプレーのように吹きつけているのだ。一般的に二、三日で自然分解する反発剤は動植物にとって無害な成分で調整されているはずだが、追い詰められたクウェンサーにとっては血の匂いよりもおぞましく感じられた。

あれだけ巨大な物体が机の上を下敷きが滑るように移動していく光景は、奇怪以外に表現のしようがない。

自軍の基地構成車両は、二つの山に挟まれた谷間の部分を通って逃げようとしていた。

オブジェクトは雷雲のような音と共に基地構成車両部隊を一度大きく迂回するように動き、斜めの山肌をぬるっとした動きで通過すると、逃げ道を塞ぐように谷間の道路に立ち塞がる。

退路は二〇秒で断たれた。

後に待っているのは明白だ。

「くっそ!!　そこから降りて!!」

叫んだのは、上官のフローレイティアだったか。

直後。

全長五〇メートル以上のオブジェクトの砲口が、火を噴いた。

いや、それは正確ではない。
オブジェクトの搭載している武器は、先ほどの下位安定式プラズマ砲だけではない。何しろクリーンな上に原子炉を軽く凌駕する動力炉を搭載しているのだ。
五〇メートル級の巨重に、クラス下位安定式プラズマ砲、レーザービーム、レールガン、コイルガンなど……大小合わせて一〇〇門以上の砲を誇っている。
それら全てが放たれたのだ。
並の戦艦なら一門搭載するだけでも船体が傾きそうな大出力兵器が、一〇〇門以上である。
もはや音の数を数える事に意味はなかった。
ドジャーッ!!　と。数千数万の轟音は重なり融合し、一つの巨大な爆音に進化する。
隊列を崩し、とにかく少しでも逃げようとしていた辺りの基地構成車両群へと、無数の砲弾や光線が容赦なく襲いかかる。
普通の砲弾ぐらいなら耐えるであろうブロック状の設備の壁が、台座となる基地構成車両ごと紙屑のように吹き飛ばされる。ガソリンに火が点いて爆発が連続し、兵士の体が宙高くに舞い上げられていく。
ヘイヴィアはとっさにクウェンサーの頭を掴み、深い雪にダイブするように身を伏せた。それでも、オブジェクトの砲弾が上半身と下半身を千切らなかったのは奇跡以外の何物でもないだろう。

（……いや……）

冷たい雪の温度すら分からない状態で、クウェンサーの頭だけが冴えていた。

（あのオブジェクト相手に奇跡とか偶然とか、そんなものが通用するはずがない。俺達が殺されなかった合理的な理由が……ッ!!）

理由があるはずだ。

クウェンサーは、まるで豆鉄砲のように雑に扱われるレールガン（それでも爆撃機に搭載するべき破壊力を持つ）に薙ぎ払われる基地構成車両を見た。砲口を向けられ、わらわらと大型車両から逃げ出す兵士達を照準で捉えておきながら、オブジェクトはさらに別の基地構成車両へ砲を向けているのが分かる。

それを見て、クウェンサーの表情がますます歪んだ。

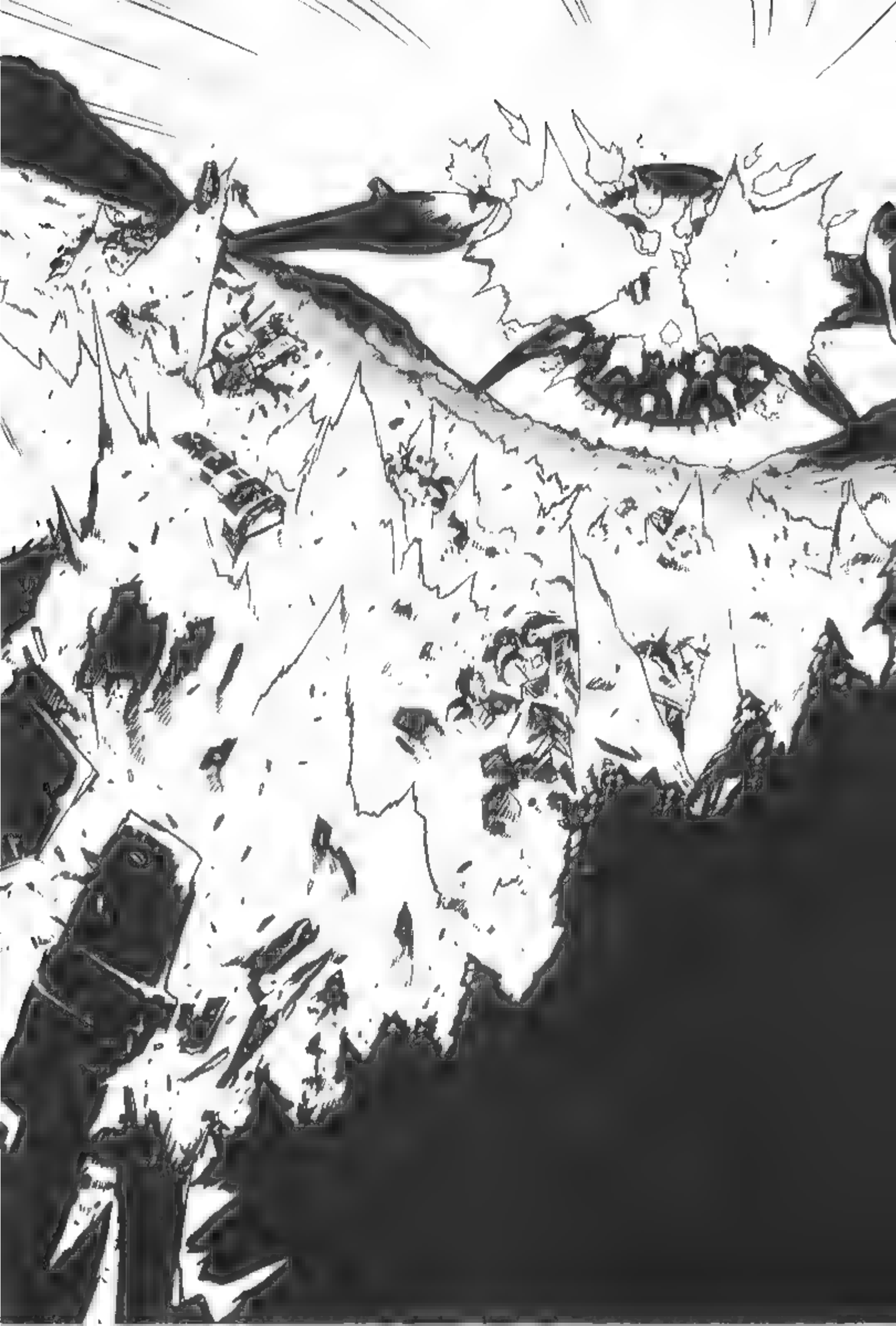
「ちくしょう、メンテナンス施設だ!!」

爆音にかき消されないように、喉を引き裂くような勢いでクウェンサーは叫んだ。

「オブジェクトの整備に使っている車両から離れろ!!　向こうの狙いはオブジェクト関係だ！離れないととばっちりを食うぞ!!」

ギョッとした兵士達が大きな基地構成車両から飛び退くと同時、オブジェクトの下位安定式プラズマ砲がそのメンテナンス施設を容赦なく薙ぎ払っていく。

戦争の代名詞はオブジェクト。



普通の戦車や戦闘機をいくら集めても、オブジェクトに対抗できる訳がない。

だからこそ、敵軍のオブジェクトは、『自分が破壊したオブジェクトを修理できるかもしれない施設やスペアパーツ倉庫などを、最優先で破壊している』のだ。万に一つでもオブジェクトを組み直されてしまえば、一方的ではなく、オブジェクト対オブジェクトという勝ち負けの分からない真剣勝負が再び展開されてしまうのだから。

別に、あのオブジェクトは兵士の命を見逃している訳ではない。

まず最初に、『反撃できる可能性』を完全に潰す。その上で、全長五〇メートル以上の巨体を使って、蟻のように見える生身の人間を一人一人追いかけて皆殺しにしようとしているのだ。

ドンバンバギン!!　と、次々と基地構成車両が破壊されていった。

自分達がまるで相手にされていないと分かっていながら、クウェンサー達は死に物狂いで身を伏せる。わずかでも状況を見誤れば、四方八方から飛んでくる畳ぐらいの大きさの巨大な壁の破片が人間を押し潰そうと迫ってくる。

「今の内に逃げるぞ」

震える手でクウェンサーの腕を掴みながら、ヘイヴィアは言った。

身動きの取れないクウェンサーは、ぐいぐいと引っ張られる腕を無視して、ただその言葉を聞いていた。

「どこでも良い!!　あの化け物から少しでも離れられれば良い！　とにかく走るんだよ!!」

それは戦略的な撤退というより、単に怖いものから目を背けたいだけのようだった。

そして、

「……」

（止まった……た？）

あらかた主要な基地構成車両を爆破したオブジェクトは、瓦礫と残骸の中央でしばし動きを止める。まるでゆっくりと思案するように、複数の巨大な砲塔だけを緩やかに動かしている。

クウェンサーは心臓が止まるかと思った。

まさか。

オブジェクト関係の施設を破壊し終えたから、今度こそ生身の兵隊への虐殺が始まるのか。

そんな最悪の想像をするクウェンサーだが、体はもう動かなかった。それは隣のヘイヴィアも同じようだった。敵が意志を持つ人間――それも自分達と同じ軍人だというのは分かるのに、もはやあまりにも圧倒的過ぎて、恐竜か何かに睨まれているようなイメージなのだ。少しでも刺激すれば噛み千切られる。

実際には軍の命令に従って規則正しく動いているだけ……と分かっているはずなのに、クウェンサー達は百獣の王と出くわした草食動物のように、相手が気紛れを起こしてくれるのを祈る事しかできなくなっていた。

そして。

やる!!　山を一つ越えられれば、大きな谷があるからね。交通手段は吊り橋だけ!!　渡ってしまえばオブジェクトの巨体から逃げ切る事ができるのよ!!　谷の向こう側から砲撃されるかもしれないが、針葉樹の森に隠れながら散開すれば何とかなるかもしれないの!!」

「でも……っ」

クウェンサーは思わずフローレイティアと足元のディスプレイを交互に見た。

正直、逃げ切る先――『ゴール』が提示された事で、思わず気絶するほどの安堵にも襲われていた。

だが。

今も生きているエリートの少女はどうするんだ……？　と、クウェンサーは踏み止まってしまう。

すると、フローレイティアはクウェンサーの足元にあるディスプレイに気づいた上で、上官はこう叫んだ。

「馬鹿野郎！　何のための救助信号だと思っているの!!」

「……？」

「そいつは私達に向けて発信されているものじゃないの！　お姫様はわざと敵軍に傍受させるように救助信号を放って、注意を引きつけてくれているのよ!!　私達があっさり虐殺されないようにね!!　その努力を無駄にするつもりなの!?」

クウェンサーの目が見開かれた。
フローレイティアの言葉は、彼の胸を確実に抉り取った。
（本気なのか……？）
クウェンサーは辺りを見回す。本来は訓練に訓練を重ねて頑強な肉体を持つはずの――そして、現実には今の今までオブジェクトの恩恵を受けて怠けていた兵士達は、クウェンサーの疑問の視線から逃れるように、それぞれが顔を逸らしている。
気まずそうに。
それでいて、何とか逃げられる可能性は手放さないように。
（おい、なんだかんだ言っても味方なんだろ。一四歳ぐらいの女の子なんだろ。俺達を助けてくれるために、自分から囮になるような子だろ。そんなのを、放り出して逃げるなんて、本気なのかよ……）
「逃げるぞ」
隣にいるヘイヴィアが、ポツリと呟いた。
「逃げるしかねえ!!　どっちにしても、あのお姫様は殺される！　が戻ってくる前に逃げ切らなきゃダメだろ!!」
「ふざけんな。良いのか、分かってんのか!?　あんなモラルもへったくれもない状況で、それも女の子のエリートが敵軍に捕まったらどんな目に遭うかイメージできてるのか!?」

「だったら、テメェはあのオブジェクトと戦えんのかよ!?」

真正面から叫び返され、クウェンサーの言葉は止まった。

ヘイヴィアの表情には、恐怖と共に屈辱があった。

「綺麗事だったら誰でも言える!!　あの馬鹿デカいオブジェクトにたった一人で立ち向かってお姫様を助け出すとか、そんな実際問題どうにかできたら最高だよ!!　でも、実際できないのだから、あんなもん、レーダーで捕捉された瞬間に生身の体なんか塵も残さず吹き飛ばされちまうじゃねえか!!」

ボロボロになったヘイヴィアに両肩を摑まれ、クウェンサーは思った。

（……ちくしょう）

じわじわと胸を締め付けるのは、人間として当然あるべき感情。

どうしようもない、恐怖だった。

（怖いに決まっている。誰がなんて言ったって、どれだけ希望的な観測を並べたところで、度胸なんか湧くかよ。オブジェクトなんて化け物だ。あんなもん相手に真正面から立ち向かうなんて間違ってる。少しでも近くにいたくない。ヘイヴィアの言う通りだ。どんなに綺麗事を並べたところで、この気持ち悪さがそうそう簡単に消える訳ないだろ……）

だが、クウェンサーの足は退却するためには動かなかった。

彼はその場に立ち、真正面から改めてヘイヴィアの顔を見る。

「……あのお姫様は、そんな化け物と戦ってくれていたんじゃないのか？」

「ッ」

「大の男がこれだけ集まっても震え上がるような、ちょっと照準を合わせられただけでショック死してしまうような化け物から!!　俺達を守ってくれるために、たった一人でオブジェクトに乗って戦ってくれてたんだろうが!!」

そう。

たとえオブジェクトなんて馬鹿げた兵器に乗っていたって、怖いに決まっている。あんな化け物と立ち向かうのに、恐怖を感じない訳がない。

あの少女は、出撃の直前にこう言っていた。

勝てるかどうかは分からない、と。

クウェンサーは思う。

特に真剣な調子ではなかったから、深い意味などないのだと思っていた。だが違う。もしも、あれが何気ない表面にまで噴出してしまうほどの、大きな不安を抱えていたせいだったとしたら。とにかく誰にでも良いから言葉を放って、少しでも不安を払拭したいだけだったとしたら。

自分はここでどう動くべきだ。

「……貸せ」

クウェンサーは、間近にいるヘイヴィアに手を差し出した。

怪訝な顔をするヘイヴィアにもう一度、

「貸せ!!　そのライフル!!」

叫ぶと、クウェンサーはひったくるように軍用のライフルを摑み取った。光学スコープの他に、赤外線カメラや索敵マイクまで備えたハイテク兵器だ。

しかし、それを見たヘイヴィアの顔が引きつった。

「……マジで行く気かよ」

まるで小さな子供のように、ヘイヴィアはふるふると首を横に振った。

「そんなもん、何の役にも立たねえぞ！　さっきのオブジェクト見たろう!?　あいつは巨大な動力炉を核シェルターの分厚い壁で覆ったような怪物なんだよ!!　核ミサイルの一発二発、まともに直撃したって動き続けるんだぞ!?　そんなの、学者の卵のテメェの方が理解できてるだろうが!!」

そうだな、とクウェンサーは答えた。

ヘイヴィアも分析官としてオブジェクトの特徴や弱点を探す仕事をしているようだが、クウェンサーはそれとは違う、設計という方向からオブジェクトについて学んでいる。そしてその知識に照らし合わせれば自ずと分かる。どう考えたって、勝てる訳がない。

だが、

「仕方ないだろ……」

「何だって？」

「お前だって、本気で信じてるのか？　山を越えれば大きな谷が待ってるって言ったって、最後までオブジェクトに追い着かれないと思ってるのか？」

「それは……」

「本気でお姫様を殺す気なら、一撃だ。仮に捕まえて基地に連れ帰るにしたって、一般の兵士がお姫様を拘束してしまえば、オブジェクトは自由の身。すぐに引き返して登山中の俺達は皆殺しにされてしまう。……さっきの機動性は見ただろう」

実はまともに使った事もないライフルの重たい感触に、ブルリとした震えを感じるクウェンサー。それを押し殺して、彼は先を続けた。

「お姫様は時間を稼ぐつもりみたいだけど、多分あの子一人じゃ稼ぎ切れない」

自分で言っていて、現実味のない言葉だなとクウェンサーは思った。

明確な恐怖が襲ってくる前に動いてしまおうと、彼は考えていた。

「誰かが行かなきゃまずいだろ。責任を押し付けるんじゃなくて、現実的に生き残りたかったら」

10

切り裂くような吹雪が顔の皮膚に鋭い痛みを与える。

白く染まる視界は無意味に不安を増大させる。
底なし沼のように深い雪に足を取られそうになりながら、両手でライフルを抱えるクウェンサーは必死に走り続ける。
この最前線に来て六ケ月になるが、初めて本物の戦場を走っているような気がする。
目的は、お姫様を助ける事だけだ。
無理にオブジェクトと戦う必要はない。というより、鉢合わせれば敵とみなされる事もなく、ゴミのように蹴散らされて殺されてしまう。どうにかして、オブジェクトの死角から近づいてお姫様を助け出す方法があれば良いのだが……。
(どこだ)
ライフルそのものが氷の塊のように冷たくなっていた。
歯を食いしばり、指先の痛みに耐えながら、クウェンサーはあちこちへ視線を飛ばす。
(くそ、あのお姫様はどこにいる!?)
確か、ディスプレイに表示されていたのはこの辺りのはずだった。しかし、エリートの少女は見当たらない。敵軍の兵士達が連れて行ってしまったのか。あるいは地図を正しく読めなくて、違う地点に来てしまったのか。
(ちくしょう。地図から現在位置を把握する事もできない状態で六ケ月も生き延びていたなんて……今までどれだけおんぶしてもらっていたんだ)

クウェンサーはライフルのスコープの辺りに、ケーブルを突き刺した。それは片耳だけの小さなイヤホンだ。それを右耳にはめつつ、使った事もないライフルを震える指で操作していく。

確かヘイヴィアの話だと、索敵マイクの機能もあったはずだ。

（……）

銃口近くに銃剣のように取り付けてあるマイクを意識しながら、とその場で回る。全方位にマイクを向けると、チリッとした小さな音がイヤホンに入った。

「向こうか……？」

ろくに訓練も受けておらず、ほとんど見よう見まねの格好でライフルを構えながら、クウェンサーは音源の方角へと歩いていく。

チリチリとした小さな音は、近づくにつれて徐々に大きくなっていく。

それが何となく人の声のように感じられた頃になって、クウェンサーは慌てて近くの岩場に体を隠した。

改めて、顔だけを出す。

白い吹雪のカーテンの向こうに、人影がある。

距離は一〇〇メートルほどだろうか。ここからでは人相までは分からない。ただ、三、四人の屈強な男の影が、一つの小柄な影を取り囲んでいた。小柄な影は膝で地面に立つような不自然な格好をしていて、両手も後頭部に押し当てている。

（お姫様か！　くそっ、予想通り捕まってやがる……ッ!!）

クウェンサーは一度岩場に顔を引っ込め、それから周囲に目をやった。

あのオブジェクトの巨体はどこにもない。

エリートの少女が捕まるのを見届けてから、再び残党狩りに向かったのだろうか。

一瞬、全ては途方もなく大きな罠で、クウェンサーが下手な行動を取った直後に、超遠距離から下位安定式プラズマ砲が飛んでくる可能性について考えてみた。だが、その可能性は低い。クウェンサー一人のためにオブジェクトを使うような罠を張るとは思えないし、そもそも超大型兵器オブジェクトなら、陳腐な生身の人間のために罠を用意する必要もない。真正面から皆殺しにできるのだから。

あまりの恐怖に、危険を感知する心のセンサーがいかれているのかもしれない。

現実的にはありえない可能性まで考慮してしまうのは、それだけオブジェクトが恐ろしいからだろう。

とにかく、冷静に考えれば……、

（オブジェクトはいない）

両手で抱えたライフルの重さを、クウェンサーは改めて実感した。

岩場の陰から顔を出し、状況を確認する。

（あの四人をどうにかすれば、お姫様を助け出す事ができる!!）

今になって、オブジェクトへの恐怖とは違う別種の気持ち悪い感覚が心臓を締め付ける。

どうにかすれば。

ライフルを手にしている以上、それは四人もの人間を撃ち殺す事を意味している。クウェンサーには急所を外して制圧するような腕はないし、そもそも軍用のライフル弾なら、手足に当てても引き千切れるぐらいの威力はあるはずだ。急所の有無など関係なく、ショック死してしまうだろう。

本当に殺すのか。

たった一人の仲間を助けるために、四人の他人を殺す事ができるのか？

（くそ、ふざけんな！）

どうあっても震える指を、もう片方の手で強引に包み込む。

ガチガチと鳴る歯を押さえられない。

（ここは戦場だぞ。殺す方が当たり前の世界なんだぞ！　戦うのは全て無敵のオブジェクト任せって……今までこんなのを押し付けていたのかよ!!）

必死に自分を奮い立たせ、太股の辺りを自分の拳で殴り付け、クウェンサーは何とかライフルを構えようとする。しかしスコープを覗き込もうとしたところで眩暈がした。吐き気を堪えるように、何とか照準を合わせる。

狙いはエリートの少女から一番近くにいる、男の兵士。

ドバッ!!　という轟音が炸裂した。

それが引き金に掛かる指を引いた結果だとクウェンサーが認識した頃には、今まで笑っていた兵士の一人――その頭が、ライフル弾によって粉々に吹き飛ばされた。薙ぎ倒される首なし死体を無視して、クウェンサーは叫ぶ。

「伏せろ!!」

その言葉を先に理解したのは、エリートの少女だったか、それとも周囲の敵兵か。

少女が深い雪の上に身を投げるのと同時に、クウェンサーはセミオートを使って素早く人差し指を動かし、短いスパンで一発ずつライフルを撃ち続けた。ろくに鍛えていないクウェンサーには、フルオート射撃の反動を押さえられないからだ。しかし敵兵の方も黙っていなかった。ほとんど反射的に動くような挙動でライフルの銃口を向けて発砲してくる。

声のした方へ、ほんの少しだけ、クウェンサーの方が速かった。

とにかくそこにある物を薙ぎ払おうと、クウェンサーは細かい照準を合わせずに右から左へ銃口を流した。短い間隔で引き金を引き、タンタンと等間隔で飛ばされる弾丸は、腰ぐらいの高さの『死のハードル』と化して敵兵達に襲いかかった。幸いにも、兵士達が雪の上へ薙ぎ倒されていく。

い血が撒き散らされ、兵士達が雪の上へ薙ぎ倒されていく。

（……これで、何とか……ッ!!）

しかし、とっさに伏せていたせいで難を逃れていた敵兵が二人いた。その内の一人が、ライ

フル弾の大きな反動のせいで棒立ちになっているクウェンサーへ、膝立ちの状態でライフルの銃口を向けようとしているのが分かる。そこへお姫様が身を低くしたままタックルを喰らわせた。近距離で揉み合いになればライフルで撃てなくなる。焦るクウェンサーだったが、その心配は必要なかった。お姫様の手の中には、包帯や小さな釣り竿などを収めたサバイバルキットの中にある、調理用の鉄串が握られていて、敵兵の脇腹に突き刺さっている。

残った一人はとっさにお姫様から距離を取ろうとしたようだが、そこで不用意に体を起こしてしまった。直後、クウェンサーのライフル弾を浴びて雪の上を転がる。

これで終わった。

そのはずだった。

しかし、お姫様に鉄串を刺されて脇腹から血を流す兵士は、雪の上に崩れ落ちた勢いで、ライフルの引き金を引いていた。おそらく本人の意思とは無関係だろう。その時、偶然ライフルの銃身の下にあるグレネードの引き金に指が掛かっていて、その銃口があらぬ方向……クウェンサーの方に向いていただけだ。

重たい爆発物が、直線ではなく弧を描いて空を切った。

クウェンサーは、とっさにどうすれば良いか判断できなかった。

直後。

パガッ!!　という炸裂音と共に、クウェンサーの体は薙ぎ倒された。上半身の大半に、異様

な痛みが走り抜ける。視界いっぱいに広がるのは白だった。最初が、実は地面の雪だった。自分の体が横倒しになっている事すら態だった。

（……俺の、体……どう、なった……？）

疑問に感じると同時に、体から力が抜けた。

死後硬直のように固まっていた手を何とか動かそうとしたが、ちていく。それに続いて、クウェンサーの腕も再び雪の上へ転がった。

腹や胸など、上半身にズキズキとした痛みがようやく伝わってくる。

（くそ、どうなった。連中、みんな死んじまったのか。本当に、誰か、起き上がったりは、しないだろうな……？）

銃撃は止んでいた。

きちんと全員殺したのか、それとも逃げられたのか、あるいは無駄弾を撃つのをやめたのか。雪に埋もれる彼には判断できなかった。

（……、くっ……）

傷口を見ようとしたが、体が思うように動かない。

そうこうしている内に、頭の中まで動かなくなってきた。

（お姫様は……？）

エリートの少女を助けるために、結局、クウェンサーにはわざわざここまでやってきたのその生死を確認する余裕すら残されていなかった。

意識は沈む。

一度浮かび上がったはずの痛みも、結局爆発する事なく霧散していった。

11

どこかから名前を呼ばれた気がした。

黒とも極彩色とも違う、何か得体の知れない視界。二つの眼球が頭の中で処理しきれずにモザイクになっている感覚。平衡感覚をやりと眺めていたクウェンサーは、今度こその名を呼ばれた。

「……おい、起きろよ……クウェンサーッ!!　寝てんな！　起き

「へイヴィア……？」

掠れた声で、クウェンサーは思わず呟いた。

体は雪の中に沈んでいるはずだが、もはや感覚はない。

「何でだ？　逃げたんじゃなかったのか……？」

「うるせえな。仕方ねえだろ!!」

そんな事を言うヘイヴィアの肩には、携行型の対戦車ミサイルが紐で掛けてあった。無駄と知りつつも、少しでも火力の高い武器を摑んで持って来たのだろう。見れば、ヘイヴィアの体は今も小刻みに震えている。

あのオブジェクトに対する恐怖は、そう簡単に拭えるものではない。

それでも、ヘイヴィアはクウェンサーの後を追ってここまでやって来てくれた。

「……俺、撃たれたんじゃ……？」

「ド素人が。中途半端なんだよ。まともにグレネードの破片を喰らってたら、肉が吹き飛んでる。そうなるように設計されてんだからよ」

撒き散らしたんだ。テメェは飛び散った石の破片を上半身に浴びたんだよ。まともにグレネー

「そうか。くそ、情けないな……。かすり傷にビビって気絶してたのか」

クウェンサーは起き上がろうとしたが、胸の辺りに強い圧迫のようなものを感じて呻いた。どうやら精神的なショックを受けて、派手に心臓が収縮したらしい。咳き込みながらも、クウェンサーは雪の中から体を引っこ抜く。

「ちくしょう、エリートのお姫様は……？　気を失ってる間に連れ去られたのか」

「何言ってんだ。テメェはきっちり勝って、クソ野郎どもを全滅させてるから安心しろ。見ろよヒーロー、テメェが助けたお姫様ならそっちにいるぜ」

ヘイヴィアが指差した方をクウェンサーが見ると、ほんの二メートルぐらいの所にエリート

の少女は突っ立っていた。信じられないものを見るような目で、棒立ちのままクウェンサーの顔を凝視している。

その表情は、なんと表現したら良いだろうか。

途方もない恐怖があった。驚えようのない驚きがあった。未だに安堵して良いのか分からないような顔でもあった。いいや、それは喜怒哀楽などという簡単に分類できるものではなかった。

「どうして……？」

と、彼女は言った。

感情の波が安定しない、ふらふらと揺れるような声色だった。

「どうして、わたしを助けに来たの……？」

後からこぼれるのは、心を大きく抉られた者から溢れる、本当の意味での本音だった。

あるいは、これ以上嘘をつきたくないと思えるような何かを、少女は感じたのか。

「じっさいにメインでたたかうエリートでもないくせに。かくシェルターみたいなぶあついそうこうのオブジェクトに守られているのでもないのに、どうして生身の体でここまで来ちゃったの？」

クウェンサーは、その言葉を黙って聞いていた。

彼女の言葉には、上っ面以上の何かが込められていた。

「わたし、心の中ではあなたたちのことをバカにしてたのに」

ボロボロと、言葉が溢れる。

それは、軍事力の要であり、ある意味において国家の代表とも言えるオブジェクトの操縦士エリートとしては、確かに不適切なものだったのかもしれない。

「いつもわたしが守ってやってるって、オブジェクトがいなくなったらみんなころされるしかないって！」

ただ、だからこそ、その醜さには人間味があった。

今までの綺麗過ぎるイメージは天然水などではなく、塩素臭い水道水のようなものだったのではないかと、クウェンサーは自然とそう思う事ができた。

「ひていしようとおもっても、正しくありたいとおもっても、ずっとずっとそんなひどいかんがえばかりうかんでたのに!!　なんでそんなにんげんを助けるために、こんな所まで来ているの!?」

クウェンサーとヘイヴィアは、互いの顔を見合わせた。

それから改めて、エリートの少女の顔を見た。

史上最強のオブジェクトを失い、役割を奪われてしまった、人の少女の顔を。

「酷い考えも何も、そいつは本当の事じゃないか」

「え……？」

「オブジェクトについて色々勉強してきたつもりだったけど、今日、実際に戦って初めて分かった。あれは、怪物だ。正真正銘の怪物なんだ。そんな化け物が俺達のベースゾーンを蹂躙しないように、今の今まで一人で頑張ってきたのは誰なんだよ」

少女は、驚いた顔でクウェンサーを見ていた。

クウェンサーは長時間雪の中に埋もれていたのと、精神的なショックが抜けきれないのとで固まった顔を動かし、強張った筋肉で無理矢理笑みを浮かべようとした。

「もう、良いじゃんか」

近くに落ちていたライフルを拾い上げ、クウェンサーは言う。

空になったマガジンを抜き、ヘイヴィアから受け取った別のマガジンを差し込む。

オブジェクトに比べれば、ちっぽけな武器。

それを手にしたまま、クウェンサーは少女に向けて、本当にひどい表情を浮かべた。

「もう、一人じゃなくても良いだろ。こんなの、大それた理由なんかいるのかよ」

少女はその言葉を、どう受け止めて良いか分からなかったようだ。

超大型兵器オブジェクトの操縦士。

エリートと呼ばれる少女。

彼女は、今までそんな言葉を掛けてもらった事もなかったのだろう。勝つ事が当たり前とされ、多くの命を背負った状態で、負ければそれらが全て奪われると暗に脅迫されるような格

好で、必死に戦い続けてきた。だから、どれだけ傷ついても、どれだけ不安を抱えていても、その一人きりの戦いに異議を唱えてくれる者はいなかった。

少女は、クウェンサーの言葉を受け止めきれなかったようだ。

困ったように視線をヘイヴィアの方に向けると、彼の方も肩をすくめた。

「俺の方も大した事ねえよ。クウェンサーの野郎が、お姫様一人じゃ囮にもならねえっつったんでな。そいつで冷静になれたってだけだ。言われてみりゃ確かにその通りだから、囮にしても使えるレベルのモンを用意しなくちゃ皆殺しって訳なんだよ。後は、まあ、あれだ。――『仕方がねえ』ってトコか？」

適当な調子で嘯くと、ヘイヴィアは軽く周囲に目をやった。

「そんじゃお姫様にナイト様。そろそろのんびりもしてられなくなってきたみたいだぞ」

「……？」

クウェンサーは眉をひそめたが、直後に気づいた。

ヘイヴィアの痩せ我慢に。そして空一面が黒い雷雲に覆われるような低いオブジェクトの駆動音が、遠くから近づいてくる事に。

「行くぞ！　派手に銃声鳴らして敵兵ぶっ殺したんだ。向こうのオブジェクトもそろそろ勘付いてこっちに来るはずだ!!」

そう叫んだヘイヴィアの言葉と共に、心温まる時間は終わりを告げる。

後は地獄に逆戻り。

全長五〇メートル以上の超大型兵器オブジェクトとの生死を賭けた鬼ごっこが再開される。

「くそっ!!　具体的にはどこへ逃げるんだ!?」

深い雪に足を取られそうになりながら、クウェンサーは必死に足を動かす。対して、ヘイヴィアは恐怖を打ち消そうとするように、思いきり大声で叫び返した。

「自分が戦うエリアの地図ぐらい事前に叩き込んでおけよ!!　五〇メートル先に洞窟がある。とりあえずそこまで駆け込めばオブジェクトの巨体はどうにかしのげる!!」

五〇メートル。

舗装された道路なら装備を背負っていても一〇秒以内で何とかなる距離。

しかし深い雪は確実に速度を奪うし、何より敵のオブジェクトは黒い雷雲が広がるような音と共に静電気を利用して山の斜面を迂回する形で現れ、滑らかに下敷きが滑るような動きだった。

三キロ程度の距離が離れているようだが、向こうにとっては目と鼻の先だ。

「プラズマほうがこっちをねらってる!!」

エリートの少女が叫ぶ。

（あのオブジェクトの照準装置なら、この距離で撃てないなんて事はありえない。お姫様を生け捕りにするかどうかで迷っているのか？）

洞窟までの距離が、異様に長く感じられた。

（確かに、『尋問』すればウチのオブジェクト関連の機密情報を得られるかもしれないけど！　さっきの歩兵とは統一の取れていない対応だな!!）

恐怖で足がすくみそうになるが、とにかく走り続けるしかない。

「なあクウェンサー、テメェの兵科は工兵だろ！　爆薬持ってきてるか!?」

「ありきたりなC4が五キロほどなら！」

「おい！　正式装備の規定じゃ、〇キロじゃなかったか!?」

「役にも立たない爆薬を四六時中抱えてるのが馬鹿馬鹿しくってね！　そもそもこいつは土木用だ！　オブジェクト相手に通じるようなもんじゃない!!」

「貸せ！　良いから早く!!　信管ごとだ!!」

洞窟の入り口近くまで走りながら、クウェンサーはヘアスプレーの缶程度の大きさの、粘土のような塊を投げる。透明なフィルムでパッケージされた爆弾を受け取ったヘイヴィアは、フィルムの上から起爆信号の受信装置とセットになった電気信管を突き刺すと、洞窟のすぐ脇に放り投げた。

迫るオブジェクトの主砲――下位安定式プラズマ砲の砲塔が、ゆっくりとこちらに照準を合わせてくる。

しかしそれが火を噴く前にヘイヴィアは洞窟へ飛び込み、クウェンサーも続いた。エリート

の少女は雪に足を取られて転びそうになったが、そのまま倒れ込むように洞窟へ突っ込んでくる。

慌ててエリートの少女を受け止めたクウェンサーは、

「おいどうする!?　出入り口から下位安定式プラズマ砲を撃たれたら、蒸し焼きにされるぞ!!　どれだけ枝分かれしていようが、洞窟内の空気全体がオーブンみたいになったらおしまいだ!!」

「そのためにC4を借りたんだ！　どけどけ!!　奥へ行くぞ!!」

ヘイヴィアに促され、クウェンサーはエリートの少女を半ば引きずるようなへと進む。一〇メートルほど進んだ所で、ふとクウェンサーは思った。

あのC4はどういう格好で洞窟の奥

もしかすると、洞窟の入り口にオブジェクトが鼻先を押し付けたところで起爆するつもりなのかもしれないが、そんなもので傷がつくとは思えない。そもそも、オブジェクトの装甲は核ミサイルの一発や二発、直撃しても問題ないぐらいなのだから。

すると、顔色から疑問を受け取ったのか、ヘイヴィアはニヤリと笑った。

「悪りぃ。のっけから運試しになりそうだぜ」

直後、ヘイヴィアは無線起爆装置のスイッチを押した。

パガッ!!　という轟音と共に、洞窟の天井が崩れて入り口が封じられた。

確かにそれは、一種の運試しだった。

一つ目は、他に出口がなければ自ら生き埋めになってしまう事。

二つ目は、圧縮された爆風は洞窟側へも流れてくる事。

……おかげで、クウェンサーはうっかり鼓膜を吹き飛ばすところだった。

12

洞窟をちょっと進んだ所で分かれ道があり、すぐ近くに別の出口はあった。クウェンサー達三人は洞窟を出ると、その出入り口を雪で埋めた。本当はC4で爆発させてしまいたかったが、下手に爆薬を使うと、その轟音でオブジェクトを呼び寄せかねない。

大きすぎるオブジェクトは、洞窟の中には入って来れない。

だからこそ、今現在は生身の兵隊が捜索活動を行っているだろう。彼らにはもう少し『ターゲットは洞窟の中に隠れている』と思ってもらった方が良い。

クウェンサー達は洞窟を出た所にある、針葉樹の林の中に隠れていた。この極寒の世界で木陰に隠れても寒さを凌げる訳はない……と思っていたクウェンサーだったが、実際に隠れてみると、冬の風が当たらないだけでもかなり体感温度は変わっていた。

消しゴムを使って焼く前の四角いお餅を作りました、という味クウェンサーは洞窟の出入り口の方へ目をやる。

「……とりあえず、こっちの足取りが気づかれている感じはしなし

「かみなりみたいな低い『うなり』がきこえるから、オブジェクい？」

エリートの少女は両手で小さなレーションを摑んで口に入れながら、耳をそばだてていた。その言葉を聞いたクウェンサーは、同じように遠くからの音に意識を集中させながら、

「多分、オブジェクトを操縦できるエリートを押さえるのが、最動が終わるまで、ここを離れる気はないみたいだ」

逆に言えば、クウェンサー達が見つかるか、オブジェクト側が走中の仲間達への虐殺は中断されるという事だ。

ヘイヴィアは役に立たない携行型の対戦車ミサイルを重たそうなあ。ひとまず敵さんはこっちを見失ってんだろ。今の内に雲るんじゃねえのか？」

「かもしれない。ただし、その場合登山中の自軍が皆殺しにされるだろ」

クウェンサーが言うと、ヘイヴィアは『くそっ！』と毒づいた。

エリートの少女は、四角いレーションを角の方から少しずつかじりつつ、

そんな訳で、クウェンサー達三人は山の斜面を迂回し、C4で爆破した出入り口の方へと徒歩で戻っていった。

深い雪の中に身を伏せ、針葉樹と針葉樹の隙間からライフルを構える。

敵を撃つための準備ではない。

スコープを双眼鏡の代わりに使おうとしているだけだ。

クウェンサーの覗いているもの――超大型兵器オブジェクトには、普通の銃弾など通用するはずがないのだから。

「(……オイ、赤外線のスイッチは押すなよ。照射してるのに気づかれたら下位安定式プラズマ砲をブチ込まれちまう)」

すぐ隣で同じように伏せているヘイヴィアが、必要以上に神経質な注意を呼びかける。それだけ緊張しているのだろう。

無理もない。

オブジェクトまでの距離は三〇〇メートルほどだが、この地点で向こうに気づかれたら、今度こそ逃げ場はない。待っているのは無慈悲な虐殺だけである。その足元から響く黒い雷雲が広がるような音を聞くだけで、身がすくみそうになる。

「(……あのオブジェクトは何をやっているんだ?)」

「(……レーダーで走査……じゃねえな。戦車や戦闘機はともかく、生身の人間の位置をキャ

ッチできるとは思えねえし）」

「（……えいせいとアクセスしようとしているみたいね。つうしんしょうがいが出ているから、上手くいっていないようだけど）」

「（……そういえば、天候兵器のチャフミサイル撃ってたっけ？　電波障害用の粒子を雲の中に散布して、天然の雲を丸ごと対衛星用のシールドに変えてしまうとかっていうヤツ）」

仮に人工衛星が使用されていたら一瞬で発見されていただろう。今は血税の無駄遣いに感謝するだけである。

「よし、復習の時間だ」

ライフルのスコープを覗きながら、クウェンサーは言う。

こちらは対戦車ミサイルの照準装置越しにオブジェクトを覗き込んでいるヘイヴィアが、その無理矢理な軽口に応じる。

「敵軍のオブジェクトの作戦名はウォーターストライダー……アメンボだ。もっとも、これはこっち側のコードネームだから、向こうがなんて名前で開発したかは分かんねーけどな」

「なまえの由来は、あのあしよ」

クウェンサーのすぐ近くで屈んでいるエリートの少女は、肉眼でウォーターストライダーを睨みつけていた。

クウェンサーはライフルを動かし、オブジェクトの脚へ視線を固定させる。

ウォーターストライダーの本体は、巨大な球体だ。そこから昆虫のような四本の脚が飛び出し、地面を踏みしめている。

移動方法は、歩行ではなく滑走。アメンボが水の上を移動するのと同じく、滑るように進む事から、そういう名で呼ばれるようになったのだろう。

「静電気を使って地面の上を滑るような感じの方式だったな。基本はウチのお姫様と似たようなもんだが、四本脚と組み合わせる事で、より起伏の激しい地面でもスムーズに動けるように調整されているんだ」

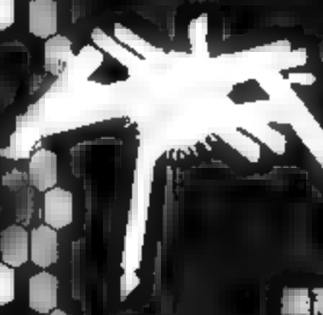
クウェンサーは特に足元に注意しながら言う。

すると、傍らにいたお姫様が付け加えるように、

「『せいでんき』はおもたいオブジェクトをうかばせるためのもの。まえへすすむためのそうちは他にあるの。わたしのばあいは、レーザーを応用して、くうきをばくはつさせているけど、ウォーターストライダーは『あし』をつかってちょくせつじめんをけっているみたいね」

そういう意味では、ウォーターストライダーは本当に『アメンボ』みたいな動き方をしているようだ。とはいえ、一度に一本の脚へ自重を集中させて潰さないよう、高度な演算と微調整を瞬時に行った上で、『ほんのわずかに、触れるように地面を蹴る』方式を採用しているのだろうが。

そんな事を考えながら、クウェンサーはさらに言う。



【ウォーターストライダー】
WATER STRIDER

全長…約140m（主砲展開時。本体は50m）

最高速度…時速550キロ

装甲…4センチ厚×250層（溶接など不純物含む）

用途…局地的防衛用兵器

分類…氷雪地帯特化型第二世代

運用者…不明

仕様…静電気＋直接接地型推進システム（氷雪仕様）

主砲…下位安定式プラズマ砲 ×2 ×4

副砲…レーザービーム、レールガン、コイルガンなど

コードネーム…アメンボ（水の上を移動するのと同じく、滑るように進むところから）

メインカラーリング…ブルー

WATER STRIDER

「ようは、静電気式っていうのは、空気を下に吹き付けて水面に浮かぶエアクッション船の親戚だろ。オブジェクトは壊せなくても、足元の大地を掘り返す事はできるんじゃないか？　極端な段差があれば『浮かばせるための力』が均一じゃなくなって、滑る事ができなくなるかもしれない」

「一応、四本脚で歩行する事も可能だぜ。深みに嵌ったら足を引っこ抜くだけだ。一〇秒ぐらいの足止めはできるかもしれねえが、それでオブジェクトの機能を殺す事はできねえよ」

それに、とヘイヴィアは前置きして、

「たとえ脚を止めても、下位安定式プラズマ砲を始めとしたふざけた火力は生きてる。移動砲台が固定砲台になるぐらいのもんだ。『足元を爆破するために近づいた事』がバレちまえば、あっという間に蜂の巣だぞ。死ぬ気でフローレイティア達を助けたいんなら有効かもしんねえが、正直そんな死に方は遠慮してえな」

「となると……」

エリートの少女は視線をウォーターストライダーの足元から、上部に備え付けられている主砲の方へと向け直す。

「てきのほうだいをごばくできないかな？　オブジェクトはオブジェクトにしかこわせないから、あのオブジェクト自身の力を利用できれば……」

「こっちの手持ちにオブジェクトがあればできるかもな。ただし、こんなチャチなミサイルじ

や、砲にかすり傷をつける事もできねえぞ」

ヘイヴィアは自分の持っている携行型のミサイルを、ガラクタでも扱うように軽く叩く。

脚も砲も壊せない。

となると、残っているのは……。

「やっぱり、『本体』を叩くしかないのか」

クウェンサーは本体の巨大な球体をスコープで見る。

「でも、そこが一番難しいんじゃないか。巨大な動力炉の周りを、たようなものだろ。そんなの、どうやって叩けば良いんだ？」

「おい、自軍のオブジェクトのスペアパーツがあったろ。あの中に、ウチのお姫様が扱っていたオブジェクトの主砲の予備とかねえのか？　オブジェクトはオブジェクトや破壊できない。っつっても、砲さえ動けば何とかなるだろ」

「オブジェクトに積まれてる動力炉の出力知ってるか？」

クウェンサーは苦い調子で首を横に振る。

「並の原子力空母でも電力不足になるぐらいの砲を、一〇〇門以上同時に撃っても有り余るほどのエネルギーを生み出すんだぞ。精密機械でも追い着かない腕を持つ職人が三〇〇人ぐらい集まって、全部手作業で作ってる、人類の技術の結晶なんだ。あの動力炉に変わるエネルギー源なんて、どこから拾ってくるんだよ」

「戦車や戦闘機どころか、装甲車とか兵員輸送車すらないな。全部雪かき用のトラクターだろ？」

「無駄な車両点検用のメンテ費を削って、全部オブジェクトの整備やレーダー施設に回してるってのかよ」

「……確かに、時代遅れの戦車を税金で整備・維持し続けるのは馬鹿馬鹿しいけど……」

おそらく、敵軍のベースゾーンにはオブジェクト以外の戦力は歩兵しかいないのだろう。しかも、その歩兵にしたところで……、

「そりゃそうだよな」

と、クウェンサーは思わず呟く。

「今まで銃を構えた事もない学生だった俺に、四人もの兵隊と戦える訳がなかったんだ。あれは整備兵か何かだったんじゃないか？　『生身で逃げるエリートを捕まえる』なんて事態を想定していなかったから、非戦闘員の整備兵が急遽駆り出されたって考えた方が無難だろ」

「相手が訓練を積んでいようがいなかろうが、テメエが殺したのはクズ野郎だよ。テメエがお姫様を救ったナイト様だっつー事にも変わりはない」

ヘイヴィアは軽い調子で呟いた。

一時的にでもオブジェクトから遠ざかったせいか、多少気が大きくなっているようだ。

「ただ、そんな前線にも整備兵が出てくるってんだから、普通の兵隊はほとんどいないって考

えた方が良さそうだな。あレイティア達だけでも何とか制圧できるんじゃねえか？」

「もんだいは、そのオブジェクトをどうするかよ」

エリートの少女は呆れた調子で言う。

クウェンサーはベース全体の中でも特に大きな……おそらくオブジェクトを整備するための施設を見る。

「？　……屋根や壁は開閉式みたいだな」

「向こうの戦力はオブジェクトだけだぜ。メンテ中に敵さんが襲ってきたら大問題だ。だから整備している間にもいくつかの砲を動かせるようにして、固定砲台として迎撃できるようにしてるんだろ」

「でも、オブジェクトをうごかしていたら、メンテナンスはできなくなるんじゃないの？」

「ウォーターストライダーには一〇〇門以上の砲があるんだぜ。半分を止めてメンテに回しても、まだ五〇門も余ってやがる。そうやって常に最低限動かせる数を揃えてるんだろ」

ヘイヴィアの言葉を聞きながら、改めてクウェンサーはベースゾーンの全景を眺めた。

「……どこを爆破すれば良いと思う？」

クウェンサーは建物の構造を頭の中に入れながら、傍らの戦友に問いかける。

「これだけ広い基地の中で、一番壊されたら困る所は」

「気づいてんだろ？　脚だ。ウォーターストライダーの脚のスペアパーツが眠ってる倉庫か何か」

「？」

エリートの少女が首を傾げるが、クウェンサーはヘイヴィアの言葉に頷いた。

「やっぱり、あれだけの巨体を浮かべるのには、相当の負荷がかかるんだろうな。エアクッション船みたいに巨大な平板を使ったとしても大変なのに、四本脚の先端だけで浮かばせているんだから」

「ウチの部署で採取した戦闘記録だと、あのアメンボ野郎は平均で半日に一回、基地に引き返してメンテを受けてる。おそらく足元のガラスの靴をオーバーホールしてるんだろ。オブジェクトの巨体を浮かばせるほどのエネルギーを常時生み出してると、パーツの金属が溶けちまうって訳だ」

「わたしのオブジェクトもせいでんきをつかっているけど、半年はこうかんしなくても大丈夫だよ。大体いつもJPlevelMHDどうりょくろの『はいきガス』をぎょうしゅくしてためこむ『こちゃくボックス』といっしょにこうかんしてるから、なんとなくおぼえてる」

「その辺は設置面積の違いじゃねえか？　お姫様のは一辺が数十メートルもある、逆Y字の平面状浮遊体をベタッと地面に対応させてるだろ。だから負担も少ねえ。例のアメンボは四本脚の先端だけで浮かび上がらせてんだから、その分速く摩耗しちまう。それが半日と半年――

交換期間の違いとして現れて
「……半日って、施設をぶっ壊しても一二時間はウォータースライダーに追われ続けるっていうのか？」
「今のガラスの靴が交換直後の新品ならな。前回の交換から時間も経ってるし、お姫様のオブジェクトとぶつかって、かなり無茶な速度を出してる。もう足回りは焦げかけてんじゃねえのか？　まだ基地に引き返してこない方が不思議なぐらいだ」
「じゃあ、そのスペアパーツをばくはしてしまえば……」
少女の呟きに、半人前の軍人二人はこう答えた。
「交換作業はできなくなるし、その状態で無理に動かし続ければ、硬い防壁オブジェクトの脚は焼き付いて動かなくなる」
「オブジェクトそのものをぶっ倒す事はできねえだろうが、脅威から走って遠ざかる事ぐらいはできるだろうな」
「ぐたいてきに、きちにしんにゅうするほうほうを考えるひつようがあるね」
エリートの少女はそう言った。
クウェンサーとヘイヴィアの二人が小柄なお姫様の方を見ると、彼女はこう続けた。
「わたしはオブジェクトをそうじゅうするエリートだから。レーダーもうのかいくぐりかたなら心当たりがあるよ」

13

手持ちの爆薬は、橋や岩を破壊するためのC4と、携行型の対戦車ミサイルのみ。

クウェンサーとヘイヴィアの二人は、それらを手にしたまま見張り台を下り、敵軍のオブジェクト整備基地ベースゾーンを目指す。

「……お姫様は置いといて良かったのかね」

「三人一緒にいても仕方ないだろ。作業中にウォーターストライダーが戻ってくるようなら、基地から撤退しないといけない。だから、警戒役を残しておくのが最善だろ」

「ハッ、良く言うぜナイト様が。作業中にウォーターストライダーが戻ってくるようなら、た捕虜扱いで済むかもしんねえが、エリート様なら間違いなく特例だ。俺らの軍のオブジェクトの機密情報を聞き出すためにグチャグチャの拷問が待ってるか、あるいは禍根を残さないようその場で射殺されるか。俺らがヘマしても、最悪あの子だけは逃げられるように配慮したんじゃねえのか？」

「だから言ったろ。最善だって」

クウェンサーは雪に足を取られないように進みながら、口元に笑みを浮かべた。

寒さのせいかぎこちなかったが、自然にこぼれた笑みだった。

「それにしても、持ち直したみたいじゃないか」
「馬鹿言え、当たり前だろ。あの怪物オブジェクトに追い回されるぐらいなら、モヤシ野郎と二人きりで敵軍の基地に突っ込んだ方が気が楽だよ」
皮肉や軽口が自然と飛び出す程度には精神的に回復した二人は、ようやく基地の裏手のバリケードまで到着する。敵軍のベースゾーンの周囲はぐるりと帯状の合成繊維のネットのようなもので覆われていたが、特にセンサーらしきものは見当たらない。
「どうする、乗り越えるか？」
「馬鹿、二メートルも上ったら流石に監視に気づかれる。バリケードを切って穴を空けた方が確実だ」
小声で呟きながら、ヘイヴィアは腰のナイフを抜いた。大型の刃を使って、織り込まれた合成繊維の帯を一本一本ブチブチと千切るように切断していく。
モタモタしている内に巡回の兵士でもやってこないかと気が気でなかったが、実際にはそんな事はなかった。どうやら本当に、戦闘はオブジェクト任せにしているらしい。
「行くぞ」
「なあ、脚のスペアパーツはどこに保管されてると思う？」
合成繊維に空いた穴をくぐりながら、クウェンサーは質問した。
ベースゾーンは広い敷地のあちこちに分厚いコンクリート製の建物がポツポツ建っている、

という感じだ。オブジェクトの活動を支援するためか、大型のアンテナ施設も多い。建物と建物の間隔が異様に広いのは、見張り塔から侵入者を発見しやすくするためか、あるいは大型オブジェクトが通行するのに邪魔にならないようにしているためか。

一番近い建物の陰に隠れながら、ヘイヴィアは答える。

「分からねえが、オブジェクトは半日ごとにメンテを受けてオーバーホールしてんだろ。だったら、一番人の出入りが多いトコじゃねえのか？」

「そういえば、あのウォーターストライダー……動いてからどれぐらい経ってる？」

「そろそろ戻ってくる頃だ。鉢合わせる前にスペアパーツを吹き飛ばさねえと」

ここでウォーターストライダーのメンテナンスを封じてしまえば、オブジェクトはこのベースゾーンで足止めだ。だが、ウォーターストライダーはオーバーホールが成功してしまえば再び半日自由自在に動き回る事になる。そんな事になったら、逃走中の上官達など簡単に皆殺しにされるだろう。

ライフルのスコープを使ってクウェンサーが周辺の施設を覗いてみると、一つの建物の出入り口だけ、やたらと雪に足跡が多い所があった。吹雪のせいで足跡など消えてしまいそうなのなのに、そこだけ白い雪が泥っぽい色で汚れている。一〇〇人から二〇〇人分ぐらいの足跡と、各種車両や重機が作ったタイヤやキャタピラの跡も多かった。

「建物のサイズは、オブジェクト自体がスッポリ収まるほどじゃねえな」

「となると、あの足跡はスペアパーツをメンテ施設に持ち運ぶ時についたものか？」

「案外基地の中に人気のストリップバーでもあるだけかもしんねえが、その時はズボンの真ん中が盛り上がったバカどもの一〇〇人と銃撃戦だ」

クウェンサーはライフルのスコープを使って、ベースゾーンの大型レーダー施設のパラボラが監視をやる。が、後から増設した優先の弊害か。とにかく、広い施設役の視線を遮るように乱立した中を走っても気づかれる事はなさそうだ。

クウェンサーとヘイヴィアは建物の陰から飛び出し、開けた雪原を走っていく。

たった一〇秒程度の時間だったが、正直心臓が止まるかと思った。

見張り塔から狙撃銃の発砲音が聞こえる事はない。

二人は倉庫の壁に張り付く。

「裏口から入ろう。電子ロックの外し方は分かるか？」

「無理ならC4で吹き飛ばすって手もあるぞ」

「良い案だ。爆破した音で敵兵が集まって来なけりゃな」

そんな事を言い合うクウェンサーとヘイヴィアだったが、実際に裏口に回ってみると、鍵もかかっていなかった。

「……生身の侵入者がやってくる、って可能性自体を捨てているんだな」

「基地にいた頃は生身の兵隊なんて税金の無駄遣いだと思っちゃいたが……」

小さな扉を開けて、二人は倉庫の中に入る。

幅五〇メートル、奥行き一〇〇メートル、高さ一五メートル程度の建物はなく、だだっ広い空間が広がっている。その空間には縦横に鉄骨が走っていた。極めて規則性が高く、まるで巨大な図書館の本棚のようにも見えた。

そして、本棚には円筒形のパーツが並んでいた。

直径一メートル、全長五メートル程度の円筒で、何となく戦闘機のエンジンをイメージさせるようなフォルムだった。オブジェクトについて学んでいたクウェンサーは、それがタービンを回転させる事で大量の静電気を生み出す機構だと予測をつけた。

「足回りじゃないかと思うんだけど」

「ああ。ウチの部署は戦闘記録を分析して、敵オブジェクトの設計図の逆算作業を進めていたが、大体こんな感じのパーツだって予想図を描いていたはずだ」

C4を手にしたクウェンサーの言葉に、ヘイヴィアは頷いた。

それにしても、とクウェンサーは円筒形のタービンの側面に目をやり、そこに記されている数字を見た。おそらく使用電力などの簡単なスペックなのだろうが、

「……何だこりゃ。桁を間違えていないか？　本当にこの数値なら、連中が主砲に使ってる下位安定式プラズマ砲の二倍以上はありそうだぞ」

「あれだけの巨体を浮かばせて高速移動させるためには、それぐれえの無茶をする必要があんじゃねえのか。電子シミュレート部門の予測じゃ、脚一本にタービンを一〇基ぐらい使ってるみてえだしな」

「下位安定式プラズマ砲の一〇倍……？　しかも、そこまでやって、まだ『脚一本』だって？」

「見ろよ」

ヘイヴィアはタービンの整備用のカバーを開けて、中を覗き込んだ。

「こんなにゴチャゴチャとセンサーつけやがって、ほとんど映画に出てくる悪趣味な時限爆弾みてえじゃねえか。これだって、高出力のタービンが実際に暴走する前に、その予兆を的確に摑んで早い段階でシャットダウンするための、神経質なセキュリティってヤツだろ」

「……そう言えば、常時エネルギーを生み続けていると、タービンが溶けてしまうかもって話があったっけ？」

「溶けてからじゃ遅せえんだ」

と、ヘイヴィアは言った。

「タービンが機能停止したって、動力炉が生み出したエネルギーはすぐに消える訳じゃねえからな。動力炉や脚には緊急用の変圧器や放電器なんかもいくつか取り付けられてるみてえだが、消費電力が桁外れだろ？　一本の脚に密集しているタービンが全部やられたとしたら、下

位安定式プラズマ砲の二〇倍だぜ。多分、実際にタービンが溶けて機能停止したら、変圧器や放電器でも対応しきれねえ。装置の方が粉々に吹き飛ぶんじゃねえのか」

そのために、タービンには大量のセンサーが取り付けられていて、ば即座に対応し、段階的に放電していく事で、何とか対応しようとしんだな」

「尖った性能とはいえ……そう考えると、ウォーターストライダーっ

「それも、雪原に特化したオブジェクトを作るための一環だろ。どんイに戦えるように設計されたお姫様のヤツと、アラスカだけで動くウ同じオブジェクトでも全然違う考えで建造されたって訳だ」

ヘイヴィアはそんな事を言う。

「深い雪の中じゃ、どうしても動きは単調になるからな。そんな中でクトってのはデカいポイントなんだよ。……実際、それでお姫様もやともあれ、このタービンが交換できなくなれば、クウェンサー達のウォーターストライダーの足回りである静電気発生装置を爆破してルは行えなくなる。そうすれば敵オブジェクトはここで足止めだ。

そして、それを実行するためのC4もある。

だが、

整備基地ベースゾーンから少し離れた見張り塔で、クウェンサー達の帰りを待っていたエリートの少女は、ピクンと耳を震わせ、それから慌てて振り返った。

ウォーターストライダーが莫大な静電気を使って移動する、黒い雷雲が広がっていくような音が聞こえる。おそらく制限時間が近くなって、一度ベースゾーンへ引き返してきたのだろう。

このままベースゾーンで鉢合わせたら、二人は間違いなく殺されるだろう。

こんな事態のために、少女には無線機が渡されてあった。いざとなったらクウェンサー達に連絡して、そこから離れさせるためだ。作戦は失敗となってしまうが、最低限命だけは守らなくては元も子もない。『オブジェクトの足回りを破壊する作戦』が中止になった時には、別の方法を考えるしかない。

エリートの少女は無線機のスイッチに手を伸ばしたが、そこでふと指が止まった。

（……まずい）

ゴクリと、喉を鳴らす。

敵軍の構成は、オブジェクトの整備場と、オブジェクトの活動を支援するための大型レーダー施設だ。吹雪の戦場で効率良く敵を発見するためのものなのだろうが……精密なレーダーを

多数配備している基地の近くで無線通信など行ったら……、
（ぜったいに気づかれちゃう。わたしだけならともかく、それがだって分かったら……）
危険を知らせるための無線なのに、その通信によってクウェンサー達を危険にさらすのでは意味がない。
しかし、無線を使わなければオブジェクトが接近している事を伝えられない。
そうこうしている間にも、ウォーターストライダーはベースゾーンへ近づいていく。
（どうしよう）
エリートの少女は無線機に視線をやった。
あの二人は死なせたくない。それは超大型兵器オブジェクトの守る使命があるから、という話ではない。そんな約束事とは別次元の所で、もっとシンプルに、自分の命を守るために立ち上がってくれた人達を、無駄に死なせたくはなかった。
戦友。
自然と浮かんだその言葉に、エリートの少女は一人で頷く。
（てきのさいゆうせんは、オブジェクトをそうじゅうするエリート……）
一度深く深呼吸し、少女は超大型兵器を睨みつける。
囮になるなら、今しかない。

C4を手にしたまま、クウェンサーは苦い顔をしていた。
震える口で、彼はポツリと呟いた。
「……どうするんだ、これ」
超大型兵器オブジェクトのパーツ……とはいえ、整備用のパーツには外殻のような物はなく、剝き出しの精密部品だけならC4でも十分に破壊できる。
だが、
「数が多すぎる。こんなの、手持ちのC4だけじゃ爆破しきれないぞ!!」
建物の広大なスペースのほぼ全てを使うように、びっしりと円筒形のパーツが並んでいた。
もはや神経質とも取れるほどの物量を眺め、クウェンサーは奥歯を噛み締める。
戦争の代名詞はオブジェクト。
万が一、オブジェクトが機能しなくなれば皆殺し。
この膨大なパーツの数は、そういった恐怖心の裏返しのように思えた。敵は殺し合いをオブジェクトに任せるようなし腑抜けばかりだが、その弱点ぐらいは理解しているようだった。
同じく、呆気に取られていたヘイヴィアが、クウェンサーの肩を叩く。

15

「おい、建物ごと吹っ飛ばそうぜ。パーツ一つ一つを爆破できなくてもっちまえば、全部まとめて瓦礫で押し潰せるだろ!!」

「何千あるかも分からないパーツが全部使えなくなるって、確実な保障はあるか？　たとえパーツ一つ一つは使い物にならなくなっても、潰れたパーツの使える部分だけをかき集めたら、使えるパーツが組み上げられるかもしれないぞ！」

「そんなの……ッ！　いや、ありえるか。オブジェクトが潰れるってのは、生きるか死ぬかの瀬戸際だ。そういう執念見せてもおかしくねえが、じゃあどうすんだよ!?」

「くそっ!!」

クウェンサーは吐き捨てると、倉庫の中を走った。少しでも有益な情報はないか、鉄骨を組み上げて作られた棚へ一つ一つ目をやっていく。そこに書かれた表示を見ていくも、焦りが重なって情報が脳まで入って来ない。

一方、ヘイヴィアは出口の方をチラチラ見ながら、

「おい、ヤベぇぜ。もう切り上げた方が良い！　オブジェクトの足回りを吹っ飛ばす事ができねえなら、こんな所にいても意味はねえんだ!!　だったら逃げねえと!!」

「待て、あと少し!!　なんかあるはずだ!!」

途中で見つけたタービンの整備マニュアルをめくりながら反論するクウェンサーだが、その時、空一面に黒い雷雲が広がっていくような低い音が彼の心臓を停止させるかと思った。

ウォーターストライダーの駆動音だ。
「やっべえ!!　ちくしょう、お姫様は無線で知らせる係だろうがヘイヴィアは叫んだが、クウェンサーは気に留めない。
ここまで来たら、一矢報いなければ無駄死にだ。
（待てよ、こっちの四重センサーと自動スイッチの組み合わせっクウェンサーは整備マニュアルと一面に広がる棚を交互に睨むむ
（番号は!?　どれだ、先頭の番号さえ分かれば……ッ!!）
「タイムオーバーだぜヒーロッ!!　三〇秒でここから出ないと袋の鼠だ!!」
「一分待て!!」
「何をゴソゴソやってんだよ!!　爆破できねえのは分かったろ!?」
「あと四五秒だ!!」
多くの足音が近づいてくるのを、ヘイヴィアは耳にした。おそらくクウェンサーがヘイヴィアの所まで戻ってきた。
「行こう。まだ間に合うか!?」
「どっかの馬鹿が道草食ってたせいでスリリングな事になってるよ!!　こっちだ!!」

言いながら、ヘイヴィアは裏口の方へ走る。

裏口のドアをわずかに開けて外を見ると、巨大なオブジェクトがすぐ近くを横切ったところだった。おそらく整備場へ向かう途中なのだろう。メンテ要員の整備兵達がその後を追って行くのが分かる。

「行けそうか？」

「蜂の巣の中を突っ切るような感じだが、ここを逃したら後はねえ。レーダー施設も一番は、レーダー施設も一番気を張る時間帯だろうからな。モードが切り替わる前に基地の外まで出ねえと」

その時、ガチャリという音が聞こえた。

裏口ではない。本来の表側の巨大シャッターの脇にある、人員用のドアが開いたのだ。

「くそ、行くぞ！」

ほとんど押し出されるような格好で、クウェンサーとヘイヴィアの二人は倉庫から外へ飛び出した。

どうやら敵軍は、唯一の脅威であるオブジェクトを破壊したおかげで、相当気が緩んでいるようだった。凱旋パレードのように帰ってきたウォータースライダーの方へ多くの人員が集まっている。

「おい、Ｃ４はもう使わねえだろ。信管刺してそこらに投げとけ」

「陽動に使うのか？」

「メンテが終わってアラスカ爆発してるって通信が入れば、砲撃の可能性を考えてオブジェクトを引き返させる事もろ。テメエの基地がバリケードできるかもしんねえ!!」

ヘイヴィアの提案に従って、クウェンサーは走りながら細かく千切ったC4を辺りに投げていく。確かに、どのみちC4は必要ないのは真実なのだ。

手持ちのC4を全て投げつつ、二人はようやく基地の出口――合成繊維製のバリケードを切り取った穴の辺りまでやってきた。

その時、クウェンサーは見た。

そして慌てて足を止めた。

「何だよヒーローッ!?　忘れ物でもしたのかよ!!」

「ああ！　お姫様が捕まってるぞ!!」

皮肉に真顔で返されて、ヘイヴィアがギョッとした顔になる。

二人はバリケードの穴ではなく、近くの建物の陰に飛び込み、それから改めて壁から顔だけを出して整備基地ベースゾーンの中央の方を観察する。

見れば、遠く離れた所にあるウォータースライダーのすぐ近くに、手錠で拘束されたエリートの少女が無理矢理歩かされていた。彼らの凱旋ムードは、単にオブジェクトが帰ってきた

からではない。今まで自分達の命を脅かしてきた相手に、リンチを加える事ができるチャンスが回ってきたから気分が高揚しているのだ。

クウェンサーはすぐ近くにある合成繊維製のバリケードの穴と、ベースゾーンの真ん中にいるエリートの少女を交互に見ながら、傍らにいる男に尋ねる。

「クソッたれ。どうするんだ!?」

「どうするったって……おい、ふざけんな。テメェがナイト様だっつーのは認めてやるが、この状況で助けるとか言うんじゃねえだろうな!?」

「じゃあ見捨てるのか!?　別にオブジェクトと正面から戦う訳じゃない。さっきあちこちに撒いたC4があったろ！　あれでどうにか敵を混乱させる事ができれば、その隙に何とかなるかもしれない!!」

「たった二人でか!?　向こうにゃオブジェクトがいるんだぜ。そうでなかったとしても、生身の兵隊だけで何人いると思ってやがる!!　切り抜けるために一体どんだけの増援が必要か分かってんのか!?」

「オブジェクトさえいなくなれば、話は変わるんだな？」

「なに？」

「ウォータークライダーさえ吹っ飛ばせれば、戦車とか戦闘機とか普通の増援だけで何とかできるんだな!?」

歯噛みしたクウェンサーは、手元の無線機を操った。
C4を起爆するためではない。
今も逃亡中のフローレイティア達の部隊に増援を求めるためだったのだが、それに気づいたヘイヴィアが慌ててクウェンサーの手を掴んだ。
「馬鹿っ!!　向こうの基地はレーダー施設主体だろ！　無線機の電波を使って連絡取り合ったら、あっという間に居場所が知られるぞ!!」
「でも……ッ!!」
「どうにもならねえよ。仮にフローレイティア達に連絡を入れたとしたって、やってくると思うのかよ!?」
「じゃあお姫様は見捨てるのか!?　そもそも、何のために俺達は部隊から離脱してこんな所までやってきてるんだ!!　見捨てられないからやって来てしまったんだろ!?」
くそ……と、ヘイヴィアは小さく舌打ちする。
彼はわずかに逡巡したようだったが、やがて意を決したように口を開いた。
「昔、訓練中に軍の教官に裏技を教えてもらった事がある」
「？」
「第八世代の携行型対戦車ミサイルの赤外線シーカーの出力を限界まで上げて、照準用のコンピュータにいくつか特殊な操作をしてから、無線機の端子を繋げると、高性能の軍事衛星が

こっちの赤外線を拾ってくれて、通信ができるようになるって」
「おい、それって……ッ!!」
「だが、その程度の小細工をしたって、レーダー施設に特化した連中の管制に見つからねえって保障はねえ。おまけに、辺りの雲には天候兵器のチャフミサイルの影響で、通信や信号を遮断する物質が混ぜてあるだろ。……そもそも軍の教官にしたって、この裏技は遭難時にSOS信号を出す最後の手段ぐらいにしか使えねえって言ってたし。一分間も通信できれば奇跡だぜ」
吐き捨てるように言いながらも、ヘイヴィアは肩に提げていたミサイルを外して準備を始めた。クウェンサーはミサイルの照準用コンピュータのカバーを取り外しながら、
「上空を通過する衛星の場所とタイミングって分かるか？」
「携帯端末出してファイル３９の『時刻表』を見ろよ。定時通りの軌道なら、わざわざネットで確認しなくても規定ルートを通っているはずだ」
無線機と携行型対戦車ミサイルをケーブルで繋ぎ、クウェンサーの携帯端末のデータを基に大空へ向けた砲口をゆっくりと動かすヘイヴィア。すると、無線機のスピーカーからジジッという小さなノイズが走った。
「そこだヘイヴィア。……よし、衛星を捉えたみたいだ!!」
「さっさと通信ラインを確保して、フローレイティアのレーザー衛星通信装置に繋げちまえ！

こんな手作業じゃ、いつまで捉えていられるかは分かんねえぞ!!」

裏技的な方法ではあるが、応軍の正式コードを認証してくれる。アクセス成功の信号を確認すると、クウェンサーは無線機に向かってこう経由させてくれる。

言った。

「こちらクウェンサー。聞こえますか、フローレイティアさん。俺達は今、敵軍のベースゾーンの近くまで来ています!!」

『……ッ!?』

無線機の向こうから、息を呑む音が聞こえた。

携行型対戦車ミサイルを強引に利用しているためか、ノイズがひどい。人の声よりも雑音の方が大きいぐらいだが、かろうじて意思を伝える事はできそうだった。

「例のお姫様が基地の連中に捕まっています。俺達はこれから彼女を助けるために行動する。力を貸してもらえませんか。基地の構成は、オブジェクト整備場とレーダー施設がほとんどで、戦車や戦闘機はほとんどありません。オブジェクトさえ何とかできれば、後は我々だけでも十分に勝てるんです!!」

『そのオブジェクトがどれだけ危険なものか分かっているの？　お姫様の事は諦めるのよ。お前達まで死ぬ必要はないし、そもそもクウェンサーに至っては正式な軍人ですらないのよ!!』

「オブジェクトは、俺達で何とかします」
クウェンサーは、キッパリとそう言った。
ハッタリとしか思えない言葉を、軍人ですらない少年は続ける。
「フローレイティアさんはオブジェクトの爆発する大規模な閃光を確認してからでも良い。とにかく少しでも勝算があるなと感じられたら、一台でも戦車を送ってください！　それだけで状況は全然変わるんだ。どうかお願いします!!」
『限りなく、ゼロに近いからな』
「待つのはこちらの自由です」
クウェンサーは拘泥せず、無線機のスイッチを切った。
それから、傍らのヘイヴィアの顔を見る。
ガチガチと震える体を無理に押し殺して、クウェンサーは告げる。
「……これで、やれる事は全部やったはずだ」
「馬鹿正直に登山中のフローレイティアが戻ってくる可能性はほとんどねえけどな。そもそも、テメエが出した要請は軍規に基づくものじゃねえ。そんなもんのためにに部下や部隊を危険にさらす事はねえんじゃねえか」
「後は奇跡でも願いながら、俺達だけでオブジェクトをぶっ壊せれば万事解決だ」
「簡単に言うんじゃねえよ。そもそも、俺はテメエと一緒にお姫様を助けようなんて一言も言

ってねえぞ」

「そうかよ」

クウェンサーはヘイヴィアの逃げ腰を罵ったりしなかった。今まで強引に巻き込むように行動を共にしてきたが、次こそ生き残れる保証はない。そして、今からやるのは規律のある軍事行動でもないのだ。むしろ、これまで協力してくれた事に感謝するべきだろう。

だから、クウェンサーはこう言った。

「……ここまで付き合わせて悪かったな。お前はバリケードの穴から出て、向こうの森に逃げるんだ。その間に俺はできるだけ暴れて、注意を引きつけておいてやるよ」

「くそ、待てよ。おい、ちくしょう!!　俺にとんでもねえトラウマを残すつもりかよ！　仕方ねえなオイ!!」

未練がましく合成繊維製のバリケードの穴をチラチラと振り返りながらも、先に建物の陰から飛び出し、別の陰へと移動していくクウェンサーを追いかけていくヘイヴィア。

たった二人。

絶対に成功しないであろう作戦に、クウェンサーとヘイヴィアは身を投じていく。

当然ながら、奇跡は起きなかった。

たった一〇分で彼らは見つかり、足元近くに狙撃銃の弾丸を威嚇射撃され、両手を上げる事

になった。

16

クウェンサー、ヘイヴィア、そしてエリートの少女の三人は、整備基地ベースゾーンの真ん中に連れて来られていた。それぞれ膝立ちの状態で、両手を頭の後ろへ回すように指示を出されている。

彼らの背後には兵士が一人ずつついていて、ライフルの銃口を頭に突きつけている。さらに、そんな公開処刑の見物人として、ベースゾーン中の人間が輪を作っていた。

「泣かせる話だろ。お姫様の危機に、ナイト様は必ず戻ってくるって良い見本だ」

「ふざけてるの？」

「ちくしょう、オブジェクトが整備場に入っていきやがる」

ヘイヴィアとエリートの少女の会話を無言で聞きながら、クウェンサーはゆっくりと移動していくウォーターストライダーを目で追っていた。

「（……混乱を起こせば、この状況から逃げられると思うか？）」

「（……あん？　さっき辺りに撒いたC4の話か。それでオブジェクトが吹っ飛べば何とか

「（……真面目な話だ）」

「（……真面目に言ってんだよ）」

そうこうしている内に、敵兵の一人がクウェンサー達の前にやってきた。彼はクチャクチャとガムを噛むような仕草をすると、口の中に溜めた黄色い唾をクウェンサーの頭に吐きかける。

それから、彼はエリートの少女の方を見た。

「お前達はオブジェクトの主砲で焼く」

「お前は暗示と電極を使って、頭の中身を引きずり出す。人格は二度と元には戻らんが、三〇分程度で完了するだろう。それが終わったら、生きたまま裸に剝いて凍死するまで主砲に吊るす。野山を駆け回っている蛮族どもも、それを見れば少しは諦めがつくだろう」

「……捕虜に関する戦争条約もお構いなしか。どっちが蛮族だよ、クソッたれ」

思わずヘイヴィアが呟いた直後、分厚い革の軍用ブーツが飛んだ。頬を蹴飛ばされ、雪の中へ沈むヘイヴィア。ガハゴホと咳き込むが、彼は強い眼光で敵兵を睨んだままだ。

敵兵は嘲るように言った。

「整備が終わるぞ。処刑の時間だ」

ガゴォン!!　という教会の鐘をつくのに似た轟音が鳴った。

オブジェクト整備施設の壁や天井が大きく開いた。そこから現れたのは、本体だけで五〇メートル級、四方向に伸びる主砲を含めると一四〇メートル以上の超大型兵器オブジェクト。

大小合わせて一〇〇門以上ある砲をギチギチと鳴らし、兵器と装甲の塊であるウォーストライダーが冬のアラスカに君臨する。足回りのパーツを交換したせいか、莫大な静電気が放つ黒い雷雲が広がっていくような音もどこかシャープに響くような気がした。

三〇〇メートルほどの距離があったが、遠近法が無視されているような威容だった。少しでも動けば、一瞬で踏み潰されると頭に浮かんできた。冗談抜きで、そういった光景が自然と頭に浮かんできた。

そんなオブジェクトを見ながら、クウェンサーがそっと呟いた。

「(……俺が飛び出したら伏せろ。そっちに除雪用のトラクターあるだろ)」

「(……おいっ!!)」

ヘイヴィアが止める暇もなかった。

三人の正面まで近づいていた敵兵に向けて、クウェンサーが飛び出した。周りの兵士達がライフルを構えたが、揉み合いになっているため引き金を引く決心がつかないようだ。もしかすると、まともな訓練を受けていない整備兵ばかりだったのも功を奏したのかもしれない。

自分のライフルを奪われると思ったらしい敵兵は、摑みかかるクウェンサーに対し、ライフルを強く手前に引いて対抗しようとした。

しかしクウェンサーが摑んだのは、ライフルではない。

肩の辺りにナイフのように収めてある、四角い無線機だ。

「伏せろ!!」

叫ぶと同時にクウェンサーは突き飛ばされ、ライフルの銃口を突き付けられるのも構わずに、地面を転がりながら無線機を親指で操作する。ヘイヴィアは辺りに撒いたC4を無線起爆するつもりかと思って、とっさにエリートの少女の上に覆い被さるように、除雪用のトラクターの陰へ飛び込む。

だが違う。

クウェンサーが爆破したのは、ダミーのために配置したC4ではない。

ウォーターストライダーの足元だ。

ボゴッ!!　という爆音が、三〇〇メートル以上先にある、四本の脚の一本を内側から爆発させた。外側からの爆発ではない。明らかに装甲の内側からの爆発だ。

倉庫で大量の予備パーツを見たクウェンサーは、その全てを爆破するのは不可能と判断した。そこで、『大量にある予備パーツの内、次のメンテでオブジェクトに組み込まれるパーツはどれか』を探し出し、パーツ内部に信管付きのC4を仕込んでおいたのだ。『どのパーツが重要なのか、交換するにあたってパーツ内部のどこならC4を気づかれないか』の判断は、半人前とはいえオブジェクトの構造について学んでいたクウェンサーだからこそ可能だったのかもしれない。

分厚い装甲に覆われたオブジェクトは、核兵器を使っても破壊できない。しかし装甲の中にある爆薬を使えば、オブジェクトの設備を爆破するのも可能となる。

その上、吹き飛ばしたのは大量のエネルギーを消費する、移動用の静電気発生用タービン。一基だけで下位安定式プラズマ砲の二倍、脚一本に密集している全てを合わせると二〇倍に達するエネルギーを常時使用しているデリケートなポイントだ。

そんなものを爆破すればどうなるか。

大量のセンサーを取り付け、本来なら『予兆』を察知する事で、最小限の負担で段階的に停止しなければいけないはずのタービン。それを一基から連鎖するようにまとめて吹き飛ばした場合、緊急用の変圧器や放電器、さらには動力炉そのものに、どれほどの負荷を加えるか。

無線機を奪われ、クウェンサーに銃口を突き付けていた敵兵は、いきなり起きた爆発に、思わずそちらへ目をやっていた。

しかし。

「……内側から爆破すれば、オブジェクトを破壊できるとでも思ったのか?」

勝ち誇ったように、兵隊は言った。

多少の爆発は連続したが、それは一本の脚に留まっていた。ウォーターストライダー自体が全壊するまでには至らなかったのだ。

「知っているか。我々のオブジェクトの総重量の五%は、安全装置で占められている。雑兵

一人二人が整備場に忍び込んで小細工を施した程度で、吹き飛ぶような小物じゃない」

大爆発に備えて除雪用トラクターの陰へ飛び込んでいたクウェンサーに、敵兵は雪原の真ん中からライフルを向けてくる。

「オブジェクトの優位は、絶対にひっくり返らない。ここはそういう戦場なんだよ」

「そうかい」

だが、絶体絶命の中でもクウェンサーは笑っていた。

「お前こそ知っているか？　整備マニュアルを読んで知ったんだけど、ウチのお姫様のとそっちのウォーターストライダーには、似たような装置が取り付けられているらしいな。一部のオブジェクトには、敵に鹵獲されるのを防ぐために機密保護装置がセットされている。大破もせずに行動不能に陥った際、敵軍に回収されてテクノロジーを解析されるのを防ぐため、下位安定式プラズマ砲の特殊ガスを使って自ら爆発する機能だ」

手品のように、クウェンサーは何かを取り出した。

掌に収まるほどの、小さな四角い基盤のような物だった。

「こいつは厳密なセンサーで制御され、滅多な事では暴走しないが」

四角い基盤の正体が何であるか、敵兵は即座に知った。

しかし、知ったところでもう遅かった。

「そのセンサーを取り外してタービンを爆破した場合、正確な自動判断なんてできると思う

か？」

何故ならば。

C4の爆発で誤作動を起こしたウォーターストライダーの機密保護装置が自動スイッチを入れ、下位安定式プラズマ砲の特殊ガスを機内の特殊スペースに充塡……即座に大爆発を起こしたからだ。

プラズマによる機内の大爆発は、装甲で守られるべき動力炉を一気に巻き込んだ。とはいえ、それは機密情報を破壊するためにテクノロジーの解析を防ぐ程度の破壊力だけを生むように整えられているため、本来最も恐れるべき『動力炉自体の臨界爆発』に比べれば、何割も威力を落とされたものに過ぎなかっただろう。

にも拘らず。

音が消えた。

オブジェクトの本体である巨大な球体が、ブワッ!!　と爆発的に膨らんだ直後、純白の閃光と強烈な衝撃波が全方向へ発せられた。その場に突っ立っていた敵兵は衝撃波に叩かれるように、くの字に折れ曲がってノーバウンドで数十メートルも薙ぎ払われた。別の場所に突っ立っていた他の敵兵達も同様だ。

生身の工兵の手による、超大型兵器オブジェクトの爆破。

それは戦争のセオリーそのものを覆す、前代未聞の偉業だ。クウェンサー、ヘイヴィア、そしてエリートの少女の各々の技術が組み合わさって初めて成し得た出来事だった。単に岩や橋を爆破してルートを構築したり妨害したりするだけだった裏方の工兵が、ここに来て戦争の勝敗そのものを左右するレベルのヒーローにまでのし上がったのだ。

だが、それを喜んでいる余裕はない。

「ぐアアあああああああああああああああああああああああああッ!!」

オブジェクトから三〇〇メートルもの距離があり、さらに除雪用のトラクターの陰に隠れていたにも拘らず、まるで貫通するように爆発的な閃光が網膜へと襲いかかってきた。鋼鉄の塊であるトラクターの表面が焦げ付き、ガリガリと強引に横滑りさせられる。

頭の中に激痛が走り、聴覚はほとんど失われていた。背中全体に火傷のような痛みが走り抜けた。真っ白に塗り潰された視界の中で必死に両目を擦り、近くで同じように倒れているであろうヘイヴィアやエリートの少女を引き起こそうとする。

どこかでガチャリという音が聞こえた。

兵士の内のいくらかは、クウェンサー達と同じく奇跡的に一命を取り留めていたのだろう。

ようやく戻ってきた視界の中で、爆発の衝撃によろめきながらも、必死にライフルをこちら

に向けようとしている数名を捉えた。
クウェンサーは手元にある無線機の感触を確かめた。
そして周波数を合わせ、C4の起爆コードを発信した。
ドゴッ!!　という爆音と共に、周囲に撒き散らした爆薬が爆発した。
構えていた敵兵が、面白いように宙を舞う。
近くで倒れているヘイヴィアに、クウェンサーは叫ぶ。
「走れるか!?　その辺に落ちてるライフル拾って応戦しろ!!」
「クソッたれ！　何が混乱を起こして逃げるだ。デカすぎてこっちがパニック起こしちまうよ!!」
叫びながらも、ヘイヴィアは転がっていたライフルを掴み取る。
とはいえ、いくつもの偶然が重なってウォーターストライダーを爆破できたものの、そもそも彼ら三人の目標は整備基地ベースゾーンの殲滅ではない。
安全に逃げられれば良いのだ。
だが、
「ッ!?」
ベースゾーンの出口に向かって走ろうとするクウェンサー達の行く先を遮るように、一人の敵兵が立っていた。彼はすでにライフルを構え、その照準をクウェンサーの胸に合わせていた。絶体絶命の状況で、二人は向かい合う。その時、確かに兵士の口元には笑みがあった。

そして銃声が鳴る。

ただし、それは敵兵のライフルから発せられたものではない。

もっと遠くから、狙撃用の弾丸が敵兵の頭を横から撃ち貫いたのだ。

驚いて発砲音のした方へ振り返った敵兵達は、ベースゾーンの外から無数のミサイルや砲弾が飛んでくるのを見た。驚いたのは敵兵だけではない。正体不明の援護射撃によって助けられたはずのクウェンサー達も、しばし呆然とそれを眺めていた。

「来てくれたんだ……。おい、これってフローレイティアさんの部隊じゃないのか!?」

「何だよちくしょう。どうやらあの和風マニアの爆乳、本当にデキル上官らしいなオイ!!」

敵軍はオブジェクトのみを集中的に運用するため、ベースゾーンには整備場やレーダー施設ばかりを並べていた。その他の戦力は最低限の歩兵部隊だけで、戦車どころか装甲車も用意していなかった。

対して、こちらの軍は税金の無駄遣いと言われながらも、戦車や戦闘機を一通り揃えていた。ほぼ確実に活躍の機会のないはずだった旧世代の兵器が、ここに来て本来の力を発揮していく。

ドカドカボゴンッ!! と複数の爆発が炸裂し、敵兵が宙を舞う中、クウェンサーはエリートの少女の手を引っ張って出口へ走る。歩哨は榴弾砲にやられているようだった。

隣を並走するヘイヴィアは、断続的にライフルを撃ちながらこう叫んだ。

「へへっ。なあクウェンサーッ！　ここまで来て死んじまったら俺ら馬鹿だろ!!」

「まあね。フローレイティアさんは、俺達を信じてここまでやってきてくれたんだ。その期待に応えるぐらいはしないとな!!」

今まで逃げていた上官達が加勢するために戻って来てくれたのは明確な勝算を提示されたからか。あるいは、心のどこかでエリートの少女を見捨てて逃げた責任を感じていたからか。

ベースゾーンの出口まで走り抜けたクウェンサーは、黒煙を上げる基地の方を振り返った。

勝敗は決しただろう。

互いのオブジェクトは失われた。後は生身の兵隊同士の殺し合いだ。そうなると、オブジェクト戦に特化してレーダー要員やメンテナンス用の整備兵ばかりを集めた敵軍よりも、時代遅れの戦車や戦闘機を多く抱えている自軍の方が、はるかに分があるはずだ。

（……あのオブジェクトを、生身の工兵が爆破した、か……）

戦争の常識を覆すほどの偉業を成し遂げた少年は、しかし呆然とのベースゾーンを眺めていた。

エリートの少女は、クウェンサーと同じような事を考えていたのか、口を開いてこう言った。

「……あのひとたちには、わたしたちがオブジェクトと同じぐらいのばけものに見えていたのかもしれないね」

「知るかよ」

対して、擁護するように口を挟んだのはヘイヴィアだ。
彼は煤にまみれた顔でベースゾーンを眺めながら、こう言い捨てた。
「これが戦争だ。先に『白旗』無視してその事を思い知らせてくれたのは連中なんだ。俺ら全員、オブジェクトのせいで戦争って言葉の重みを忘れてたみてえだけどな」

17

戦争なんて世界中で起こっているが、少なくともアラスカで繰り広げられた激戦だけは終了した。両軍のオブジェクトは破壊されたものの、最終的には（この時代には珍しい事に）生身の兵隊同士の殺し合いに発展し、これに勝利を収めたのはクウェンサー、ヘイヴィア、そしてエリートの少女は、アラスカから本国へと帰還した。
三人はそれぞれの所属が違うため、整備基地ベースゾーンを離れてしまえばバラバラになる。
しかし、そんな彼らがもう一度集まる機会があった。
特別表彰式である。
自軍のオブジェクトを破壊され、絶体絶命の状況を救ったのは、戦いのプロフェッショナルではなく、部隊にくっついてオブジェクトの勉強をしていた単なる学生だった。生身の体一つで無敵のオブジェクトを爆破した——というニュースは世界中を駆け巡り、本国では勲章

モノの栄誉とされたのだ。
　今の自分には全く縁がない（逆に、オブジェクト設計者として富豪になった時にいつか常連になってやると考えていた）超巨大ホテルのパーティ会場の控え室に、クウェンサーはいた。慣れない礼服の感覚に戸惑い、上品なネクタイの位置を何度も調整していた訳だが、久しぶりに見たヘイヴィアの顔に、そんな感覚は一気に吹き飛んだ。
「一応『貴族』サマだろ。俺より礼服が似合わない人間なんて初めて見たぞ」
「うるせえな。アラスカの雪原で鹿を追い掛けている内に感覚を忘れちまったんだよ。大体テメェだって似たようなモンじゃねえか」
　とは言うものの、流石に『貴族』の家柄なのか、礼服は似合ってなくてもパーティ会場の雰囲気に気圧されている様子もなかった。クウェンサーのように、変な感じに緊張して体に力が入ったりもしていない。
「ヘイヴィアは次、どこの戦場に転属させられるんだ？」
「アホか。元々、俺が軍の基地で時間潰してたのは、家の跡取りとしておくためのモンだ。生身でオブジェクトぶっ壊した面子の一人として相応しい功績を積んで表彰されりゃ、もう軍に用はねえ。後は悠々自適の金持ちライフを過ごすだけだ」
　まあそれもそれで面倒臭そうだけどな、とヘイヴィアは漏らす。
「そっか。出世コースまっしぐらなんだな」

「そっちだって似たようなモンだろ。今回の件で軍に気に入られたから、国のデータベースを漁る特権を得たって話じゃねえか。もう戦場に行かなくても、最先端のオブジェクトの設計図をいつでも見れる。お勉強のためのサンプルが大量にあるんだから、学ぶ速度も周りに比べて圧倒的に速いって寸法だ」

言われて、クウェンサーは思わず人差し指で頬を掻いた。

未だに実感はないが、どうやら彼もまた出世コースを突っ走る事に成功しているらしい。

「お姫様はどうしてる？」

「流石に、オブジェクトを動かすエリート様は戦線離脱って訳にはいかねえみてえだ。生身の兵士がオブジェクトを壊すのは表彰クラスの奇跡だが、元々オブジェクトと戦ってきたエリートのお姫様にとっては、それが『当たり前』なんだと」

サラッと住んでいる世界が違うような台詞を吐くヘイヴィア。改めて、オブジェクトを操って戦う者の背負うものをクウェンサーは少しだけ考える。

ヘイヴィアは続けてこう言った。

「今はアラスカで破壊されたオブジェクトを基に、さらに改良を加えた同系統の発展型に乗ってるってよ。あれだけデカいオブジェクトをゼロから作ると二、四年はかかるって話だし、元々『乗り換え』の計画はあったみてえだな。……まあ、あのお姫様は戦場を気に入ってる節もあるようだから、そういう境遇に納得してんじゃねえのか？」

「あれだけの目に遭ったっていうのに、信じられないセンスだな」
「あるいは、だからかもしれないぜ。俺らみてえな雑兵の命の価値について、いっぺん真面目に考える機会に恵まれたんだからよ」
その時、控え室のドアが丁寧にノックされた。
顔を出したのは、軍の高官に仕える美人秘書だった。どうやら式の準備が整ったらしいので、主役にご登場願いたいらしい。
控え室を出て、パーティ会場へ向かう途中の廊下で、ふとクウェンサーはこう言った。
「そうだ。お前の所にはお姫様からメール届いてるか？」
「馬鹿が。それこそテメェだけの特権だ。あの時、ライフル抱えてお姫様の所に一番乗りしたのはテメェなんだからな」
「……こんな時ぐらい、会えるものだと思っていたんだけどな」
「まあ、表彰式が終われば俺達はバラバラの道を行く事になるが、今は別れを哀しむよりも出発を祝うようにしようぜ」
パーティ会場への両開きの扉が開かれ、拍手とカメラのフラッシュが二人を出迎える。司会者の声に導かれてゆっくりと檀上へ歩いたクウェンサーとヘイヴィアは、軍のお偉いさん達から挨拶を受けると、オリンピックの金メダルよりも価値のありそうな勲章に表彰用のリボンを取り付け、一人一人首に掛けられる。

そして最後に、司会者はこう言った。
『それでは、生身でオブジェクトを撃破したお二人に盛大な拍手を。その特殊で優れた戦力を今後も世界のために使っていただく事を願って、笑って次の戦場へ送り出しましょう』

……え？
この馬鹿、今なんて言った？

檀上にいるクウェンサーが慌てて軍の高官達の方を見ると、彼らは極めて白々しい笑顔と共にパチパチと拍手をしていただけだった。
ただし目だけは本気だ。
戦争の代名詞はオブジェクト。そのオブジェクトを破壊し、戦争の勝敗を分けるほど重要な戦果を上げる優れた兵士達を、そうそう簡単に手放すなんてありねーぞ……という無言のプレッシャーが放たれている。

「（……おい。聞けよヒーロー。どうやらドッキリじゃなさそうだぜ。あっちの席の小太りが話してんのを聞いたんだ。俺らの配属先が分かったぞ！）」
「（……何だよ配属先って。もう決定事項かよ!?）」
「（……お姫様のオブジェクトと一緒に動けって話らしい！　なんつーか、生身の体だけでオ

ブジェクトを爆破できたんなら、自軍のオブジェクトと共同作戦を行えば、さらに効率良く敵軍にダメージを与えられるかもしれないとか、そういう方向らしいぞ!!）」

「（……マジかよ。って事はまた怪物オブジェクトと真っ向勝負か!?）」

意外な所で頑丈な人間関係に眩暈を覚えながら、クウェンサーは首に掛かった勲章に目をやる。

まさか。

戦死で特別昇進とか、そういう意味合いじゃないだろうな、と彼は思った。

第二章　親指トムは油田を走る　〉〉ジブラルタル通行阻止戦

1

お姫様という愛称で（本人の望む望まないに拘らず）自軍や友軍から呼ばれているオブジェクトの操縦士、エリートの少女は、巨大な軍港式の整備基地ベースゾーンにいた。

全長五〇メートル以上のオブジェクトを整備するための施設は、やはりオブジェクトの大きさに引きずられるように大型化する傾向にある。大昔の神殿を築いたギリシアの設計者が見たら泡を吹きそうなサイズの巨大構造物の中に、お姫様のオブジェクトであるベイビーマグナムはすっぽりと収まっていた。

オブジェクトは整備用の連絡通路で縦横に取り囲まれていて、お姫様はさらにそのオブジェクトの中心地点に佇んでいる。

球体状の本体の中心点は、オブジェクトのコックピットだ。

オブジェクトの形状に合わせるように、操縦席もまた直径二メートルの球体だった。人間工

学に基づいた流線形の椅子には『人体が疲れにくい最適の形』をコンピュータ上で計算し尽くしたものであり、さらには床ずれのような現象を回避するためにマッサージチェアとしての機能まで備わっていた。

オブジェクト中心部にあるコックピットには、肉眼で外を確認できる窓や風防のような物はない。視野は全てカメラやセンサーと連動するモニタによって確保される仕組みだ。球体の内側に張り付くように備えられた湾曲式のモニタを使い、エリートは常時三〇〇以上のウィンドウを緻密かつ高速に観察していく事になる。

操縦システムも一つではない。

お姫様は顔に掛けたアスリート用のシャープなサングラスのような機材を、人差し指でコンコンと軽く叩く。

赤外線を利用して眼球の動きを読み取る入力デバイスが代表的だが、それ以外にもお馴染みの戦闘機タイプの操縦桿やキーボードのような大量のボタンもある。そのどれもがメインとなり、サブとしても機能する仕組みだった。

メインシステムが複数あり、さらにサブとの組み合わせが無数に派生するのでは、単に覚える方が混乱するだけでは……？　と思う人もいるだろう。しかし、オブジェクトとは、国の軍事力そのものだ。単に『システムに不備があったから戦えませんでした』では済まされないからこそ、操縦士エリートは『最低限のレベル』ですら分厚い百科事典に勝る操縦マニュアルを、さらに

何冊も何冊も追加した上で、『全ての派生パターンを問題なく使うためには、その基本のマニュアルをどうすれば良いかという応用パターンを頭の中で練り上げる必要に迫られる。

「……、」

整備中で機体を休めているオブジェクトの中で、エリートのお姫様はそっと息を吐く。

別に軍事作戦の内容を確認し、これから殺す相手の家族について考えている訳ではない。彼女の手には、ありきたりの携帯電話が握られていた。オブジェクトは通常、ハッキング防止のために一部の独立した通信機を除いて外部からの電波を完全に遮断する機能が備わっているが、今は整備中でコックピットから外へ繋がる長いトンネルのような通路と隔壁は全て開放されている。

少女は、携帯電話の小さな画面を眺めていた。

そこに表示されていたのは、短いメールだった。

アラスカの基地で出会い、窮地に陥った自分を助けに来てくれた、本物の友達。

「ふふ」

内容はそっけないものだったが、お姫様にとっては関係なかった。内容ではなく、誰からのものであるのかがこんなにも重要な意味を持つとは、今まで想像もできなかった。

「ふふ、ふふふ。うふふふふ」

思わず鼻歌を歌い、椅子に座ったままダンスっぽく体を小さく左右に振った直後、適当に振

り回した手の甲がうっかりレバーにぶつかった。
巨大な主砲がガコーンと大きく動き、空中の連絡通路を押し潰そうになり、すんでの所で整備兵の婆さんをホームランしそうになったお姫様は、慌ててレバーを掴み直す。

2

「クウェンサー、そろそろ作戦行動時間に入るの。私的通信が制限されるから、再び自由時間になるまで携帯電話はお預けよ」
美人上官のフローレイティアに注意され、クウェンサーは慌てて携帯電話をポケットに押し込んだ。
作戦の内容は簡単よ、と我らが上官フローレイティア様は銀色の細長いヘアピンを揺らしながら、大型輸送機の中で豪語する。
「地中海の玄関である、ジブラルタル海峡を突破しようとしているの。こいつの侵入を許してしまうと大変な事になるから、海峡突破前にオブジェクトを爆破しないレベルで行動不能にしろって言うんですか」
「以上よ、じゃねっすよ何すか行動不能ってあの怪物に峰打ちでもそんな事を言う。
ヘイヴィアが口を尖らせて。以上よ」

フローレイティアも無茶を言っている事に自覚があるのか、軽く肩をすくめて、
「上のお偉いさんは本気でそんな注文をしてきている訳よ。どうやら今度のオブジェクトは大量の原油を勝手に盗んで運搬している最中らしくて、それを回収したいみたいだけど」
正直無謀でしょ？　とフローレイティアは簡単に言う。
「ただ、現場の私はもう少し実現性のある命令を出してあげるから安心して。……盗まれた原油の行方なんぞどうでも良いから、とにかくオブジェクトが海峡を突破するのを阻止しろ。何なら原油ごとオブジェクトを吹っ飛ばしても構わないから。以上よ」
「それもそれで、十分に無茶すぎる命令なんですけどね。生身で戦うような相手じゃねえぞ……」
ブツブツ言っているヘイヴィアだが、フローレイティアはこれ以上の妥協はしないつもりのようだった。
クウェンサーはこれからの激戦を想起して軽い眩暈を覚えながらも、
「……地中海。それで、支給品の軍服の迷彩カラーが灰色系に変わってたんですね」
「見てへイヴィア。最近の学生は呑み込みが早いのね。曲がりなりにも本職の軍人が後れを取って良いの？　んん？」
「分っかりましたよー。俺もライフルの迷彩パターン変えりゃ良いんでしょ。ったく、携帯電話の色替えボディかっつの」

「上官にケンカを売っているのヘイヴィア？　そうだったらさっさと向かって来い」
「よしてくださいよ。そのスラリとした脚で股間を踏まれたりしたら元気が出ます」
　適当な事を答えながら強化プラスチック製のパーツをテキパキと交換していくヘイヴィアを横目で見ながら、クウェンサーは上官のフローレイティアに話しかけた。
「そもそも、何でフローレイティアさんがこんな所に？　アラスカ所属じゃありませんでしたっけ？」
「私も望んでこんな所に転属した訳じゃないの。お偉いさんの意向よ。今回はあのお姫様と、お前達二人がセットで作戦を行うからっていうね。馴染みのオブジェクトと奇跡のコンビに命令出す側もアラスカの時と同じようにした方が良いっていう考えなんじゃないの？　ったく、スタンドプレーに付き合わされるのも大変よね」
「海峡を突破されるとどうなるんです？　さっき、オブジェクトは大量の原油を盗んで運んでいる……とかって言っていましたけど」
　話題を変えるようにクウェンサーが質問すると、フローレイティアは肩をすくめた。
「我が国が六ケ月かけて兵糧攻めにしている敵軍のベースゾーンがある訳だけど、その六ケ月が無駄になるの。どうやら海上移動中の敵軍オブジェクトは石油採掘機能も備えているらしくてね。公海も他国の領海もお構いなしに海底から石油を吸い出しては体の中に抱えて、オブジェクトの同盟国に配って回っているみたいよ」

「テロ指定国家への宅配サービスってトコですか。ここで沈めておいた方が世界のためだぜ」

ヘイヴィアが唇を歪めてそんな事を言った。

クウェンサーは首を傾げて、

「オブジェクト主体の戦場に、石油なんて必要あるんですか。あの動力炉ってJPlevelM-HD方式でしょ？　あれはもっと特殊な仕組みで動いているはずだし」

「あれも皮肉なもんだよな。最先端技術とかになると、逆に石炭の方が燃焼効率が良くなってヤツだろ？」

「JPlevelの場合、実際には一度ドロドロに溶かして構造をいじってから再固化してるけどね。燃焼時間知ってる？　あの燃料って一度ぶち込んだら五年は交換しなくて良いらしいよ」

そんな感じで脱線しかかった話を、フローレイティアが元に戻す。

「オブジェクトそのものじゃなくて、メンテ用のベースゾーンが石油を消費する訳ね。アラカでお前達が基地を襲ったのと同じよ。整備できなくなれば、オブジェクトも身動きが取れなくなるの」

彼女は基地に着いたら呑めなくなるであろう、度数の高いショーチューを口に含みながら、

「現在、ジブラルタル海峡の端から端までゴールテープを張っているの。等間隔で機雷の巻き付いている網ね。それで鋼の巨体の侵入を防ぐんだって。しかしまあ、例のオブジェクト相手にどこまで通用するかは分からないの。だから正面からお姫様のオブジェクトをぶつけて、

裏からお前達に動けと命令が来たみたいね」
「激戦区だな。流れ弾で一〇〇回死ねる」
思わず呟くヘイヴィア。
クウェンサーは輸送機に取り付けられた小さな窓の外に目をやる。雲の下に広がっているのは、青い青い綺麗な海だ。それを眺めながら、クウェンサーもポツリと口に出す。
「ただいま、クソッたれの戦場さん」

3

クウェンサー達を乗せた大型輸送機は海辺の滑走路に着陸したベースゾーンはそこではないらしい。
「……おい嘘だろ。ど真ん中じゃねえか」
船体をおざなりな鉄板で覆い、機関砲を前後に二門だけ取り付けただけの雑な軍用ボートの上で、ヘイヴィアが呻き声を上げた。
無理もない、とクウェンサーも思う。
ジブラルタル海峡のほぼ中央地点に、海上油田のような物が建てられた、鋼鉄の島。どうやらそれが、海峡を突破しようとしている敵軍オブジェクトを迎撃す

るために作られた、急造のベースゾーンのようだった。
柱の高さは海面から五〇メートル以上、そして柱によって支えられた天井部は、三〇〇メートル四方の四角い板だ。さらにその下に、複数の通路やら階段やらエレベーターやらが、四方八方に入り組んでいる。
クウェンサーは上官のフローレイティアの方を見ながら、
「これじゃ的ですよ。デカいのがやってくるって分かっているなら、じっと待っていないで空軍でも動かせば良いのに……」
「オブジェクト相手じゃ通用しないの。設計学んでいるお前なら分かる事よね。戦争の代名詞はオブジェクト。これからジブラルタルに向かってくる怪物を食い止めるためには、こっちもお姫様のオブジェクトを運用するためのベースゾーンを作って待ち構えるしかないの」
……まあ、クウェンサーとしてもそんなのは百も承知で、ようは自分が戦うのが嫌だというだけなのだが。
ともかく、そんなヤバい所で働かされる生身の人間としては、たまったものではない。ここでオブジェクトから砲撃を受けたら、死体は海から上がってこないかもしれない。
周囲を見回せば、似たような油田みたいな施設が海の上にポツポツと建っているのが分かる。
「油田じゃない。この辺は採掘には向いていないからね」
第一印象を口にすると、上官のフローレイティアはそう答えた。

「メンテに必要な石油は世界中の協力地域からかき集めて、海底のタンクに貯蔵してあるの」
「……敵も味方も似たようなモンですか。なんかもう、戦う気力が一気に削げるな」
クウェンサーはうんざりした調子で言う。
一方、ヘイヴィアはボートを降りると、上陸用の鉄の階段を昇って、ベースゾーンの上部へと向かって行った。とはいえ、まさか階段で五〇メートルも昇るつもりはないだろう。作業用エレベーターのある広場にでも行くつもりか。
クウェンサーもその後を追う。
「おい。何でそんなにやる気いっぱいなんだ？」
「軍の上層部もそれなりに期待してくれてるみたいでな。聞いた話だと俺らには陸軍のパワードスーツを支給してくれるらしいぜ」
「そんなの、オブジェクトの砲撃一発で灰も残らないだろ」
「だがパワードスーツがありゃあ、爆発で飛び散った破片ぐらいなら何とかなるんじゃねえか？　死因は味方の装甲でしたとか、最高に格好悪いオチだしな」
彼らがやってきたのは、海面から一〇メートル以上上がった所にある鉄板の広場だ。幅一〇〇メートルぐらいの巨大な空間だ。海面に向かって釣り竿のように何機ものクレーンが伸びているところから、おそらく貨物船からの荷物をやり取りするためのスペースなのだろう。クレーンとは反対側の壁には、コンテナを丸ごと昇降させるため

のか、家族向けの3LDKがそのまますっぽり収まりそうな、それでいて最低限の手すりしかない無骨なエレベーターがいくつも用意されている。

ヘイヴィアは広いスペースを走り回り、そして中央で両手を広げた。UFOでも呼び出そうとしているのかもしれない。

「やっぱデカい基地来るとテンション上がるなー」

「……こっちは論文の材料にならない知識を詰め込まされても、記憶野の無駄遣いにしかならないんだけどな」

「まだ派遣留学気分かよ。アラスカの一件で出世コースには乗ったんだろ。及第点取れてんなら後はダレてても良いんじゃねえのか？」

「アタマっていうのは筋肉と同じで、ブランク空くとリハビリが必要になっちゃうんだよ。嫌だよー、気がついたら爆破の技術しか残ってませんでしたとかいう展開」

そんな事を言い合っていると、少し離れた所からフローレイティアが片手を振りながらこちらに声を掛けてきた。

「おい、遊びに来ているんじゃないの。さっさとロッカーに荷物を置いて、配置につくの。聞いた話だとお偉いさんもちょっとは注目しているみたいだから、ここでヘマすると響くよ」

「そういや、支給品の爆薬がC4から『ハンドアックス』に変わってたっけ？　グラム単位の価格はプラチナよりも高いとかいうヤツ」

「いずれにしても、オブジェクトの装甲にはかすり傷もつけられないけどね」
改めて任務内容を思い出し、うんざりした調子になるクウェンサー。
彼は傍らにいる、なし崩し的な相棒に小声で話しかける。
「（……おい。リアルな話、何とかなると思うか？　生身の人間がオブジェクトと戦うなんて普通じゃないぞ。たまたま偶然起きた奇跡を何度も何度も起こせる訳ないのに……）」
「いやあ、何とかなるんじゃねえか？」
驚くクウェンサーに、ヘイヴィアの意外に軽い返事に、クウェンサーは思わず目を真ん丸にした。
ヘイヴィアは肩をすくめて、
「だってよ、今回は俺らだけじゃねえんだぜ？　あのお姫様が操るオブジェクト対オブジェクトの戦いがメインで、俺らはその裏からチョイチョイっと手を出して、お姫様を少しでも有利にすれば良い。後はお姫様が勝手にやってくれるさ。生身の人間だけで馬鹿デカいオブジェクトとぶつかったアラスカとは訳が違うんだよ」
「そんな……モンか？」
「そんなもんだろ。見ろよ」
ヘイヴィアは巨大な板状のベースゾーンのさらに向こう――海の方を指差した。
広い海のあちこちに、この基地と似たような施設があった。一つ二つではない。横一線に、

等間隔で、海峡を遮るように……二、三〇ものベースゾーンが並んでいる。こうして見ると、海上油田の激戦区みたいにも見えた。

「急造とはいえ、オブジェクト整備施設だけで三〇ぐらいあるんだぜ？　仮にメンテ施設が一つ二つ狙われたって、続けてお姫様のオブジェクトを運用できるように準備を固めてあるんだ。この予算の掛け方はちょっと異常だよ。そして金をたくさんつぎ込んだ施設はそう簡単にはやられねえ。上層部の連中もそういう風に作戦を練ってくれてるはずだ。俺らの帰還率も自然と高まるって事だな」

確かに、そう考えれば多少は楽観的にもなれるか、とクウェンサーも頷いた。

本当に単なる捨て駒なら、軍の上層部も大量の資金を投入したりはしないだろう。そしてお姫様のオブジェクト。アラスカでの経験を考えれば、彼女一人に頼りきりにする訳にはいかないが、それでもあるとないとでは大違いだ。少なくとも、オブジェクト対オブジェクトの戦いになれば、『一方的』ではなく『拮抗』した戦況に持ち込む事ができるのだから。

クウェンサー達の仕事は、その後押しをする事。

何も生身の人間が、本体だけで五〇メートル以上のオブジェクトへ真正面から突撃するのではない。

裏からお姫様の手伝いをし、彼女が勝利するための条件を整える事。

それぐらいなら、自分達にだって実行可能かもしれない。

クウェンサーは自然と笑顔になり、傍らの相棒にこう言った。

「なら大丈夫――」

言葉が終わる前に、隣のベースゾーンが粉々に吹き飛ばされる。

キュガッ!!　という爆音が視覚情報よりも遅れてやってきた。

トランプで作ったピラミッドを平手打ちで崩すような――横方向からの衝撃に、ベースゾーンがバラバラに崩れて海面へと沈んでいく。隣の基地とは二〇〇メートル以上離れていたはずなのに、爆発の衝撃波はクウェンサーやヘイヴィア達をまとめて薙ぎ払った。細かい針金みたいなパーツの破片が、彼らの頭の上にまで降り注いでくる。

ジンジンと痛む左右の鼓膜に顔をしかめながら、ヘイヴィアが叫んだ。

「なん……っだ、いきなり!?　違法建築か!!」

「馬鹿、現実逃避してんな！　オブジェクトに決まっているだろ!!」

仰向けの状態から半回転してうつ伏せになり、双眼鏡を使ってクウェンサーは水平線の辺りへ視線を走らせる。

山のような巨体があった。

超大型兵器オブジェクト特有の、動力炉を核シェルターの装甲で覆ったような巨大球体と、

そこから伸びる大小無数の砲の数々。今回の主砲はレールガンのようなサイズの砲弾を、マッハ一〇近い速度で撃ち出しているらしい。破壊力については前述の通り。あれ一発でベースゾーンを一つ地図から消せるレベルである。

しかも。

今回のオブジェクトの動力炉となる巨大球体は、一つではない。

三つもある。

各球体は正三角形の頂点を築くように配置され、それぞれの球体を甲パーツが連結されている。機体下部にあるA字の特殊フロートとエアクッション機関によって海上に浮かんでいるらしく、オブジェクトの周囲へさざ波のようなものが撒き散らされている。

海戦特化型のオブジェクト。その名はトライコア。

軍の資料にあったその巨体を眺めて、ヘイヴィアがもはや駄々をこねるように叫んだ。

「おいおいおい!!　あんなもん、どうやって動かしてんだよ!?」

「知るかよ!!　どうせ空気で船を浮かばせるエアクッション船とかウォータージェットとか、色々組み合わせてるんだろ！　あれだけの巨体なら、複数の推進装置があってもおかしくないし!!」

そんな二人の少年などお構いなしに、オブジェクトは鉄塔を横倒しにしたような巨大レール

【トライコア】
TRI-CORE

全長…約180m

最高速度…時速320キロ

装甲…2センチ厚×500層（溶接など不純物含む）

用途…大陸間侵攻用兵器

分類…海戦特化型

運用者…不明

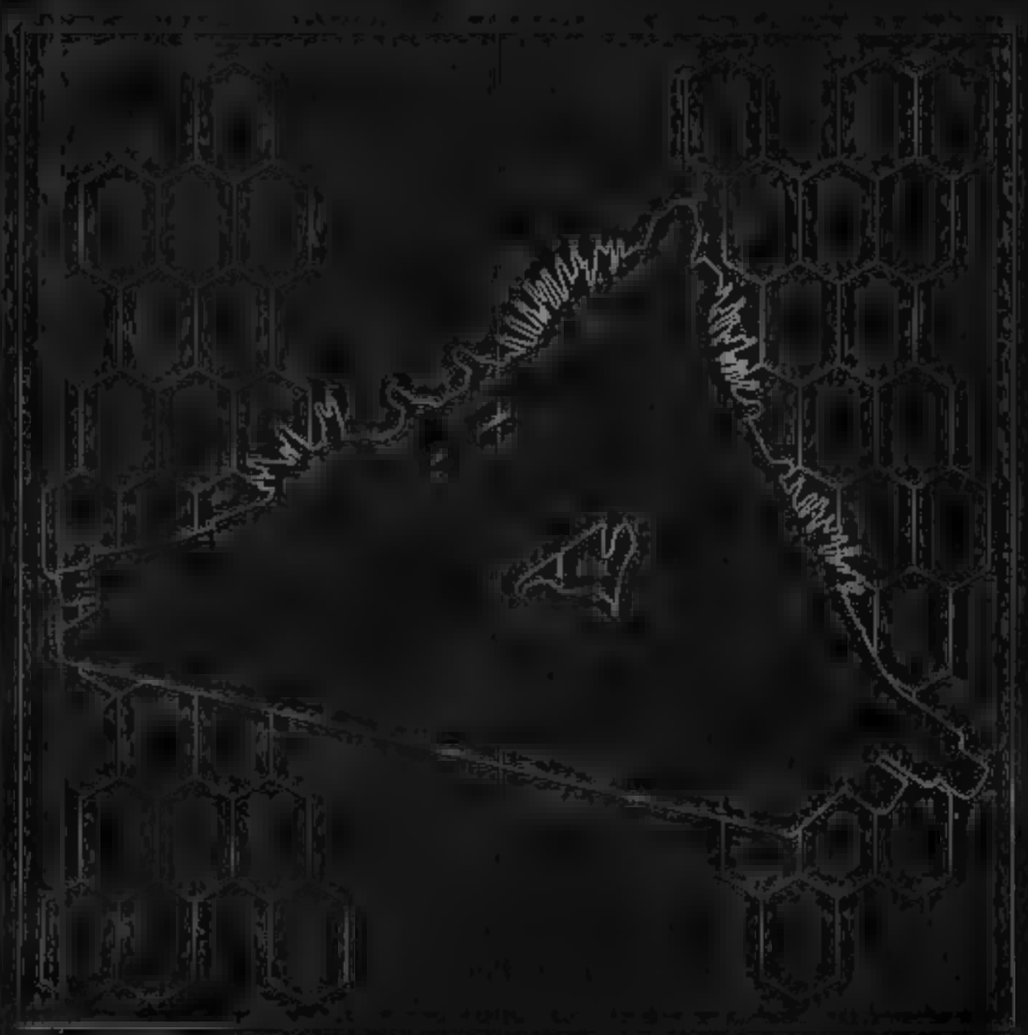
仕様…海上戦闘・採掘フロート仕様

主砲…レールガン ×3

副砲…レーザービーム、コイルガンなど

コードネーム…トライコア（動力炉が3つあるところから）

メインカラーリング…不明



TRI-CORE

ガンをギチギチとこちらへ向けてくる。
威嚇も警告もなかった。
ボンドンバガン!!　と凄まじい爆音と共に、海上で横一列に展開されていたベースゾーンが次々と真横へ吹き飛ばされていく。
ヘイヴィアは耳を塞ぎながらも、衝撃波に負けないように大声で叫ぶ。
「くそ、俺らは屋台の射的の景品か!?　そもそも機雷つきのネットを張ってるって話はどうなってんだっつの!!」
クウェンサーは双眼鏡を別の方向に向ける。
「普通の爆薬なんか通じるか！　薄々分かっていたんじゃなかったか!?」
第一射からほんの六〇秒で、すでにベースゾーンの半数近くが沈められた。四秒で一つ潰されている計算だ。お姫様のオブジェクトはどこにいる？　とクウェンサーは焦った。まさか、基地と一緒に海の茂屑になっていないだろうな、と。
「おいどうすんだ!?　やっぱ俺ら甘かったんだよ！　正面から戦わなければ大丈夫とか、そんな次元じゃねえんだ！　オブジェクト対オブジェクトの戦いなんてよ、側でウロチョロしてるだけで知らない間に吹っ飛ばされるのがオチだぜ!!」
「いや待て。というか、そもそもお姫様のオブジェクトは何で反撃しないんだ!?」
クウェンサーは伏せたままあっちこっちに双眼鏡を向けるが、一向にその巨体が出てくる様

子はない。

そこで、上官のフローレイティアが苛立ったような顔で、海上のオブジェクトを睨みながら声を掛けてきた。

「何よ!?　お前達、もしかして聞いていなかったの!?」

「何すかその不穏な前振りは!?」

「お姫様は陸地にある軍港式のベースゾーンで、海上戦闘用のフローティングゾーンを整備している内に調子がおかしくなったらしくて、到着が遅れるの!?　時間にルーズなシンデレラが配備されるまで時間がかかるから、『オブジェクトを使わなくても唯一対抗できる』のために輸送機をチャーターしてお前達を迅速に運んだと思っているのよ！　なんか大西洋を渡ってお前達が先にダメージを与えておいて、後からやってくるお姫様に楽をさせてやれという、上層部のありがたいお達しよ!!」

「おい、ふざけんな……」

ヘイヴィアの口調が、一瞬だけ軍の上下関係を超越した。

「俺らだけでまともに戦えるはずねえだろ。オブジェクトなしじゃ話にならねえって、アラスカの時にも言ってたじゃねえか!!」

やねえ。さっさと『白旗』上げろよ!!　今時の戦場は総力戦にはならねえって、アラスカの時

「それは領土を明け渡して撤収できる場合での選択肢よ。今回は敵さんの進路を塞ぐ形で陣

今にも沈みそうな状態で、それでもクウェンサーは叫ぶ。
一方、隣で同じように泳ぐと溺れるの中間みたいな仕草をしているヘイヴィアは、
「おい、このままじゃ砲撃受けなくても、バラバラになって降ってくる基地の残骸だけで圧死しちまうんじゃねえか！」
「とっくに海底だろ！　俺らに支給されるパワードスーツってのはどこにあるんだ!?」
「着たら沈むようなスーツを支給する気だったのかよ、海の上なのに!?　やっぱ上層部は俺らを使い潰す気まんまんだな!!」
「それより少しでも基地から離れないとまずいんじゃないか!?　素潜りで三〇〇メートルぐらい潜れりゃ拾えるんじゃないか!!」
て、メンテに必要な分か、破れたパイプからはパイプで汲み上げているんだったよな。今は安全装置でも働いてるのかは分かんないぞ!!」
「黒い噴水が出てきたら文字通りの火の海って事かよ!?　誰だこんな適当な作戦にゴーサイン出したヤツ!!」
ぎゃあぎゃあ喚いてたヘイヴィアだったが、その体が一度海面に沈んだ。慌ててもう一度顔を上げた彼は、ぶるると水に濡れた犬のように顔を振り、
「ちくしょう、もう駄目だ。しっ、沈む……。爆薬捨てちまっても構わねえか？」
「お前は一％の可能性を捨てて〇％にする気か!?」

「こんなガラクタ後生大事に抱えてどうしろってんだ!!　まともに設置しても装甲にダメージ与える事はできねえし、そもそもこんな状態じゃ近づく事もできねえだろうが!!」

「確かにどうやって近づくかは問題だけ――うぎゃあ!?　向こうの方から近づいてくるぞ!!」

クウェンサーの絶叫に、ヘイヴィアはギョッとした顔で水平線の方へ目をやる。

トライコアは巨大なレールガンを使ってベースゾーンのほとんどを破壊し尽くした事で勝利を確信したせいか（あるいは、そこまでやってもオブジェクトが出てこない事に安堵したのか）、断続的に砲を撃ちながらも、こちらへ接近してきている。

速度は時速二〇〇キロ前後。

このまま海峡を突破する気か、と考えるクウェンサーの耳に、海面に顔だけ出した状態の上官フローレイティアの叫び声が届く。

「どうにかして!!　ここを突破されたら敵軍のベースゾーンに石油が届けられてしまうの！　それが嫌なら食い止めろ!!」

「もうそんなのどうでも良いだろ！　サラダ油と一緒に送ってやれ!!」

「石油が運ばれたらオブジェクト整備場が再稼働してしまうのよ!!　そうなったらこれまで整備不良で止まっていた、もっとヤバいオブジェクトが援軍でやってくるの!!　今以上の地獄になった地中海に放り込まれたいの!?」

「もう辞めてえ!!　この上官の頭ブチ抜いたら今すぐ除隊処分にしてくれねえかな!?」

ヘイヴィア、完全にマジな目で語っているが、クウェンサーとしてはそれどころではない。

彼はそれ以上に真剣な顔でこう叫んだ。

「おい、ヤバいぞ！　トライコアがこっちに来る!!」

「今さらだなヒーローッ!!」

「そうじゃない!!　直接あの巨体で俺達を押し潰すルートだ!!」

ウソだろオイ!!　あいつが海峡を突破しようとしてる事ぐらい――」

三つもの動力炉を備えたトライコアは、デカいレールガンを二、三発撃ってもかろうじて原型を留めているベースゾーンがある事に気づいたのか、今度は零距離で主砲を発射しようとしているらしい。そのルート上にいる立ち泳ぎ状態のクウェンサー達などお構いなしに、その巨体を強引に前進させてくる。

当然ながら、このまま直撃すれば生身の人間などひとたまりもない。

トライコアは空気を下に吹き付けて船体を浮かばせるエアクッション船と同じ理屈で浮かんでいるようだが、流石に巨体を浮かばせるのは骨が折れるのか、せいぜい三〇～五〇センチ程度しか浮かんでいない。あの状態では立ち泳ぎのクウェンサー達に船体がぶつかってしまうし、何より、数十万トンの巨体を浮かばせるほどの突風を浴びたら、人体の形がおかしくなるかもしれない。

このままではすり身にされてタコに喰われるのがオチだ。

やや右回りの進行ルートで迫ってくるトライコアを見て、ヘイヴィアは目を剝いた。

「よけろよけろ!!」

「アホか！　そんなに早く泳げる訳ないだろ!!　トライコアの横幅は一五〇メートル以上あるんだぞ！　オリンピックの金メダリストでも回避なんかできないってのの!!」

「なら教えろ学者の卵!!　一体どうすりゃ生き残れんだ!?」

そんな事を罵り合っている内にも、トライコアは圧倒的な速度で迫ってくる。

もう激突まで三〇秒もない。

（左右どっちに逃げても、泳いで回避する事はできない……ならっ!!）

クウェンサーは近くの海面でほとんど沈みかけていた救命ボートへ向かった。それを見ていたヘイヴィアが呆れた声を放つ。

「チャチなモーターボートで海戦用オブジェクトより早く進めると思ってんのか!?」

「違う、馬鹿！　こいつをつけろ!!」

叫び返しながら、クウェンサーは救命ボートに備え付けられていた物を、ヘイヴィアとフローレイティアに放り投げた。

透明なマスクが取り付けられたタンクの先端に、口と鼻を覆うゴーグルぐらいのサイズの缶。

「酸素ボンベ……？」

「それつけて潜れ!!」

透明なマスクを装着し、下を指差しながらクウェンサーは言う。

「トライコアは大型フロートとエアクッション機関で海上を進む！　だとすれば、あの巨体は海中までは広がっていないはずだ!!」

「ッ!?」

ヘイヴィア達は何らかのリアクションを返そうとしたようだが、それを黙って聞いているほどの余裕はない。

時速二一〇〇キロ近い速度で迫るトライコアの先端は、すでにクウェンサー達のすぐ近くまで迫っている。巨体が高速移動する事で、V字の高波も発生していた。船体自体は浮いていても、強烈な下向きの突風が海面を抉っているのだろうか。仮に何かの奇跡が起きてトライコアの横幅の外まで逃げたとしても、海面にいるだけでは高波に呑み込まれて消え去るだけだ。

「くそっ!!」

クウェンサーはマスクの調子を確かめる事もできず、そのまま頭を海中に沈めた。

間一髪の所で、すぐ真上の海上をトライコアの分厚いフロートが通り過ぎる。強烈な空気が、その猛威は海中のクウェンサーまでは届かない。

海面が大きく乱されているが、

（ふう。何とかなっ……）

安堵の息を吐こうとしたクウェンサーの呼吸が止まりそうになる。

確かに、トライコアの本体は巨大フロートとエアクッション機関によって、ほぼ完全に海上

に浮かんでいた。

ただし。

トライコアが備える三つの球体動力炉から真下へ、鉄塔のようなものが突き出していた。

警官が使う警棒のような伸縮式の構造物の正体はシャークアンカー――起き上がりこぼしのように、巨大オブジェクト本体はクウェンサーの頭上を通り過ぎたが、鉄塔サイズのシャークアンカーが横転しないように取り付けられた錘である。

オブジェクト本体はクウェンサーの頭上を通り過ぎたが、鉄塔サイズのシャークアンカーがそんな彼の胴体目がけて迫ってくる。

「ッ!?」

クウェンサーはとっさに横方向に泳いで避けようとしたが、そこでさらにトライコア側に動きがあった。主砲の狙いを調整するためか……まるで靴底で地面を踏みにじるように、ぐりっと右回りに急旋回したのだ。大幅に速度が落ちる代わりに、まるで誘導兵器のようにシャークアンカーが逃げるクウェンサーへ軌道修正していく。

（おおおお

シャークアンカー自体に激突したのではない。
そんな事になっていれば人間としてのシルエットすら残っていないだろう。
かろうじて回避したものの、大質量のシャークアンカーが撹拌する海水の渦に巻き込まれ、クウェンサーの体が勢い良く回転したのだ。
（でも、これで回避でき）
ほとんど奇跡のように命を繋ぎ止めたクウェンサーだったが、ここまで来てまだ安堵する事は許されなかった。
ぐんっ!!　と、彼の足が唐突に引っ張られたのだ。
「ッ!?」
足首が脱臼したかと思うほどの激痛が走ったが、実際には至らなかったらしい。それでもクウェンサーの意識は混濁しかけた。クウェンサーの足首に絡まった何かは、そのまま彼の体を時速五〇キロ近い速さで海中を引きずり始めたのだ。
（げほっ、ごぼっ!!　くそ、トライコアのパーツに引っ掛かったのか!?）
ギリギリと痛む足首に目をやったクウェンサーは、そこで嫌そうな顔になる。
シャークアンカーの一つに、金属製の網のような物が絡まっていたのだ。単なる漁に使う網とは思えない。その証拠に、改めて辺りを見回せば、クウェンサーの体のすぐ近くに、金属製の球体のような物があった。大玉

転がしに使うようなサイズの金属球体の表面には、太いトゲのような物がびっしりと生えていた。

それを見たクウェンサーの表情が、これまで以上に強張る。

（――機雷!?）

そういえば、フローレイティアはジブラルタル海峡に機雷つきのネットを張ってトライコアの侵入を阻むとか言っていた。このオブジェクトは巨体を使ってネットを強引に網を破り、引っ掛けたまま移動していたのだ。

こんな機雷如きでオブジェクトが破壊される事はない。

だが……こんな間近で不発弾が爆発してしまったら、クウェンサーの体は粉々になる。

（ちくしょう、味方の罠で死んでたまるか!!）

より正確にレールガンの狙いを定めるためか、トライコアは移動を停止し、エアクッションの浮力で海面に留まっていた。

機関も弱め、フロートだけ、ネットはガッチリと嵌まっていて、足首は抜けない。

この隙に、クウェンサーは体を丸めて足首に手をやる。しかし焦るクウェンサーだったが、そこへ横から別人の手が伸びた。

（!?　……ヘイヴィア!!）

どうやら相棒も同じようだが、酸素マスクと海水に阻まれているため、具体的な声は届

かない。

ヘイヴィアは意外に器用な手つきでクウェンサーの足首からネットを外したが、海水の流れに任せて離脱しようとするクウェンサーの腕を摑み、そのままトライコアに留めようとした。

トライコアはほぼ機体の動きを止め、主砲のレールガンを撃って兵隊達もほぼ海へ飛び込んだであろうベースゾーンを完全に海の藻屑とするために、だ。

こちらに注目していない今なら、ネットから手を離せば安全にトライコアから離脱できる。

にも拘らず、ヘイヴィアはネットにしがみついて留まろうとしているらしい。

（？）

クウェンサーは怪訝に思いながらも、とりあえず梯子のようにネットを摑み直したが、相変わらずヘイヴィアの真意は読めない。どうやら彼は説明しようとしているようだが、海中なので言葉はクウェンサーの耳に聞こえない。

しばらく努力し、それが無駄だと気づいたヘイヴィアは、片手でネットを摑み、もう片方の手で頭上を指差した。

そのジェスチャーは こう示す。

――エアクッションの突風も止まってるみてえだし、せっかくだからトライコアが加速する前にこのまま乗り込もうぜ、と。

まるで公園のアスレチックのようにネットを上っていき、クウェンサーとヘイヴィアの二人はようやく海面に顔を出した。

トライコアの大型フロートは、アルファベットのAのような形になっている。二人がいるのは中央の空洞部分で、釣り堀のように開けた海面だった。

ヘイヴィアは酸素ボンベのマスクを顔から取り外すと、海中ではちっとも届かなかった悪態をここぞとばかりに吐きまくる。

「くそっ、ベタベタして気持ち悪りぃ！　ずぶ濡れの犬だなオイ!!　大体何が潜れば安全だよ！　思いっきり死にかけたじゃねえか!!」

「ご注文は『どうすれば生き残れるか教えてくれ』だったはずだけどイティアさんはどこ行った!?」

「知るかよ、その辺にぷかぷか浮かんでんじゃねえのか？」

ヘイヴィアは投げやりな調子で言いながら、辺りを見回した。

「おい、海面に上がったのは良いけど、どこからトライコアの甲板に上がるよ？」

「あっちに整備用の梯子があるぞ」

「ッ!?　やべえクウェンサー、早くしろ!!　射的ゲームを済ませたトライコアが再び動き出しやがった!　このままじゃエアクッションの突風に叩き潰されちまう!!　六〇万トンの巨体を持ち上げるような風が吹くんだからよ!!」

「くそっ!　なあ、このまま敵国まで一直線とかじゃないだろうな!?」

「知るかよ!!　とにかく上がるぞ!　さっきのシャークアンカーだってヤバかったんだぜ。伸縮式の先端部分はウォータージェットの吸水口と排水口の両方を兼ねてるみてえだった。あのデカい柱が縮んで海面付近まで来てたら、俺らそのまま吸い込まれてたぞ!!」

という訳で、五メートル以上の厚さを持つ巨大フロートの側面に取り付けられた梯子を上って、クウェンサー達はトライコアの甲板へと上陸する。

オブジェクトを浮かばせるためのフロートとはいえ、幅だけでも二〇メートル以上ある。そして、彼らのすぐ側にはコンビナートにあるような、巨大な円筒形のタンクが三基も備え付けられていた。

「……トライコアには石油採掘機能があるんだっけか?」

「一応『ハンドアックス』は仕掛けるけどさ、こんなので本当にトライコアを沈められると思うか?」

クウェンサーは爆薬に信管を突き刺しながらも、怪訝な顔を崩さない。

「アラスカの時は敵軍のベースゾーンにあったパーツの中に爆薬を仕掛ける事で、オブジェク

トを内側から吹っ飛ばしたけどさ……トライコアっていうのは一体いつになったらどこでメンテを受けるつもりなんだ？」

「おい。オイ見ろよ」

と、ヘイヴィアがライフルを肩紐から取り外しつつ、クウェンサーに話しかけた。

近頃のライフルは海水に濡れた程度で使えなくなるものではない。

「？」

ヘイヴィアが顎で示す方を見ると、そちらは別のフロートだった。前述の通り、トライコアのフロートはAの字の形をしていて、クウェンサー達がいるのとは別の所にも、数々の施設が建っている。石油を採掘するために使う巨大なクレーンがあるブロックもあれば、港にある大型倉庫のような建物が並んでいるブロックもある。

釣り堀のように開けた海面越しのフロートを眺めていたクウェンサーは、

「……大型倉庫？　そうか、トライコアは整備基地を丸ごと内蔵したオブジェクトだったんだ!!　確かにこれなら弱々しい整備艦隊式のベースゾーンをお守りする必要もない。動力炉を二つも搭載している大型機ならではの新機能って訳か!!」

「違うよそっちじゃねえ！」

「は？」

「敵兵だ！　施設の他に、機関銃持ってる兵隊もフルセット揃えてあるみたいだぜ!!」

ヘイヴィアは言いながら、クウェンサーの腕を掴んで物陰に隠れる。
途端に銃声が鳴り響き、足元のフロートや遮蔽物に使っている金属板に火花が散る。
「ちょっと待て。俺達が隠れているのって石油タンクじゃないか!?」
「他に隠れる場所がねえんだから仕方ねえだろ!!　それともだだっ広いフロートのど真ん中に出て行くかよ!?」
ところが、トライコア側の兵士達もクウェンサー達が隠れている場所に特別性を見出しているらしく、数十人分もの銃が集まっている割には火力がえらく慎重というか、散発的だった。
グレネードのような物も使って来ない。
ヘイヴィアは石油タンクの陰からライフルを構え、二、三発ずつ細かく連射しながら、
「おい、フロートをぐるりと回って整備場まで行くぞ!!」
「アラスカの時みたいにかっ？　でもいつになったらトライコアはメンテを受けるんだ!!　仮に三日後だったら三日間は追われ続けるぞ!!」
「なら弱点を探せ!!　せっかくの機会だ、こいつにダメージを与えておかなきゃもったいねえだろ!!」
ダダッ！　ガガガッ!!　とライフルの引き金を引き続けていたヘイヴィアだったが、ふとその銃声が止まった。
「何だよ弾詰まりか!?」

「うるせえな今すぐ直すよ!!」

ヘイヴィアは一度遮蔽物の陰に隠れて、ライフルのカバーを取り外す。動作不良を起こした弾丸を取り外し、再びカバーを取り付ければ銃が撃てる状態になる訳だが。

そこで、ゴゴンッ!!　と大地が揺れた。

トライコアが大きく右回りに旋回したらしく、クウェンサー達を振り回すように倒れ込む。ライフル分解中のヘイヴィアも例外ではなく、細かい金具やスプリングなどがバラバラとフロートの上に散らばっていく。

するとヘイヴィアはとても嫌そうな顔で、

「……泣いて良い？」

「めげてないで拾えよ!!　ほら、こっちの調子が悪い事に気づいて向こうの兵隊がバンバン撃ってきてるじゃないか!!」

とはいえ、パーツのいくつかはフロートから海へと落ちてしまい、もうどうしようもないらしい。ヘイヴィアはピースの欠けたライフルを適当に放り投げると、予備として用意していた拳銃を取り出して応戦している。

「おい、どこに爆薬仕掛ける!?」

「待てって。今、携帯端末使って軍のデータベースにアクセスしてる」

「防水オプションなんて風呂場でネットやる以外に役立つとは思えなかったのにな」

「実際には確実にのぼせるからお風呂ネットはしんどいけど。ヘイヴィアは分析官だったよな。お前の部署じゃ、敵軍のオブジェクトを遠くから観察して大雑把な設計図を予測したりするんだろ。なら、それを調べれば弱点が見つかるかもしれない」

クウェンサーは小さな画面に目を落としたまま、

「何だこりゃ、安物め。電波の状況が悪すぎるぞ。もう少しあっちに移動すれば良いのか……？」

「おい馬鹿待て!!　そっちは敵の射線ど真ん中だ!!」

ヘイヴィアに慌てて引っ張られ、クウェンサーは我に返る。

「ヤバいな、ゆっくり設計図を確認してる暇もない」

「テメェは戦場にネット環境の整ったお洒落な喫茶店でも用意して欲しいのか」

「トライコアならネット喫茶ぐらい設置してるかもよ？」

クウェンサーは真顔で罵詈雑言に応じながらも、足元の地面を軽く蹴飛ばし、

「でも、冷静に考えたら一番の弱点は『これ』じゃないか？」

「やっぱ大型フロートか。ま、オブジェクトの球体状本体を三つも積んだ大型機だからな。フロートさえ割っちまえば、後は自重で海底まで沈んでいくんだろうけどよ」

「問題は、大型機雷が直撃しても傷一つないフロートを、手持ちの『ハンドアックス』だけでどうやって破壊するか……ってところか。何かしら衝撃を集中させて、一点を砕くように

すれば……」

「だーちくしょう!!」

クウェンサーの思考を遮るように、ヘイヴィアが突然叫んだ。

見ると、ヘイヴィアの手にはブローバックの途中で動作が止まった拳銃がある。

「弾切れだ！　元々拳銃は予備だから、そんなにマガジン持って来てなかったんだよ!!　これ以上ここにいるとフツーの兵隊に頭ブチ抜かれるぞ!!」

「じゃあトライコアはどうする!?」

「知るかよ！　とりあえず適当に爆薬投げて海に飛び込もうぜ！　どっかにいるフローレイティアとでも合流して、一度逃げるしかねえって。ここはチャンスを窺った方が良い!!」

一方で、敵兵側からの銃弾もさらに散発的になってきている。どうやら短い間隔ごとに発砲しながら、A字のフロートを大きく回り込んで来ようとしているようだ。

時間がない。

このままでは追い詰められる。

確かに現状の『ハンドアックス』だけで確実に沈められるようなトライコアは惜しいが、確実に拘泥すれば追い詰められるのはクウェンサー達の方だ。

『弱点』は見えない。このまま

（仕方ないか……ッ!!）

クウェンサーとヘイヴィアの二人は歯噛みしながらも、A字のフロートから、その外側に広

がる海へと飛び込もうとする。

しかし、彼らが戦線離脱する事はなかった。

それは、クウェンサー達の勇敢な心が撤退を拒んだとか、そんな高尚な理由ではない。

ゴバッ!!　と。

遠方から何者かが放った大口径砲撃をトライコアが受け、間近でその衝撃波を浴びたクウェンサー達がその場でひっくり返ったからだ。

一撃で聴覚がほとんど消滅しかけた。

平衡感覚を司る器官までダメージが加わったのか、クウェンサーは起き上がる事もできない。

強烈な頭痛と共に吐き気が込み上げ、必死にそれを押さえつけようとする。

「ち、くしょ……ッ！　何だっ……んだ!?」

すぐ間近にいるはずのヘイヴィアの叫び声が不鮮明だった。

クウェンサーは巨大フロートの上に倒れ込んだまま、ただ目線だけで襲撃者を探す。

水平線の辺りから、何か巨大な物が高速で接近してくるのが見えた。

本体は巨大な球体。その下部には本来逆Y字の静電気式推進装置があるのだが、今はさらに円形の海戦用フロートが追加されている。球体の後部からは巨大なアームが七本も伸びていて、

それぞれのアームの先端には巨大な主砲が取り付けられていた。おそらくその内の一門、あるいは複数の砲が火を噴いたのだろう。

推進方式が陸上時と違うのか、莫大な静電気の塊が放つ、黒い雷雲が広がっていくような音は聞こえてこない。

（……オブジェクト……？）

「おい、ヤベえぞ」

朦朧としているクウェンサーに、ヘイヴィアが震える声で話しかけてきた。

「絶対ヤベえって!!　お姫様のオブジェクトだ！　このままここにいたら、俺らはオブジェクト対オブジェクトの砲撃戦に巻き込まれちまう!!」

「ッ!?」

ひくっと、クウェンサーの顔面が歪む。

オブジェクトは五〇メートル級の怪物兵器で、扱う兵器もレーザービーム、レールガン、コイルガン、下位安定式プラズマ砲などなど……そこらの戦艦とは破壊力の桁が違う。そんなオブジェクト同士の戦いに巻き込まれたら、もう敵も味方もない。爆発で飛んでくるオブジェクトの装甲表面がぶつかっただけでも、生身の兵士など即死である。

こうなったら、一刻も早くトライコアから離れるしかない。

しかし、衝撃波に打ちのめされたクウェンサー達は、思ったように体を動かせない。

今まで別のフロートからこちらを狙っていた敵兵達も同じ状態らしい。これ以上余計なダメージを受けないように、慌ててトライコアのフロート上にある整備施設ベースゾーン部分へと逃げようとしている。

そうこうしている間にも、二機のオブジェクトは互いに正面から睨み合い、鉄塔サイズの主砲をギリギリと構えていく。

もはや、雑兵が逃げ出すだけの余裕すらなかった。

砲撃戦が、始まった。

ドガドガボゴッ!!　と凄まじい爆音や衝撃波が連続した。

クウェンサーとヘイヴィアの二人は這って進む事すらできず、その場でうつ伏せになって両手で頭を守る以外に何もできなかった。

――トライコアは『三つの動力炉』の総出力を最大限に発揮し、強力なレールガンを次々と放っていく。

――対するお姫様のオブジェクトは左右へ小刻みに加速して敵の照準から逃れつつ、磁力を利用したコイルガンのモードにした七つの主砲を連続射出していく。

生身の人間では絶対に抗う事ができないはずの超大型兵器のオブジェクト。その装甲の表面

が剝離し、花火のように飛び散っていく。見る者を圧倒するスケールの大破壊だが、そのど真ん中で巻き込まれているクウェンサー達としてはたまったものではない。

「くそっ!!　やっぱ戦争の代名詞はオブジェクトかよ！　俺らの命なんてどうでも良かったんだ!!」

「いや、そもそもあのお姫様は俺達がトライコアに上陸しているのか？」

クウェンサーは言いながら、携帯端末を操作してお姫様のオブジェクトへと交信を試みる。

相変わらず、電波の状況は最悪だった。

「おい、どうすんだよ？」

「メインに使う武器をレーザー系に変更してもらう。装甲を吹き飛ばすんじゃなくて焼き切る方向なら、今より流れ弾で死ぬ可能性も減るだろ！　作戦上有利になる点は全くないけど、あのお姫様ならワガママ聞いてくれるんじゃないのか!?」

「おい、派手な溶接光で失明したりしねえだろうな!?」

「なら破片の豪雨で死んでみるか!?　とにかく、お姫様にレーザーで牽制してもらう間に海に飛び込むんだ。流れ弾の心配がなくなったら、元のコイルガンに戻してもらうって寸法だ!!」

クウェンサーは携帯端末を通して、エリートのお姫様に話しかける。

「こちらクウェンサー。今トライコアの甲板にいる！　脱出するまでの間、兵装を一時変更し

てほしい。WL3B1 に変更してくれ！　繰り返す、WL3B1 に変更だ!!」

6

戦争の代名詞であるオブジェクトの一機、ベイビーマグナムのコックピット内で、エリートの少女は操縦桿を握っていた。

超大型兵器オブジェクトを操るには、特殊な才能がいる。

といっても、それは得体の知れない超能力とか、そういうものではない。単純な記憶力と計算能力、並行作業能力に状況判断能力など……人間なら誰もが頭を使う時に求められる能力を、極限まで高める必要があるのだ。

オブジェクトは大小一〇〇門以上の砲を同時に操る超大型兵器だ。

従って、各砲の照準情報を管理するだけでも、『同時に一〇〇通りの情報処理を可能とする頭』が求められるし、大概の砲は予備照準機能（とりあえず複数の目標をロックしておいて、いつでも照準を切り替えられるようにする仕組み）を備えているため、実際には三〇〇、四〇〇もの敵を同時に追えなければ、火器管制だけでこれだ。

オブジェクトの能力を最大限に発揮する事はできない。

さらに全長五〇メートルに及ぶオブジェクトの全機能を把握するとなると、もはや『天才』

程度の頭脳では管理が追い着かなくなる。結果として、オブジェクトを操れるのは、ありふれた情報処理能力を極限まで高めた、エリートと呼ばれる人間だけという事になってしまうのだ。

この問題を緩和するため、ある軍では大勢の乗員を使って分業制を構築しようとしたり、ある企業ではＡＩを利用して作業量を簡略化しようとした。

しかし大勢の乗員を使うと意志伝達までにタイムラグがあり、その間にエリート一人の高速判断で操られるオブジェクトによって撃破されてしまう。ＡＩを利用した場合でも、『ＡＩが学習していない未知の状況』に対応する事ができず、柔軟なエリートの戦術に追い着く事ができなかった。

遠い未来にどうなるかはさておいて、少なくともこの現代では、超大型兵器オブジェクトはたった一人のエリートの手によって操られるのが、最も強力な運用方法と認識されていた。

さて。

そんなエリートの少女は、敵であるトライコアへコイルガンの大型砲弾を次々と射出している最中に、友軍からの通信を受け取った。

『こち……クウェンサー。今……トライコアの……板にいる！』

懐かしい声だった。

自然と、操縦桿を握る小さな手にも、力が籠る。

『脱出す……までの間、兵装を一時、変更し……くれ！　ＷＬ３Ｂ……に変更し、てくれ！

繰り返す、WL3、に……変更だ!!』

ただ、電波状況が悪いのか、通信内容は不鮮明だった。

首を傾げるエリートの少女。

どうやら敵軍のオブジェクトであるトライコアの甲板に上陸しているらしいクウェンサー達は、エリートの少女に援護射撃を求めているらしい。……のだが、肝心の兵装をなんと指定しているのかが分からない。

(WL3B……だから、この系列だと、レーザー系のリクエストなの?)

うーむ、と少女は考える。

あまり時間的な余裕はない。放っておくとクウェンサー達が窮地に立たされるリスクも増す。エリートの少女は短い時間に急かされるように、こう決断した。

(たしか……WL3B2……だったような気がする。うん、そのはず!!)

彼女は一度だけ頷くと、兵装を切り替えるスイッチに手を伸ばす。

ジュワッ!! という水が蒸発するような音がクウェンサー達の耳に襲いかかった。

音源はお姫様のオブジェクト。

球体状のボディの表面に取り付けられた、プラネタリウムのレンズのようなパーツだった。

そこから前面に向けて扇状に、数百本のレーザービームが飛び出したのだ。オレンジ色の軌跡が見えるのは、空気中の埃か水分でも焼いているからか。

WL3B2『キラースコール』。

元々は対オブジェクト戦用ではなく、生身の人間が守る敵軍の基地を殲滅するために使われる補助兵装なのだが……、

「ぐわあああああああああーっ!?」

クウェンサーとヘイヴィアの二人は目の前の光景に絶叫しながら、ゴロゴロゴロゴロ!! とフロート上を転がって逃げる。そうこうしている間にも、大量の光学兵器がトライコアの表面を次々と焼いていく。

オブジェクトそのものを貫通する事はないが、その表面の部分部分が局地的に熱したフライパンのように加熱されていく。石油採掘に使うクレーンの柱が焼き切れ、避難もしないで別のフロートからしつこくライフルでクウェンサー達を狙おうと残っていた真面目な敵兵達がバカスカ破裂していった。

「何だこりゃ!? WL3B1 を注文したのに、思いっきり WL3B2 の方が飛んできたぞ!? あのお姫様は俺達を殺す気か!!」

「おい見ろよヒーロー、なんかお姫様のオブジェクトの様子がおかしくねえか!?」

ヘイヴィアに促されて見てみれば、ベイビーマグナムの後部から伸びるアーム状主砲の内の

一本が、何やら獲物を追うように小刻みに左右に揺れている。
それは、冷静に観察してみると『やっほー、お久しぶりー☆』というジェスチャーのようにも見えたかもしれないが、
「ち、ちくしょう！　なんか照準こっち向いてねえか!?　砲身を左右に細かく振って微調整までしてやがるぜ!!」
「もはや捨て駒確定だな！　だけど死んでたまるかちくしょう!!」
豪雨のように降り注ぐ対人殺傷レーザーの中、なけなしの勇気を振り絞ってクウェンサーとヘイヴィアは立ち上がる。彼らが向かうのはトライコアの深部ではない。外周に広がる海に向かって全力で走り、職務放棄全開で海面へ飛び込んだ。
ざぱーん、などというありきたりな音はしなかった。
時速二〇〇キロ近い速度を出すトライコアから飛び降りたからだろう。おまけにエアクッション船と同じ突風の余波も広がっている。クウェンサー達はまるで川で平たい石を投げたように、水面をバンバンと数回バウンドしてから、勢い良く海面に突っ込んだ。
とんでもない爆音が、ズボッシャアアアッ!!　と炸裂する。
あっという間に、トライコアまでの距離が一五〇メートル以上開く。
直後。
問答無用とばかりに、二機のオブジェクトの間で再び主砲同士の全力バトルが繰り広げられ

ていく。トライコアからそこそこ離れたはずなのに、海面そのものがビリビリと震動してクウェンサー達の体をシェイクしそうになっていた。

「もうやだ！　あんな戦いについていける訳がない!!」

ようやく浮き出てきたクウェンサーが半泣きで喚くと、すぐ近くで同じように海面から顔を出したヘイヴィアがヤケクソな調子でこう言った。

「おい、さっきいくつか爆薬仕掛けてたろ！　さっさと起爆しちまえ!!　あれだけ死に物狂いで頑張って成果が何もないんじゃやってらんねえよ!!」

「オーケー相棒!!　これが俺達の努力の結晶です!!」

クウェンサーがおかしくなり、起爆用の無線信号を躊躇なく送信した。

直後、

グワッ!!　と紅蓮の炎が舞い上がった。

トライコアのフロートに取り付けられていた円筒形の石油タンクが爆発したのだ。

衝撃波は均等に撒き散らされ、海面にいたクウェンサー達も叩きのめされた。モグラ叩きのように海面に頭が沈み、それから慌ててもう一度顔を出す。

「うえっ、くそ……結局自分の方に帰ってくるのかよ……」

「だが今まで俺らが盾に使ってたタンクが吹っ飛んだって事は、トライコア側にも戦略的ダメージが入ったんじゃね？　連中の目的は『敵軍基地に原油を運ぶ事』なんだからよ」

「っていうか、おいおい。補給を断つための作戦とはいえ、これ大丈夫なの？　海が原油で大変な事になってないか？」

「上層部だってある程度は予測して対策練ってるだろ。戦闘が終わればすぐに専用の作業船をよこして吸引するんじゃねえか。どうしても盗まれた原油を全部持って来いって言うなら、お偉いさんを海に沈めて自分で作業させりゃ良い。それよりトライコア自体の方はどうなんだ？」

そんな事を言い合う二人は、改めて黒煙を上げるトライコアへ目をやる。

彼らの顔は優れない。

「ちくしょう、何だかんだでオブジェクトの野郎はピンピンしてんじゃねえか!!」

「やっぱりフロートにも傷がついている様子はないな。くそっ、どうやりゃトライコアを沈められるんだ！　そもそも手持ちの爆薬だけで何とかなるのか!?　だー全部投げてさっさと帰りたい!!」

と、そこへ上官のフローレイティアが、モーター式の小型推進装置を操って救命ボートを動かして、こちらに接近してきた。彼女は濡れた軍服の内側からオトナな下着が透けているのも気にせず、非常食らしきチーズの塊を小さな口で噛み千切りながら、

「まあ、帰れるかもしれない可能性もあるのよ」
「フローレイティアさん!?　アンタ今までどこいたの!?」
「そんな救命艇どこで見つけてきたんだよ!!　っつーかそのチーズは何!?　救命艇ってそんなのまで積んでんの!?　いつも食ってるレーションより美味そうじゃん！　優雅な身分だなオイ!!」
　涙目でぎゃあぎゃあ騒ぐ馬鹿二人などお構いなしに、フローレイティアはさっさと話を先に進める。
「さっきも言った事よ。お姫様のオブジェクトの配備が遅れるから、それまでダメージを与えておけって。お前達がさっきタンクを爆破した事で、私達の役割は終わったの。後はお姫様にバトンタッチしておしまいよ。私達はレスキューのヘリを待って、ロープに掴まって引き上げてもらえば大陸まで一直線という訳ね」
「……あのド派手な戦闘の余波で、ヘリが落とされなきゃな」
　へイヴィアがボソッと嫌な事を言う。
　トライコアはお姫様と戦うためにクウェンサー達から遠ざかっているが、そもそもオブジェクトの砲はキロ単位の射程を持つので、全く安心できない。
　そうこうしている内に、陸地のある方角から大型の軍用ヘリがこちらに向かってきた。当然ながらトライコアのレーダーにも捕捉されているはずだが、撃墜しようとするような動きはな

い。おそらくお姫様の操っているオブジェクトとの戦闘に専念するため、いちいち輸送用のヘリに気を配ろうとしていないのだろう。生身の兵隊や普通の戦車、戦闘機などではオブジェクトに傷をつけられない事はすでに証明されている。そんな雑魚を追って機体の向きを変更して、お姫様からキツい主砲を直撃させられるのは間抜けすぎる。

ヘリコプターは立ち泳ぎしているクウェンサー達の真上まで来た。一〇メートルぐらいの高さでホバリングすると、レスキュー隊が使うようなワイヤーを真っ直ぐ垂らしてくる。

するとフローレイティアはこんな事を言った。

「悪いけど階級順よ。私が一番最初にヘリに乗らないと、赤の他人は『命惜しさに軍の規律を乱した部下二人』というレッテルを勝手に貼りかねないしね」

「……俺らが乗る前にワイヤーを引き上げる素振りを見せたら、ヘリに信管つけた『ハンドアックス』を投げつけちまいますからね」

かなり真剣な調子でヘイヴィアは言う。

クウェンサーは遠くで戦っている二機のオブジェクトを眺めていた。左右に小刻みに高速移動しながら相手の照準をかき乱すお姫様と、その周囲を大きく右回りに移動しながら大口径レールガンで攻撃を加えていくトライコア。オブジェクト対オブジェクトの戦いに確実な勝算などない。一進一退の攻防は、〇対〇のままラスト一〇分を切ったワールドカップの試合のような緊張感を孕んでいる。

「ボーッとしてんなクウェンサーッ!!　テメエの番だぜ!!」

頭上から声を投げられて、クウェンサーは我に返った。見上げれば、すでにヘイヴィアとフローレイティアは輸送ヘリの中に収まっている。ヘイヴィアは開いたドアから身を乗り出しながら、

「派遣留学気分で居残り授業でもやってくか!?　いつ流れ弾が飛んでくるか分かんねえし、いつまでもこんなトコに留まっていたくねえんだよ!!」

言われて、クウェンサーは慌てて近くに垂れている太いワイヤーを掴んだ。巨大なモーターがワイヤーを巻き取り、クウェンサーの体もみるみる空中へ運ばれていく。

三〇秒ほどで、完全に引き上げられた。

クウェンサーはワイヤーと一緒に揺れる体を固定するため、ヘリの床の縁の部分に足を乗せる。元々水中作戦を支援するためのヘリなのか、中には潜水服や酸素ボンベ、水中用の圧縮空気で動かすレンチやドリルなどの工具類、アクアスクーターと呼ばれるモーターのついたビート板のような機材などが備え付けられていた。

「よし、回収したよ！　早く行って!!」

フローレイティアがコックピットに向けて大声で指示を出すと、ヘリがグンッと前のめりに傾いだ。今まで空中にピタリと止まっていた機体は、オブジェクト同士の戦いから離れるように移動を始める。

「ひでえな」

ヘイヴィアは眼下に広がる海を眺めて、思わず呻いた。

二機の巨大なオブジェクトが暴れているその周りには、無数の残骸が散らばっていた。今までクウェンサー達が待機する予定だった、海上の整備基地ベースゾーンの成れの果てだ。

「急造っつっても、一、二〇はあっただろ。それが今じゃ、まともに浮かんでる物すらありやしねえ。柱の基部以外は全部海の底かよ」

「不幸中の幸いなのは、トライコアが攻撃してきた直後に、ほとんどの兵隊が海に飛び込んだところかな。おかげで救助ヘリも大軍でやってきた」

クウェンサーが見ている方向には、四～五〇機程度のヘリがあった。おそらく周辺の軍港や基地にあるものを片っ端から集めてきたのだろう。救助専用のヘリだけでなく、輸送用や観測用といったバラバラの機種がそれぞれホバリングしていた。クウェンサーを使って拾われていく。

上に浮かぶ兵士達がワイヤー

良く今まで死ななかったな……と呟くヘイヴィアに、フローレイティアはカンザシを模した細長いヘアピンについた海水を拭いつつ、ため息混じりで会話に加わる。

「所詮、戦争の代名詞はオブジェクトという事よ。仮に原子力空母を一〇隻ぐらい連結して四〇メートル級の砲を配備したって、あの怪物には勝てないの。見てよあの挙動。総合格闘技のチャンピオンだってあんなフットワークは見せないんじゃない」

敵側の主砲の微細な動きから発射前動作を判断しているのか、お姫様のオブジェクトは小刻みな動きで相手のレールガンを避け、返す刀で砲を撃っていく。トライコアの方は完全回避はできないと踏んだ上で、わざと装甲の厚い場所を正面に向けて致命傷を避けている。

それは確かにフローレイティアの言う通り、戦車や戦艦の操縦法というよりも精密な格闘技のようにも見えた。

「チャフやフレアで照準をごまかすんじゃないし、遮蔽物を盾にして飛び道具の射線を遮る訳でもないの。こんなだだっ広い戦場の真ん中で、マッハ一〇近い速度の主砲を真正面から回避したり防御したりするような連中よ。普通の戦車や戦闘機でどう戦えって言うの」

と、その時だった。

クウェンサーは突然、ヘイヴィアを押しのけるように開いたドアから身を乗り出す。

「おい待て。なんかお姫様の様子がおかしいぞ！」

「何だよ。相変わらずどっちが勝つか分からねえ真剣勝負じゃねえか」

「いや。クウェンサーの言う通りよ」

フローレイティアがヘリの中にあった双眼鏡を手に取った。

「さっきからお姫様が攻撃する機会が少なくなっているの。射線上にトライコアを捉えている時はあるはずなのに、見逃しているパターンが少しずつ増えてきているのよね」

「どういう事すか？」

「見ろ、あれだ!!」

クウェンサーが指差して叫んだ直後、トライコアの主砲のレールガンが発射された。マッハ一〇近い速度が生み出す衝撃波が、火薬を使わないはずのレールガンに莫大な発射音を生み出す。

トライコアは、お姫様のオブジェクトの中心を狙おうとはしなかった。

レールガンの砲弾が狙っているのは、お姫様のオブジェクトの主砲の先端だ。

クウェンサーは呻くような声を出した。

「……長期戦になると踏んで、相手の攻撃力を削ぎ落とす作戦に変更したんだ」

「オブジェクトは全体的に核シェルター級の分厚い装甲に覆われているけど、砲台の先端部分だけは違ったはずだ。……確か、オブジェクト対オブジェクトの構図を作れない場合の模範的戦闘パターンは『核兵器ないし同等の高熱源を生み出す兵器を利用し、オブジェクトの砲を歪ませるべし』とかいうはずだった」

もっとも、オブジェクトには大小一〇〇門以上の砲を備えている。普通の軍隊が核兵器を使ったとしても、その内の何割かが『歪む』程度で、決定的な破壊には繋がらない。一門でも生きている砲が残っていれば、それだけで兵隊を薙ぎ払えるはずだ。

ただし、オブジェクト対オブジェクトの場合はどうか。

互いに堅牢な装甲で覆われている超大型兵器同士の場合、それを撃ち貫ける砲も限定されて

くる。たとえ一〇〇門の砲を揃えているオブジェクトであっても、同格のオブジェクトを破壊可能な砲が全て潰されてしまったら？

できるのは主砲クラスに限られるだろう。

では。

もしも、そのオブジェクトを

「くそ、嬲り殺しにされちまう!!」

ヘイヴィアが思わず叫んだ。

クウェンサーはオブジェクトの設計を学ぶ学生で、ヘイヴィアは戦場の情報から敵オブジェクトの特徴や弱点を探る分析官だ。

だからこそ、二人には分かる。

お姫様のオブジェクトもまだ戦闘を続けているが、元々あった七門の主砲コイルガンの内、すでに五門が使い物にならなくなっているようだ。このままでは戦場の情報から敵オブジェクトの特徴や弱点を探る分析官だ。

てしまうのも目に見えている。

クウェンサーは徐々に防戦に追い込まれつつあるお姫様のオブジェクトを見た。それから、自分の手の中に視線を落とす。そこにはトライコアに少しでもダメージを与えるために、軍の上層部が大枚をはたいて支給してきたプラスチック爆弾・『ハンドアックス』がある。

「おい、待てよ」

ヘイヴィアはクウェンサーが爆弾を睨みつけている事に気づき、引きつった笑みを浮かべた。

「テメェが何を考えてるか薄々分かってきた気がする。だが待てよ、そりゃ無理だろ」
「このままじゃお姫様が沈められる」
外の様子を確認するために乗り出していた体を、さらに前へと突き出しながらクウェンサーは言う。
「完全に勝敗が決まる前に、援護してやらないと」
「死ぬって！　っつか、さんざん挑戦したろ!!　あのトライコアは、甲板に上がって爆薬仕掛けて馬鹿デカい石油タンクを誘爆させてもピンピンしてる怪物だぜ！　そんなもん相手に、今さらどこに爆薬仕掛けりゃダメージが入ると思ってんだ!!　そもそもオブジェクト同士の高速戦闘に生身の人間が割り込んでも、そのまますり身にされるのがオチじゃねえか!!」
「でも、ここで動かないとお姫様が死ぬぞ!!」
クウェンサーはヘイヴィアの顔を正面から睨みつけた。
「アラスカの時にも嫌ってほど思い知らされたろ！　オブジェクトは戦争の代名詞だ。あれを失っちまったら残された兵隊がどんな地獄を見るか、もう忘れたのか!?　オブジェクトは強いけど無敵って訳じゃない。でも、それはお姫様に頼り切りにできないってのと同時に、トライコアだって何とかできるかもしれない可能性があるって事だろう!?」
「やめろ、駄目だ！　こんな鈍間なヘリで近づいたら、あっという間に撃ち落とされちまう!!」
「別に、ヘリで向かうなんて言ってないぞ」

「馬鹿よせ、くそっ!!」

ヘイヴィアの制止も聞かず、クウェンサーはヘリの開いたドアから勢い良く身を投げた。一〇メートルの高さは、ほんの数秒だった。コンクリートのように固く感じられる海面へそのまま突っ込み、クウェンサーの体が水の中へと深く深く沈み込む。

「ぷはっ、ちくしょう!!」

海上に顔だけを出し、クウェンサーは立ち泳ぎのまま辺りを見回す。

ヘイヴィアやフローレイティアを乗せたヘリは積極的に援護するつもりはないようだが、かと言ってクウェンサーを見捨てて飛び去るまでの決断もできなかったようだ。お人好しめ、とクウェンサーは微かに笑ってしまった。

クウェンサーだって、別にトライコアに真正面からぶつかろうとは思わない。

そんな風に戦ったって、勝てる訳がない。

どれだけ気高い理由があったって、多くの守るべきものを抱えていたって、オブジェクトという兵器は生身の兵隊を容赦なく屠っていく。

そこには、努力すれば何とかなるとか、必死に戦う者には奇跡が起こるとか、そんな都合の良い可能性など欠片もない。

だが。

クウェンサーはアラスカで思い知らされた事がある。

だったら、正面から戦わなければ良い。
裏から回れば良い。
不可能を可能にするピース。腕力ではなく頭脳。悩むだけ悩んで、考えるだけ考えて、どうやっても勝てない敵をどうにかして倒す方法、手段、手順を見つけ出す。自暴自棄な突撃などしないで、最後の最後まで考えに考え抜く事で――初めて、思わぬ勝利が転がり込んでくるのだ。
クウェンサーは立ち泳ぎのまま、無線機で頭上のヘイヴィアと言葉を交わす。
「さて、と。ここから先が弱点探しだ。普通のオブジェクトが持ってる動力炉を二つも搭載している超大規模オブジェクト……その辺に短所もあると分かりやすいんだけど」
『馬鹿か、そう簡単に見つかるかよ。あれは海上戦闘のためだけに作られた専用のオブジェクトだぜ。総合マルチロールのお姫様と違って、海の上に限って言えば死角なんてない。そういう風に設計されてる怪物なんだよ』
「海戦のために作られた……それにしては……」
とにかくオブジェクト同士が戦っている方へ泳ぎながら、クウェンサーは考える。
（それにしては、どうも動きが単調というか、戦い慣れていないような感じが……）
お姫様のオブジェクトの周囲を大きく弧を描く軌道で右回りに移動しているトライコアを眺めながら、ふとクウェンサーは泳ぐのをやめて無線機に話しかけた。

「待てよ……。おい、トライコアはさっきも右回りに移動していなかったか？」

『あん？』

「そうだ、トライコアは戦闘が始まってから、ずっと右回りしかしていない！　緩急をつけるためにちょこちょこ左方向へ推力を向ける事はあっても、大きく左へカーブを切った事って一度もないんじゃないか!?」

クウェンサーは自分の意見に自分で焦るように、早口で言う。

「一番最初に、海に潜った俺達がシャークアンカーに叩き潰されそうになった時だって、普通なら右回りと左回りの両方使って最短で旋回するものだろ。にも拘らず、トライコアは徹底して右回りしかしていない。海戦に特化した専用のオブジェクトが、こんな機能不足な訳あるか!!　おそらく何かトラブルが起こって左回りに移動できない状態にあるんだ！　そこをさらに突く事ができれば!!」

『トラブル……っつってもよ』

おそらくヘリの中から身を乗り出して双眼鏡を覗いているであろう子でこう言った。

『見たところ、異常があるようには見えねえぞ。フロートやエアクッションにも変化なし。トライコアのバランスもきっちり水平に保たれてる。少なくとも、ここからじゃ確認できねえ』

「……、」

明らかに異常があるのは分かっているのに、ヘイヴィアからでは観察できない状況。

ヘリの上からでは見えない部分。

そう、

「海中……？」

呟いてから、クウェンサーは頭上を見上げて無線機に言った。

「おい、アクアスクーターを投げてくれ。ヘリの中にあったろ。水中活動用のモーターついたビート板みたいなヤツ!!」

『なっ、何だよ。っつーか急いで離れねえとトライコアの右回りコースに重なるぞ!!』

「だったらなおさらだ!!　トライコアの弱点が分かったんだよ!!」

『ッ!!』

ヘリの開いたドアから、スチールデスクの小さな引き出しほどの大きさのプラスチックの塊が落ちてきた。それと同時に、ヘリは急いでその空域から離れていく。高さだけで五〇メートル以上あるトライコアが戦闘の過程でこちらへ急接近してきたからだ。

クウェンサーはぷかぷか浮いている丸っこいプラスチックの塊を掴むと、ボタンを押してヘアスプレーサイズの酸素ボンベを飛び出させた。海水の味がする透明なマスクを口元に装着すると、マシンの起動スイッチを押して内部モーターを回転させる。

アクアスクーター、と言うと聞き覚えがないかもしれないが通り、ようはモーターのついたビート板だ。これを持って潜る事で、両足を動かして泳ぐよりも圧倒的に素早く水中を移動する事ができる。

『ヤベえぞクウェンサーッ！　潜れ!!　トライコアが突っ込んでくる!!』

無線機からそんな言葉が響いた。

クウェンサーが視線を横にやると、一五〇～一八〇メートルクラスの超大型兵器が横滑りしながらこちらへ向かってくるところだった。崖のように高い二〇〇キロぐらいの速度で緩急をつけながら迫ってくる。

トライコアが、クウェンサーを気にしている様子はない。

一〇〇門近くある砲の内、最も小さなものすらこちらには向けてこない。

おそらくお姫様のオブジェクトと戦う事に専念しているのだろう。その途中で生身の兵士をすり潰そうがお構いなしという感じだった。

初めてトライコアと対峙した時は、オブジェクトがフロートて進んでいる事を利用し、海中に逃れる事で何とか回避した。

クウェンサーは、今回も慌てて海水の中へと潜り込んだ。

ただし、今回は逃げるためではない。

トライコアへ確実なダメージを与えるために、だ。

ざぱっ!!　と海水を割りながら、クウェンサーはトライコアの真下に潜り込む。……という
より、正確には真下に潜ったクウェンサーの頭上を、トライコアが通過したのだが。
クウェンサーは高速で動くトライコアに置いて行かれないように、アクアスクーターの推
力を最大にして何とか喰らいつこうとする。
そして。
クウェンサーは、海中に隠れていた巨大な構造物を睨みつけた。
（シャークアンカーッ!!）
トライコアがお姫様を翻弄するため緩急をつけている内、最も減速した瞬間を狙って、ク
ウェンサーはアクアスクーターから両手を離し、自らシャークアンカーに引っ掛かっている機
雷つきのネットに飛びかかった。それでも時速五〇キロほどはある。まさに命懸けの無賃乗
車だった。
（――ッ!?　おおおお

ライコアの傾きに合わせて長さを変える事で重心を調節し、オブジェクトがその動力炉の生み出す莫大なエネルギーに任せて高速で移動しても、ひっくり返らないようにしているのだ。

トライコアがエアクッション船と同じ理屈で本体を浮かばせている理由は単純で、そうした方が速く移動できるからだ。水の抵抗を軽減させる手っ取り早い方法は、船体そのものを浮かばせてしまう事なのだから。

にも拘らず、トライコアはわざわざシャークアンカーという『大きな水の抵抗』となる物を三本も用意している。

これは何故か。

シャークアンカーはそれだけ重要な物であり、下手に取り除けばまともにオブジェクトを操縦する事もできなくなるからだ。

だが、

（その機能は、『ゴールテープ』のネットが絡まった事で一部が封じられている）

普通の機雷などでは大したダメージは与えられないと思って、トライコアはそのまま突っ込んで強引にネットを破ったのだろう。その考えは正しかった。ただし、シャークアンカーの伸縮部の隙間にネットが挟まってしまう事までは予想していなかったらしい。

おかげで、三本あるシャークアンカーの内、一本は動かせない状況にあった。

だからこそ、

（トライコアは左回りに機体を大きく動かすと、バランス制御を失ってひっくり返る羽目になる。そういう間抜けな自滅を防ぐため、トライコアは右回りだけでおよそ姫様と戦わなくてはならなくなってしまったんだ!!）

思えば、一番最初にクウェンサー達のいた『普通のベースゾーン』を、遠距離から慎重に砲撃していったのも、絶対無敵のオブジェクトらしくない感じがした。本来なら敵軍のど真ん中に突っ込み、適当に全方位へ砲弾をばら撒くだけでも事足りる。それをしなかったのは、万に一つでも『左回りしないといけない状況を生み出さないため』だったのかもしれない。

しかし、そうと分かれば話は早い。

（一本封じられただけでこれだけ動きが制限されるんだ。もう一本でもシャークアンカーを潰してしまえば、トライコアはバランスを崩して勝手に自滅する!!）

そのための爆薬は、ありったけ持って来た。

プラスチック爆弾の『ハンドアックス』。

この爆薬だけで堅牢なオブジェクトをどうにかできるとは思えないほど強引に引き千切ったのか、まるで鯉のぼりのように三五〇メートル近い帯が、シャークアンカーから長く長く流れている。

クウェンサーは、電気信管を取り付けた『ハンドアックス』を機雷のすぐ側に取り付けてい

く。

これを利用すれば、トライコアを沈める事もできる。

（よし、これで取り付け完了――うわっ!?）

ぐんっ！　とトライコアが右回りに旋回し、クウェンサーの体が大きく振られた。ネットを摑んでいた手が強引に離され、鉄塔のようなシャークアンカーが生み出す膨大な水流に攪拌されるように、クウェンサーはぐるぐると翻弄されていく。

あっという間にトライコアと距離が開く。

しかしやるべき事はやった。

クウェンサーは両足を動かして水面に顔を出し、顔を覆う透明なマスクを取り外した。

彼の手には、『ハンドアックス』の信管へ起爆信号を送るための無線機が握られている。

「行くぞ!!」

遠くからでも山のような威容を見せつけるトライコアを睨みながら、クウェンサーは親指でボタンを押す。

ボゴッ!!　というくぐもった爆音が炸裂し、トライコアの下面から直径一〇メートル以上の巨大な水泡が海面へ噴き上がった。

それだけでは終わらない。

何も衝撃波は空気の中だけを通るものではない。プラスチック爆弾の爆発によって生み出

された衝撃波は海中を駆け巡り、それを爆発させたクウェンサーの体にも容赦なく襲いかかった。まるで重たいボディブローでも受けたように、クウェンサーの体勢がくの字に折れ曲がる。

がくんっ、と。

巨体のバランスを支えるシャークアンカーに衝撃が走った影響か、お姫様のオブジェクトの周囲を右回りに旋回していたトライコアの動きが、一瞬だが確実に押し留められる。

「ぐっ……げぼっ!?」

『おい、シャークアンカーに「ハンドアックス」を取り付けたのか!?』

「まあね。ついでに絡まっていた大型機雷も誘爆するような場所に仕掛けておいた。これなら……」

『馬鹿野郎、そんな都合の良い話がある訳ねえだろ！　元々、トライコアの分厚い装甲は機雷ネットを引き千切って正面から爆発を受けてもああして動き続けているんだ！　それを今さら「ハンドアックス」で誘爆した所で、あのデカいシャークアンカーが折れるはずあるかっ!!』

トライコアの砲が動いた。

羽虫の小さな歯で噛みつかれた事に怒りを表したのか、一〇〇門以上ある砲の一つを、初めてクウェンサーに向ける。

お姫様のオブジェクトを狙っているような、主砲級のものではない。

が、トライコアに装備されているものなら、大小どれでも並の戦艦を沈める事ができる。生

身の人間の生死など問うまでもない。

『くそっ、トライコアを本気にさせちまった!!　なあクウェンサー、ヘリからありったけのチャフとスモークをばら撒くが、オブジェクトの精密照準装置にどこまで通用するか分からねえから俺を恨むなよ!!　やっぱ手持ちの爆薬でシャークアンカーを折るなんて不可能だったんだ!!』

「いいや、違う」

焦りに駆られるヘイヴィアの台詞に、しかしクウェンサーは口元に不敵な笑みを浮かべて応じた。

彼は無線機に向かってこう言い返したのだ。

「俺が爆破したかったのは、オブジェクトに引っ掛かってるネットの方だ!!」

その時。

トライコア下面のシャークアンカーに引っ掛かっていた巨大なネットは、クウェンサーの仕掛けた『ハンドアックス』の爆風で引き千切られ、一度大きく広がった。

風に打たれる旗のように大きく広がったネットは、シャークアンカーが生み出す水流に誘われるように、再び大きく包囲網を作って巻き付き返した。

今までは、三本あるシャークアンカーの内の一本だけにネットが絡まり、使い物にならない状態だった。

しかしクウェンサーが手を加えた事で、二本のシャークアンカーにネットがまとわりつく事になった。それは特殊警棒のように伸縮するシャークアンカーの隙間に潜り込み、動きを止め、さらにオブジェクトの巨体のバランス制御能力を失わせていく。

そして……。

7

ゴッ!!　という爆音が炸裂した。

クウェンサーを狙うトライコアの砲が発射された音だった。

しかし実際には、砲弾はクウェンサーから離れた場所に着弾した。大量の海水が巻き上げられ、直撃していないはずのクウェンサーの体が水流に巻き込まれて翻弄される。しかし彼は死ななかった。絶対無敵のオブジェクトに照準を合わされておきながら、クウェンサーは生き残った。

その理由は単純。

クウェンサーは様子のおかしくなったトライコアを見据える。

「……元々オブジェクトってのは普通じゃ考えられないほどの重量を持つけど、トライコアはその球体状の本体を三つも搭載してるのも、おそらくそれが理由だろうな。あんな超大型の機体だ。海戦専用ってチだろうし」

ギチギチギチギチ、と不気味な音が戦場に響いていた。

設計図通りに精密に組み上げられ、一分の歪みもないはずのトライコアのボディが、徐々にだが確実に歪み始めている。それは地殻のプレート同士がぶつかって山脈が生み出される光景にも似ていた。ミシミシと音を立てて、A字の形をしたオブジェクトが、巨大な手で対称に折り曲げるように盛り上がってくる。

「だったら、その重量は相当のエネルギーを生む。シャークアンカーによって管理されていた頃ならともかく、そのシャークアンカーが制御不能になってしまえば、『本来ならありえない重量移動』が成されて、結果としてトライコア本体を苦しめる。……そう、合気道が敵の体重すら利用して人間を投げ飛ばすようにな!!」

もがくオブジェクト。

だが遅い。

すでにトライコアの巨体は誰が見ても分かるほどn字に折れ曲がっていた。さらにメキメキと音を立てて自壊していくオブジェクトの末路は、誰でも予測できるものだろう。

ボギンッ!!　という轟音がジブラルタル海峡に響き渡った。

まるでウィンナーのCMのように、限界以上に折れ曲がったトライコアが真っ二つに折れたのだ。自らの重量によって両断されたオブジェクトは、そのまま深い海へと沈んでいく。フロートが砕かれ、エアクッション機関も正常に動かなくなった今、巨体を浮かばせる事ができなくなったのである。

トライコアが完全に沈む直前、その上部からボンッ!!　と音を立てて脱出装置が飛び出した。操縦を司る敵軍のエリートが諦めたのだ。クウェンサーはトライコアに勝利したのである。

クウェンサーは思わず頭上のヘリを見上げて、馬鹿笑いしながら叫ぶ。

「ははっはァ!!　ようやく戻ってきたか負け犬諸君!!　アラスカのウォーターストライダーに続いて二機目だぞオイ!!　一体どんだけ勲章もらえるんだ!　一応派遣留学の学生だけど、ひよっとしたらそこらの中佐ぐらいと肩を並べる事にならないかコレ!?」

『馬鹿待て!!　まだ終わってねえぞ!　早くそこから逃げろ!!』

「はあ？　もうトライコアなら海の底に――」

『だから、オブジェクトの巨体が沈んだ事で津波みてえなデカい円形の波が広がってんだよ!　宇宙ステーションが海面に落下してクレーター状の高波を生むみたいなヤツが!!』

ギョッとしたクウェンサーが改めて視線を上から前へ戻すと、巨大な壁があった。

二〇メートル級の高波だった。

見た目の感覚としては、ほとんどビルが倒れかかってくる光景にも近い。頭上のヘリすらも巻き込まれるのを恐れて、慌てて機体を緊急上昇させていくのが分かる。

（うそ、だろ……ッ!?）

撃破時の余波だけで、生身の兵士を殺害する。

最後の最後で改めてオブジェクトのスケールの大きさに気づかされたクウェンサーへ、水の脅威が直撃する。五感の全てが攪拌され、外界を認識する能力がグチャグチャになっていく。

（ごっ、ぼ……ぐぶあ!!　――ッ――……ッ!!）

死。

定まらない感覚とは別に、体の内側からそんな単語が湧き出てくる。

しかし、クウェンサーはバラバラにはならなかった。

何かが流されていく彼の体を支えてくれたからだ。

「……？」

数十秒経って、ようやく二〇メートル級の高波が通り過ぎていく。

自分が何故生き残ったのか分からないクウェンサーは、怪訝な顔で周囲を見回した。そして状況を理解した。

お姫様のオブジェクト。

その巨体がクウェンサーの流される方向へと回り込み、その大ームを使って、クウェンサーの体を拾っていたのだ。四〇メートル級の主砲の先端で、クウンサーは干された布団のような格好でぶら下がっている訳である。

『やっほー』

お姫様の声が聞こえた。

本来なら敵軍のオブジェクトを吹き飛ばした後に、震える兵隊に使用されるスピーカーを通して、クウェンサーは呆然とその言葉を耳にしていた。

『あこがれのオブジェクトののりごこちはいかが？』

8

そんなこんなで、クウェンサー、ヘイヴィア、フローレイティア残った。現在は陸地にある軍の基地から飛び立った大型輸送機の三人は基地に詰めている時は食べられないような、栄養計算をーガーを手にしていた。和風マニアのフローレイティアだけは、を挟んだバーガーにかぶりついている。

三人は今回も無事に生き中である。

完璧に無視したデカいハンバこういう時も和風な竜田揚げ

フローレイティアは薄い色の小さな唇を動かしながら、
「味のないレーションを何ケ月も食べていると逆に普通の食事に馴染めなくなるんじゃないかとも思ったけど、やっぱり料理は料理ね。こういうものを口にしていると、生命体としてきちんと生きているって感じがするの」
「ちょいと哲学的な事を言ってる最中に申し訳ないんですけどね。タイトスカートであぐらをかくのやめましょうよ。真正面に座っている部下の気持ちも考えてください」
「んん？　何だ、気に入らないの。ほらほらせっかくのサービスよ、黒いストッキングと赤い下着が織り成すセクシーゾーンの誘惑から逃れる事ができるのー？」
「いやただ堂々とパンツがあれば良いという訳ではなくてもっとレアな風情というかチラリ感がなくてはならないんであってもパンツのある風景というのは決して悪くないんだけどいや俺の主張はそんな事ではなくてこれしきの事でぐらついてはいけないはずなんだけどちくしょう赤かよ海水で濡れてるし黒い化学繊維がちょっと破れて白い肌が際立ってるし悔しいけどやっぱ嬉しい!!」
ぐわーと翻弄される健全な青少年ヘイヴィアを見て、わずかに青い色を帯びた銀髪で爆乳のフローレイティアはゲラゲラと勝者の笑みを浮かべていたが、
「くそっ、やっぱりベタベタして気持ち悪いのよね。海水っていうのは、どうしてこう肌に張り付いてくるのよ。着替えるにしても、こんな磯臭いままじゃ意味ないし。軍港でもうちょっ

と待機時間をくれればシャワーを借りられたのに」

「輸送機にシャワールームなんてないんだから、次の基地に着くまでは我慢するしかないですよ」

「それがそうでもないのよクウェンサー」

と言うと、フローレイティアは近くに置いてあった大きなボックスの留め具を外し、中身を取り出した。それは防水性の布でできたバッグの下端に、ジョウロに似た蛇口が取り付けられた謎のアイテムだ。

「野営用の簡易シャワーね。専門のダイバー達も、大体考えている事は同じらしいのよ」

フローレイティアは濡れた体を動かし、防水布のバッグを天井のフックに吊り下げる。さらにお湯が床に広がらないように子供用の簡易プールのような物を取り出す上官を見て、『えっえっ？』とうろたえるヘイヴィアは、

「まさか、ここで……？　みんなでお風呂っ!?　そっ、それは大歓迎ですが上官サマ!!」

「はーいカーテンで仕切るからどけヘイヴィア邪魔よー」

「うぐはあっ!?」

最後のヘイヴィアの言葉が叫び気味だったのは、天井のレールに引っ掛けた分厚いビニールシートを横一線に引くフローレイティアのブーツの先端が、床に座るヘイヴィアの脇腹を蹴飛ばしたからだ。

しゅるしゅるという衣擦れの音がシートの向こうから聞こえていたヘイヴィアの動きがピタリと止まった。

「……くそう。恐るべき生殺し状態じゃねえか」

「んー、うん……。そうだね。……うん、ヘイヴィアの言う通りじゃ……ッ!?」

「え？　何で生返事？　え、えっ？　てめっ、まさかそっちにシートと壁の間に隙間でもあるんするると、分厚いシートの向こうからシャワーの水音と共に、極めて冷静なフローレイティアの声が飛んできた。

「ないよ。全然ない。大丈夫だから大丈夫」

「クウェンサー私が許容できるのは下着までよ。正直に言わないと後で尋問室を使わせてもらうからね」

「うわあやっぱりバレてるーっ!?」

「バレてるって事はやっぱりテメエーっ!?」

場所取り戦争で掴み合いになる馬鹿二人だったが、フローレイティアはシートと壁を塞ぐようにビニールテープを貼り付け防御力アップ。ヘイヴィアが振り返ったその時には全てが何事もなくなっていた。

「おい、おい。なあヘイヴィア、膝を抱えるほどの事かよ？」

「……ほっといてくれよ。
汗臭い男がウジウジしているものほど厄介なものはないので、クウェンサーはそれ以上拾わない事にした。彼も暇ではないのだ。
「それにしても、お姫様も大変だな」
クウェンサーは窓の外へ目をやりながら、ポツリと言う。
「本来なら輸送機でひとっ飛びなのに、デカいオブジェクトを次の戦場に運搬するために陸地を移動しないといけないっていうんだから」
そんな独り言に割り込むように、分厚いシート越しにフローレイティアが会話に加わった。
「最大出力でリニアモーターカー並の速度で大陸や大海原を突っ走る怪物だけどね。何でも、今起きている戦争にはいろんな大義名分があるけど、実際には『最強の戦力である超大型兵器オブジェクトを、世界中の戦場へ効率良く運ぶルートを占有するために』起こされているそうよ。特に海峡は旨味が大きいらしいのよ」
「大航海時代の再来、ですか」
自分が今まで参加していた殺し合いの理由について、改めて考えさせられるクウェンサー。
そこでシャワー空間との間を区切っていた分厚いシートが横へシャーッと引き開けられ、着替えを終えたフローレイティアが顔を出した。
「じゃーん、サッ☆パリ。備え付けの衣服が野暮ったいつなぎしかないのがアレだけどね。

……ところでヘイヴィアは何で膝を抱えているの？」

……美人の上官の下についたが故の深刻な悩みです、と暗い顔でブツブツ言っているヘイヴィアに、キョトンとしたままま首を傾げるフローレイティア。クウェンサーはクウェンサーで、彼女の持っている物に目をやりながら、

「フローレイティアさんこそ、何で湯上がりでノートパソコンにタブレットなんか繋げてるんです？」

「ん、これの事？　南米大陸で行動中のオブジェクトと支援部隊の輸送ルートをリアルタイムで遠隔指示しなくちゃならないのよ。こういう事をやっていると、オブジェクト運搬用の最短ルートを掌握できるかどうかで世界のパワーバランスが変わるって台詞を肌で感じられるのよね」

そこへ、何やら不機嫌なヘイヴィアが口を挟んできた。

「……どうでも良いけど、俺はもう二度と表彰式には参加しませんからね。辞退だ辞退！」

「おいおい、軍の規約を知っているの？」

「ふざけんなっ!!　何なら除隊でも構わねえよ！　判断材料が足りねえなら今からレイプしてやろうかこの爆乳ッ!!　どうせ俺は『貴族』の跡取りとして必要な経験値を積むために軍に所属してるだけなんだ!!　生身の兵力でオブジェクトを二機も潰せばもう充分だろ！　俺は二度とこんな無茶な戦場には行きたくねえっ!!」

「あのね。そもそも今回はほとんどクウェンサーの一人勝ちだったような……？」

「深い意味でもな!!　どうせ俺は何も見れなかったよ!!」

「？　今、私とお前で会話が噛み合っていない気がするんだけど、どこで話題が混線したのへイヴィア？　まあその……良く分からないけど泣かないの」

コンピュータ上の地図から目を離して呆れたように言うフローレイティアだったが、その時、彼女の装備品である無線機から発信音が鳴った。軍用の特殊な用語を織り交ぜて短い通信を交わしたフローレイティアは、しばし面倒臭そうに眉をひそめた後、やがて同意するような言葉で締めくくって通信を切る。

「おい良かったね。表彰式はナシだそうよ」

「マジで!!　やった、家に帰れる！　『安全国』に指定されてる本国まで戻っちまえば後はこっちのモンだ!!」

「誰が帰還命令が出ているなんて言ったの？　そっちも取り消しよ」

「は？　とクウェンサーとヘイヴィアの二人は上官の顔を見る。

フローレイティアは肩をすくめて疑問に答えた。

「オセアニアでなりを潜めていた軍事国で大きな動きがあったそうね。オブジェクトを二機も潰したお前達は、いよいよ本格的に上層部から気に入られたらしいよ。じきじきのご指名よ。このままオセアニアまで飛んで、どうにかしろってね」

ふざけんな下ろせこの機をジャックするぞと兵隊二人が抗議の絶叫を迸らせたが、今さら大型輸送機の進路が変わる事はなかった。どうやらこの輸送機の飛行ルートもまた、どこかの誰かが遠隔地からコンピュータ上の地図にラインを描いて指示しているものらしい。

第二章　蟻とキリギリスの戦争　〉〉オセアニア軍事国攻略戦

1

オセアニア軍事国。

コアラやカンガルーで有名なこの地方は、かつてオーストラリアという国が存続していた時代には、都市部と言えば海沿いの外枠が主流で、内陸の大半は西部劇に出てくる荒野のようにひび割れた土の大地が広がっているだけだった。明確に『砂漠』とまでは行かなくても、水分の少ない硬い地面には下草程度しか生えておらず、農作物を育てる事はもちろん、近代的な都市を築き上げるのも困難な状況だった。

ところが近年、この常識は覆される。

保水性の高い人工土の開発が進み、劣悪な環境でも育つ都市緑地化用の遺伝子改良植物の品種が揃ってきた事もあいまって、オセアニアは大規模な『環境改良計画』を打ち出したのだ。

これによって土壌が改善されれば、今まで不毛の地だった内陸部に大規模な農場を建造する事

ができ、それで財を成した者達が大きな都市と交通網をワンセットで築き上げていく。地中に眠る資源と合わせ、国家の経済は潤い、国際社会の中での地位を押し上げていく。……そんな風に話が上手く転がっていけば、別に誰もこの国にオブジェクトの矛先を向けようとは思わなかっただろう。

実際には、そうはならなかった。

このオセアニアに古くから住んでいる『部族』は、オセアニアがそのままの状態を維持している事にこそ意義を見出していた。つまり、外来種や遺伝子改良した植物に覆われるぐらいなら、干上がったままだとしても本来の自然の大地の方が気高く尊いものだと、彼らの信仰は訴えているのだ。それを即物的な金のために『侵食』されてはたまったものではない……というのが『部族』の考えだったのだが、あくまでも平和的なデモ活動を行う『部族』に対し、緑地化が生み出す利潤に目が眩んだ軍事国の対応は実にシンプルなものだった。

超大型兵器オブジェクトをけしかけたのだ。

「それが今から二年前から始まった『森林保全』ってヤツだ。そんな訳で、オセアニア軍事国の横暴から『部族』を守るために、多国籍軍が介入する事になっちまったんだな」

ヘイヴィアは砂にまみれた整備基地ベースゾーンの敷地内で、そんな事を言った。

すぐ近くにいたクウェンサーは、
「あれ？　二年も前からやってたっけ。じゃあ何で今さら俺達呼び出されたの？」
「知るかよ。なんか新しい動きでもあったんだろ。とどめを刺せそうなヤツがさ」
オセアニアの勢力図は実に分かりやすい。オセアニア軍事国の支配地域は緑地化が進み、多国籍軍（及び軍事国に与しない『部族』）の支配地域は砂漠化が進んでいる。それは同時に、食糧や材木が生み出す利益のために反対勢力への虐殺を許すか許さないかの違いでもある。
ここは多国籍軍の前線にあるベースゾーンで、本来ならいがみ合っている可能性の方が高かったであろう、様々な勢力の個性的なオブジェクトが並んでいた。
当然ながら、土壌は乾いた上である。『部族』からの要請に従い、占くからオセアニアに存在する草木以外は焼き払っているぐらいなのだ。
「それにしても、何だこの暑さは。ついこの間までアラスカの雪原で頑張ってなかったか俺達」
「南半球は季節が逆なんだっつーの間抜け。ただまあ、ミニスカサンタってのはこっちの気候の方が似合うかもしんねえな」
クウェンサーは汗と砂の混じった汚れを顔から拭いながら、辺りを見回した。
「……それにしても、今回は味方のオブジェクトが多いな。これなら小賢しい加減に、生身で突撃しなくても済みそうだ」
「阿呆が。今までそんな期待を何度裏切られたと思ってやがる。味方が多いって事は、間違っ

て踏み潰される可能性も高いってぐらいに考えておいた方が色々と現実的じゃねえのか」

「多国籍軍って、これまでもオセアニアの独裁体制を潰すために、何機ものオブジェクトを基地にぶつけたりしてるんだよな。でも、例の『白旗』についてはどうなんだ。今時の戦争ってオブジェクト対オブジェクトが基本で、生身の人間だけの基地を一方的に襲うのってアリなんだっけ？」

「俺に聞くなよ。特例中の特例なんじゃねえのか。っつか、多国籍軍の構成表見たかよ？　こんな険悪な連中が二年も一緒に行動してる方が普通じゃねえんだ。よっぽどオセアニアの独裁政権は国際社会から嫌われてるとは思えねえけど。向こうも結構グロテスクな事をやってきたんだ。亡命したくても受け入れ先なんかねえだろ」

うんざりした調子で言うヘイヴィアの言葉を聞きながら、クウェンサーは基地の外周を取り囲む合成繊維製のバリケードに寄りかかり、巨大な四角い消しゴムのような物を頬張る。

「うむ。レーションの不味さも相変わらずで大変結構」

「今回はトッピングで砂の味も混じってるけどな」

さっさと帰りたいな、平和ボケしたお偉いさん達は携帯ゲームの通信機能使って銃撃戦やってるってよ、などとブツブツと言い合う二人は、そこで合成繊維製のバリケードが軋む、ミシッという音を聞いた。

クウェンサー達が振り返ると、現地の子供なのか、一〇歳ぐらいの女の子がバリケードに手を当てて、こちらをじーっと見ている。

女の子は言う。

「あれ何？　何なのー？」

無邪気に指差されたのは、敷地の外からバクウェンサー達はちょっと返答に困る。

しかし女の子の方はそんな事を気にしている様子もなく、手にしていた絵本をバリケードにぐいぐいと押し付け、

「これの事でしょ、描いてある。優しい岩のケモノさんの話」

「そ、そうそう、そうだよ。雨が降ったらリスさんやカンガルーさんのために、雨宿りの屋根になってくれたりするんだ」

実際には優しいどころか大量破壊兵器の塊な訳だが、とてもそんな事は言えない感じのクウェンサーである。ナイスだ。

すると今度は、ベースゾーンの敷地内から大空に向けて、直線的な白煙が散発的に射出され

「何あれー？」

ていく。

女の子は大空を指差して、

センサー系の新型天候兵器のミサイルの試射実験だとは口が裂けても言えないので、
「ろ、ロケットとか、スペースシャトルの親戚、だよ？」
「わー、初めて見たー」
瞳をキラッキラさせている女の子から、思わず顔を逸らしそうになる、くすんだ男二人。
そこへ、上官のフローレイティアがやってきた。
「オイ馬鹿ども、バリケードの近くで無駄口叩いているんじゃないの。気を引き締めるのよ」
すると、部下のクウェンサー達よりもバリケードの外にいた女の子の方が素早く反応した。
ビクッと肩を震わせると、そのままピューッと走り去っていく。
クウェンサーとヘイヴィアは、しばし無言でフローレイティアの顔を見た。
「……台無しだな」
「……仕方ねえって。美人っつってもキツい系の上官なんだからよ。多分こんなオーラぶつけられたら総合格闘技の選手でも腰抜かすぜ」
「この私の優しさを知りたいの？　必要ならブーツの踵で教えてあげるけど。とにかく、バリケードの近くでのんびりしてるんじゃないの。ここが戦場だって分かってる？」
「大丈夫ですって。いくら軍事国家でも、こんなオブジェクトだらけの基地をチャチな狙撃銃で狙ったりはしないでしょ」
「違うの。狙っているのはカメラのレンズよ」

フローレイティアも面倒臭そうな調子だったが、この暑い中でも爆乳を包んでいる軍服のボタンを外そうとはしない。

「海外メディアのカメラマン達が軍事国の横暴を暴くとか言って、結構集まっているのよ。とかも怪しいような連中ばっかりだけどね」

「ああ。オブジェクト主体の戦争で生身の傭兵は立場がなくなったから、戦場のガイドに転職しつつあるってヤツですか？」

ヘイヴィアが言うと、そんな感じだ、とフローレイティアは頷き、

「しかしまあ、軍の安全規約で軍事国の支配地域へ立ち入る事は禁じられているから、暇なのよ。時折こっちにカメラを向けては、金になりそうなシャッターチャンスを狙っているの。風刺記事と一緒に間抜けな顔を本国に伝えられたくなければ、建物の外ではシャキッとしておくように」

「……そりゃまた面白くない話で。そんなの『オブジェクトの機密情報保持に関するセキュリティ事項』でも何でも使って、基地にカメラを向ける事を禁じてしまえば良いじゃないですか」

クウェンサーの素人丸出しの提案に、フローレイティアは自分のこめかみを人差し指で突

「何のための多国籍軍なの？　こんな内紛は、その気になれば本国だけでも十分収められるの。上層部は、正義のヒーロー達の大パレードって派手な絵が欲しいのよ。撮影禁止なんかにしたら、本国で『評議会』の選挙活動に必死な候補者さん達からお叱りを受けてしまうの。フライド評議員とかピリピリしているのよ」

「クウェンサーは知らねえのかよ？　プレス向けの対策も色々してるらしい。Ｆ１のレーシングカーみたいに、オブジェクトの装甲に高額で企業や政党のデカールを貼ろうって話も出てるみてえだぜ」

「……そんなもんが基地襲って生身の兵隊を血祭りにしてる様子をお茶の間に流すつもりか、平和ボケどもめ」

いっぱしの兵士みたいな口ぶりのクウェンサーだが、かく言う彼も派遣留学扱いの単なる学生である。批評となると通ぶった表情でものを語りたがるのは、平凡な市民の特徴だ。

ヘイヴィアはうんざりした調子で、隣のクウェンサーに話しかける。

「そういや、海の方じゃ反戦団体のボートも元気に走り回ってるみてえだよな。『多国籍軍は数の暴力でオブジェクトをけしかける侵略行為を今すぐやめろ』とか何とか、デカい横断幕を船体にくっつけてさ」

「軍事国の内側で何が起きているか分かっていないお馬鹿さんか、あるいは知ってて放置しようとしている自己中どもの集まりだし、気にする必要はないんじゃないか？　……そもそも、

あいつら軍事国の魚雷に沈められたら『何でもっと早く軍事国を攻撃しなかったんだ』とかサラッと言いそうだしなぁ」

すると、フローレイティアは少しだけ嫌そうな顔になった。

「『本国』の評議会選挙がそろそろ投票日だからね。さっきも言ったけど、現職のフライド評議員とかが相当ピリピリしているの。変なマイナスイメージを与えないようにってね。……ひょっとすると、平和ボケした反戦団体を救助するための作戦に動員……なんて事も本当にあるかもしれないのよ」

おいおい戦場まで来て子守りかよー、と少年二人は思わず天を仰ぐ。

フローレイティアはやや傾き始めた太陽をチラリと見てから、

「お前達には日没と同時に始まる作戦に参加してもらうよ。今から準備しておくように。夕暮れ頃には正式な作戦前の会議……ブリーフィングに招集されると思うから、それまでに装備一式の準備を整えておいてね」

「お前達って……フローレイティアさんはエアコン効いた部屋で結果待ちっすか」

ヘイヴィアが唇を尖らせると、フローレイティアは肩をすくめた。

「何ならこっちの仕事を手伝ってみる？　軍の安全規約を無視して最前線に飛び込もうとする戦場カメラマン気取りの三流ライター達を押し留めるありがたい任務ね。どいつもこいつも私達軍の人間をツアーガイドみたいに思っているから、ちょっとでも自由を侵害されるとお客様

サービスセンターにかかってくる困った電話みたいに騒いでくるけど」
顔に唾をかけられても殴り返せない平和主義の実像が見える言葉に、クウェンサーとヘイヴィアは嫌そうな顔になった。

2

多国籍軍の整備基地ベースゾーンは、同じ敷地内であってもの特徴もバラバラだった。周りからは『お姫様』などと呼ばれているのは、複数の大型基地構成車両によって作られた、移動型オブジェクトであるベイビー当然ながらいくつもの施設がある訳だが、現状のお姫様は専マグナムが収まっている巨大な整備場にはいない。その近くにトの身体調整を行うための特殊施設にやってきていた。
車両の中とは思えないほど大きな室内には、直径一〇メートル設置されていた。エリートの少女はそのドームの中央にスッと無数の機材と人の目が少女に注目している。エリートの体調管理を専門とする衛生班の人間だ。
アニメや映画の吹き替えに使うような、録音用のコンソールにも似た機材を操りながら、衛生班に混じって、普段はオブジェクトの整備を行っている婆さんが口を開く。

『それじゃ始めるかね。楽器の準備はできとるか？』

声は音ではなく、ドーム内側の透明な壁にオレンジ色の文字として現れた。ドームは防音なのだ。電光掲示板のように流れていく文字を目で追った少女は、目の前の楽譜――透明な薄型モニタに目線を走らせながら、オブジェクト操縦時にも使う特殊なゴーグルを掛けた。

銀色の細長い笛を改めて構えながら、ゴーグルの赤外線入力機能を使って眼球の動きを読み込ませ、文字情報を打ち込んでいく。

『フルートのちょうせいはおわってるよ』

『その調子だと、楽譜の方も問題なさそうじゃな。それならメトロノームを飛ばしてくれ。演奏開始のタイミングはそっちで決めてもらって構わんよ』

婆さんの『言葉』を受けたお姫様は、手に持っていた紙飛行機をそっと飛ばした。緩やかに弧を描くペーパークラフトを眺めながら、彼女は細長い銀色の笛を横に咥える。

息を吹き、白い指を動かす。

すると、細い音に合わせて紙飛行機が、クンッ……と小さく機首を上げた。音波を受けて歪曲する特殊な材質を使っているのだ。

『そうそう、良い感じじゃ。メトロノームが高度、四〇センチ、半径五メートルの円を、二〇秒に一回描くようにな』

『げいじゅつせいのないえんそうって、たいくつよね』

口をフルートに当てながら、目を動かして会話をするお姫様。その間にも楽譜のモニタ上では目まぐるしく音符が追加されていくが、少女の指の動きに危うさはない。それは音楽を愛する演奏家の手つきというよりも、半導体工場でプリント基板に正確にはんだ付けをしていくロボットアームのようだった。

『音に包まれる感覚は心地良くはないかね？』

『ドームがポイントごとにしんどうして、わたしのおとまざることとうら、オーケストラのがくだんに失礼よ』

エリートの体を調節するために用いる手法は一つではない。所属する軍や国家ごとにフォーマットが違うのではなく、一人一人のエリートのために一つ一つ最適の方法を構築するのだ。それは大きなプールの中で最速を目指して泳ぎ続ける事であったり、スーパーコンピュータ相手にチェスの勝負をする事であったり、お姫様のように丁寧な音に包まれる事であったりする訳だ。

『楽器に不満があるのかのう。何なら気分を変えてエレキギターでも使ってみるかね？』

『こきゆうのおとがまざるとちょうせいにえいきょうが出るよ。「いきつぎ」のおとすらがつきよくにくみこんでいるからこそ、「ふえ」っていうがっきをつかっているんでしょ』

とにかく演奏中に他の音が混ざってはいけないのだ。休憩と割り切って楽器を止めてしまえば息継ぎも会話も問題ないのだが、それでは調節が進まない。

よって、口で演奏して目で語る……という面倒極まりない作業をサラリとこなすエリートの少女。そうこうしている内に最後の一音が発せられ、調節が一段落ついた。お姫様がフルートから口を離すと、今までその恩恵を受けていた紙飛行機がゆっくりと床に落ちていく。

メトロノームを拾い上げ、次の楽曲を演奏する準備をするお姫様は、ふとそこで顔を上げた。透明なドーム――大型の基地構成車両の開いた出入り口の辺りに、見知った顔があったからだ。

クウェンサーである。

どうやら相棒のヘイヴィアに肩を押されているらしく、当のクウェンサー本人は何故こんな所に入るのか分からないといった顔をしていた。それを見たお姫様は、無言で頷く。

（……ヘイヴィアはらんぼうものだけど、ああいうきくばりはわるくない）

すると、多くの衛生班達の中で、部外者の婆さんだけが少女の心境の変化に気づいたようだ。

『ちょっと休憩するかね』とだけオレンジ色の文字が表示され、透明なドームの防音扉が自動的にバコンと開く。

クウェンサーが入ってくると、お姫様は眼球を動かしてドームに指示を出す。直後、透明だったドームの壁が、偏光率を変えて白い色になった。『うわっ』とびっくりした顔で辺りをキョロキョロ見回すクウェンサーに、お姫様の方から近づいて話しかける。

「今日は何しに来たの？」

「いや、ヘイヴィアのヤツが『これからお姫様と一緒の作戦に出るだろうから、俺らの事を踏み潰さないように念を入れておいてくれ』とか何とか言ってきてさ」

……あのらんぼうものは自分のことを一体なんだとおもっているんだろう、とお姫様はちょっとだけイラッとする。

そんな事には気づかないクウェンサーは、お姫様の持っている細長い銀色の笛を見て、

「へぇー。それ、フルートってヤツだよな。俺も『安全国』にいた頃は吹奏楽部の連中が使ってるの見た事あるけど、なんかゴテゴテしてて不思議だよね。コツみたいなものが全くイメージできないし、多分、俺が吹いても音なんか出ないんだろうなあ……」

「いがいにかんたんよ。吹いてみる？」

エリートの少女が言うとクウェンサーの顔が予想以上にパッと輝いた。それだけで良い気分を取り戻したお姫様だったのだが、

「確か、フルートって横に構えるんだよな。あれ？　右と左、どっちだっけ？」

わっ、と思った時にはクウェンサーは無邪気にフルートに口をつけていた。

せめて口元の部分だけでも拭いてから手渡そうと思っていたお姫様は、顔を赤くする事すら忘れてポカンとしていたのだが、直後にそれ以上の衝撃が走り抜ける。

ぺぷー、と。

間の抜けた音が小さく鳴った途端、『楽器の音で体を調整している』少女の背筋に、ゾクゾク!!　という得体の知れない感触が洪水のように襲いかかってきたのだ。

「……ッ!?」

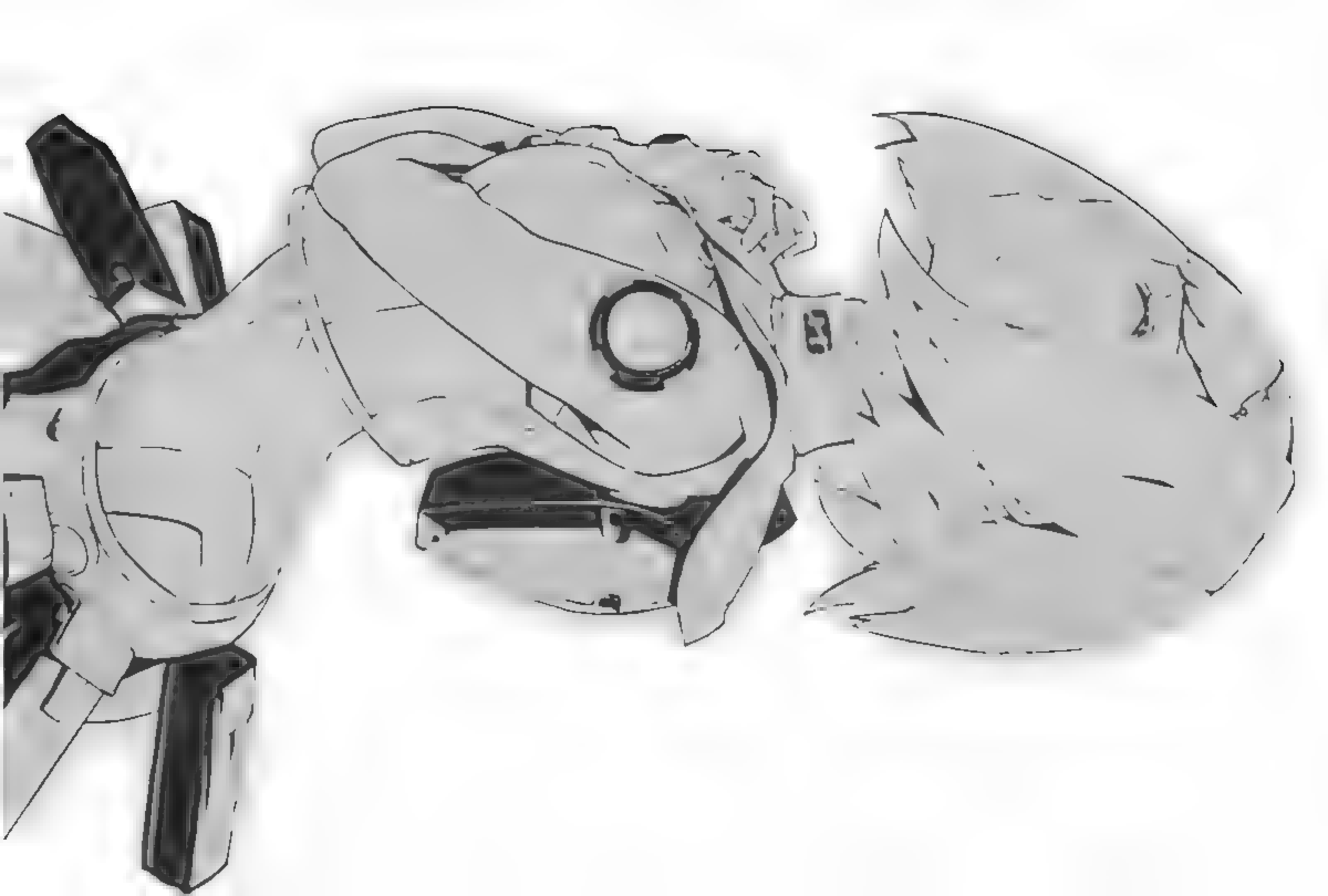
ぱくぱくぱくぱくぱくっ!!　と声もなく口だけ開閉し、小さな背中を丸めるお姫様。特定の暗示状態に限り、少女はフルートを利用した調整機能を開放する訳だが、その暗示状態を一時中断するのをすっかり忘れていたのだ。

瞳に甘くとろけそうな光が浮かびかかり、それを否定しようとする理性の光と拮抗し、体をガチガチにさせる少女だが、クウェンサーの方は相変わらず気づかない。

とにかく基本のドレミファソラシドを正確に出すために、丸っきり見当違いの強さの息を吹き込んでいる。

「あれ？　何かちゃんと出ないな。音がブレるぞ。そもそもどこを押さえるとドになるんだっ？」

ぺぷーぴぷーと雑音みたいな音がフルートから発せられるたびに、がくがくがくっ!!　とお姫様の体が不自然に震えた。白い頬に艶のある薄桃色が浮かび上がり、目尻にうっすらと透明な涙の粒が浮かびそうになる。細い両足は少女の意志とは関係なく、何故か内側に向いた。太股をもぞもぞと擦り合わせる少女は、自分が何をしたくてそうしているのかも理解できていなかった。



「ドーレーミー……ファ？　ファはこれかな。――って、あれ？」

と、そこでようやくクウェンサーが異変に気づいた。

やっと気づいてもらえたという安堵感と、気づかれてしまったという羞恥心とがゴチャゴチャになり、余計に顔を赤くするお姫様。

そんな少女の顔を見ながら、クウェンサーは心配そうな顔でこう言った。

「だっ、大丈夫か。おトイレ我慢してるの？」

直後。

珍しく、エリートのお姫様は小さな拳を握って人間に直接殴りかかった。

3

太陽は地平線に接触しつつある。

オレンジ色に染まる荒れた大地の上で、クウェンサーは傍らにいるヘイヴィアがこんな事を言っているのを聞いた。

「そういや、俺らって結局何やるんだっけ？」

「だから、これからブリーフィングでそれを聞くんだろ」

「どうせ多国籍軍のお歴々は『うちのオブジェクトが一番目立ちますように』って企んでるに

決まってる。誰が敵にトドメを刺すかで紛糾するんじゃねえのか？」

「美味しいお肉の前で奪い合いの殴り合いにならない事を祈るしかないな」

クウェンサーは歩きながら、折り畳んでいた地図を取り出した。オセアニア軍事国のものだ。古びた地図を見たヘイヴィアがうんざりした顔になる。

「……テメェ、何だよそれ。携帯端末なくしたのか？」

「バッテリー切れたり砂が入ったら使い物にならなくなるだろ。デジタルとアナログを上手に使い分ける方法も勉強しとかないと早死にするぞ」

言いながら、クウェンサーは満員電車で新聞を読むように、地図を小さく折り直す。

「なんかお姫様のオブジェクト整備してる連中に聞いた話だと、オセアニア軍事国の秘密基地を襲って、敵軍オブジェクトを吹き飛ばす作戦みたいだな」

横から地図を覗き込むヘイヴィアに、クウェンサーは続けて言う。

「上層部の情報だと、オセアニア軍事国は技術力が低くて、何とかオブジェクトを一機作れるかどうか、って状況らしい。電子シミュレート部門がオセアニアで搬入・開発されている部品から敵軍オブジェクトの完成予想図を作ってるみたいだけど、どうやら向こうの機体は『〇・五世代』って話だってさ。……技術レベルが低すぎて、平均的なオブジェクトが持つ性能を維持できないガラクタオブジェクトって訳だ。特に装甲が粗製で、オブジェクトに頼らなくても核弾頭を使えば破壊できるかもしれないとか分析されてたけど」

「だったら楽勝じゃねえか。こっちは多国籍軍だぞ。オセアニア全域に、合計二〇機以上のオブジェクトが展開されているんだ。戦争の代名詞はオブジェクト。オセアニア側は数で押されておしまいだろ」

「ところが、そんな簡単には進まないらしい」

クウェンサーは小さく折った地図をヘイヴィアに見せる。

所々に、赤い丸が記されていた。

「オセアニア軍事国も本格的に攻め込まれたら瞬く間に虎の子のオブジェクトを壊されるってというのは分かってるらしくて、基地の場所を隠しているんだ。だからこっちの多国籍軍がオブジェクトの頭数を揃えても、すぐに出撃できるって訳じゃない」

「あん？　でも日没と共に作戦始まるだろ。秘密基地の場所は特定できたのか？」

「候補なら」

クウェンサーは地図上で赤い印のある場所を指でつついた。

「どうやらオセアニア側はベースゾーンのハリボテを大陸中に建造して、こっちの分析を攪乱しようとしてるみたいだ。今まで何度かそれっぽい施設を襲ってるんだけど、もぬけの殻なんだと。今じゃ虱潰しにしようって話になってて、今回も当たりか外れか分からない状態なんじゃないかな」

「オブジェクトなんて馬鹿デカいモン、衛星から監視すりゃ分かるだろ」

「逆手に取られてるよ。五〇メートル級の影を見つけて大喜びした上層部が大部隊をけしかけたら、そこにあったのは派手な装飾を施された丸いガスタンクだったってオチ。衛星観察官は窓際に飛ばされて泣き崩れてるってさ」

「……えらく間接的な攻撃だな、また」

ヘイヴィアはうんざりした調子で答えた。

ダミーのガスタンクはオセアニア中に散らばっていて、衛星監視されている事を自覚している軍事国側は『我々はこんなにいっぱいオブジェクトを持っているぞー。わっはっはー』とか何とか信じてもらいたいらしい。

もちろん多国籍軍側もそのダミー全てを鵜呑みにしないが、かといって『どうせガスタンクだろと思って近づいたら本物のオブジェクトだった』という可能性も捨てきれないので、気を抜かずに一つ一つ確認作業をしていくしかない。かくして兵隊の精神は無意味に削り取られ、国民の血税もドバドバ無駄遣いされていく事になるのだ。……上層部がさっさと戦争を終わらせたいとせっついてくる訳である。

「じゃ、今回もハリボテ使った射的ゲームになる可能性が高いんだな」

「……そういう風に気を抜いてるトコにドカンとやられるのが一番怖いんだってば」

クウェンサーは必要のなくなった地図をさらに小さく折り畳んでズボンの尻ポケットに押し込んでいく。

ヘイヴィアは辺りをキョロキョロと見回しながら、
「おい、ところで俺らは『多国籍軍』として動くんだろ。お姫様の他に、どこの国のオブジェクトが参加すんだよ。いやだぜー、アラスカとかジブラルタルとかでぶつかりあったトコと一緒に作戦すんの。私情バリバリで背中撃たれるのはゴメンだぜ」
「あ、それ聞いちゃう？　お前、絶対嫌な顔するよ。俺もさっきお姫様のオブジェクト整備してる連中に聞いたんだけどさ。ウワサだとどうやらあの――」
とクウェンサーが言いかけた時、彼らのすぐ目の前を巨大な建物が横切った。
いや違う、オブジェクトだ。
五〇メートル級の巨体が通るだけで砂嵐のような埃が舞い上がるが、クウェンサーもヘイヴィアも気にしている場合ではなかった。
オブジェクトの装甲に印刷されている国旗のマークを眺めて、ヘイヴィアの心臓が止まりそうになる。
「うぎゃあ!?　嘘だろ、『情報同盟』軍の連中じゃねえか!!」
「……俺もさっき知ったんだけどさー、あの変人達と一緒みたいだよ」
すると、オブジェクトの情報収集デバイスが彼らの声を拾ったのか、五〇メートル級の巨体は身じろぎするように減速し、スピーカー越しにこんな言葉を放ってきた。
『あらあら。「正統王国」ぐんの、かいいぬさんではございませんか。今回はよろしくおねが

いたしますわ、おほほ』

言葉と共に機体を浮かばせるエアクッションの機関をぶしゃーっ!!　と噴射させるオブジェクト。無意味に砂埃が撒き散らされ、クウェンサー達はゲホゴホと咳き込む。

「くそ、これだから大人げねえヤツにオブジェクトの操縦桿握らせたくねえな!!　ホントにこんなのと一緒に作戦すんのかよ!!」

「……でもまあ、『資本企業』軍とか『信心組織』軍の連中に比べればマシだと思って諦めた方が良いかもよ」

この時代の世界地図はステンドグラスみたいなものだ……などと、どこかの皮肉好きなジャーナリストは譬えていた。かつて国境によって細かく分けられていた各国家は、何種類かの『色』に分けられて管理される事になったのだ。

それは情報の真偽こそ善悪を決定すると謳い、世界中をネットワークで覆い尽くそうとする集団だったり、貯金の大小で人権の優先順位が決まる超資本主義企業の集まりだったり、血統と名誉が地位を確立させる古い制度を復活させようとする諸文化の集合体たる王国だったりする訳だ。

食糧とかエネルギーとか人口増加とか色々『公式の理由』はあるようだが、どうやら世界がこんな風になったのは、二一世紀の前半に『国連』という仕組みが破綻して粉々に砕け散ったからしい。割れてしまった欠片は各々が勝手に一人歩きし、

『いくつかの連合』を作り直してしまったようだった。

そういった『世界的勢力』は一つの大陸のカラーはみんな一緒、く、一地方の国々が各々自由に所属勢力を決定していった結果、そうに地理的条件を超越した勢力図を築き上げてしまった。同時に敵国』というのが当たり前のこの状況は、小規模な戦闘を極めて生てしまっている。

……とはいえ、クウェンサーが生まれた時にはすでに『当たり前そこらの年寄りがやれやれと語っているのを見ても首を傾げるだけなのだが。

『もっとも、今回のさくせんではオブジェクトが2きも投入されるので、生身のへいたいなどにでばんがあるとはおもえませんけどね、おほほ』

「じゃあ俺達、今日は寝てて良い？」

4

多国籍軍のお歴々が自分が一番活躍したいんですオーラを激突させた、作戦前の会議であるブリーフィングが終わると、クウェンサーのような現場の兵士達はうんざりした調子で建物を出て行った。

太陽は完全に没し、暗い空が広がっている。
作戦開始時刻だ。
「やだなー。攻撃目標はここから二キロ南西だってさ。二キロだぞ！　上層部は軍用トラックを用意するべきじゃないのか!?」
クウェンサーは思わず大声を上げたが、ヘイヴィアはやれやれと首を横に振った。
「トラックなら配備してあんだろ。『情報同盟』の連中が重たいパワードスーツ着てる部隊運ぶのに必死になってるけどな。ほら、重すぎてトラックのタイヤがパンクしそうになってんだろ」
「……モーターだの繊維性スプリングだので筋力補ってるなら率先して歩けよ。そもそも、オブジェクト対オブジェクトの戦いであんなの何に使うんだ？」
「超高感度のハイスピードカメラを備えた偵察部隊だとさ。敵軍オブジェクトの主砲やレンズの微細な動きを解析して味方のオブジェクトに送信する事で、回避や防御のタイミングを手助けするらしい。まあ俺らよりゃ実戦的だって期待されてんだろ。下手にチクチク干渉するから、真っ先に狙い撃ちされるみてえだけどな」
しかし、イライラしているのは歩兵だけではないらしい。
その気になればリニアモーターカー級の速度で突っ走る事のできる超大型兵器オブジェクトは、歩兵の速度に合わせてちんたらちんたら進んでいる。時折起こる身じろぎのような細かい動きは、まるで待ち合わせに遅れた人間を待っている間に、不機嫌そうに地面をタンタン踏ん

ているような仕草にも見えた。

クウェンサー達の歩兵部隊の左右には、二機のオブジェクトが並んでいた。

つは我らが『正統王国』軍のお姫様。

もう一つは先ほど出会った『情報同盟』軍のエリート様だ。

お姫様と『情報同盟』軍では推進方式が違うのか、お姫様の方からだけ、黒い雷雲が広がっていくような音がゴロゴロと鳴っている。

苛立ちを紛れさせるため、そして即席のチームとはいえこれから一緒に戦うという変な連帯感から、クウェンサーは今まで会話する機会もなかった『情報同盟』側のオブジェクトに声をかける。

まあ、普段近寄る事もできない（というか近づいた時点で粉々にされるであろう）『情報同盟』軍のオブジェクトに、興味がないと言えば嘘になるのだが。

「ねえ。『情報同盟』軍じゃ人型のオブジェクトが開発されてるって話は本当なの？」

『おほほ。そんなのはみにくいウソに決まってますわ。ぎじゅつてきにはかのうですけど、じゆうしんがたかすぎて、かんたんにコケてしまうのです』

「夢がないなー。じゃあアレは？　アンタ達のオブジェクトには電源プラグがついているっていうのもデマなの？」

『そっちは本当。オブジェクトのどうりょくろは、ようこうろと同じでスイッチをつけたりけ

したりするより、「24じかんつねにかどうさせつづける」方がこうりたいきちゅうはよじょうエネルギーをきちの方に回すのです。おほほ」

「しかしまあ、静電気じゃなくて空気圧を利用した純粋なエアクッションの余剰エネルギーだけで周りの兵隊が吹き飛ばされそうだけど」

『兵士とたいれつをくむばあいは、エアクッションをつかって、あるいげんさせた上で、キャタピラでぜんしんするのですわ。おほほ。こクッションのくうきをまきちらすことなく、兵士といっしょにこうどるのです』

「へぇー。今の情報同盟軍はそんな事になってんのかー」

『あこがれのまなざしは、わるくありませんわね。そうそう、きたいョンのせいのうをはっきするために、私のオブジェクトはそうこうのラミド系のそざいもつかっているのですよ？　おほほ』

「というか歩きっ放しで疲れたから、ちょっと乗せてくんない？」

『おほほ。じゅうりょうてきにはもんだいないので、かってにしがみつきなさいな』

それじゃあ失礼して……とエアクッション機関のウレタンのようなろで、ふとヘイヴィアが小声でこんな事を言ってきた。

素材にしがみついたとこ

「(……おい、オイ！　ヤベぇって、クウェンサーッ!!)」
「(……何だよ。『情報同盟』軍の諜報部が情報漏洩を恐れて睨んでるとか？)」
「(……そろそろヤツらがスコープ越しにテメェの顔を覗きそうになってんのも問題だけどよ。それ以上にウチのお姫様が何故だかさっきから不機嫌になってんだよっ!!)」
「(……は？)」
エアクッション機関に使う軍用ウレタン素材の上へ完全によじ登ったクウェンサーは、キョトンとした顔でもう一機のオブジェクトの方へ目をやる。
すると、お姫様のオブジェクトは首を横に振るように巨体を動かしながら、
『別に。なんでもない』
「ぐわぁーっ!?　巨体を揺さぶるから、風圧と反発剤のスプレーでとんでもねぇ砂埃がーっ!?」
地上のヘイヴィアが絶叫し、きちんと隊列を組んでいた兵士達がガハゴホと咳き込む。一応、数メートルの高さまでよじ登っていたクウェンサーだけはかろうじて難を逃れる構図だ。
「クウェンサーっ！　これ以上の被害を出したくなければ今すぐお姫様のオブジェクトの方にしがみつけーっ!!」
「いや、お姫様の方って、推進装置に静電気とレーザー使ってなかったっけ？　あれ、金属板でレーザーをバシバシ捻じ曲げて熱で空気を爆発させるヤツだろ。あまり近づきすぎると危なそうな気がするんだけど」

「ゲホゲホゴホ!!　おっ、俺らのこの砂埃地獄は危なさそうじゃねえのかーっ!?」

すると、『情報同盟』軍のエリートお嬢様はこんな言葉を投げかけてきた。

『何気ないきくばり、さりげないやさしさが、兵士のしんらいのえるのですわ。おほほ。「正統王国」ぐんのどろくさいエリートには分からないでしょうけどね』

『――、別に、って言ってるのに……ひょっとして、ナメてるの?』

「ちょっとーっ!!　クウェンサー、すぐに降りろ!!　お姫様達を変に刺激するんじゃねえ!!　このままじゃ俺らデカいオブジェクト二機に挟まれて全滅しちまうんだよおーっ!!」

「?」

下から叫び声が聞こえてきたが、今さら重たい装備品を抱えて徒歩に戻るつもりはない。とりあえず現場までは楽をさせてもらおうと、クウェンサーはウレタンの上に寝転がった。

5

オセアニアの勢力図は分かりやすい。

軍事国が支配している地域は緑地化が進み、多国籍軍が支配している地域は砂漠化が進んでいる。

今、クウェンサー達がいるのは緑の森の中だ。

最初はひび割れた土の大地だったのだが、ある一定のラインからそこから一気に深い森が広がっていた。保水性の高い人工土が散布されているのだ。本来この大陸には存在しないはずきりと土壌が変わっているのだ。本来この大陸には存在しないはず景色は、確かに一〇〇〇年以上この自然の大地を愛してきた『部族』からすれば、冒瀆的にも見えるかもしれない。

クウェンサーはオブジェクトのウレタン部分から降りながら、辺りを見回した。

「さて、と。ここから先が戦場だな。まあ、しばらくは『主役』に任せて俺達は待機だろうけど」

「……俺は今すぐテメェを退場させてえよ」

と、ボソリと呟いたのはヘイヴィア。オブジェクトに同乗してのーは預かり知らぬ事だが、二機のオブジェクトに挟まれてさんざんヘイヴィアは辺りをあちこち見回しながら、

「それにしても、すげえ森だな。都市緑地化用に遺伝子改良したんなて信じらんねえぞ」

「アホ。いくら生長速度を調節しているからって、あんな幹の太い大木が育つ訳ないだろ。背の低い木はともかく、樹齢一〇〇年クラスのヤツはそこら辺の国から適当にかっぱらってきているんじゃないのか？」

お姫様のオブジェクトは、スピーカーを使ってこんな事を言ってきた。

『じゃあ行ってくる。ながれだまとか、ふくしゃねつとかにやられないように気をつけて』

「お気遣いどうも。つまり役立たずって事だな」

『おほほ。10分でできるのうのトレーニングでもしながら、まってください』

言うなり、二機の巨大オブジェクトは深い森を高速で突き抜けていく。お姫様のオブジェクトが発する、黒い雷雲が広がっていくような音だけが尾を引いていった。

本体だけで五〇メートル以上の巨体が、時速二一〇〇キロ程度で直進していくのだ。

人工的に生育していた巨木の数々が割り箸のようにベキベキとへし折られ、あっという間に地均しされていく。

標的は深い森の中にある、四角いコンクリート製の建物の群れ。

オブジェクトの接近に気づいて警報を鳴らす軍用施設へ、最先端の殺戮兵器が突撃していく。

双眼鏡を取り出したクウェンサーに、ヘイヴィアはうんざりした様子で声をかけた。

「どうせ外れだろ。本当にオセアニアのオブジェクトがあったら、クウェンサーは双眼鏡の倍率を調整しながら答えた。

様達がベキベキ大木を折って行った跡ができてる。お姫

「違う。観察すんのは『情報同盟』軍のオブジェクトだ」

「敵としてぶつかる時は冷静に解析してる暇がないけど、今なら別だろ。これも良い勉強だ。

向こうの技術をゆっくり目で盗んでやる」

「……異国の女のセクシーなドレスに首ったけかよ。おいおい、そんなのに夢中になってると、可愛いお姫様に殺されるぞ」

「だからさっきから、お前は一体何を言ってる訳？」

そうこうしている内に、多国籍軍のオブジェクトとオセアニアの基地に詰めていた普通の隊とが交戦を開始した。

見たところ、〇・五世代の敵軍オブジェクトが出てくる様子はないとなれば、勝敗は火を見るより明らかだ。

ドバッ!!　と。

夜空を引き裂くように爆発的な閃光が、戦場を覆う。

放たれたのは連速ビーム砲か。

強力なビーム砲を、極めて短い間隔で連続的に照射する兵器だ。

『情報同盟』軍のオブジェクトが使っている三五メートル級の主砲は、五門の巨大連速ビーム砲を束ねたガトリング制を採用していた。金属弾を発射しないビーム系兵器でガトリング砲を構成するのに何の意味が……？　と首を傾げる人もいるかもしれないが、強力なビーム系兵器

は、連続照射すると砲身や装置に傷がついてしまうし、大型増幅装置を使って瞬間的に電力を増幅・放出させる方式を採用している事もあって、『短い間隔で点滅させ、砲身や装置に加わる負荷をある程度分散させる事』も重要になるのだ。

五つもの巨砲を束ねる事で、『情報同盟』軍のオブジェクトは永続的な連速ビーム照射を実現しているらしい。

青白いエネルギーの帯が夜空を切り裂き、分厚いコンクリート製の建物を次々と引き裂いていく。火山のように吹き飛ばされた残骸は、その断面がほとんど溶けていた。オセアニア側も戦車やミサイル発射車両などで応戦しようとしているようだが、オブジェクトは気にも留めない。空から降り注ぐ大量の建築廃材を浴びただけで、装甲車両は容赦なく爆発させられる。

お姫様のオブジェクトの方も、黙って見学している訳ではない。

こちらは素早い機動性を活かして逃げる戦車隊の退路を断ち、七本のアーム状主砲を次々と浴びせていく。お姫様の主砲には、顕微鏡のレンズのような機関が取り付けられている。用途に合わせて『砲身の核』を回転し、レーザービームや下位安定式プラズマ砲、コイルガンなどを適時入れ替えて攻撃を行っていく訳である。お姫様が『総合型』と呼ばれる理由だった。

爆発、閃光、轟音が炸裂する戦場からは、悲鳴すら聞こえなかった。

おそらく怒号や絶叫はあるのだろうが、それすらもオブジェクトの破壊音がかき消していく。

圧倒的な光景。

改めて、あんな怪物の前には立ちたくないと思わせる地獄だった。

「すごいなこりゃ。戦争条約を無視してオセアニアで好き勝手にやってきたツケってところなのかな。『白旗』の信号が使えないっていうのは、ちょっと同情するね」

「お姫様達が『巻き込まれないように』って言ってたのが頷けるぜ。なあクウェンサー、あの大鑑巨砲主義のガトリング砲、仕組みは分かるか？　お姫様のオプションにつけたら面白い事になりそうじゃねえか」

「え？　俺が興味持ってたのは足回りだったんだけど」

クウェンサーは一度双眼鏡から目を離し、『情報同盟』軍のオブジェクトの方を指差す。

「何でエアクッションとキャタピラ併用させてるのかって思ったら、あいう事だったんだよ。基本的にはエアクッションで浮かばせつつ、ダッシュ時にはキャタピラで地面を蹴って瞬発力を高めてるんだ。キャタピラって言うより、ほとんどチェーンソーみたいになってるけどね」

「それ着けたらお姫様どうなんの？」

「ビューンってなるよ、ビューンって」

……などとバカ丸出しの会話を続けるクウェンサーとヘイヴィアだったが、そうこうしている内に戦闘が終わってしまったらしい。

敵は全滅、味方は死者どころか負傷者もゼロ。

軍のお偉いさんが見たら手を叩いて喜びそうな、まさに理想的なオブジェクト運用法だった。

一緒に戦ってくれている内は頼もしい事この上ない。

無線機からエリート達の声が聞こえる。

『やっほー、おわったよ』

『おほほ。センサーでひとおりスキャンしていますが、一応伏兵やじらいに気をつけてくださいませ。……これがさりげないきくばりですわよ、「正統王国」ぐんのどろくさいエリートさん』

二機のオブジェクトがボディをゴンゴンぶつけ合っているのを見て、『まだ危険みたいだぞ』『もうちょっと待たないか、なあ？』などという兵士達の声がヒソヒソ囁かれている。

とはいえ、軍事行動なので嫌とは言えない。

クウェンサー達はオブジェクトが大木をへし折っていった『足跡』をなぞるように現場に向かう。これは『あれだけの巨体が通った後ならトラップなどもまとめて壊されているはず』という、彼らなりの知恵であったりもした。……もちろん、それでも完全には安心できない訳だが。

現場に到着すると、お姫様がスピーカーから話しかけてきた。

『ここもダミーだったみたいね。ベースゾーンとしてのきのうはなかったし。オセアニアのオブジェクトは見つからなかったよ』

「念のために俺達で捜索はするけど、流石にあんな巨体が隠れるスペースはなさそうだよなあ」

それにしても、とクウェンサーは辺りを見回す。
焼け野原、どころの話ではなかった。
建物は吹き飛び、アスファルトはめくれ上がり、地盤そのものが大きく割れている場所もあった。巨木も鋼鉄も全て黒く焦げつき、原型を失っている。石油化学コンビナートに火を放っても、こんな惨状にまで発展するのは難しいだろう。
核より手軽で、核より強力で、核よりピンポイントに標的だけを破壊する。
敵兵の死体がどこにあるかも分からなかった。徹底的に吹き飛ばされすぎているのだ。
うへー、と声を上げているのはヘイヴィアだ。
「ここに来る前に軍用食糧の話を切り上げといて良かったぜ。『情報同盟』軍って、レーションに味覚刺激用の粉末がついてくるんだとよ。カレーとかチーズとかお好みの味を選んで自由に食べられるそうだぜ」
「……とりあえず、しばらく焼き肉味が在庫だらけになりそうだな」
クウェンサーは二機並んでいる友軍オブジェクトを見上げた。
「ところで、あっさり戦闘は終わってしまったけど、俺達はこれからどうするんだ？　適当に辺りを捜索して、オブジェクト整備基地のベースゾーンが地下にでも隠されていないかどうか確認したらおしまい？」
「おほほ。ちかくにオブジェクトをはかいできるようなだいきぼへいきがあるとはおもえませ

んが、一応そのへんをけいかいしていてください』
と、答えたのは『情報同盟』軍のエリート様だった。
「？」
『ちょっとはでにやったので、一休みしたいというだけですわよ。おほほ』
「そうか。もしかして、慣性Gのせいで体力削られたの？」
エリートが着ている特殊スーツは一人一人デザインが違うが、概ね空軍パイロットのような耐圧機能が備わっている。別にオブジェクトは戦闘機のように音速以上の速度で動き回る訳ではないが、代わりに膨大な質量がある。鎖についた鉄球を思い浮かべれば分かりやすいが、遠心力は鉄球を速く回すか、鉄球を重たい物にするかで強くなる訳だ。
改めて観察してみると、『情報同盟』軍は元より、お姫様の方のオブジェクトもその場に留まり、ピクリとも動かない。
『おほほ。たたかえといわれれば今すぐ応じますけど、てきのいないところでピリピリしているのもバカらしいので。エリートのスーツは足をしめつけるタイプのものですし』
「そういや、高速戦闘中は脳に血が回らなくなるのを防ぐために、足の血流を止めるようにモードチェンジするんだっけ。……もしかして、痺れてる？」
『いようにしゅうちゅうするこうそくせんとうのちょくごは、体にねつがこもるものですし、スーツから足を出して、れいきゃくスプレーをつかうのがてっとりばやいのです。おほほ』

はー、と適当に感心したクウェンサーだったが、そこで彼の体がピタリと止まる。

（あれ……？　お姫様の足を冷やすっていう事は、ひょっとして、あの分厚い鋼鉄の壁の向こうでは……特殊スーツを脱い……？）

動きを止めたクウェンサーは、しばし哲学者のように深く深く考え込む。

すると、『正統王国』軍のベイビーマグナムの主砲がこちらに向いて、

『……よけいなことは、考えなくていいから』

「うぎゃあーっ!!　ツッコミにしてもそれは強力すぎる!!　それから余計な事を言ったのは『情報同盟』軍のエリートの方のはずだっ!!」

すると、矛先を向けられた例のエリートはスピーカー越しに、

『んふぅ。おほほ、私もハイレグレオタードがたのスーツをぬいで、Gカップのナイスバディを冷まさなければなりませんわっ!!』

「まっ、マジかーっ!!　たった一文の中に人を惹きつけるワードが満載!?　考えてみればウチのお姫様の格好も色々アレだけど、『情報同盟』軍のエリートの方はどうなってんだーっ!?」

『せっけいしのリクエストです。おほほ』

「……ッ!?　亡命する気はさらさらないが、そんな職場があるとは……瞳をキラキラさせながら『情報同盟』軍のダミー情報に踊らされてんじゃねえっ!!　大体、本当にハイレグだったら足を締め付けられねえから耐圧機能をつけられね

えだろうがっ!!」

『あら、バレてしまいましたわね。おほほ。たしかに足もおおわれていますが、代わりにこうりつよくスーツの中にれいきゃくスプレーをふんしゃするために、スーツの各所にスリットが入っていますけどね。……スク水以上の、きわどい所まで』

「おいちょっとなあヘイヴィアこれマジかーっ!?」

「だからクウェンサーっ!!　テメェが異様に『情報同盟』のエリートに喰いつくから、おかげでウチのお姫様がすっかり翻弄されてるだろうがあーっ!!」

ヘイヴィアに頭を殴られて、クウェンサーはようやく我に返った。今はオセアニア軍事国の基地を制圧したところのはずじゃなかったのか？　何故こんな場面で乙女の恥じらいや特殊スーツのセクシーっぷりに頭を支配されなくてはならないのだ。

今は作戦を続行しなくては、とクウェンサーはちょっとやる気を出す。

『そういうことでしたら、まだおしごとがのこっていますのよ。おほほ』

という訳で、『情報同盟』軍のエリート様からありがたいお達しを受けるクウェンサー。

『おほほ。「ぶぞく」の方のリクエストです。オセアニアにこんなあるのはふしぜんだから、やきはらって元の大地にもどしてほしいんでしょ』

「……ああ。例の勢力図の『塗り替え』ね」

クウェンサーはうんざりした調子で答えた。

お姫様の方はやや申し訳なさそうに、

『やろうとおもえば、オブジェクトをつかって一気にやきはらうこともできるけど』

オブジェクトの動力炉を利用した下位安定式プラズマ砲でも使えば、草木どころか地盤の奥まで焼き尽くせるだろう。ただし、オセアニアの『部族』にとって大地は神聖なものなので、必要以上に傷つけてしまうのも困るらしい。

「適度な破壊に適度な手加減、か。アメコミのヒーローみたいだな」

「それ文化擁護団体が抗議してるらしいぜ。もうアメリカって国家はねえんだから、資本主義コミックって呼んで欲しいんだと」

「そういう細かい事でぎゃーぎゃー騒ぐから、ヤツらは風情がないって言われるんだ」

クウェンサーとヘイヴィアがそんな事を言い合っていると、夜の森にボワッと炎が揺らめくような光点がいくつも現れた。『情報同盟』軍のパワードスーツ部隊が、火炎放射器のスイッチを入れて、ノズル先端に火種を点けたのだ。

「……おいおい、こっちは生身だぜ。炎に巻かれて自滅したりしねえだろうな」

「枯葉剤をばら撒くよりは安全じゃないの？」

その時、ザザッとクウェンサーの無線にノイズが走り、友軍から通信が入った。

しばらく聞いていたクウェンサーは、やがてスイッチを切ってヘイヴィアに言う。

「雑用係に仕事だと。周囲に集落がないかどうか一通りチェックしてから火を放つらしい」

「無人機とかねえの？UAVでも飛ばせば良いだろそんなの」
「そういえば、集落の家って燃やしちゃって大丈夫なのか？」
「無線でフローレイテアにでも聞いてみろよ。どうせ多国籍軍はお引越しのアフターサービスも充実させてんだろ」
態だ。本来の暮らしに戻れるなら、さっさと捨てちまいたいって考えてんじゃねえのか？」
ブツブツ言う二人だが、一方で、ここまでやってきて何の仕事もしないで帰るというのも、それはそれで虚しすぎる。そんな訳で『正統王国』と『情報同盟』の多国籍部隊は落とし物探しをするため、地雷やトラップに注意しながらゆっくりと均等に捜索を始める。
「地図を見る限り、該当エリアは二キロ四方だって。……その中で、古びた小屋が一つでもあったらノックして確かめなくちゃならない」
「戦争って意外に地味だよな。派手すぎても困るけどよ」
これで地雷踏んだらアだったが、そこで不意に、森が開けた。
彼らが立っているのは七、八メートル程度の、ちょっとした高さの丘の上だった。大雨でもあったのか、クウェンサー達の前方は崩れていて、崖のようになっていた。そして眼下には民家が二〇軒ぐらいあるだけの、小さな村があったのだ。

それだけなら、避難勧告を出せばおしまいだろう。
だが問題なのは、村の入口を塞ぐように軍用トラックが停まっていた事。
オセアニア軍事国の部隊が村にやってきているのだ。
てっきり戦闘は完全に終わったと思っていたクウェンサーとヘイヴィアはライフルのスコープで集落を観察した。
身を伏せる。クウェンサーは双眼鏡で、ヘイヴィアは、慌ててその場で
「(……くそっ、何で俺達ばっかり派手な戦争の係なんだ!!)」
舌打ちしながら、その音よりも小さな声でクウェンサーは愚痴る。
「(……ついさっきまでその辺でお姫様達が戦ってたのに。あいつら聞こえなかったって言うのか!?)」
「(……知るかよ！　ひょっとすると偵察専門かもしんねえぜ。こっちのオブジェクトの配置を上層部に通達した上で、その帰りに『買い食い』でもしてんじゃねえのか？)」
ヘイヴィアもほとんど投げやりな調子で受け答えた。
「(……どうする？　俺らだけでやんのは面倒だぜ。お姫様達ここに呼ぶか？)」
「(……いや待て。あんな巨体が動いたら絶対気づかれる。村人を人質に取られるかもしれない。あと、オブジェクトのスペック的にはどうなんだ？　お姫様の方は対人殺傷用のレーザーも備えているけど、『情報同盟』軍があの馬鹿デカい連速ビーム式のガトリング砲なんか持ち出したら、村ごとまとめて吹っ飛ぶのがオチだ)」

丘の上から村の様子を見る限り、今すぐ住人を射殺しようとしたりはしていないようだ。よくよく観察してみると、村長らしき老人が軍服を着た男に札束を渡しているのが分かる。

「(……今月の『家賃』でも収めてるのか？　恒例行事みたいな感じだな)」

地図で確認すると、この辺りはオセアニア側と多国籍軍側の領土が隣接する地域らしい。おそらくこの村は、物資をやり取りするトラックの荷運びや検問を手伝う事で生計を立てているのだろう。

ヘイヴィアはライフルのスコープで敵兵の数を大雑把に数えているようだ。

「(……生身の兵士が一、〇〇人ほど。各々、グレネードつきの旧式ライフルで武装してる。軍用トラックが一台しかないところを見ても、それ以上の伏兵が潜んでる様子はねえな。どうする？)」

「(……どうするって言われても、どうにかしなきゃいけないのか？)」

「(……だよなあ。いくら何でも、たった二人で一〇倍の兵隊と戦うのもアホらしいし)」

クウェンサーとヘイヴィアは互いの顔を見て脱力する。

村人全員が広場に集められて、オトコは銃殺オンナは強姦みたいな展開になっていたら、流石に交戦せざるを得ないだろう。だが、どうも様子を見ている限りそこまでひどい事にはならないようだ。一定の金銭・物資を払う『恒例行事』が終わったら、オセアニア軍は村から

立ち去るだろう。それを待ってから村人に避難勧告を出しても何の問題もない。

下手に村の中で銃撃戦を始めてしまった方が、かえって被害者を増やしそうな状況だ。

その上、クウェンサーは爆薬しか持っていない工兵なので、生身の兵士相手に使える武器はヘイヴィアのライフルと拳銃だけ。戦う理由もないのに無理して不利な戦いに身を投じる事もないだろう、というのが二人の意見だった。

……のだが。

「(……おいちょっと待て、なんか様子がおかしくなってるぞ)」

双眼鏡を手にしたクウェンサーが思わず呟いた。

先ほどまでダラダラとしていたオセアニア軍の兵士達が、突然弾かれたように動き出した。

肩に引っ掛けていたライフルを構え直し、緊張した面持ちで索敵活動を開始している。そのピリピリした空気に押されるように、小さな子供達や女性が慌てて家屋に逃げ込んでいくのも見えた。

「(……何だ、何が起きた？)」

「(……見ろよクウェンサー、あれだ！)」

ヘイヴィアが指差した所は、村の中でも少し開けた所だった。そこに、誰かが倒れている。オセアニア軍の制服を着た男だ。体の真ん中辺りからどくどくと血が流れていた。おそらく即死だろう。

「(……熱中症って訳じゃなさそうだぜ)」

「(……っていうか、え? へイヴィア、もしかしてスコープ覗きながら撃っちゃった?)」

「(……ふざけんな馬鹿! このクソッたれのライフルに、隣で伏せてる方向が全然違うだろうほど高性能な消音器がついてるように見えんのか!? そもそも倒れてるのがよ!!)」

言われたクウェンサーは、改めて敵兵が倒れた方向とは逆に目線をやる。

そちらにあるのは……、

「(……多国籍軍の支配地域ライン……? まさか、向こうから? わざわざ領土の外から『小石』を投げたっていうのか)」

その時、クウェンサーの無線機が小さなノイズを発した。友軍からの通信を受信したのかと思ったが、違う。断続的に短いノイズだけが繰り返されている。

「(……○・八秒間隔の雑音……これ、確かレーザーと電磁波で照準補正するスナイパー用のロングサイト狙撃装置じゃなかったっけ!?)」

「(……あん? 軍の正式装備がこんな分かりやすい周波数帯でヒットする訳ねえだろ。どこの馬鹿だ、粗製品振り回して義勇軍を気取ってんのは!!)」

憤るように言ったヘイヴィアだったが、直後に苦虫を噛み潰したような顔になった。

「(……うわー、ヤバい。ヤバいぜこれは……)」

と、ヘイヴィアがライフルを構えたまま呻き声を上げた。
彼のライフルにはスコープを使った光学照準の他に、赤外線や紫外線、索敵マイクなどを利用した多角的な照準補助装置が取り付けられている。片耳にイヤホンを引っ掛けているところを見ると、どうやらマイクを利用して村人やオセアニア軍の会話を盗聴しているようだ。
ライフルの銃口は、軍人と村長らしき老人の方に向いている。
「(……何？　何がヤバいんだよ？)」
「(……いちいち丁寧に説明すんの面倒臭くなるような内容だから、三文芝居で答えてやろう。『テメェこのヤロー、騙しやがったなー』『いえそんな、誤解なんです。滅相もないー』『黙れ馬鹿野郎、テメェら皆殺しにして村に火を放ってやるー』)」
「(……ヤバすぎんだろオイ!!)」
ギョッとするクウェンサーに、ヘイヴィアは意見を求めるように続けて言う。
「(……どうすんの？)」
「(……無線でオブジェクト呼んでる間にバンバン発砲しそうだよね、あいつら)」
「(……じゃあどうすんだよ？)」
「(……いやどうするって言われても、スナイパーはどこに隠れてるか分からないし、このまま村の中でオセアニア軍が派手に暴れたら余計な被害が出るだろうし……)」
特別支給されていた『ハンドアックス』に電気信管を突き刺しながら、

「(……やるしかないだろ、こんなの!!)」

いかにもうんざりした調子で二人は頷くと、同時に動いた。

クウェンサーは信管の刺さったプラスチック爆弾を丘の上から転がり落ちるように投げていく。爆弾が落ちて行ったのは集落から離れた場所だったが、クウェンサーは構わず無線信号を電気信管に送って『ハンドアックス』を爆発させた。ボンドンバガン!!

オセアニア軍の兵士達が慌てて家屋の陰に隠れようとする。

実際には学生が爆弾を放り投げているだけなのだが、事情を知らないオセアニア側は、最低でも迫撃砲による奇襲、最大では近くに戦車が潜んでいる可能性まで考慮しているだろう。連続で起こる爆発に、いらぬ心配を重ねていくのだ。

そこで、ヘイヴィアがライフルを一発一発点射していった。

オセアニア側は『新たな敵』から身を隠すため、見当違いな方向に隠れようとしている。こちらに尻を見せてビクビクしている兵隊を、ヘイヴィアが一人一人撃っていっている訳だ。派手な銃撃戦になればクウェンサー達は数で負けてしまうが、こうして攪乱している間なら一方的である。

「(……っつっても、流石に全員は撃てねえぞ!!)」

「(……一定の数が減れば、変なプライドを捨てて森へ身を隠すんじゃないか？　最後の一人まで頑張るような気高い感じでもないだろ)」

「(……おい学生さんよ、逃げる様子がねえぞ。なんか徹底抗戦の構えになってねえか!?)」

「(……ちくしょう、また撃ってきてる!!　さっきのスナイパーだ!　退路を断つように狙撃を繰り返してるから、オセアニア側も逃げるに逃げられなくなってるんだよ!!)」

戦闘が長引けば、それだけ流れ弾が無関係な村人に当たる可能性も高くなる。クウェンサー達からすれば無理に勝敗にこだわる必要はなく、さっさとオセアニア側が村から離れてくれればそれで構わないのだが……どうやら謎のスナイパーはそれを許さないつもりらしい。

と、隊長クラスの小太りの男が、丘の方へ目をやった。

身振りで指示を出すと、今まで伏せていた兵士達が一斉にライフルを構える。

「(……まずい、気づかれた!!)」

慌てて後ろに下がるクウェンサーとヘイヴィア。直後に、豪雨のように弾丸が向かってきた。

崖のように崩れた丘の下から斜めに撃ってきているため、二人が後ろに下がると丘自体が壁になってくれる。

「(……距離が開いてるせいで、旧式の安物グレネードが届かなかったのは幸運だったよな)」

「(……じきに迂回して別動隊がこっちに回ってくるぞ。なあクウェンサー、先に道を塞ぐようにに爆薬仕掛けられないか?)」

などと言い合っている二人の肩が、それぞれいきなり背後から掴まれた。

ぐいっと体のバランスを後ろに傾けられる。

慌てて振り返ると、そこに控えていたのは『情報同盟』軍の歩兵達だった。

「(……いまいち状況は読めんが、加勢しよう。こちらにはパワードスーツ部隊がついてる。突入すれば五分もかからんよ)」

「(……五分か。だがもう遅え)」

だがもう遅かった。オセアニア軍だけではヘイヴィアは顎で崩れた丘の下を示した。

銃撃戦に巻き込まれた村のあちこちに、倒れている人影があった。

ない。自棄になったオセアニア側の兵士に撃たれた村人もいる。

逃げ惑っている内に散らばった物なのか、子供が使うようなオモチャが地面にたくさん転がっていた。

砂と泥、そして血にまみれたオモチャの中には、一冊の絵本もあった。

あったが、ライフルのスコープを使えば表紙の細部まで観察できる。

優しい岩のケモノさん、というタイトルの本。

多国籍軍の整備基地ベースゾーンのバリケードの外で、現地の女の子が持っていた物と同じ絵本だった。

一度だけ舌打ちすると、ヘイヴィアは手にしていたライフルを思いきり地面に叩きつけた。

そのまま、彼は言う。

「(……分かったよ、これがクソッたれの戦争だ。民間人の女子供だって理由もなく殺されち

まう、な。……みんなやってくれ。オセアニアの畜生どもをぶち殺してくれ（Kill the Oceanian bastards）」

『情報同盟』軍の男は神妙な顔で頷くと、パワードスーツを着た部隊に指示を出す。彼らは銃弾の雨も崩れた丘の高さも気にせず、一斉に飛び降りて行った。

「おい、いたぞ」

と、クウェンサーが双眼鏡から目を離し、指で示した。

彼が見ていたのは、村の方ではなかった。オセアニア軍と多国籍軍の支配地域ラインの方だ。

「例のスナイパーの正体だ。見ろよ、オセアニア軍でも多国籍軍でもない。報道カメラマンだ。カメラをライフルに持ち替えていたんだ。狙撃装置が軍の正式モデルじゃなかったのも、そういう訳だったんだな。個人的な自己満足のために、勝手に戦闘を始めたんだ。……もしかすると、フローレイティアさんの言っていた『傭兵からカメラマンになった』ヤツかもしれない」

「……オーケー」

ヘイヴィアは一度捨てたライフルを、もう一度摑み上げた。

彼は結果待ちをしている『情報同盟』軍の男へこう言った。

「スナイパーについてはこっちでやる。ついでに二、三発は殴っておかなくちゃ気が済まねえ」

クウェンサーとヘイヴィアの二人は、整備基地ベースゾーンに帰って来ていた。
彼ら二人は無言で、通路の壁に背を預けていた。
そんな二人の部下に、上官のフローレイティアは話しかける。
「レポートを見たが、絵本の持ち主はお前達が懸念していた子とは違ったそうだ」
しばらく、クウェンサーとヘイヴィアは黙っていた。
やがて、クウェンサーの方が口を開いた。
「……そんなので、ホッとしろって言うんですか？」
「毎日戦争やってる俺らに綺麗事言えた義理はねえけど……。これなのは、俺らがやってる戦争じゃねえよ」
そうか、とだけフローレイティアは呟き、それから近くにあったドアノブを摑んだ。
ノックもなしに中に入ると、フローレイティアはため息をついた。
面倒な仕事が舞い込んできたと、フローレイティアはため息をついた。
ここは狭い一室だ。
長くてわずかに青い色を帯びた銀髪にカンザシを模した細長いヘアピンをいくつも留め、和

風な煙管から灰色の煙を吸い込むフローレイティア。彼女は脇に抱えていたノートパソコンとタブレット用の感知板をテーブルの上に置いた。普段はペン型の入力装置を使って別の部隊に遠隔指示を出すために使っているパソコンだが、今はモニタが閉じてある。

フローレイティアは自分の正面に目をやる。

小さなテーブルを挟んだ向かいの席には床にボルトで固定された椅子があり、その肘掛に二つの手錠でそれぞれの腕を拘束された男が座らされていた。

報道カメラマンだ。

クウェンサーとヘイヴィアは元傭兵かもしれないと報告してきたが、フローレイティアの感想は否定的だった。超大型兵器オブジェクトに守られずに戦場を行き交う傭兵なら、もっとギラギラした目をしているはずである。……あるいは、正規の軍人よりも。

おそらく、オセアニアの外からやってきた『文化人』気取りのお坊ちゃんだろう。

「……シーワックスさん、ですか。厄介な事をしてくれましたな。ここが軍の尋問室であり、あなたがここに招待されるべき事をしてしまったという自覚はありますか？」

「手錠を外してくれ」

フローレイティアの言葉を遮るように、シーワックスは早口で言った。

「弁護士もいない所で口を開く義理はないが、敢えてサービスで言っておこう。これは明確な人権侵害だ。君に私の自由を奪う権利などない。今すぐ私の拘束を解きたまえ」

「……、」

「何だ、狙撃について怒ってるのか？　君のような役に立たない兵隊が。まさか、軍に所属していないから殺人罪とか言わないだろうな。オセアニアのように『オブジェクトも配備されないような紛争地域』では、安全国からやってきた傭兵が適当に敵兵の数を減らしてのびのびと帰っていく。彼らが罪に問われるのか？」

ニィ、とシーワックスは笑いながら言う。

自分の権利は絶対だと、その肌に傷をつけるものはどこにもないと。

「私は君達が忘れてしまった事を行ったまでだ。……本来、オセアニア軍の外道どもに鉛弾をブチ込むのはそちらの仕事のはずだろう。私はその代わりを務め、なおかつこの現状を報道する事で世論の流れも変えてみせる。ハッキリ言わせてもらうが、オセアニアの兵が倒れた程度でグダグダ言っている時点で、君達は本来の仕事すら果たせていないのだよ。そんな調子でオセアニアの横暴を止められるとでも思っているのか」

顔をしかめるフローレイティアを、シーワックスは嘲るような目で眺めた。

軍人の顔色の変化を、彼は見逃してしまった。

「オブジェクト任せの平和ボケどもめ。君達については本国に帰ったら書かせてもらうぞ。戦う事を忘れた兵隊達は、ちょっぴり血を見ただけで大パニック。冷静な判断能力を失って善良な報道人を不当逮捕した、とな」

フローレイティアは、ゆっくりとした仕草で細長い煙管をテーブルに置いた。

直後、

ゴッパアアアン!!　という轟音が炸裂した。

シーワックスの肩を摑んでいるフローレイティアが、ボルトで固定された椅子ごとカメラマンの体を引っこ抜き、思いきり壁に叩きつけた音だった。

「ごっ、ぶ……げはアアあああああああああああああああああああああッ!?」

あまりの衝撃に椅子の背もたれは粉々に砕け、シーワックスの体が仰け反った。だが、フローレイティアの細い腕は、シーワックスが倒れる事を許さない。そのまま彼の体を壁に押さえつけながら、フローレイティアは顔を近づけていく。

「良い、四人よ」

今まで聞いた事もないほど低く冷たい声で、フローレイティアは言った。

「テメェが敵兵だけを皆殺しにしてくれるなら、私達だって褒めてあげる。だけど、四人もの関係ない村人が、テメェの勝手な行動で死んでしまったの。良い、これは本来なら死ぬ必要のなかった人間よ。その内の一人は、オセアニア軍ではなくテメェの弾丸を浴びて死んでいるの」

「げほっ、おかげで君達も、オセアニアを攻撃する踏ん切りがついただろうが！　小さな悪でも見逃してはいけないんだ!!　私は間違ってなんかいない!!　この事を記事にすれば、世界中の人々が戦争の理不尽さに憤り、戦争反対の輪が広がっていく。君達みたいに税金ばかり使って何もしない軍人なんかに頼る時代は終わるんだよ、馬鹿め!!」

「ああそうかい!!」

フローレイティアはシーワックスの体を壁から離すと、そのまま振り回した。遠心力を利用し、その背中を小さなテーブルの上へ叩きつける。

咳き込むシーワックスに向けて、フローレイティアはさらに言った。

「なら教えてあげる。元々オセアニア軍事国は、あの村では『恒例行事』の現金回収ではなく、イレギュラーな動きをする手はずを整えていたの。テメェが狙撃ライフルを使って余計な真似をしなくても、あの兵隊達は上の命令に従って組織的に村を襲っていたのよ」

「だ、だったら……」

「それはね、連中がテメェみたいなカメラマンの動向を摑んでいたからよ!!　多国籍軍の介入で、オセアニア軍事国は国際社会からナメられてると思っているの。『強い軍事国家』をアピールするために、敢えて『森林保全』を強化して村人を虐殺しようなんて馬鹿げたプランを考えついたのよ!!　自国の国民を『交渉材料』にして、こいつらが死ぬのは我々の命令を無視してお前ら多国籍軍がオブジェクトを送り込んできたからだって言いたいの!!　……何のため

フローレイティアの尋問風景をモニタで観察していたクウェンサーとヘイヴィアは、ほとんど同時に画面から目を離した。記録・分析用のスタッフのいる監視用の小部屋から廊下に出ると、二人きりで話を始める。

「なあクウェンサー。オセアニアの『犯人探し』が始まるまで、あとどれぐらいかかると思うよ？」

「電子シミュレート部門の予測が正しければ、軍事国が使ってるオブジェクトは〇・五世代。技術力が足りなくて、本来オブジェクトが持つべき性能を発揮できないモデルらしい」

クウェンサーは慎重に言葉を選びながら、

「……オブジェクトの動力炉っていうのは、原子炉や溶鉱炉の機構と同じで、スイッチを入れたり切ったりするより、常に炉を動かし続けた方が効率が良いんだ。でも、例の〇・五世代は強度不足の関係で、長期間動力炉を動かし続けると内部融解する恐れがある。だから普段は炉を停止しているはずなんだ。そこから行動可能領域に回転数が上がるまでの時間を逆算すると……」

「……大雑把に考えて、四時間から五時間ってところか」

ヘイヴィアは軍用の腕時計を使って時刻を確認している。
クウェンサーは頷いて、
「フローレイティアさんの話によると、元々『世界的なアピール』のために村で虐殺行為をスクープさせる予定だったんだろ。それに失敗した以上、オセアニア軍は『もっと強烈なイメージを払拭するしかない。となれば、オブジェクトを動かして村を襲うっていうのが一番妥当な線なんじゃないか？」
〇・五世代と侮られたところで、オブジェクトはオブジェクトだ。『正統王国』や『情報同盟』が持つ最先端のオブジェクトを使えば容易く勝てるかもしれないが、何の力もない村人達では抗いようがない。
このままでは『分かりやすい悲劇』の材料として、順次皆殺しにされていくのがオチだ。
「まずいよな。それまでにオブジェクトを見つけて何とかしないと、すごくまずい」
「……でもよ、何とかなるのかよ。衛星観察官だって何ケ月も索敵を続けてるんだろ。それで見つからないんだ。俺ら二人で、たった四時間で、オブジェクト見つけてぶっ壊すなんてできんのか？」
「壊す方法だけなら簡単だろ。今は多国籍軍のオブジェクトが二〇機以上駐留しているんだ。彼らに〇・五世代の居場所を教える事ができれば、後は集中砲火で一掃してくれる」
「つまり？」

「見つける方法を考えよう。衛星以外の視点から、何か新しい事が分かるかもしれない」

そんな訳で、二人は行動を開始しようとしたのだが、横槍が入った。

尋問室から出てきたフローレイティアだ。

「……正直、お前達に賛同したいところだけど、ダメよ。上層部から命令が出ているの」

「？」

「コンクリートの建物を脱ぐオセアニア提供のストリップショーで〇・五世代のオブジェクトが出てくるっていうなら、チャンスよ。ヤツがどこのベースゾーンから出てくるか、衛星で観察したいんだって。それまでに下手な内偵をして勘付かれたら、せっかくの機会を棒に振る羽目になるの。私達も無意味で地道な索敵の日々に逆戻りよ」

「じゃあ、オセアニア軍が小さな村に行う『犯人探し』は放っておけって言うんですか!?　オブジェクトが生身の人間に牙を剝いたらどうなるかは分かっているはずでしょう！」

「どの基地から出てくるかを見極めるだけよ！　具体的な襲撃に移る前に迎撃するの!!　これ以上は一人だって犠牲者を出させやしないっ!!」

「オセアニアの連中だって、それぐらいは分かってんだろ！　衛星からの情報で意気揚々と現場に向かって、見つけたモンがキャタピラつきのガスタンクだったらどうすんだ!?　別の場所にいる本命は容赦なく集落を焼いてから、他のガスタンクに紛れて別の基地へと逃れるだけじゃねえか!!　そしたら、また一からやり直しか。見つかるまで村を襲わせ続ける気か!!　オセ

アニア軍にオブジェクトぶつけてる俺らに偉そうな事を言えた義理じゃねえけどよ、あれは武器を持たない民間人に突っ込ませて良いものなんかじゃねえだろうが!!」

ヘイヴィアは敬語すら捨てて上官に叫んだ。

おそらく、フローレイティアもそういう懸念については理解しているだろう。

その上で、彼女にはクウェンサー達の意見に賛同できない理由がある。

それは、軍の規律だけでも行かせたいの。だが、上層部の命令は今さら覆らないのよ」

「……私だってお前達を悔しそうに、フローレイティアは言った。

その顔を見て、クウェンサーとヘイヴィアも黙り込んだ。

「良い、軍のデータベースに触れようとしないで。ただでさえ、多国籍軍を編成している今はお互いのオブジェクトの情報が漏洩しないか、チェックを厳しくしているの。この状況で軍の方針とは違う目的でデータに触れようとすれば、あっという間に軍法裁判にかけられるから」

「どうすんですか、それじゃ」

ヘイヴィアはなおも食い下がったが、フローレイティアは背を向けた。

「準備をしておくの。衛星観察官からの情報が来たら、一刻も早く現場に到着できるようにね」

それだけ言うと、上官は立ち去っていく。

後に残されたクウェンサーとヘイヴィアは、互いの顔を見合わせた。
「なあクウェンサー、どうするよ？　テメエ、アラスカの一件でIースを漁る権限をもらってただろ。それをどうにか利用して、このデータベースはズボンの尻ポケットに手をやった。
「そんな腕があったら、権限もらう前から勝手にハッキングしてるだろ。無理だよ。この状態だから、とクウェンサーは地図を突きつけてこう言った。
そこから取り出したのは、折り畳まれた地図だ。
驚くヘイヴィアに、クウェンサーは地図を上手に使い分ける事にしよう」
「デジタルとアナログを上手に使い分ける事にしよう」

8

クウェンサーとヘイヴィアの二人は建物の外に出ると、裏手に回った。固く乾いた地面の上に座り込み、改めて地図を広げる。
「……それにしても、この状態オセアニアってのは広いな」
ヘイヴィアが呻くように言う。

クウェンサーは頷いて、
「西ヨーロッパがほとんどすっぽり収まるぐらいの広さらしいからな。伊達に『大陸』の名を冠してはいないだろう」
「で、この中からたった一機のオブジェクトを探し出せって？」
「虱潰しに調べたら何年かかるか分からないけど、大雑把な予想エリアは判明しているらしい」
言いながら、クウェンサーは赤ペンで地図の一角に大きな丸を描いた。
オセアニアの北部だ。
「ノーザンテリトリー、キンバリー高原とタナミ砂漠の間」
「……この辺じゃねえか」
それでも、『資本企業』の一角である日本列島の本州を輪切りにする程度の距離は開いている。ただ単に歩いて探し尽くせる面積ではない。
「二年前に〇・五世代が完成した時、この辺りでパレードを行っていたんだ。その後、大量にばら撒いたキャタピラつきの移動型ガスタンクの陰に隠れてどこかの基地に入ったらしいんだけど、それがどこかが分からない」
「だから多国籍軍はダミーも承知で、全ての基地を虱潰しするようにプランを変えてやがったのか。この辺りにある基地を殲滅すれば、その内本命にぶつかる事を知ってたから」

「正直、放っておいてもいつかはヒットするとは思う。ただし、それまでにいくつの村が襲われるかは分からないけど」

「やっぱり任せてはおけねえか」

「でも、ここからが問題なんだ。ダミー施設だけで一〇〇以上、地上に出てるガスタンクも四〇近くある。どれが本命かは上層部でも判別できていない」

「上層部も掌握していない、完璧に隠蔽された秘密基地がある可能性は？」

「〇%とは断言できないけど、多分難しいと思う。あれだけ巨大な物を収められる建物を衛星から隠すのは容易じゃないよ。地下に隠すにしても、ダクトとか出入り口とか、『それらしい痕跡』は必ず出てくる」

「となると、『上層部が掌握してる建物のどこか』で間違いはなさそう、か」

ヘイヴィアはポツリと言う。

クウェンサーは地図に自分で印をつけた辺りを凝視しながら、

「……何か、本命にしかないサインっていうのはないのかな」

「メンテナンス用の機材が頻繁に搬入されてるとか？　だったら、それっぽい太い道がきちんと構築されてる基地が怪しいのか？」

「ついさっき襲った基地だって、ダミーの道路が繋がっていたじゃないか」

「けどよ、五〇メートル級のオブジェクトが通れるほどのスペースが広がってる場所なら、そ

う多くはないだろ。ほら、さっきの基地だって周りは緑で囲まれていて、オブジェクトが通ったような痕跡はなかったじゃねえか」

「オブジェクトが通れるようなスペースのある基地は、優先的に破壊されてるみたいだね。あらかた破壊し終わってる。だから俺達の所には、『ないとは思うけど……』クラスの標的を攻撃するように命令が下されていたんだ」

「じゃあそれ以外に何があるってんだ。怪しい所を片っ端から壊していくしかねえじゃねえか」

へイヴィアが投げやりな調子で言う。

おそらく、上層部の方もそういう判断をしたのだろう。

だが、

「……逆ならどうだ？」

「は？」

クウェンサーの呟きに、へイヴィアが間抜けな顔になる。

構わずにクウェンサーは続けた。

「例の〇・五世代が確認されたのは、二年前の完成時だけだ。その後はどこかの基地に行方をくらませたまま、一度も日の目を見ていない。……だったら、元々オブジェクトが通れるスペースがあった基地』の周りに、木々を植えてしまう事もできるんじゃないのか？」

「それ、意味があるのか？　障害物で囲っちまったら、オブジェクトが通った跡がべったりつ
いちまう。そんなのマークしてくれと言わんばかりじゃねえか」
「どうせオブジェクトが出てきてしまえば、その基地は衛星からマークされて使い物にならな
くなる。木々をへし折りながら出てきても問題ない訳だ。一度出撃したら無数のガスタンク
に紛れるように、別の基地に入ってしまえばおしまいだ」
現実には、『次の候補地』は続々と撃破されていってるけど……とクウェンサーは呟く。
「……となると、怪しいのは周りに障害物の多い基地か。上層部の連中が『これはないだろ』
って考えちまうような、ショボい施設の方が逆に怪しい、と」
「ここ数年で急速に緑に包まれた地域は、ここと、ここと、ここの三ケ所。上層部じゃ『誰も
いないダミー施設が緑の中に埋もれていった』って評価されてるみたいだな」
「問題は二つ」
ヘイヴィアは赤ペンで印をつけた所を一つずつ睨んでいく。
「一つ目は、ここまで絞っても、まだ基地と基地の距離が結構開いている事。三つ全部を簡単
に調べられる訳じゃねえ。ダミーに引っ掛かったらかなり時間をロスしちまう」
小さなライトで地図を照らしながら、ヘイヴィアは続けた。
「二つ目は、ダミーの施設であっても、おそらく生身の兵隊は詰めてるって事。仮にダミーを
押さえちまったら、本命に連絡が入る。そしたら大量のガスタンクをばら撒いて〇・五世代は

雲隠れだ。後日改めて『犯人探し』をしましょう、って話になっちまう」

「三つ目として、軍やオブジェクトの力を借りる事もできないってところもあるけどね」

「なあ、ホントにダメだと思うか？　いくら俺らが規律に反する行動をしたって、実際に〇・五世代を見つけちまったら、あのフローレイティアでもひとまずお姫様を差し向けるんじゃねえの――」

と、その時だった。

突然、多国籍軍の整備基地ベースゾーンに緊急出撃を告げる警報が発令された。太い音響のサイレンが夜空に響き渡る。まるで野球のナイター中継のように、基地中の照明が一斉に照らされた。

「おいっ、何だ？　俺らはまだ敷地の外に脱走してねえぞ!?」

「違う馬鹿、出撃命令だって！」

上層部の連中は〇・五世代の場所を突き止めたのか!?」

クウェンサーは地図を畳みながら、辺りに目をやる。

建物の中から、大勢の兵隊達がバタバタと飛び出してきた。お姫様がオブジェクトのメンテナンスを行っていたであろうと整備場でオブジェクトのメンテナンスへと走っていくのが分かる。ずっと整備兵が何かの操作をしたのか、巨大なシャッターがガシャガシャと音を立てて開いていく。

クウェンサーは、忙しそうに動く兵士の一人を捕まえた。

事情を尋ねる。

「おいどうなった!?　オセアニアのオブジェクトは見つかったのか!?」

「ああそうだよ。これでやっとマイホームに帰れる！　ラスボスはグレートサンディー砂漠の端っこで待ってるってさ。先に多国籍軍のオブジェクトが全力疾走で現場に急行だ。サスペンションの良いトラックは早い者勝ちだってよ。お前も急いだ方が良いぜ、下手なの選ぶと腰痛になるぞ」

「……グレートサンディー砂漠……？」

走り去る兵士の背中を眺めながら、クウェンサーは呆然と呟いた。

ヘイヴィアも、言わんとしている事を察したらしい。

「おい、俺らが予測した三ケ所とは違う場所じゃねえか」

「おかしいな。そもそも上層部は何を根拠に〇・五世代があるって確信したんだ？」

今度はヘイヴィアが近くを通った軍人を呼び止めていた。制服は内勤のものだ。どうやら、短く会話を交わすと、ヘイヴィアと同じオブジェクトの分析官らしい。

「おい、やっぱ衛星からの情報らしいな。オブジェクトの動力炉が起動すると、エネルギーの余波みたいなものをうっすらとばら撒くんだと。どうやら衛星がそれを掴んだみてえだ」

「オセアニアは今まで多国籍軍の衛星観察官を欺いてきただろ！　そんな便利な識別方法があったら、ガスタンクなんかにごまかされないはずだ!!」

「その苦い経験から、上層部は新型の天候兵器の準備を進めてた。そいつがやっと導入されたらしい。アラスカで使ってたチャフミサイルみてえなもんだな。特殊な粒子を高空にばら撒いて、一時的に馬鹿デカい雲そのものを巨大なセンサーに変えちまうんだと。そのセンサー雲を利用して衛星で地表走査すると、微弱なオブジェクトの反応が掴めるようになるらしい」

試作型だから効果が出るかどうかは不安定だし、風向きや雲を形成する水分の密度などによっても粒子が雲と絡まずに失敗したりするから、今回はほとんどまぐれのラッキーだったみてえだけどな、とヘイヴィアは言う。

しかし、クウェンサーはそこで安堵しなかった。

「それにしたって、〇・五世代の動力炉は止まってるはずじゃないのか!?」

「だから、起動に合わせるために今から少しずつ回転数を上げてるって話じゃねえか。それが衛星でもキャッチできるレベルにまで達したって事なんだろ」

そうなのか？　とクウェンサーは眉をひそめる。

オセアニア全土にダミーの基地を乱造し、キャタピラをつけたガスタンクを使って衛星の目をごまかしてきた軍事国が、こんなに分かりやすい情報をこちらに与えてくるか？　まるで大陸中に展開している二〇機以上の多国籍軍オブジェクトに集中砲火してくださいと言っているようなものではないか。

少し考え、それからクウェンサーは顔を上げた。

そこには焦りがあった。

「いや、ダメだ。試作実験炉がある!!」

「何だよそれ!?」

「動くかどうかも分からない、いつ爆発するかも分からない。そんな動力炉をいきなりオブジェクトに組み込むはずがないだろ!? 本番に移る前段階として、『きちんと動くかどうか確かめるための動力炉』を最初に作ってみるのがセオリーなんだ。おそらく、オセアニア側にも試作実験炉がある。いつをオブジェクト起動に合わせて派手に動かす事で、本命の動力炉が動いている事を隠そうとしているんだ!!」

「深読みじゃねえのか? センサー雲は上層部でも正式配備するか審議中の試作兵器だぜ? スペックシートの存在しねえ兵器の効果を、オセアニア側が摑んで逆手に取ろうなんて考えられる訳ねえって!!」

「そいつが初めて運用する『試作型』ならな。多国籍軍がオセアニアに駐留してから、もう二年になるんだろ? その間に、そういうオモチャを何度かここで試した事があるかもしれない。だとしたら、オセアニア軍が離れた所から『過去に失敗した』データを実地収集して、大まかの効果を推測している可能性だって否定できない。逆手に取られるリスクだって!!」

「おい待て冗談だろ。お姫様達もう行っちまうぞ!!」

もしもクウェンサー達の予測が正しければ、お姫様達が向かう先はダミー。そうして時間を

取っている間に、オセアニアの〇・五世代は近隣の村々に攻撃を加えてしまうかもしれない。

今現在、オセアニア軍は大陸に駐留する多国籍軍と正面から戦っても勝てないと分かった上で、政策に反対する『部族』を人質にした、極めて軍事的な外交を行おうとしている。今すぐ国から多国籍軍を撤退させなければ、さらに多くの『部族』が死ぬと言外に告げる事で。

一歩離れたクウェンサー達からすれば、どう考えたところで『森林保全』と呼ばれる虐殺行為を繰り返しても二〇機以上のオブジェクトが立ち去るはずはないと思うのだが、そんな全く意味のない政策のために、実際に多くの人々の命が脅かされそうになっているのだ。

このままお姫様達を行かせてしまったら、その馬鹿げた計画がそのまま実行されてしまうかもしれない。

「くそっ、ふざけやがって……ッ!!」

クウェンサーとヘイヴィアは慌てて建物の裏手から飛び出した。オブジェクトの進路を妨害する形で立ち塞がろうとしたが、実際にはオブジェクトの方がはるかに速い。新幹線より高速で敷地を突っ切った『正統王国』軍と『情報同盟』軍の二機のオブジェクトは、クウェンサー達の目の前を横切ってベースゾーンの外へと飛び出して行ってしまった。

お姫様のオブジェクトが鳴らす、黒い雷雲が広がっていくような音だけが、クウェンサーの耳に残った。

「くそっ！　無線で呼び戻すか!?」

「わざわざオブジェクトを二機も出したんだぞ。お姫様達にも軍の正式命令が出てんだろ。それもかなり権限のデカい命令が、だ。俺らの私的な交信程度じゃ戻ったら懲罰もんだ!!」

次々と軍用トラックで基地を出ていく兵士達を眺めながら、クウェンサーは必死に考える。

そんな彼を見ながら、ヘイヴィアは言う。

「どうする？　もしかしたら、上層部の言う通りグレートサンディー砂漠で本命のオブジェクトが動力炉を動かしている可能性もない事はねえが……」

「そう、それだ」

ヘイヴィアの言葉に、クウェンサーが反応した。

首を傾げるヘイヴィアに、彼は言う。

「試作実験炉にしたって、オセアニアがオブジェクト完成を発表してから二年間で一度も使って来なかった『ダミーの基地に詰めてる兵隊が皆殺しにされても、今まで隠し通してきた切り札』だ。ダミーの切り札なんだ。それを何で今ここで急に使った？　そこまでして俺達を騙したい理由は何だ？　……何としても、最先端オブジェクトが数多く滞在してるこの地方から、おいたら、あっさりバレてしまうっていうのが分かっていたんだ!!」

「脅威」を取り除きたいからだ！　○・五世代はすぐ近くにいるんだよ!!　このまま放って

クウェンサーの言葉に、ヘイヴィアはギョッとした。

「じゃあ、〇・五世代が隠れている施設ってのは……」
「おそらく、ピックアップした候補地三つの中で、俺達が今ここにいる基地から一番近い場所だ！　でも、これだけじゃ確信が持てない。どうにかして『施設から動力炉の余波が出ている』データで確認しなくちゃ……ッ!!」
二人は思わず建物の方を見た。
軍のデータベースに触れる事ができれば、今すぐにでも真偽を確認できるだろう。だが、オブジェクトの設計図や戦闘方法なども記録されたデータベースは、軍の中でも特にデリケートな場所だ。そちらに用はないと主張したところで、『軍の命令に背いた形でのアクセス』が見つかれば、その時点で裁判を経ずに銃殺されてもおかしくない。
「とにかくじっとしてても仕方がない。必要な情報は基地の中にしかないんだから、動くしかないか。どうにかして、データベースの情報を閲覧する方法を探さないと……」
「なあクウェンサー。お偉いさんの老人の中に、デジタル苦手なヤツとかいねえかな」
「？」
「作戦前にやった会議……ブリーフィングでプリントアウトしたレポートを使ってるとしたら、データベースにアクセスしなくても必要な情報は紙切れに残ってるかもしんねえぜ」
という訳で、クウェンサーとヘイヴィアの二人は会議が行われていたであろう大型施設の方へ向かう。先ほどほとんどの兵士がグレートサンディー砂漠に向かってしまったのか、多少の

兵士は警備として残っていたものの、ほとんどガラガラだ。

しかし、順調に施設の中に入って会議室の前までやってきた二人は、薄く開いたドアの向こうを覗き込んで思わず呻き声をあげそうになった。

「(……何でよりにもよってフローレイティアさんが居残りしているんだっ!?)」

「(……見た目は派手だけど、意外に生真面目だよな。あの爆乳)」

ノートパソコンで何らかの操作をしているらしき爆乳の上官の横顔をもう一度眺め、それからクウェンサーはドアから離れた。仮に資料があったとしても、フローレイティアの前では調べられない。今、不審な行動をすれば適当な名目で軟禁されかねない。

「(……どうにかして、フローレイティアさんと鉢合わせないで、印刷されたレポートを閲覧する方法ってないものかな)」

「(……いっそ適当な騒ぎでも起こして、あの和風マニアをよそにおびき出すってのはどうよ?)」

「(……それやったら、全部終わった後に軍法裁判カクジツだけどね)」

と、そんな風に手をこまねいている二人の耳に、ゴン、という音がクウェンサー達が振り返ると、突然男の声が飛んできた。

「……知ってるぞ」

声はドアの向こうからのものだった。

尋問室に繋がるドアだ。

報道カメラマンのシーワックスが話しかけているのだ。

「（……おいふざけんな。尋問室なのに何で防音じゃねえんだよっ!?　自軍のやりとり全部筒抜けなのかよ!!）」

「（……オブジェクト整備しか考えてないから、捕虜を捕まえる可能性なんて想定していなかったんじゃない？　何か慌てて機材を運び込んでそれっぽく整えてたみたいだし）」

「知ってるぞ!!」

さらにゴン！　とドアが内側から強く叩かれた。

別の部屋にいる上官のフローレイティアに音や声が聞かれないか冷や冷やしているクウェンサーやヘイヴィアなどお構いなしに、シーワックスは切羽詰まった声でこう続けた。

「ここからでもそっちの話が聞こえたんだ。〇・五世代のオブジェクトはどこに隠れているか、上層部の方でも意見が分かれているようだった。候補地が二ヶ所あったみたいなんだが、最終的に反応の大きな方を本命と睨んだらしい。それがグレートサンディー砂漠の方だ」

クウェンサーとヘイヴィアは思わず顔を見合わせた。

「（……どうするクウェンサー？　このまま話を聞いていくか。否定できねえぞ）」

「（……これまでの行動パターンを見る限り、社会的にはアウトだけどオセアニアの利益にな

る行動を起こすとも思えないけど）」

聞くだけ聞いてみよう、とひとまず結論づけたクウェンサーは、施錠されたままのドアに向けて尋ねる。

「もう一ケ所は!?」

「タナミ砂漠とかいう所だ」

シーワックスはよほど誰かに伝えたかったのか、迷わずそう答えた。

「上層部の中でも疑ってるヤツはいたみたいだ。ただ、あまりにも反応が小さすぎるのと、グレートサンディー砂漠の大きな反応が『オブジェクトとして現実的すぎる数値』だったから、こっちは切り捨てられたらしい」

「……やっぱり、睨んだ通りだな」

クウェンサーは呻き声を上げた。

シーワックスが言ったタナミ砂漠には、この基地から一番近い『疑わしい』施設がある。もしも〇・五世代のオブジェクトがこんな所で起動したら、近隣の村はおろか、この基地さえも破壊目標に選ばれかねない。

「ヤベえな。お姫様達がグレートサンディー砂漠に行って、ここまで帰ってくるとなると、結構時間がかかるぜ」

「俺達だけで何とかしなくちゃいけないって事だろ。いつも通りの地獄絵図だよ！」

地図で場所を確認するクウェンサーと、使える車両はないか算段を始めるヘイヴィア。だがそこで、再びシーワックスが彼らの動きを遮るようにドアの向こうから話しかけてきた。

「待ってくれ。私も連れて行ってくれ」

「ああん？　ふざけんなんかねえんだろ。軍事行動に民間人なんか連れて行ける訳ねえだろ。大体テメェの逃亡劇に付き合ってる暇なんかねえんだよ」

「そうじゃない。償いがしたい。これは私が招いた事なんだろう？」

ドアの向こうから聞こえるシーワックスの声には焦りがあったが、最初にこのベースゾーンへ連れてこられた時とは雰囲気が違った。

「巨大なオブジェクト同士が戦っている場面ばかりがクローズアップされて、現地で生きている人間がどんな目に遭っているか分からない。だから誰もが戦争を他人事のように観察できる。私はそういうのが許せなくてここまで来たんだ。でも現実はどうだ。君達はちゃんとプロの考えで一つ一つの作戦を積み木のように重ねていた。私が素人考えでそれを壊したんだ。『部族』の村人に接触するオセアニア軍を排除すれば状況は改善すると思ったのに、その行動のせいで罪もない人々が殺されるという過ちを犯してしまった。そしてこれからさらに、その何倍も何十倍もの人々が殺されていくんだ！　見過ごせるかそんなもの。罪を償う前に、私にはやっておくべき事があるはずだ!!」

クウェンサーとヘイヴィアはわずかに顔を見合わせた。

「……確か、狙撃銃を使えたはずだな」
「ま、まあ。軍隊経験はないがね。週末に射撃場へ向かう程度の腕だよ」
「人を撃てれば十分だ。用意してくる。丸腰のお荷物を連れていくほど、俺達にも余裕はない」
「分かった、ありがとう！　待っているからな!!　必ず私も一緒に戦わせてくれ!!」
シーワックスはドアの向こうで涙を流しているかもしれなかった。
尋問室のドアからゆっくりと離れながら、クウェンサーは小声で言う。
「（……おい、アシを探そう。あいつは戦わせない方が良い）」
「（……やっぱ、そういう事になるか）」
ヘイヴィアもそれに倣って、尋問室のドアに背を向ける。
出口に向かいながら、クウェンサーは言った。
「あんなヤツを連れて行ったら、戦場で華々しく死のうとか考えかねないだろ。ムカつく野郎だっていうのに変わりはないけど、目の前で死なれたら流石に寝覚めが悪すぎる。そもそもマスコミ巻き込んで死なせたなんて事になったら、色々叩かれまくるだろうしな」
「そーかいヒーロー。俺らも死なねえように頑張ろう。寝覚めが悪いからな」
二人は建物の外に出る。

一度どこかへ走って行ったヘイヴィアが軍用のオフロードカーを見つけて、こちらに回してきた。クウェンサーが助手席に乗り込むと、勢い良く発進する。

ベースゾーンの外へ飛び出すオフロードカーの中で、クウェンサーは傍らの相棒に尋ねた。

「……そういえば、お前、免許持ってたっけ？　俺と同い年だよね？」

「『正統王国』の場合、軍用免許は従軍中に採れんの。戦場以外は走っちゃいけねえ半端な免許だがな。それにしても、いい加減に四輪から脱却できねえモンかね。地球上に初めて自動車が生まれた頃から何にも変わってねえじゃねえか」

「最先端技術はみんなオブジェクトに回されているんだよ。それ以外の軍用品を開発してどうすんの。一応細々とやってるみたいだけど、文化の速度はどんどん遅くなってるって話じゃないか。オブジェクト発明から現代の間に、本来なら拳銃から戦車まで、最低でもあと三世代は進んでいないとおかしいぐらいらしいよ。……これぐらいの知識もないのに軍用車のハンドル握ってるって、やっぱり大丈夫なのか？　ねえ？　これ助手席にエアバッグついてるモデルなんだろうな」

「やかましいな。衝撃受けるたびに膨らむような風船のついた軍用車なんてある訳ねえだろ。それに見ろよ、ちゃんと車は前に進んでんだろ。運転できてる証拠じゃねえか」

お上品な教師が見たら悲鳴を上げそうなハンドル捌きで、『貴族』の跡取り息子は乱暴にオフロードカーを進めていく。

「それよりヒーロー、爆薬はちゃんと揃えてきたか？　〇・五世代っつっても、オブジェクトはオブジェクトだ。これまで通りの死闘になるぜ」

「一応『ハンドアックス』と甲に爆弾取り付けた程度で倒せるとは思えないけどな」

「おー、そうだそうだ。お姫様達の方はどうするよ？　試作実験炉だっけ。ダミーの中でも虎の子を出してきたって事は、派手なトラップ仕掛けてんじゃねえか」

「そうだよな。それはまずいあるんだけどさ、電気信管の繋がんの？　こっちにも無線機。おい、この車載無線って連中と起爆コードに合わせておきたいから、受信専用ならともかく送信用の周波数帯までいじりたくないんだよね。簡易メモリに登録する分は全部起爆関連で占めちゃうし」

「待て待て。今、周波数合わせてみる」

片手でハンドルを摑みながら、もう片方の手でタクシーの運転手が使うような有線の小さなマイクを手にするヘイヴィア。彼は多国籍軍の全員に伝わるよう、共通の周波数を利用して話しかける。

「あっあー、ただいまマイクのテスト中。聞っこえってるー？　諸君よ、テメェらが追いかけてるのはおそらくダミーだからガッカリせよ。本物はタナミ砂漠勤勉なる『正統王国』の兵士

ぶふっ!?　という変な音が、無線機のスピーカーから聞こえてきた。
無視して、横からクウェンサーも声を出した。
「多分、グレートサンディー砂漠の施設にあるのは、オブジェクトじゃなくて試作実験炉だ。しかも大規模なトラップが待ち構えている可能性も高い。下手をすると試作実験炉自体、通常の出力を振り切ってわざと特別臨界爆発させて、近づいて来たオブジェクトごと吹き飛ばす算段かもしれない」
大勢が聞いているにも拘らず、しばらく返答はなかった。
皆がそれぞれ情報の信憑性について、真剣に考えているようだった。
やがて、全員を代表するように、情報同盟軍のエリートが話しかけてきた。
『そのはなしに、めいかくなこんきょはあるのかしら。おほほ』
「ない」
クウェンサーはきっぱりと答えた。
「検証してる暇がなかった。それっぽい証言はあったけど、証人そのものの信用性が低すぎる」
『それなら……』
「だから、可能性のある両方を叩こうって言ってるんだ。力の余波の大小はあれ、二ヶ所から動力炉の反応があった事には間違いない。オセアニアのオブジェクトは一機。となると、どち

らかが本物で、どちらかがダミー。……両方潰しておいて損はないだろう？」

「俺らとしちゃ、分かりやす過ぎるグレートサンディー砂漠より、それっぽく隠してあるタナミ砂漠の方が怪しいと思ってる訳だ」

すっかり黙り込んだ友軍に向けて、クウェンサーは話を続ける。

「話を戻すけど、俺達の予測じゃグレートサンディー砂漠には試作実験炉を使った大規模なトラップが仕掛けられてると思ってる。念には念を入れて、生身の兵士は元より、オブジェクトの方も迂闊に近づくな。最低でも一〇キロ以上の距離から主砲を放って施設を吹き飛ばせ。……なあに、対オブジェクト戦の高速機動中ならともかく、止まってじっくり狙えばお姫様なら何とかなるはずだ」

『おほほ。私の方にきたいしてくれないのが、ちょっとしゃくですわよ』

そんな『情報同盟』軍のエリートの言葉に対し、クウェンサーは呆れた声で、

「アンタの主砲は連速ビーム系のガトリング砲だろ。接近戦なら圧倒的だけど、遠距離の標的に細かい狙いなんてつけられないんじゃないのか？　ここはお姫様の出番だろう」

『……。わたし、がんばるよ』

そこで割り込んできたのが、今度こそ『正統王国』軍のお姫様。

そして、その言葉を聞いたヘイヴィアが何やら小声で、

「（……やっと報われたな、お姫様。その一言に込められた、テメエのガッツがここまで伝わ

ってきそうだぜ）」

「？」

ゴニョゴニョ言ってるヘイヴィアに首を傾げるクウェンサーだったが、気にしていられない。

今は伝えておかなければならない事が他にもある。

「俺達はタナミ砂漠をちょっと西に行った辺りが本命だと睨んでると五キロ程度の距離しかない。そっちからも微弱ながら、オブジェクト動力炉の余波みたいな反応があったって話だしな」

「ま、グレートサンディー砂漠でスカッて暇になったら、こっちの仕事を手伝ってくれや」

すると、今度は別人が通信に割り込んできた。

上官のフローレイティアだ。

今まで通信機の送信機能が不調だったのか、彼女の声と一緒にガサゴソと装置を操る音も混じっている。

『オイちょっと待って。じゃあお前達は今、タナミ砂漠の方に向かっているの!?』

「おおっと、軍法裁判ですかい。なら賭けようぜ、グレートサンディー砂漠が本命だったら何でも言う事聞いてもらいますからね。タナミ砂漠が本命だったら俺は美人の柔らかい足の裏でイロイロと踏んで欲しいな!!」

ちなみに俺は美人の柔らかい足の裏でイロイロと踏んで欲しいな!!」

「おまっ、ホントに要求するの!?　そうそうところで俺は美人の腋の下でイロイロされるのに

ちょっと期待したいです!!」

『なっ、なっ……。かっ、勝手に賭けを成立させた上に、まともじゃない所ばかりリクエストするんじゃないの!!』

「「まだまだこんなもんじゃないですよ鼻の穴とか耳の裏とかっ!!」」

『言わなくていいのよどうせ叶える気ないし!!』

フローレイティアの叫び声に、クウェンサーとヘイヴィアはちょっと冷静になった。何でこれからオブジェクトと戦うという時に、馬鹿が二人揃って変に鼻息を荒げているのだ?

「でも実際問題、俺らだけで〇・五世代潰したらヒーローどころの騒ぎじゃねえよな。ひょっとして、また勲章追加とか。おいおい、あっという間にフローレイティアさん追い抜いちゃうんじゃね?」

「駄目だよヘイヴィア。どっちにしたって軍の命令に背いてる事に変わりはない。最悪、今までの功績全部没収されるかもよ」

『違う馬鹿、ふざけるんじゃないの! ここまで頑張ってきたお前達を、そんな簡単に切り捨てさせる訳ないのよ!!』

冗談混じりの二人の台詞に、フローレイティアが本気で怒った。

相手は本物のオブジェクトよ!! 仮にタナミ砂漠が本命だとしたら、お前達……たった二人でオブジェクトと戦う事になるのが分かっているの!? せめてウチ

のオブジェクトが向かうまでは待つのよ!!』

意外に部下想いな上官の言葉に、思わずクウェンサーとヘイヴィアはわずかに黙った。

彼らは少しだけ、真剣にフローレイティアの放った言葉について考えてみた。

しかし、オフロードカーが止まる事はない。

クウェンサーとヘイヴィアの二人は、改めて無線機に言葉を返す。

「いやだって、ここは行くべきでしょう。のんびり待ってたら〇・五世代が動き出すだろうし」

「オセアニアなんぞにまんまと騙されて村人虐殺されましたーなんてオチになったら、多国籍軍のメンツがボロボロになっちまうしな。テメェも左遷されんじゃねえのか」

フローレイティアが何かを叫ぼうとしたが、ヘイヴィアは無線機のスイッチを切った。

しばし無言だったが、やがてヘイヴィアの方が口を開いた。

「腋の下でイロイロねえ」

「足の裏よりはまともだと思うよ」

「(……そういや、お姫様はどうなんだろな。腋の下は許容範囲内?)」

「?」

オブジェクト壊しの最強コンビは、無駄口を叩きながらさらにオフロードカーを進ませる。

9

タナミ砂漠。

そういう名前で記されているのは、多国籍軍側の地図の中だけの話だ。

クウェンサーとヘイヴィアの目の前に広がっているのは、アマゾンのように巨大な熱帯雨林だ。自然の規模の割に生き物が少ないのは、人工的な植林活動で短期間の内に植物を増やしていったからだろう。生き物が定着するには、まだまだ時間がかかる。

「……ここから先は、歩いた方が良いな」

森の入口でオフロードカーのエンジンを止めるヘイヴィア。

彼はオフロードカーの後部に載せてあったライフルや携行型対戦車ミサイルなどを抱えながら、

「エンジン音を聞かれて敵兵を呼び寄せるのもアレだしな。ダミーの基地にも兵士が詰めてたんだから、本命にだって兵士がいてもおかしくねえし」

「それに帰りのアシをなくしたら俺達、徒歩で基地まで戻る事になるぞ」

「ははっ、そりゃまずいな。……いや、冗談抜きにホントにまずいぞ。入念に隠しておこうぜ」

などと言い合いながら、倒木の枝などを被せてオフロードカーに迷彩を施す二人。

一通り隠し終えると、一歩離れて観察するクウェンサーはこう言った。

「……これ、帰りに俺達見つけられるかな？」

「目印つけたら今度は敵兵に発見されないかなって気になんだろ。もう行こうぜ。これ以上はどっちに転んでも不安が残るだけだ」

そんな訳で、深い森へと歩を進めていくクウェンサーとヘイヴィア。

この時代にはもはや極めて珍しい事だが、ろくにオブジェクトを運用していない『古い戦場』では、相変わらず人と人が戦っている。そのため、人間用の地雷やトラップが仕掛けられている可能性も高い。クウェンサー達は今まで以上に慎重に森を歩いて行った。

「そういや、オセアニアの裸の王様も、オブジェクトと一緒に雲隠れしてるって話だったよな」

「操縦士エリートとしてな。じゃなけりゃ、とっくにオセアニアは解放されてるだろ。何回首都にオブジェクトを突っ込ませたと思ってんだ」

「それは……村を襲撃どころの話ではないのでは？」

「どうせ首都の便利な暮らしを独占してんのは、オセアニア軍で甘い汁をすすってる連中ばかりだ。軍事政権の構築と共に、普通の市民は住居を奪われて荒野に追いやられてる。多少吹っ飛んだって問題ねえよ」

「しっ……。おい見ろよ、あれがオブジェクト整備用のベースゾーンじゃないのか？」

クウェンサーとヘイヴィアの二人は立ち止まり、身を低くする。地面から生える背の高い草に身を隠すようにしながら、問題の施設に目をやった。

四角く、巨大なコンクリートの建物だった。

五〇メートル級の構造物をそのままスッポリ覆えそうなほどのものだ。その周りには関連施設なのか、生身の兵隊が駐留するためなのか、小さな建物がポツポツとある。

クウェンサーは軍用の腕時計に目をやった。

「しめた。動力炉が温まるまで、まだ二時間もあるぞ。〇・五世代は動けないはずだ。周りにどれだけ兵隊が控えているか知らないけど、オブジェクトが動く前なら結構あっさり行けるかもな」

「……おい。でも、なーんか様子がおかしくねえか？」

ヘイヴィアの言葉に改めて全神経を集中させると、何やら小さな震動がクウェンサーの足元に伝わってきた。それは少しずつ大きくなり、やがてカタカタガサガサと周囲の草木を明確に揺らしていく。

「これ絶対ヤバいだろ!?　少なくとも確実に動力炉が動いている雰囲気だぞ」

「じゃ、じゃあ賭けようぜ。俺は期待を込めて……技術力の低い動力炉を久しぶりに動かそうとしたら、なんかまずい方向に暴走しちゃったとか」

「……その場合、爆発で俺達死にそうだけどな。俺はどうしてもなんか特殊な秘密兵器を使って、オブジェクト起動までのカウントダウンを短縮させたとか」

と、クウェンサーが嫌な予感極まりないコメントを出した直後だった。

ガッゴォォォォン、と鈍い音が聞こえた。

巨大な整備場の前面には大規模なシャッターが壁のように備えられていた。それが上方に開いていっているのだ。

同時に、白い蒸気のような物が溢れ出した。

スモークにシルエットを隠すように、巨大な構造物が整備場の奥からゆっくりと這い出て来る。

「……暴走したってのは、間違いなさそうだな」

五〇〇メートル近く離れたここからでも熱波を感じるような状況に、思わずクウェンサーが呻いた。

〇・五世代は球体状の本体と、複数の大型構造物で形成されていた。足回りはX字の推進装置が取り付けられ、球体後部には、ビルのように巨大な塊が翼のようにも備え付けられていた。

もちろん空を飛ぶためのものではなく、多分技術レベルが低くてぎてしまったエネルギーを放出するためのものだろう。

主砲は球体の左手側に一門だけ。

まるで鉄橋のように、複数のワイヤーで吊るされて補強されていた。おそらくなくても問題ないだろうが、数十メートル級の長さの砲を長期間水平にしておくと、自重で砲身を傷めてしまうリスクがあるのだろう。普通のオブジェクトなら考える必要もない、まさに〇・五世代ならではのチープな対応策だった。

主砲を固定して安定性を増す代わりに、ほぼ旋回機能はなくなっていた。あれでは細かい微調整はオブジェクトそのものを動かして行うしかなさそうだ。

洗練されていないが故の無骨な構造は、近代的兵器のスマートさを失わせる代わりに、原始的で野蛮な武具をイメージさせた。楽には死ねない。そんな悪寒をこちらに叩きつけてくる威容だった。

クウェンサーは正体不明の蒸気を纏って現れた〇・五世代のオブジェクトを、遠距離から睨みつける。

「おそらく電気的なブースターを使って、炉の温度を強引に上げようとしたんだ。『情報同盟』軍のオブジェクトには電源プラグがついてるって話があったろ。あれの逆。ガソリンエンジンのイグニッションと似たようなものかな？　外部から大量の電気を流し込んで、オブジェクト内部のレーザー発振装置でも動かしてるんだろ。そして、そいつを使って動力炉に無理矢理干渉しようとして……失敗した。整備場の中で小規模の爆発が起こったんだ」

あるいは、『情報同盟』軍のように高レベルの技術力があれば、実現可能な事だったのかも

しれない。しかし、そもそもオセアニアのオブジェクトは『長期間動力炉を動かしているだけで内部融解の恐れがある』程度のものなのだ。そんな状態で、さらに動力炉に無理矢理手を加えようという考えは無謀すぎる。

「……あの分じゃ、整備場の中で働いてたメンテナンス要員は全滅だな。いや、周りに兵士らしい影がないのもそういう事か？　メンバー集めて華々しく出陣式でもやろうとして、部下を全員吹き飛ばしちまったんだ」

ヘイヴィアはライフルの補助機能を使って辺りの音を拾っているようだが、やはり人の声らしきものは聞こえないようだった。

ここにいるのはクウェンサー、ヘイヴィアと……あの〇・五世代のオブジェクトのみ。

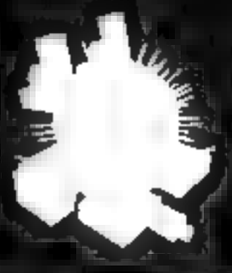
あれさえ破壊できれば、オセアニアでの戦いはほぼ終わったも同然だ。

10

しかし、だからと言って真正面から突撃するほどクウェンサー達は馬鹿ではない。

〇・五世代のオブジェクトは、まだこちらに気づいていない。ならば、わざわざ派手に体を出すのは自殺行為も同然だ。

「（……とにかく勘付かれないようにこっそり近づこう。整備場の中で小規模の爆発を起こし



【0.5世代】
ZERO POINT FIVE GENERATION

全長…約70m

最高速度…時速450キロ

装甲…10センチ厚×100層（溶接など不純物含む）

用途…対オブジェクト戦特化兵器（自称）

分類…陸戦特化型0.5世代

運用者…オセアニア軍事国

仕様…鉄製車輪（接地重量分散型）

主砲…大口径コイルガン ×1

副砲…レーザービーム、コイルガンなど

コードネーム…無し（0.5世代）

メインカラーリング…シルバー

ZERO POINT FIVE GENERATION

たって事は、おそらくプラグ部分の辺りにダメージが入っている。そこを見つけられれば、何とかなるかもしれない）」

「（……おい、ちんたらやるのは良いけどよ。向こうのオブジェクトが『森林保全』とかほざいて村人殺すために全力疾走しちまったらどうすんだ？　○・五世代がどれぐらいの速度出るのか知らねえが、少なくとも走って追い着けるようなモンでもねえだろ）」

「（……二年ぶりに動力炉を回転させて起動させたオブジェクトだぞ。絶対慣らし運転をしようとする。すぐに立ち去る事はないだろうさ）」

その時だった。

五〇〇メートルほど先にいる○・五世代のオブジェクトがわずかに身じろぎした。大小合わせて七〇近くあるサブの砲をそれぞれバラバラに動かしている様子は、まるで準備運動しているようだった。

やがて、オブジェクトは全ての砲をピタリと止めると、本体を旋回し一際巨大な主砲だけを大きく動かした。まるでそこに操縦士エリートの神経を集中させているようにも見えた。

そして、

ドバッ!!　と。

○・五世代のオブジェクトが、横一線に薙ぐように主砲を連射する。

にもぎ取り、肩で担ぐ。

狙いはオブジェクト本体ではない。

そもそも学生のクウェンサーは、ミサイルの誘導照準装置の詳しい使い方も分かっていない。適当に引き金を引くと、噴射煙を吐き出すミサイルはオブジェクトの手前にある、泥の沼地のような所に落ちた。沼地の真ん中に突き刺さったミサイルは起爆し、辺りに大量の泥を撒き散らす。ビシャビシャと音を立てて、オブジェクトの装甲一面の色が塗り替えられていく。

直後、砲に取り付けられたカメラに泥を貼り付けたまま、〇・五世代は砲を動かした。

「くそっ!!」

クウェンサーは空になったミサイル砲を適当に投げ捨てる。

彼とヘイヴィアの二人は伏せる事なく、とにかくその場から離れるために走り出す。直後、ついさっきまで彼らのいた場所が、莫大な砲撃音と共に粉々に散った。衝撃波の煽りを受けた二人の体が、そのまま数メートルも飛ぶ。地面を転がり、起き上がり、それでもクウェンサー達は走り続ける。〇・五世代に向かって、一気に走る。

き残るため、彼らは整備場の建物の陰まで

ようやく〇・五世代がゆっくりと振り返り、泥を被っていない面の砲をこちらに向ける。だが、そこでオブジェクトはクウェンサー達を見失ったのだろう。カメラのついた無数の砲をあちこちに向けて走査行動を繰り返している。

整備場の壁に体を押し付けたまま、クウェンサーは言う。
「……ちくしょう、技術レベルが低くて助かったな。標準的なオブジェクトだったら、多角的なセンサーで簡単に見破られているはずだぞ」
「っつっても、あのガラクタだってワイパーぐらい配備してんだろ。泥玉ぶつけたらエリート様が白旗振って泣きましたなんて話は聞いた事ねえぞ」
クウェンサーは、手元にある『ハンドアックス』にチラリと目をやる。
それから整備場の陰から顔だけを出し、今度はオブジェクトの装甲から地面まで垂れている太いケーブルに注目した。
「（……あそこが弱点なんだろうけど、真面目な話、近づいてこいつを取り付けられると思うか？）」
「（……テメェが筋トレ積んでオブジェクトの砲を跳ね返せるまで成長したらな）」
くそ、とクウェンサーは吐き捨てる。
大雑把な方針は決まっている。弱点らしき物は分かっている。使うべき道具も集まっている。しかし、それでもオブジェクトには勝てない。あの巨体は、そのぐらいの事では沈まない。圧倒的な火力の量が、勝利までの道のりを分厚く遮る。
クウェンサーは手の中にある無線機を握り直す。
『ハンドアックス』の信管を爆発させるための物だが、当然ながらそれ以外にも使える。

友軍への通信だ。

「(……おい。これ無線で通信しても大丈夫かな)」

「(……じきに○・五世代に気づかれるだろうが、瞬殺って感じでもなさそうだな。だが、それより厄介なのはお姫様達が今すぐ駆け付けてくるかだぞ。グレートサンディー砂漠からここまで、どれぐらいの距離があると思ってんだ)」

「(……やっぱり、それまで逃げ続けるしかないか?)」

「(……そりゃ素晴らしいダイエット法だ。痩せるまでに一〇〇回死ねるな)」

ヘイヴィアはそう言ったが、クウェンサーは無線機のスイッチを押した。

○・五世代は、まともにやっても勝てる相手ではない。

11

静電気を使ってオブジェクトを動かすための、黒い雷雲が広がっていくような音が、夜のオセアニアに響き渡る。

グレートサンディー砂漠の近くまでやってきたところで、『正統王国』軍と『情報同盟』軍の二機のオブジェクトは、その巨体を停止させていた。

お姫様は望遠で標的を確認する。

この辺りはオセアニア側の人工緑地計画が始まったばかりで、まだ大半は砂の山や荒野に近かった。そしてその真ん中に、コンクリート製の塊が見える。元々は長い長い砂漠の道の途中にある、ガソリンスタンドを中心とした大規模な補給所のような物だったらしい……と公式には登録されているが、実質、その廃墟はオセアニア軍の軍事施設という事で間違いはない。

友軍からは『お姫様』などと呼ばれていたエリートは、超遠距離から主砲の狙いを定める。標的であるオセアニア側の施設までの距離は一〇・三キロ。仲間からの指示は律儀に守る性格をしているらしい。

ゴッ!!　という巨大な発射音が炸裂した。

一直線に突き進む下位安定式プラズマ砲は四角いコンクリート製の建物に突き刺さり、青白い爆発を撒き散らす。ハイスペックなオブジェクトの装甲を撃ち抜くには多少距離が遠すぎ、プラズマのエネルギーも分散されてしまうが、単なるコンクリートの建物や、技術不足の〇・五世代レベルの装甲ならば問題はない。

さらに続けて二発、三発と同じ建物に攻撃を加えていくと、これまでとは違う爆発が起こった。試作実験炉の特別臨界爆発だ。

規模は思ったより小さかった。

せいぜい、半径三〇〇メートル程度の爆発だ。どうやら、炉を通常ではありえない特別臨

界状態に変異させる事すら失敗したらしい。その小さな爆発は、暗にオセアニア軍事国の技術力の低さを示しているかのようだった。

同行していた『正統王国』軍の通信兵が、お姫様へと連絡を送る。

『衛星観察官が確認しました。施設の残骸の中から、実用レベルのオブジェクトらしき影は発見できず。おそらく試作実験炉を使ったダミーだろうが、念のために施設の敷地に入って確認作業を行え、との事です』

『それは、あなたたちのしごとでしょ』

『おほほ。万が一、がれきの中からオブジェクトが出てきたときのためにも、たいきしていないということですわ。プールのかんしいんみたいなものです』

時間の無駄遣いだ、とお姫様が思ったその時、予想外の相手から通信が入った。

『……ザザッ……、こちらクウェンサー。タナミ砂漠で捜索中のオセアニア軍事国側のオブジェクトを確認！　繰り返す、タナミ砂漠で捜索中のオセアニア軍事国側のオブジェクトを確認！　電子シミュレート部門の予測通り、技術レベルは〇・五世代。俺達の最先端の機体を使えば主砲一発でおしまいだ！　増援を要請する。どこの軍のものでも良い！　とにかくデカい砲を積んだオブジェクトを一機でも連れて来てくれ!!』

『早い者勝ちだ!!　さっさと来ねえとまた俺らが表彰状さらっていっちまうぞ!!』

まさか本当にあっちだったのか……？　という言葉が歩兵の方からも聞こえてきた。

お姫様はオブジェクトの方向を大きく変えようとしたが、その時、さらに別の通信が割り込んだ。

『いいや、タナミ砂漠への増援は認められない。これは命令だ』

その言葉に、お姫様の動きが止まる。

……これは、一体誰の声だ？

周波数帯を確認する限り、同じ『正統王国』軍側の人間らしいが……。

『繰り返す、タナミ砂漠からの通信は罠だ。従う事は許さない。独断行動を取るクウェンサー、ヘイヴィアの両名は極度に混乱しているようだ』

（……この声……）

フライド評議員。

『正統王国』の重鎮で、選挙活動のために多国籍軍を編成してオセアニアへ送った立て役者とも言われている人物だが、お姫様にとっては『違う意味』でも重要な意味を持つ人物だ。

『データからも分かる通り、オセアニア側のオブジェクトは、本当にグレートサンディー砂漠にあった。試作実験炉とオブジェクトの双方が同じ施設にあったのだ。オセアニア側は我々他国籍軍からの攻撃に驚き、急遽試作実験炉だけを置いて、オブジェクトを逃がしたのだろう。

本物は現在もグレートサンディー砂漠を移動しているはずだ。この機を逃してはならない。こでタナミ砂漠に引き返せば、〇・五世代のオブジェクトは再び雲隠れしてしまう』

戸惑う兵士達に、フライド評議員はさらに続けて言った。

『クウェンサー、ヘイヴィアの両名はこの事実を知りながら、わざとダミーのタナミ砂漠で時間を潰す口実を作ろうとしているだけだ。彼らはのちに捕縛するが、まずはグレートサンディー砂漠にいるであろう〇・五世代が先だ。クウェンサー、ヘイヴィアの両名の言葉に惑わされるな』

本当にタナミ砂漠がダミーかどうかは、衛星で確認すればすぐに分かるはずだ。

ゆっくりと移動している分には、オブジェクトとガスタンクを見分けるのは難しいかもしれない。ただし、現在クウェンサー達が死闘を繰り広げている相手は、戦闘行動中のオブジェクトだ。いかにのろまな〇・五世代と言っても、キャタピラのついたガスタンクなどと見間違う訳がない。

（……何かある……）

お姫様はオブジェクトの鼻先をタナミ砂漠の方角へ向けた。

命令系統の関係か、追従していた歩兵達がお姫様を止めようとしたが、元より普通の兵力ではどうにかなるオブジェクトではない。

無視して進もうとしたお姫様だが、そこで彼女のオブジェクトは動きを止めた。

お姫様を妨害するに足る戦力が、この場に一つだけあった。

『おほほ。じょうかんのめいれいには、したがうべきではありませんの？』

『……あなた』

すぐ隣から主砲の連速ビーム式ガトリング砲を突きつけてくる『情報同盟』軍のオブジェクトを、お姫様はセンサー越しに睨みつける。二機のオブジェクトの直接対決に巻き込まれると思ったか、歩兵達が隊列を崩してバラバラと逃げていく。

『ぜったいてきなせんりょくであるオブジェクトのエリートは、どくだんせんこうをゆるされていない。「情報同盟」ぐんだけでなく、オブジェクトを扱う全てのぐんたいできょうつうするにんしきのはずですわよ。おほほ。あなたのこうどうは、たいりょうぎゃくさつをまねくよういんにもなりかねませんもの。めいれいいはんするエリートをみすごすわけにはいきませんわよね』

『フライドひょうぎいんは「正統王国」ぐんのにんげんよ。あなたがそのことばにしたがうりゆうはないはずだけどう？』

『おほほ。それはそうなのですけどね』

『情報同盟』軍のエリートは、連速ビーム式ガトリング砲をどけるお姫様も、アーム状の主砲を改めて動かす。

二つの主砲が交差し、互いの動力炉に狙いを定める。

様子はない。

ゴロゴロと、お姫様のオブジェクトの下部から黒い雷雲が広がっていくような不気味な音が辺り一面に響き渡る。

『あいにくと、私はこうめいれいされているわけです。せんとうこうどうをきろくすることで「正統王国」ぐんのオブジェクトぎじゅつをしらべてこい、と。ふつうはいっしょにたたかいながらしらべるものですけど……ケンカを売ってちょうさしても良いんですのよ。おほほ』

12

通信機から流れてくる不穏な会話に、クウェンサーは思わず顔を青くした。

「おいおい、どうなってんだ!?　俺達が極度に混乱しているだって!!　当たり前だろ、本物のオブジェクトが目の前にいるんだからさ!!」

「フライド評議員か。確か軍需系の出身で、オブジェクト関係でも重要なポジションについてたな。『正統王国』軍でエリートの才能を磨くための部署を一括管理してたはずだぜ」

そんなヤツが何で横槍を……？　と二人が眉をひそめた時、無線機から答えが来た。

『……君達は我々の思惑から外れてしまったんだ』

「ッ？」

クウェンサーとヘイヴィアは思わず顔を見合わせた。

まさか、直接コンタクトを取ってくるとは思っていなかったのだ。

『この通信は君達にしか届いていない。我々の思惑から外れた君達が生き残ったのは偶然だろう。俺らの泥まみれの顔でお茶の間の皆さんの気分でも害したって言うのか？」

「思惑？　政治屋さんの選挙活動のお邪魔でもしたっていうのか」

「多国籍軍をオセアニアに派遣する事そのものが計画的だったんだよ。君達は頑張りすぎた。もっと無様でいてくれれば良かったんだ』

『逆だよ。君達は頑張りすぎた。もっと無様でいてくれれば良かった』

フライドは滑らかな声で答えた。

始めから用意されていた台本を読むような口調だった。

『生身の兵隊が超大型兵器オブジェクトを破壊する……。いかにも疲弊した人間に希望を与えるような、素敵な話じゃないか。しかし、だ。希望を与えられたのは「安全国」の呑気な住人だけではない。世界中で無謀な戦いを続けている、ゲリラやテロリスト達にも活力を与えつつあるという事実に気づいているかな？』

「……」

『このオセアニアは、君達が生み出した地獄だ』

フライドはそんな事を告げる。

おそらくは『敵』であろう人物の言葉を、二人は注意深く聞いていく。

『確かに我が「正統王国」を含む多国籍軍が、この二年間手をこまねいていた事は認めるが……それにしても、この戦争は一ヶ月前のオブジェクト大量増援の時に終わっているはずだった。君達がちょうどアラスカでオブジェクトと戦っていた頃だな。今時の戦争というのは簡単なものでね。オブジェクトの質と量、それだけで勝敗を簡単に計算できるようにバランスが整えられていた。こっちのオブジェクトは一機、向こうは三機、じゃあ戦っても無駄だ。速やかに退避し、少しでも損害を減らそう――そういう風に、「あっさり諦めるための仕組み」が出来上がっていたはずなんだ』

オセアニアも、そうなるはずだった。

軍事国の持っているオブジェクトは〇・五世代が一機。対する多国籍軍は最先端のオブジェクトが二〇機以上。常識的に考えれば、それだけの数のオブジェクトが展開された時点で、オセアニア側は速やかに白旗を上げるはずだった。それで戦争は終わるはずだった。

実際、今までのオセアニアはそうだった。

虎の子の〇・五世代を破壊されないように、雲隠れするのが精一杯だったのだ。

にも拘らず、ここに来て彼らは『具体的に〇・五世代を使った軍事作戦』を立案・実行し始めている。あまつさえ、試作実験炉を利用した罠まで利用して。

『……そう、君達が生み出した素晴らしい戦果のおかげだ』

軽蔑するような口調だった。

『戦争はオブジェクト対オブジェクトだけではない。生身の人間でもオブジェクトを破壊する事ができる。アラスカで君達が証明してしまったたった一つの戦果は、ゲリラやテロリスト、旧式の独裁政権などにとって「救い」になってしまった。白旗を上げるせっかくのチャンスを、「希望」が奪ってしまったのだよ。かくして、戦争は長期化し我々の思惑を外れ、選挙広報として得られるべき利益よりも、戦場に支払う損益の方が増えつつある訳だ。それはまずいだろう。この辺りで一度、世界の流れを修正しておくべきだという意見が出てもおかしくはあるまい？』

「……だから、俺達にはここで死んでほしいと？」

「それも、力の象徴であるオブジェクトを使って、か。オブジェクト壊しで知られる俺らが、そのオブジェクトにブチ殺されたって情報が広がれば、『やっぱり奇跡は何度も起こらないんだ』って生身の兵隊を諦めさせる事ができるってのか」

『戦争にはセオリーが必要だ。最短時間でスマートに終わらせるためにもな。戦場を混乱させても誰も喜ばん。君達がやっているのは、戦争期間を無駄に引き延ばし、必要のない死者を増やすリスクを孕んでいるのだから』

フライドの声は揺らがない。

『本来なら多国籍軍の基地で仲間割れを誘発し、君達には最先端のオブジェクト同士の戦いに巻き込まれてもらう手はずだった。ところが、都合良くオセアニア側のオブジェクトを単独で

見つけてくれたそうじゃないか。我々としても、貴重な自軍オブジェクトに傷をつける機会は少ない方が良い。オセアニアが汚れ役を買って出てくれるというのなら、我々に止める必要もないだろう？』

それは、上っ面だけを聞けば、フライド評議員は正義を語っているのかもしれない。

確かに、オセアニアの泥沼化を招いた一端は、クウェンサー達にもあるかもしれない。戦争なんて面倒な仕事は全てオブジェクトに任せて、生身の人間は民間軍人問わず脇役に徹していた方が良いのかもしれない。

だが、

「ここでオセアニア側を利用すれば、あのオブジェクトは俺達を殺した後にそのまま近隣の村を襲いに行くぞ。それでも良いのか!?」

『〇・五世代の動きは衛星でマーキングできる。オセアニアでの虐殺行為は、それが最後になるだろう。後は多国籍軍のオブジェクトが主砲を撃っておしまいだ』

あっさりした言葉を聞いて、クウェンサー達は確信した。

この評議員サマは、正義や平和などというものを全く考えていないぐらい、君達は有害人物に『そのレベルの犠牲を払ってでも計画的に抹殺しなければならないぐらい、君達は有害人物になってしまったのだという自覚を持ちたまえ。オブジェクトとオブジェクトが戦っている間なら、戦争はスマートに進んでいた。余計な被害を増やさずに済んだ。それを君達の「希望」や

「救い」が邪魔をしてしまっているのだよ』

そんな訳があるか、とクウェンサーは思った。

オブジェクト対オブジェクトの戦いは、確かに『どちらのオブジェクトが勝つか』だけで勝敗が決まる。しかし、だからといって歩兵に対する虐殺が減る事はない。現にアラスカではオブジェクトを失ったクウェンサー達が皆殺しにされるところだった。ジブラルタル海峡ではお姫様の到着が遅れたというだけで全ての基地が破壊された。『オブジェクトがいなくなったから、残りは見逃してやろう』などという優しい法則は、戦場に存在しない。

フライド評議員の言っている持論は、突き詰めてしまえば次の一言に要約される。

「一方的に殺す側の理論だなこりゃ」

「結局、利権を守りてえだけだな。オブジェクトを持っていない国、オブジェクトに砲を向けられた普通の兵隊はみんなこう思ってるぜ。……今の世界は間違ってる、オブジェクトは効率良く人間を殺すためにある大量殺戮兵器だってな」

そもそも、戦う前から戦争の勝敗が決まっている、などという考えがおかしい。

実際に銃を取って戦っているのは、生きている人間なのだ。

どれだけちっぽけでも、彼らは持てる力を全部使って戦おうとしている。

それを、効率のために戦う前から負けろと言うのは間違っている。この世界は、偶然や逆転

を許さないほどつまらなくはできていないのだ。

フライド評議員が言っているのは、金持ちだけが莫大な費用を投資してオブジェクトを作って、そのオブジェクトが戦争の勝利と共にさらに大きな金を生んで……という世界を作って、その重要ポストに自分を置いておきたいというだけではないだろうか。

『何とでも言いたまえ』

多くのオブジェクトを抱える側の――言ってしまえば、噛みつかれる可能性を考えた事のない口調で、フライド評議員は告げた。

『どのみち、君達はそこで死ぬ。村を襲う〇・五世代は衛星から監視され、多国籍軍のオブジェクトによって徹底的に破壊される。オセアニアの戦争は我々の思惑通り、「最先端のオブジェクトが全てを制する」最大級のアピールとして機能する事に変わりはない』

「そうかい。なら賭けようか」

クウェンサーとヘイヴィアは、無線機に向かってこう言った。

『正統王国』の重鎮にケンカを売るために、だ。

「俺達が〇・五世代に負けたら、アンタの天下」

「俺らが〇・五世代に勝ったら、テメェは終わりだぜ」

無線機の通信を切り、クウェンサーは舌打ちした。
「くそっ。結局、増援はなしか！　オセアニア中に多国籍軍のオブジェクトはわんさかいるっていうのに、協力してくれるヤツは一機もない!!」
「なあクウェンサー。お姫様はどうなってると思うよ？」
「頼めば動くかもしれないけど、そうなると多国籍軍の残り全部がお姫様の敵になる。それぐらいの安全装置は評議員サマだって用意してるんじゃないか？」
「……だとすると、やっぱ俺らだけでやるしかねえな！」
「フライドのクソ野郎を一発殴るまでは死ねないしな!!」
建物の陰で、二人は改めて方針の確認をする。
ひとまず分かっているのは一つ。
こんな所で死んでやるほど、クウェンサー達はお行儀の良い軍人ではない事だ。

13

とはいえ、コミックのヒーローみたいに超大型兵器オブジェクトへ真正面から突っ込んでいくほど、クウェンサーやヘイヴィアは超人ではない。
「（……道なりに進んで撃たれるのも馬鹿らしいな。ヘイヴィア、盾に使ってるこの建物の中

をショートカットして〇・五世代に近づこう）」

「（……近づくのは勝手だけどな。どうやって〇・五世代を吹き飛ばすんだよ？）」

オブジェクトから見えないように、裏手の壁際を移動していくクウェンサー達。やがて彼らは裏口を発見した。ドアに鍵はかかっていなかった。というより、ドアそのものが吹き飛ばされていた。整備場の中で爆発があったからだ。

中に入ると、そこは広大な空間だった。

〇・五世代のオブジェクトの整備場だ。

巨大なオブジェクトを整備するための設備一式があるのだが、何もかもが折れ曲がっていた。クレーンは床に倒れているし、業務用冷蔵庫より大きな計器類は熱で変色している。辺りには死体も転がっていた。数も多い。四〇人近い軍服や作業服を着た人々が、ほとんど蒸し焼きになっている。

一瞬、奥に踏み込もうとした足が止まりそうになるが、先へ行くしかない。ここで引き返せば、〇・五世代のオブジェクトによってさらに悲惨な死体に変えられてしまう。

「（……何だよクウェンサー、あちこちキョロキョロ見回して。さっさと行こうぜ。それとも悪趣味な死体にご執心か？）」

「（……いや、ここって〇・五世代の整備場だろ。だったら……）」

「（……主砲のスペアでも探すってか？　だが仮にあったとしても、そいつを動かすためのエ

ネルギー源がねえだろ。都合良く試作実験炉でも転がってりゃ話は別だけどよ）」

「（……違う。〇・五世代の設計図があるんじゃないかって言いたいんだ。そこから弱点が分かるかもしれない）」

二人は一度バラバラに離れると、改めて広い整備場を観察する。

アラスカの敵軍基地に忍び込んだ時は、ウォーターストライダーの弱点である静電気発生用タービンが山のように用意されていた。同じように、保管されているスペアパーツや設計図などから、〇・五世代の特徴や弱点も分かるかもしれない。

「（……なあ、オブジェクトはどうしてる？　俺達見失って、さっさと近隣の村を襲いに行ったとかって話じゃないだろうな）」

「（……そんな訳あるか。泥のついたカメラの洗浄中っぽいぜ。一度乾かして粉末状にしてからマイナス電荷で弾き飛ばそうとしてるみてえだ。なんか花粉を近づけないマスクとかで、似たような技術なかったっけか？）」

反対側――オブジェクトが出入りするために大きく開かれたシャッターの所から、ヘイヴィアが外を覗いている。最先端のオブジェクトなら屋内にいる人物もセンサーで見つけられそうなものだが、〇・五世代にそういった機能はないようだ。

おそらくは、『とにかくオブジェクトという兵器を所有している事』が国際社会の中で重要なのであって、実際に戦争でどの程度役に立つかは二の次なのだろう。

「(……おい、爆発したのってこれじゃないか？)」

クウェンサーが言うと、外を覗いていたヘイヴィアがこちらに戻ってきた。クウェンサーの指差す方向は建物の壁際で、そこには大きなコンテナのような物が一面に並べられている。各コンテナは太いケーブルで連結されている。

「(……何だこりゃ。バッテリーか？)」

「(……巨大なコンデンサーじゃないか。おそらく〇・五世代の動力炉に外部から干渉するためのの電源だろう。ディーゼルで発電した電力を一度ここに集めて、増幅して、それからオブジェクトの方に送っていたんだ)」

と、連結されていたコンテナの内の一つが、内側から爆発していた。その爆風が密閉状態だった整備場の隅から隅まで一気に充満したのだ。当然、中にいた人間に逃げる場所はなかっただろう。

だが、

「(……おい、爆発したのってオブジェクトの方じゃなくて、こっちの増幅装置の方だったのか？　だとすると、オブジェクトの方にはダメージが入ってないって事になるぞ!!)」

「(……まあ、ホントにオブジェクトの中心から爆風が漏れてたら、分厚い装甲が内側からめくれ上がってねえとおかしいわな。とにかく簡単に倒せねえのは分かってんだ。メンテ用のコンピュータを探して設計図を調べようぜ)」

「(……ちくしょう、コンピュータも熱でやられてるとか言わないだろうな)」

整備場を見回した限り、それらしいものはない。

ただ、爆風でほとんど折れかかった階段を上ると、建物の外壁に寄り添う回廊のような二階部分に、大型のコンピュータが鎮座していた。オブジェクト出撃用のシャッターは開いているが、幸い、その位置は〇・五世代からは死角になっているようだった。

「(……液晶が溶けてて使い物にならねえな)」

どうやらコンピュータ本体はまだ動いているらしい。モニタを交換すると、〇・五世代のメンテ情報を示す画面が表示された。

「(……こっちに使えるモニタがあるぞ。ケーブル挿してみよう)」

と、そこでクウェンサーが眉をひそめる。

「(……ありゃ？　なんかキー配置がおかしくないか。これシフトじゃないの？)」

「(……チッ、使ってるOSが俺らのトコとは違うみてえだな。こりゃ『情報同盟』の旧式OSじゃねえのか？)」

多少コンピュータの扱い方に混乱しかかったが、相違点が分かれば後は簡単だ。クウェンサーは熱で若干変色したキーボードを叩いていく。

「(……なあクウェンサー。アラスカのウォーターストライダー、ジブラルタルのトライコアは足回りを狙ってたよな？　今回もそっちから狙ってみるのか？)」

「(……○・五世代の『脚』は、見た限りだと列車みたいな鉄の車輪を使ったものだ。仕組みは単純だけど、簡単に隙をつけるものじゃない)」

「(……車輪？　エアクッションじゃなくてか。そんなもん、オブジェクトの巨体を支えられねえだろ。いくら鋼鉄使って巨大な車輪を用意したって、車輪そのものが歪むか、車軸が折れちまうんじゃねえのか？)」

ヘイヴィアの質問に、クウェンサーは小声で答える。

「(……○・五世代は機体の重量を分散するために、五〇〇近い車輪を用意しているんだ。トゲだらけの拷問椅子と一緒。実はゆっくり座ると、トゲトゲに体重が均等に逃げていくから体に刺さる事はないってヤツ)」

「(……それ、ちゃんと実証したヤツいねえだろ。都市伝説じゃねえの？)」

「(……適当に語ってる内が華だよね。絶対チャレンジするなよ。どうなっても俺は知らないぃ)」

理論上、全体の三分の二以上の鋼鉄車輪を吹き飛ばす事ができれば、重量分散が追い着かずに残りの車輪は勝手に潰れてしまうらしい。だが、生身の兵隊にそれを実行するのは不可能だ。

「(……装甲は核兵器を直撃させれば何とか溶かす事ができるみたいだけど、そんなもん用意できる訳ねえしな)」

「(……いくら○・五世代でも、正攻法の火力で勝負しようなんて自殺行為だよ。機構の裏か

ら攻められる場所を探した方が良い。っと……？）」

コンピュータを操作して設計図を確認していたクウェンサーの手が止まる。

表示されたのは、外部電力を利用してオブジェクトの動力炉を急速起動させるための仕組みだ。確かに『正統王国』軍でも開発の進んでいない新技術なのだが、そもそも一般的なオブジェクトは待機中も常時動力炉を回転させ続けているため、急速起動させる必要性そのものがない訳だが。

「（……これか。裸の王様がデカい屁で部下を皆殺しにした機構は）」

「（……おい。外部からバッテリーで動力炉を急速回転させるのとは逆に、作り過ぎたエネルギーを排出する事で動力炉を守る仕組みもあるみてえだぜ。電力って形で放出する機構が取り付けられてるってよ）」

「（……そっちの方が失敗したのかな。回転数を上げたのは良いけど、上がり過ぎて制御できなくなったとか）」

「（……つまり？）」

「（……あの電源プラグから膨大な電力を流し込めば、もう一度動力炉を暴走させる事ができるかもしれない）」

言いながら、クウェンサーはコンピュータから離れた。回廊状の二階部分から階下に目をやると、〇・五世代のために用意されたコンテナ状のコンデンサーがある。

その時だった。

ゴバッ!!　と。

クウェンサー達のすぐ横の壁が、突然外からの掃射によって吹き飛ばされた。

おそらく〇・五世代の主砲である、連射式のコイルガンだろう。

二階部分の壁を吹き飛ばした風穴が、右から左へ――クウェンサー達の方へと近づいてくる。砲弾の飛んでくる方向がおかしかった。〇・五世代は慣らし運転のために、建物の周りをゆっくり回っていたのだろうか。

「伏せろクウェンサーッ!!」

「馬鹿、壁の破片に殺されるだけだ！　飛び下りろ!!」

二人は手すりを飛び越え、回廊状の二階から一階部分へとダイブする。直後に二階の壁一面が横一線に吹き飛ばされていった。大型コンピュータが火花を散らして爆発していく。

「くそっ、これ以上の調べ物は無理か！」

「分かってる事を試すしかねえな。例のコンデンサーを動かそうぜ!!」

しかし、そんな暇はなかった。

一通り二階部分の壁を破壊し、整備場そのものを斜めに傾かせた〇・五世代だったが、風穴

の向こうに一滴の血もない事に不満を感じたのだろう。複数の砲を一気に火を噴いていく。

レールガン、レーザービーム砲、コイルガン、連速ビーム砲。種々様々な大規模兵器が炸裂し、あっという間に巨大な整備場がエンサーとヘイヴィアは動けなかった。この状況で下手に頭を上げると、逆に巨大な砲弾に吹き飛ばされかねないからだ。

幸か不幸か、大小無数の砲撃によって彼らが吹き飛ばされる事はただし。

ごごんっ、という鈍い音が聞こえた。

徹底的に壁が破壊された事で、整備場の屋根の方が耐えられなく虫食い状態で残った壁を押し潰すように崩れてくる。建物の中にいた線に。

「嘘だろ……ッ!?」

回避する暇はなかった。

轟音が炸裂し、クウェンサーの意識は容赦なく断絶した。

心臓が止まったんじゃないか。

真剣にそう思ったクウェンサーだったが、どうもそうではなかったらしい。

「(……ちくしょう。なあクウェンサー、起きろよ!!)」

「(……何だこれ。俺達、潰れたんじゃなかったのか?)」

「(……天井は体育館みてえに複数の柱で支えられてたんだ。俺らはその隙間に上手く潜り込んだみてえだな)」

屋根には亀裂があり、そこから這い出る事はできるみたいだ。

しかし、考えなしに出ていくほど彼らは馬鹿ではない。

少なくとも、〇・五世代を操っているエリートはクウェンサー達が死んだと思い込んでいる。

そう思い込んでいる内は、追い撃ちはやってこない。反撃の準備を固めるなら今しかない。

「(……っつっても、具体的にはどうすんだ? 俺らが死んだと思ってもらうのは結構だが、このままじゃ〇・五世代は近隣の村を襲いに行っちまうぞ!!)」

「(……あの火力を見ただろ。真正面から向かっても太刀打ちできない。やっぱり電源プラグを通して動力炉をぶち壊すしかなさそうだ)」

「(……テメェこそさっきの火力見たのか!?　電気カーのスタンドよろしく送電ケーブルを突き刺す暇なんかねえだろ!!　どうやって近づくって言うんだよ!!)」

「(……近づかなくても電力を送れる方法があれば良いんだ。ついてこい)」

クウェンサーは天井の亀裂から顔だけを出した。

深夜の暗闇の中に、巨大なオブジェクトの影がある。大小合わせて七〇近い砲を小刻みに動かしているが、どうやら周囲を索敵している訳ではなさそうだ。

「(……村を襲う前の準備運動ってか。ナメてんのか?)」

「(……あるいは、二年ぶりに動かしてみた動力炉が思ったより不機嫌だったとかね。行くぞ)」

「(……おい。っつかどこへ行くんだよ!?)」

天井の亀裂から体を乗り上げると、クウェンサーは匍匐前進で屋根の上を進む。本当はササッと走ってしまいたかったが、どう考えても大きな音が鳴るに決まっている。今オブジェクトに気づかれたらおしまいなのだ。

幸い、オブジェクトの索敵装置はカメラを使った視覚一点突破。音には鈍い。七〇近い数が大問題だが、深夜の闇に紛れてしまえばエリートの意識から逃れる事もできるようだ。

クウェンサーがやってきたのは、元々は整備場の壁だった所だ。

そこには、コンテナ状の大型コンデンサーが並んでいる。大半は崩れてきた屋根に潰されて

しまっているが、いくつかはまだ動くようだ。
遅れて匍匐前進でやってきたヘイヴィアが、小声で言う。
「（……マジか。本気で〇・五世代のケーブル持って突撃する気かよ!!）」
「（……そうじゃない。おい、どこかに水はないか？　貯水タンクでもかく辺りを水浸しにできるような膨大な量の水だ!!）」
「（……何言って――おい。まさか……）」
「（……そうだよ。〇・五世代の電源プラグから、千切れた送電ケーブルが地面に垂れてるだろ。巨大な水溜りを使って大量の電気を流してしまえば、垂れてるケーブルを伝って〇・五世代の動力炉まで届く!!）」
その時、ギュイッ!!　と〇・五世代の砲が音を立てた。
「気づかれた!!」
「クウェンサー、あそこだ！　貯水タンクがある!!」
主砲でトドメを刺そうとしたのか、わざわざ巨体を回転させてクウェンサー達へ振り返ろうとする〇・五世代。
その間に、クウェンサーは『ハンドアックス』に電気信管を突き刺すと、ヘイヴィアの指示した方向へ思い切り遠投した。

そちらにあるのは錆ついた貯水タンクだ。建物の屋上に設置されている鉄塔の上に取り付けられている。

爆弾がタンクにぶつかるかどうかといったところで、クウェンサーは無線機から信号を送った。

バガッ!!　という轟音と共に貯水タンクは破れ、鉄塔そのものが大きく崩れた。

しかし、

「空っぽじゃねえか!!　あれもダミー施設の一環だったっつーのかよ!?」

「っ!!」

そうこうしている内に、〇・五世代のオブジェクトが完全に旋回した。

ギチギチと音を立てて、主砲のコイルガンの細かい狙いが定められていく。

絶体絶命。

その時、轟音を立てて鉄塔が地面に直撃した。衛星からの目線をごまかすためのダミー施設だったのだが、その鉄塔は落下時の衝撃で土を大きく掘り返す。大量の砂煙が舞い、クウェンサー達の頭の上まで土が飛んできた。

それだけではない。

地中に埋まっていた水道管が破れたのだろう。まるで巨大な噴水のように水柱が上がった。

普通の水道管とは思えない。数十メートルもの高さまで噴出した水は、辺り一面へあっという

間に降り注いでいく。

（工業用水のためのパイプラインか……？　オブジェクトの部品を削り出すのに水を使った工作機械でも使っていたのか）

ともあれ、どんな用途であっても構わない。

大量の水が地面へ降り注ぎ、〇・五世代のボディから垂れたケーブルと、潰れた倉庫の中にあるコンテナ状の大型コンデンサーが繋がっていく。

「逃げろォ!!」

クウェンサーは叫び、オブジェクトに背を向けて走り出した。

ヘイヴィアもその後に続いた。

彼らが逃げているのは、〇・五世代の主砲からではない。

元々、そんなものから走って逃げ切れる訳がない。

クウェンサー達が逃げているのは、みるみる広がっていく広大な水溜りだ。

そして。

潰れた倉庫から〇・五世代までの道のりが、一直線に繋がっていく。

直後、

ボバッ!!　という爆音が炸裂した。

一瞬、地面が青白く爆発したかと思った。

だが違う。大型コンデンサーに溜め込まれていた莫大な電力が、いったのだ。それは一瞬で二〇〇メートル四方の濡れた土地を一気に走り抜けると、その領内にいた〇・五世代に直撃した。

標的は、地面に垂れた送電ケーブル。

流し出された高圧電流の内の何割かがそこを伝ってオブジェクト内部へと入り込み、動力炉を加熱するために使用するレーザー照射装置を強引に起動させてしまう。

オブジェクトの、球状の本体が内側から膨らんだような気がした。

それを確認する余裕はなかった。

ヘイヴィアがクウェンサーの上に覆い被さるように倒れ込み、彼の両目を掌で遮ったからだ。

「馬鹿野郎、失明するぞ!!」

その言葉を頭で理解したかしないか、といった辺りだった。

轟音。

同時に放たれた莫大な閃光は、ヘイヴィアの掌に遮られているはずの両目の網膜へ容赦なく突き刺さった。視界はおろか意識まで真っ白に塗り潰されるような感覚だった。激痛が両耳から頭の中心へと突き抜けていき、今度は逆流するようにドロリとした液体がこぼれていく感触

がした。どこが傷ついたか知らないが、おそらく血が流れているのだと、クウェンサーは思った。

視界が元に戻るのに、どれだけの時間がかかっただろうか。もしかしたら、途中で何度か気を失っていたかもしれない。それすらも判別できない。

「……クウェンサー。目を開けろよクウェンサーッ!?」

ヘイヴィアに揺さぶられて、ようやくクウェンサーは両目を瞬かせた。ぼんやりとした視界で、クウェンサーはヘイヴィアの顔を見る。

「〇・五世代は……？」

「見ろよ」

ヘイヴィアが顎で指し示す。

見ると、つい先ほどまで君臨していたオセアニア軍のオブジェクトは、内側からメチャクチャに破裂していた。球体状のボディは開いた花のように大きくめくれ上がっていて、七〇近い砲はあちこちの地面に飛び散り、突き刺さっていた。動力炉の大爆発による影響か、先ほどまで辺り一面を水浸しにしていた水はもうない。全て蒸発してしまっている。工業用水用の破れたパイプラインからも水の噴出は止まっていた。もしかすると、配管が溶けて繋がったのかもしれない。

オブジェクトを操っていたとえ脱出装置を使って尽くされているはずだ。

「終わったな」

「ああ。オブジェクト一機の問題じゃねえ。オセアニアの戦争をしばらく呆然としていたが、彼らはやがて立ち上がる。どちらともなく、彼らは言った。

「――じゃあ、後はフライド評議員のクソ野郎をどうにかしよう」

「裸の王様がどうなったかは、考えるまでもない。パラシュートで空中を漂う装置は丸ごと爆風に焼き終わらせちまったよ」

終章

評議員と言えば、『正統王国』の中でもほぼ最高の地位を意味する。『正統王国』のトップは一応、所属している各文化・文明の絶対王政における『王』の位に着く者達で構成される『君主議会』となっている。しかし『君主』達は自分達の考えをまとめる過程で、有識者を集めた『評議会』へと意見を求める。王の血筋に依らない、『選挙で決められる』範囲において『評議員』は最高の地位であり――場合によっては間接的に王の意見を調整する事すらも可能な正真正銘の重鎮なのだ。

それが。

その私が、何故追い詰められているのだ……と、フライド評議員は気持ちの悪い汗を全身から流していた。

「……困った事になりましたね」

『安全国』と評価される近代国家の中の一等地。軍事施設という事で特別減税されているものの、実質的にはフライド評議員の私設オフィスと化している高層ビルの中で、そう言ったのは

フローレイティアという軍人だった。

部下を率いて現場で作戦を実行する程度の階級は持っているらしいが、評議員のフライドからすれば、掃いて捨てるぐらいの小物でしかない。そのはずなのに、フローレイティアはフライドに敬意を払おうとしない。むしろ、見下すような軽蔑の眼差しを投げている。銀色の髪に留められたカンザシを模した細長いヘアピンを指で弄び、あまつさえ全室禁煙のこの建物の中で、その主の目の前で堂々と和風の煙管を咥えていた。

フライドの前には、いくつかの資料があった。

彼がオセアニアで秘密裏に進めていたプロジェクトの詳細だ。

「オブジェクトの質と量によってのみ勝敗の決まる戦場。あなたはそういう世界を構築したかったようですが……この方法はスマートとは言い難い。特に、『正統王国』軍のオブジェクトがグレートサンディー砂漠からタナミ砂漠へと引き返そうとした時に、あなたが放った通信は【決定的】だ。クウェンサー、ヘイヴィアの両名を都合良く殺害させるためとはいえ……オセアニア側のオブジェクトの逃走を助けるような虚偽の命令を行って、作戦行動中の部隊を混乱させた事は、反逆罪に問われるでしょう。『あの時はその情報が正しいと思っていたんだ』が通じるような軍法裁判ではない、とだけアドバイスさせていただきましょう」

「私には私の意図があった。そして、あの時、あの作戦は正式に『君主議会』から私へ権限を与えられた上で行っていた。君のような軍人に責められるような事は何もしていない。これが

軍事行動なのだ」

「という口実を作っていたようですが、『正統王国』軍だけならともかく、多国籍軍の他勢力にまで一斉に通信を放って誘導しようとしたのは間違いでしたね。『君主議会』はあくまで『正統王国』の権限だけを取り扱っており、『情報同盟』軍のようなそちらの方からクレームが殺到しているようですよ。『君主議会』はどうするでしょうね？あれは『正統王国』軍の重要な秘密作戦だったから……では、振り回された『情報同盟』軍側は納得しないでしょう。『正統王国』からの正式報告がなければ、妙な火種にもなりかねませんん」

「……君に何が分かるのかね？」

フライドは絞り出すような声で言った。

「超大型兵器オブジェクトが圧倒的な火力として君臨するからこそ、この世界の戦争はスマートに進める事ができる。あの二人の存在はそのバランスを容易に崩す!!　この世界にはオブジェクトという柱が必要なのだ!!　私は国を守るため、いや世界を守るために尽力したんだ!!」

「ええ。『正統王国』のお歴々も、『君主議会』の他の評議員も、大方似たような意見でしょうね。超大型兵器オブジェクトの存在こそがスマートに戦争を終わらせられる素晴らしい兵器だと。だが、だとしてもあなたの行動はまずかった。もしもクウェンサーとヘイヴィアの二人がオセアニアのオブジェクトに殺されていた場合、その後に起こったのは『軍事国のオブジェ

クトによる村人の虐殺(ぎゃくさつ)』であり、あなたの行動は『「正統王国」の重鎮(じゅうちん)は自国の利益のためにその手助けをした』事を意味してしまう。それは『クリーンな戦争を演出するオブジェクトの保有国』というイメージを保持したい上層部(じょうそうぶ)からすれば、大変まずい状況でしょう。……あるいは、クウェンサー達が敵国のオブジェクトを破壊(はかい)して回っている事よりも」

「私は……失脚するというのか？　この私が!?　オブジェクトがバランスを決める世界の中で、『正統王国』の地位を固めるために努力してきたこの私がか!?」

「ぎゃあぎゃあ騒ぐのは構わないけど」

そこまで言うと、フローレイティアの声がいきなり低くなった。

人を見下すような敬語すら消え、彼女は底冷(そこひ)えするような声で言う。

「私は本国で待つ家族から預かっているガキどもの面倒(めんどう)ぐらいは、最後まで見たいと思っている人間なの。どんな事情があるにせよ、ここでトドメを刺(さ)しておくべきだと思うのよ。だから、まあ、分かっているね？　続きは軍法裁判だ。挽回(ばんかい)できると考えるのは無駄(むだ)よ」

「ふ、ふふ。そうか、なら私も切り札を使わせてもらおう」

「？」

「私が何故(なぜ)、軍のエリート育成部門を率(ひき)いていたと思う？　――軍に採用させない、秘密(ひみつ)裏に育成したエリートを子飼(こが)いとしてキープしておくためだ」

クウェンサーとヘイヴィアは『安全国』に指定されている中でも、最も力のある国へやってきた。『正統王国』の中で『本国』と呼ばれている近代国家だ。

オセアニア戦争が終わった後、フライド評議員に反撃すると息巻いていたが、そうそう簡単に評議会の重鎮に近づける訳もなかった。どうやら、攻め込み方の種類が違うらしく、何かを摑んできたフローレイティアは『上官に華を持たせろ』と言って、フライド評議員の待つオフィスビルへと消えて行った。

「オセアニア戦争を終わらせた立て役者だっつーのに、結局軍の命令に違反してタナミ砂漠に向かった罰で、今まで溜めてきた功績も全部失っちまったな。名誉も勲章もパー。一瞬にして貯金が消えちまった気分だぜ」

「貯金があっただけでもマシじゃないの？　普通だったら軍法裁判送りだと思うけど」

「オセアニア戦争を終わらせたのに？　あそこでタナミ砂漠に向かってなければ裸の王様は近隣の村を襲うだけ襲ってから雲隠れして、戦争が何年長引いたかも分からなかったのに？」

「どうにもならないよ。それを認めてしまったら、世界各地で大義名分だけ掲げた略奪行為が正当化されてしまう。やりたければ軍を抜けてフリーとして頑張りたまえってところなんだろ」

「……元々、俺らはアラスカの件で表彰されたら、そのままスッと退場する予定だったんだ

けどな。何度も何度も戦場に引っ張り出したのは上層部じゃねえか」
「もしかすると、どこかでプラマイゼロにしておきたかったのかもよ」
そこまで言うと、二人は少しだけ黙り込んだ。
彼らの視線の先にはフローレイティアが向かって行った、フラ
がある。軍用基地という事で大都市の真ん中に広大な土地が開けて
ビルが聳えていた。
「そういやテメェ、相変わらずお姫様からメール届いてんの？」
「まあね。あとなんか最近、『情報同盟』軍のオホホからもメール
らアドレスが漏れたんだろ？　やっぱ変に『情報同盟』軍のオブジ
としたせいで、向こうの諜報員にもマークされてんのかな」
「……荒れるな。その内、史上初の痴話ゲンカオブジェクト戦が繰り広げられるかもな」
「？」
クウェンサーはわずかに眉をひそめ、
「それにしても、フローレイティアさん遅いな。もう召喚状も正式に降りてるはずだから、後は兵隊に命令してフライドの馬鹿野郎を引きずり出してくるだけなのに」
「なあおい。なーんか嫌な予感がしねえか？」
ヘイヴィアが口元を引きつらせた、その時だった。

ドバッ!!　という轟音が炸裂した。
オフィスの広大な敷地が下からの突き上げによってガラガラと崩れ、そこから巨大なオブジェクトが顔を出したのだ。

おいおい、と顔を見合わせる二人に、『本国』では使う機会もないと思っていた無線機から通信が入った。フローレイティアからのものだ。
『ちくしょう！　クウェンサーヘイヴィア、新しい仕事よ!!　フライドの野郎、何でこんな巨大な敷地を用意しているかと思ったら、こういう事だったのよ!!』
「マジかよ。市街戦とかありなのかよ!!」
「なんかもうそっちの言いてえ事は分かってきたけどよ、今回こそオブジェクトからの正式な支援はあるんだろうな!?」
『馬鹿野郎！　こんな所にお姫様を呼んだら避難勧告を出す前に本国の首都が瓦礫の山になるだけよ!!　お前達だけで何とかするの！　元々フライドに一泡吹かせたかったのよね!!』
「そりゃまあ」
「殺しちまっても良いんだよな？」
『ちなみにフライドはオブジェクトに相乗りしているけど、本来のエリートは一二歳の女の子

よ。できれば殺さずに回収したいの。「正統王国」軍のエリート様には貴重な価値があるからね。……っていう大義名分で、せめてガキぐらいは助けたいんだけど、できる!?』

「またいきなりややこしい事になってるな!!」

「まあ一二歳の女の子とか言われたら仕方ねえけど!!　そんなん盾に使うなんて、やっぱフライドはぶっ殺さねえとダメだな!!」

「おい、どうにかして脱出装置を作動させようぜ。それなら幼女を殺さずにオブジェクトを止められるだろ!!」

粉塵の中から現れたオブジェクトがヤケクソ気味に市街地へ攻撃を加えようとする前に、クウェンサーやヘイヴィアは広大な基地へと走っていく。

地獄の戦場へと近づいていきながら、クウェンサーは言う。

「結局、一からやり直しって事になるのかな。こっちは最低でも派遣留学を終えた程度の学歴と権限は取り戻さないとまずいし！　っていうか、これって解決したら表彰されんのかね!?」

応えるように、ヘイヴィアも言う。

「何とかなるんじゃねえの？　つっつか、これ終わったらホントに軍を辞めよう。ホントにオブジェクトと戦うのもう辞めようぜ!!　俺は『貴族』の家を継ぐ。ぶっちゃけオブジェクト相手に戦争起こしてんだ。家の連中が反対意見を出したら、そいつらとだって戦争してやるよ!!　冷

静に考えたらそっちの方が絶対に楽だろ!!　なあ、俺は今まで何をやってたんだ!?」

「それはそうだよな！　こんなのなら派遣留学なんてしてないで、普通に受験戦争に挑んでいた方が良かったんじゃないかと俺も思う!!」

「おい泣くなよ!!　とりあえず幼女助けてフライドぶっ殺してなどと叫び合いながらも、なんだかんだで彼らは戦場へと話し合おうぜ!!」

目の前には五〇メートル級の超大型兵器オブジェクト。

こちらにあるのはチャチな爆薬とライフルのみ。

これが彼らの毎日。

二人の特殊工兵達は、今日も怪物相手に戦っている。

一人でも多く早く飛び込んでいく。

あとがき

本書を手に取っていただいた全ての皆様、初めまして。
鎌池和馬です。

デビュー五年にして新シリーズです。今回は超大型兵器モノですではない！　というのが個人的なこだわりですが、別に人型ロボットに否定的な訳ではないので勘違いはしないでくださいませ。今回のような話の場合は、もうちょっとイレギュラーな形状のマシンの方が威圧感が出るかな、と思ってチョイスしました。

全長五〇メートル、重量二〇万トン級のビッグサイズです。
重さの方は、ざっとニミッツ級の原子力空母二隻分ぐらいでしょうか？　武装についての重量を加えると、さらに増すかもしれません。

こんなもんが時速二一〇キロで格闘技のフットワークのように動き回るというのだからとんでもない事になっている訳ですが……こういうSF方向に目を向けなくても、既存の兵器だって十分に桁違いなんですよね。

先ほども書きましたが、これだけ巨大なオブジェクトは、原子力空母たった二隻分でしかない訳ですし。その原子力空母のパーツを持ち上げる馬鹿デカいクレーンがあったり、陸上で艦を立てておくためにその重量を受け持つ複数の柱があったり、もっとスケールの小さな八〇〇〇トンぐらいのイージス艦とかになると、造船所内を移動するための大型車両があったりして移動するため艦を丸ごと載せて移動するとか……と、なんか人間の発想力というのはとんでもないなあと思います。皆様はいかがでしょうか？

そうそう、今回はとにかく爽快感を最優先に考えて執筆したためか、一応そのための工夫もちらほら盛り込んでみたりしてもいます。例を挙げるなら、主人公だけでも『軍人』ではなく『学生』にして少しでも感情移入しやすくする、可能な限り敵軍側の心境を描写しない、などなどです。

おそらく多くの読者さんは、この作品を読んでいる内に、主人公達の言動に首を傾げる事もあったでしょう。ちょっと冷静になってみると、敵と味方の命の扱い方にかなり差がないか、とか。それこそが『マクロな戦争に翻弄されるミクロな人間の精神』というものなのかなあ、と思います。純粋に物語を楽しんでいただいた上で、『でも、やっぱ戦争ってどこか歪んでるよな』とも感じていただければ感無量です。

担当の三木さんとイラストの凪良さんには感謝を。イラスト的にものすごーく負担のかかる作品だったと思います。最後までお付き合いいただき、今回は本当にありがとうございました。

そしてここまで読んでいただいた読者の皆様にも感謝を。新シリーズの一冊目、試しに手に取ってくださった事、本当にありがたく思っています。

ちなみに、今回クウェンサーやヘイヴィア達が戦ってきたオブジェクトの破壊方法は、一つだけではありません。おいかもしれませんね。暇がありましたら、彼らとは違う『突破口』を模索してみるのも面白

それでは、今回はこの辺りで。

この一冊が、貴方の心の中で何らかの糧になる事を願いつつ、筆を置かせていただきます。

……今回、一番桁違いなのは主人公達だったんじゃや……？

鎌池和馬

◉鎌池和馬著作リスト

「とある魔術の禁書目録（インデックス）」（電撃文庫）

「とある魔術の禁書目録（インデックス）②」（同）

「とある魔術の禁書目録③」(同)
「とある魔術の禁書目録④」(同)
「とある魔術の禁書目録⑤」(同)
「とある魔術の禁書目録⑥」(同)
「とある魔術の禁書目録⑦」(同)
「とある魔術の禁書目録⑧」(同)
「とある魔術の禁書目録⑨」(同)
「とある魔術の禁書目録⑩」(同)
「とある魔術の禁書目録⑪」(同)
「とある魔術の禁書目録⑫」(同)
「とある魔術の禁書目録⑬」(同)
「とある魔術の禁書目録⑭」(同)
「とある魔術の禁書目録⑮」(同)
「とある魔術の禁書目録⑯」(同)
「とある魔術の禁書目録⑰」(同)
「とある魔術の禁書目録⑱」(同)
「とある魔術の禁書目録ＳＳ」(同)
「とある魔術の禁書目録ＳＳ②」(同)

本書に対するご意見、ご感想をお寄せください。

■

あて先

〒160-8326 東京都新宿区西新宿4-34-7
アスキー・メディアワークス電撃文庫編集部
「鎌池和馬先生」係
「凪良先生」係

■

電撃文庫

ヘヴィーオブジェクト

鎌池和馬
かまちかずま

発行　二〇〇九年十月十日　初版発行

発行者　高野　潔

発行所　株式会社アスキー・メディアワークス
〒一六〇-八三二六　東京都新宿区西新宿四-三十四-七
電話〇三-六八六六-七三一一（編集）

発売元　株式会社角川グループパブリッシング
〒一〇二-八一七七　東京都千代田区富士見二-十三-三
電話〇三-三二三八-八六〇五（営業）

装丁者　荻窪裕司（META＋MANIERA）

印刷・製本　株式会社暁印刷

※本書は、法令に定めのある場合を除き、複製・複写することはできません。
※落丁・乱丁本はお取り替えいたします。購入された書店名を明記して、株式会社アスキー・メディアワークス生産管理部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。但し、古書店で本書を購入されている場合はお取り替えできません。
※定価はカバーに表示してあります。

© 2009 KAZUMA KAMACHI
Printed in Japan
ISBN978-4-04-868069-1 C0193

電撃文庫創刊に際して

文庫は、我が国にとどまらず、世界の書籍の流れのなかで〝小さな巨人〟としての地位を築いてきた。古今東西の名著を、廉価で手に入りやすい形で提供してきたからこそ、人は文庫を自分の師として、また青春の想い出として、語りついできたのである。

その源を、文化的にはドイツのレクラム文庫に求めるにせよ、規模の上でイギリスのペンギンブックスに求めるにせよ、いま文庫は知識人の層の多様化に従って、ますますその意義を大きくしていると言ってよい。

文庫出版の意味するものは、激動の現代のみならず将来にわたって、大きくなることはあっても、小さくなることはないだろう。

「電撃文庫」は、そのように多様化した対象に応え、歴史に耐えうる作品を収録するのはもちろん、新しい世紀を迎えるにあたって、既成の枠をこえる新鮮で強烈なアイ・オープナーたりたい。

その特異さ故に、この存在は、かつて文庫がはじめて出版世界に登場したときと、同じ戸惑いを読書人に与えるかもしれない。

しかし、〈Changing Times,Changing Publishing〉時代は変わって、出版も変わる。時を重ねるなかで、精神の糧として、心の一隅を占めるものとして、次なる文化の担い手の若者たちに確かな評価を得られると信じて、ここに「電撃文庫」を出版する。

1993年6月10日
角川歴彦

電撃文庫

ヘヴィーオブジェクト

鎌池和馬
イラスト／凪良

超大型兵器オブジェクト。その操縦士、『エリート』。雪原の戦場に派遣留学したクウェンサーが出会ったのは、そんな素性を持つ奇妙な少女だった――。

ISBN978-4-04-868069-1

か-12-21　1833

とある魔術の禁書目録（インデックス）②

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

"超能力"をカリキュラムとする学園都市に"魔術"を司る一人の少女が空から降ってきた。「インデックス（禁書目録）」と名乗る彼女の正体とは……!?

ISBN4-8402-2658-X

か-12-1　0924

とある魔術の禁書目録（インデックス）③

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

学園都市「三沢塾」で一人の巫女が囚われの身となった。上条当麻は魔術師ステイルと幾々手を組み、彼女を助けに行くことになるのだが――学園アクション第2弾！

ISBN4-8402-2701-2

か-12-2　0951

とある魔術の禁書目録（インデックス）④

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

補習帰りに、上条当麻は御坂美琴とその妹に出会う。御坂妹も姉同様とにかくヘンな奴で……。そんな普段通りの生活の中、学園都市の能力者が次々と殺されはじめる……。

ISBN4-8402-2785-3

か-12-3　0988

海へバカンスに来た上条当麻が見たものは、インデックスが青髪ピアスで、神裂火織がステイルで、ステイルが海のオヤジで、御坂美琴が当麻の実妹で!?　全てはとある魔術から……!?

ISBN4-8402-2858-2

か-12-4　1021

電撃文庫

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑤

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ
ISBN4-8402-3025-0

8月31日の学園都市。御坂美琴は、さわやか男子生徒に誘われた。一方通行(アクセラレータ)は、不思議な少女と出会った。上条当麻は、不幸な一日の始まりを感じた……。

1083 か-12-5

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑥

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ
ISBN4-8402-2973-2

新学期初日。それは上条当麻が通う学校に転校生が来た日で、インデックスにはじめての「ともだち」ができた日で、学園都市に謎の魔術師が潜入した日だった……!

1113 か-12-6

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑦

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ
ISBN4-8402-3205-9

伝説の魔術師クロウリーが記したとされる魔導書「法の書」と、その解読法を知るシスター(インデックス)が何者かにさらわれた。上条当麻は、"不幸"にもその救出戦に加わることに……。

1167 か-12-7

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑧

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ
ISBN4-8402-3269-5

こもは学園都市屈指の名門女子校・常盤台中学。御坂美琴が体育の授業後、シャワーを浴びていると……。お姉様とあの殿方が交差するとき、白井黒子の物語が始まるのですの!?

1198 か-12-8

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑨

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ
ISBN4-8402-3385-3

学園都市最大級行事「大覇星祭」。上条当麻や御坂美琴も参加するその大運動会の開催中に、謎の"霊装"を巡って、とある魔術師が学園都市に侵入した……!

1243 か-12-9

電撃文庫

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑩

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ
ISBN4-8402-3428-0

学園都市に、ひとつの波紋が広がった。クローチェディピエトロ「使徒十字」。そう呼ばれる存在が、上条当麻の大切な人たちの夢を、破壊していく！科学と魔術が交差するとき、物語は始まる！

か-12-10　1257

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑪

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ
ISBN4-8402-3581-3

大覇星祭最終日。自分が"不幸"であることしか自慢できない男・上条当麻が、なんと大覇星祭「ナンバーズ」に見事当選した。景品は「海外旅行」のチケットで……!?

か-12-11　1327

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑫

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ
ISBN978-4-8402-3683-6

九月三〇日。学園都市の某所に、御坂美琴は立っていた。待ち合わせである。けれど、あの少年は一向に姿を見せず……。削ゲームを巡る学園コメディ編スタート？

か-12-12　1372

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑬

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ
ISBN978-4-8402-3801-4

九月三〇日の学園都市に侵入した魔術師『前方のヴェント』。彼女が操る謎の魔術により都市機能は完全麻痺、大部分の人間は倒れた。絶望的な状況下で上条当麻は……！

か-12-13　1411

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑭

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ
ISBN978-4-8402-4062-8

一〇月。ローマ正教徒によるデモが全世界で勃発した。混乱の最中、その元凶が黒装「C文書」にあることを聞かされた上条は、土御門と共にフランスへと飛び立つ！

か-12-15　1506

電撃文庫

とある魔術の禁書目録⑮

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ
ISBN978-4-8402-4145-8

治安部隊がアビニョン侵攻作戦で不在の学園都市。そこでは闇の組織らの暗躍が始まっていた。「グループ」の一方通行（アクセラレータ）は、謎の組織「スクール」の存在を知り……！

とある魔術の禁書目録⑯

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ
ISBN978-4-8402-8670869

宿敵・後方のアックアがついに動いた。標的とされた上条当麻だが、彼の元には五和がボディガードとしてやってきて……インデックスとの同棲バトル勃発!?

とある魔術の禁書目録⑰

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ
ISBN978-4-04-867591-8

「禁書目録召集令状」が布告された。何者かに爆破されたユーロトンネルを「王室」と共に調査せよ、という任務だった。上条当麻が被る今度の〝不幸〟は、英国にて開幕！

とある魔術の禁書目録⑱

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ
ISBN978-4-04-867897-1

ロンドンはクーデターにより堕ちた。影響はイギリス全土に及び、市街では「清教派」と「騎士派」が対立する中、ついに上条当麻は「あの男」と出会う……!!

とある魔術の禁書目録SS

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ
ISBN978-4-8402-3912-7

上条のクラスで行く鍋パーティのゆくえは？イギリス清教ロンドン女子寮の乱れた？一日とは？　一方通行が闇へと堕ちた、その先には……。本編補完のSSシリーズ！

か-12-14	1456	か-12-20	1787	か-12-19	1730	か-12-17	1601	か-12-16	1537

電撃文庫

とある魔術の禁書目録SS②

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN978-4-8402-8673 42-6

ジーンズ切り裂き魔を追う神殺、半蔵に恋する郭ちゃん、謎の魔革売り少女と出会う上条刀夜、微妙な強さの超能力者・ナンバーセブン。圧倒的な登場人物で送るSSシリーズ第2弾。

か-12-18	1676

アクセル・ワールド1 ―黒雪姫の帰還―

川原 礫
イラスト／HIMA

ISBN978-4-04-867517-8

《黒雪姫》と呼ばれる少女との出会いが、デブでいじめられっ子の未来を変える。ウェブ上でカリスマ的人気を誇る作家が、ついに電撃大賞〈大賞〉受賞！

か-16-1	1716

アクセル・ワールド2 ―紅の暴風姫―

川原 礫
イラスト／HIMA

ISBN978-4-04867843-8

デブでいじめられっ子の少年・ハルユキの人生は、黒雪姫との出会いによって一変した。そんな彼のもとに、「お兄ちゃん」と呼ぶ見ず知らずの少女が現れて!?

か-16-3	1775

アクセル・ワールド3 ―夕闇の略奪者―

川原 礫
イラスト／HIMA

ISBN978-4-04-868070-7

「ゲームオーバーです、有田先輩……いえ、シルバー・クロウ」黒雪姫不在の中、スクールカーストの頂点に立った新入生。圧倒的な彼の力の前に、ハルユキは倒れ……!!

か-16-5	1834

ねこシス

伏見つかさ
イラスト／かんざきひろ

ISBN978-4-04-868071-4

五度目の挑戦でようやく「人化の術」を成功させた猫又一家の三女・美緒。「俺の妹」コンビが贈る、ちいさなトラ猫の人生おためしストーリー！

ふ-8-9	1835

電撃文庫

キノの旅 the Beautiful World

時雨沢恵一
イラスト／黒星紅白

ISBN4-8402-1585-5

「世界は美しくなんかない。そしてそれ故に、美しい」――短編連作の形で綴られる人間キノと言葉を話す二輪車エルメスの旅の話。話題の新感覚ノベル第1弾！

461　し-8-1

キノの旅II the Beautiful World

時雨沢恵一
イラスト／黒星紅白

ISBN4-8402-1632-0

「キノ。旅人に一番必要なのは決断力だよ」「いいや、エルメス。それはきっと運だよ。最後までであがいた後に自分を助けてくれるもの。『運さ』」話題の新感覚ノベル第2弾！

487　し-8-2

キノの旅III the Beautiful World

時雨沢恵一
イラスト／黒星紅白

ISBN4-8402-1709-2

キノとエルメスがまだ師匠の元にいたころ。キノたちが暮らすところに3人の山賊達がやって来た!?（『説得力』）他全6話を収録。話題の新感覚ノベル第3弾！

515　し-8-3

キノの旅IV the Beautiful World

時雨沢恵一
イラスト／黒星紅白

ISBN4-8402-1844-7

ある国に入ったキノとエルメスは、路上で激しいケンカをしている男女を見かける。そして。（『二人の国』）他全11話を収録。口絵は、黒星紅白描き下ろしイラストノベル。

440　し-8-4

キノの旅V the Beautiful World

時雨沢恵一
イラスト／黒星紅白

ISBN4-8402-2013-1

ある国に向かっていたキノとエルメスは、男と出会う。その男は一緒に行こうと言い、キノはキッパリと断った――（『人を殺すことができる国』）他全10話収録。

627　し-8-5

電撃文庫

キノの旅VI the Beautiful World

時雨沢恵一
イラスト／黒星紅白

ISBN4-8402-2155-3

出国待ちのキノとエルメスは一人の男と出会う。その男は過去の殺人の許しを乞うために、これから一人の女性と旅に出ると言う。（「彼女の旅」）他全11話収録。

し-8-7	695

キノの旅VII the Beautiful World

時雨沢恵一
イラスト／黒星紅白

ISBN4-8402-2386-6

キノとエルメスは〝動いている国〟に出会い入国する。その国が進む先には〝道……〟があった。そして……。（「迷惑な国」）他全8話収録。

し-8-9	796

キノの旅VIII the Beautiful World

時雨沢恵一
イラスト／黒星紅白

ISBN4-8402-2832-9

〝想いは正しく伝わらない〟――キノとエルメスが訪れた国は、全ての国民に〝眼鏡〟の着用が義務づけられていた。その〝眼鏡〟とは……。（「悪いことはできない国」）他全8話収録。

し-8-12	1000

キノの旅IX the Beautiful World

[改訂新版]
イラスト／黒星紅白

ISBN4-8402-3172-9

一人の女性と出会ったキノとエルメス。その女性は作家で、旅の話を聞かせてくれたらいくらでもご馳走すると言うのだが……。（「作家の旅」）他全15話収録。

し-8-15	1153

キノの旅X the Beautiful World

時雨沢恵一
イラスト／黒星紅白

ISBN4-8402-3580-5

キノとエルメスは、訪れた国で〝歌姫〟の歌を聴く。とても気に入ったキノ。その歌姫は全国民からも愛されていて……。（「歌姫のいる国」）他全11編を収録。

し-8-19	1326

キノの旅XI the Beautiful World

時雨沢恵一
イラスト／黒星紅白

ISBN978-4-8402-4025-3

キノとエルメスは、赤ちゃんを抱えた女性と数人の男達の集団に出会う。彼らはキノに護衛を依頼してきた。そして――。（「戦う人達の話」）他全11話収録。

し-8-23　1493

キノの旅XII the Beautiful World

時雨沢恵一
イラスト／黒星紅白

ISBN978-4-04-867263-4

キノとエルメスが訪れたのは〝徳〟ポイント制度がある国。貯めたポイントから犯した罪の分が相殺されるというのだが。（「徳を積む国」）他全15話収録予定。

し-8-27　1659

キノの旅XIII the Beautiful World

時雨沢恵一
イラスト／黒星紅白

ISBN978-4-04-868068-4

そして、キノは見つけました。土煙の下では、大量の黒い影が、もぞもぞと蠢いていました。「何だ？」（「この世界の話・b」）他全11話収録）。

し-8-30　1832

MIB

柏葉空十郎
イラスト／二ノ瞳

ISBN978-4-04-867769-1

顔は可愛いがやけに態度がでかい宇宙人。星人は彼女を「性悪ちび悪魔」と名付けた。彼女には家を壊され人体実験をされ、さらには星人の学校に転入してきて!?

か-15-2　1755

MIB②

柏葉空十郎
イラスト／二ノ瞳

ISBN978-4-04-868020-2

人類を滅亡させる性病に感染してしまった星人。アリアたちは星人を監視するため居座る。だが、なぜかモテまくる星人は貞操の危機連発で大変なことになり!?

か-15-3　1842

電撃文庫

ほうかご百物語

峰守ひろかず
イラスト／京極しん

ISBN978-4-8402-4168-7

真一が夜の美術室で出会った少女は銀色に輝く瞳を持っていて——。ピュア可愛いイタチさんと真一の、不思議な放課後物語。第14回電撃小説大賞〈大賞〉受賞作！

み-12-1　1546

ほうかご百物語2

峰守ひろかず
イラスト／京極しん

ISBN978-4-04-867091-3

美術部の一員として学校生活に溶け込むイタチさん。しかし、そんな彼女を狙う怪しい影が……!?　ピュア可愛いイタチさんと僕の放課後不思議物語、第2弾‼

み-12-2　1606

ほうかご百物語3

峰守ひろかず
イラスト／京極しん

ISBN978-4-04-867273-3

雪深い温泉宿に妖怪退治に出かけることになった僕とイタチさん（と、その他の人々）。シリーズ第3弾は、学校を飛び出してイタチさんたちが大活躍ですっ‼

み-12-3　1669

ほうかご百物語4

峰守ひろかず
イラスト／京極しん

ISBN978-4-04-867524-6

3学期が始まり、平穏に（？）妖怪対処の日々を送っていた美術部。でも、そんな彼らの妖怪対処を邪魔する兄妹が現われて!?　波乱がいっぱいのシリーズ第4弾‼

み-12-4　1723

ほうかご百物語5

峰守ひろかず
イラスト／京極しん

ISBN978-4-04-867846-9

学校の裏山で蛇を助けた真一。翌日家に綺麗なお姉さんがやってきて、言った。「つーわけで嫁にしなさい」!?　イタチさんもヤキモチ焼いちゃう第5弾ですっ！

み-12-5　1778

電撃文庫

ほうかご百物語6

峰守ひろかず
イラスト／京極しん

ISBN978-4-04-868073-8

天才画家ニコが真一を弟子にしたいと言い出した。なぜか真一は、ニコを慕う新入生と絵の勝負をすることに!? イタチさんと僕の放課後不思議物語第6弾！

み-12-6　1837

ロウきゅーぶ！

蒼山サグ
イラスト／てぃんくる

ISBN978-4-04-867520-8

ロリコン疑惑で部活を失ったのに、なぜか気づけば小学校女子バスケ部コーチに!? 少女たちに翻弄されるも昴はついに――。第15回電撃小説大賞《銀賞》受賞作！

あ-28-1　1719

ロウきゅーぶ！②

蒼山サグ
イラスト／てぃんくる

ISBN978-4-04-867842-1

少女たち五人のさらなる成長を目指し、小学校内で合宿を行うことになった昴。解決しなくちゃいけない問題は山積み、色々な意味での問題も山積みで――!?

あ-28-2　1774

ロウきゅーぶ！③

蒼山サグ
イラスト／てぃんくる

ISBN978-4-04-868076-9

プール開き目前な本格的な夏到来。泳げない愛莉のため&センターとしての精神的成長を促すためにも昴は文字通り一肌脱ぐのだが、そこに忍び寄る女の影が――!?

あ-28-3　1840

りんぐ&りんく！

水沢あきと
イラスト／木場智士

ISBN978-4-04-868088-2

風呂が壊れて銭湯に行った俺を待ち受けたのは隣のクラスの美少女市瀬さん。風呂を壊した犯人だという彼女は俺を脅して「あたしの所有物になれ」と言い出して!?

み-17-1　1846

電撃文庫

さよならピアノソナタ

杉井 光
イラスト／植田 亮

ISBN978-4-8402-4071-0

「六月になったら、わたしは消えるから」ピアニストにして曰くありげな転校生の真冬と、平凡なナオの出会いと触れ合いを描くボーイ・ミーツ・ガール・ストーリー。

す-9-6　1515

さよならピアノソナタ2

杉井 光
イラスト／植田 亮

ISBN978-4-8402-4195-3

天才ピアニストの真冬をギタリストとして迎えた民俗音楽研究部は海へ合宿に行くことになるが、ナオを巡って戦いが勃発し!?　恋と革命と音楽の物語、第2弾。

す-9-7　1570

さよならピアノソナタ3

杉井 光
イラスト／植田 亮

ISBN978-4-04-867182-8

文化祭を控え民俗音楽研究部は準備を開始する。そんな折、真冬と顔なじみのヴァイオリニストが現れナオの動揺を誘うが――。恋と革命と音楽の物語、第3弾。

す-9-9　1641

さよならピアノソナタ4

杉井 光
イラスト／植田 亮

ISBN978-4-04-867429-4

季節は冬。真冬の誕生日、そしてクリスマスを控え、ナオはついに行動を起こそうとする。ところが真冬の指がまたおかしくなり――。ナオと真冬の恋の行方は!?

す-9-10　1699

さよならピアノソナタ encore pieces

杉井 光
イラスト／植田 亮

ISBN978-4-04-868078-3

結婚を意識しはじめる真冬と相変わらず鈍感なナオ。そんな折、とあるピアノソナタにまつわる依頼を受け――。その他登場人物それぞれに焦点をあてた短編集！

す-9-12　1843

電撃大賞

電撃小説大賞・電撃イラスト大賞

上遠野浩平(『ブギーポップは笑わない』)、高橋弥七郎(『灼眼のシャナ』)、支倉凍砂(『狼と香辛料』)、有川　浩・徒花スクモ(『図書館戦争』)、三雲岳斗・和狸ナオ(『アスラクライン』)など、常に時代の一線を疾るクリエイターを生み出してきた「電撃大賞」。今年も新時代を切り拓く才能を募集中!!

●賞(共通)　**大賞**……正賞+副賞100万円

金賞……正賞+副賞 50万円

銀賞……正賞+副賞 30万円

(小説賞のみ)　**電撃文庫MAGAZINE賞**
正賞+副賞 20万円

小説賞に新設! メディアワークス文庫賞

正賞+副賞 50万円

『メディアワークス文庫』はアスキー・メディアワークスが満を持して贈る『大人のための新しいエンタテインメント新文庫レーベル』。上記「メディアワークス文庫賞」受賞者は、2009年冬創刊予定の本レーベルより出版されます!

選評をお送りします!

小説部門、イラスト部門とも1次選考以上を通過した人全員に選評をお送りします!

※詳しい応募要項は小社ホームページ(http://asciimw.jp)で。